神岡町埋蔵文化財調査報告第６集
江馬氏城館跡調査報告書　第６集

岐阜県吉城郡神岡町

EMA　CASTLE　SITE

江馬氏城館跡Ⅴ

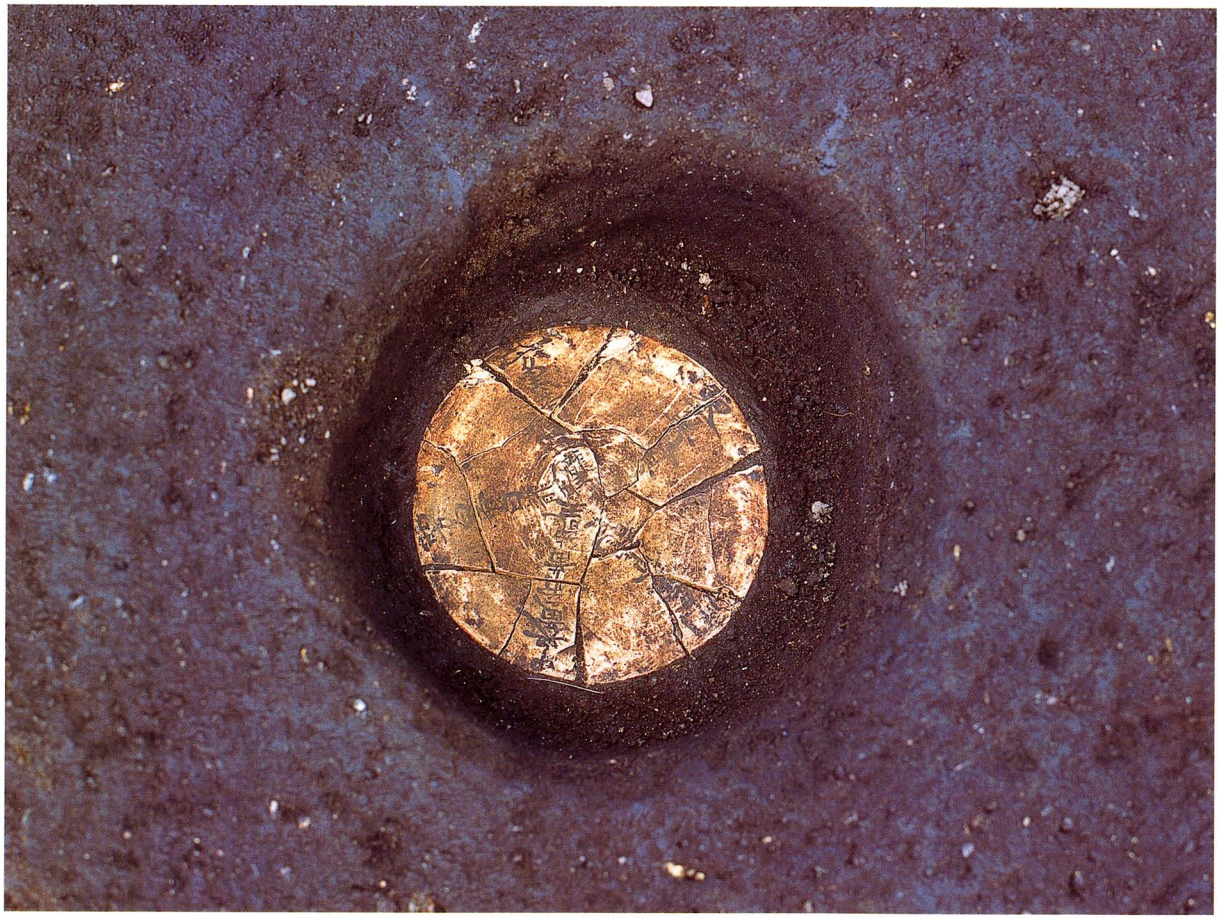
―下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査―

神岡町教育委員会

２００１年３月

巻頭図版

1　下館跡堀内地区北西隅部遠景写真(1998年度調査地区，北西から)



2　地鎮遺構SP148墨書土師器皿出土状況写真(南から)

神岡町埋蔵文化財調査報告第６集
江馬氏城館跡調査報告書　第６集

岐阜県吉城郡神岡町

EMA　CASTLE　SITE

江馬氏城館跡Ⅴ

―下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査―

神岡町教育委員会

２００１年３月

序

神岡町は岐阜県の北玄関に位置し，かつての鉱山町のイメージから地下空間の活用による東京大学のスーパーカミオカンデや東北大学のカムランドによる壮大な宇宙自然の謎に挑む，「宇宙のロマン」を秘めた町として世界から熱い視線を浴びております。

また，神岡町を流れる清流高原川の流域から一億三千万年程前と思われる恐竜の足跡の化石が発見され，町政50周年記念事業の一つとして，平成12年の夏に恐竜展を行い，「太古のロマン」をアピールしたところです。

ふるさとを誇りをもって語り継げる町民にしたい。そんな目玉のロマンの三つ目は，歴史学者をして言わしめた下館の姿は，「飛騨の花の御所」といわれる「中世のロマン」を秘めた国史跡「江馬氏城館跡」であります。

平成10・11年度の発掘調査では，館の北・西・南側の三方が堀と築地塀で囲まれていたこと，門の構造を考える手がかりを得たこと，地鎮遺構が発見されたこと等，新たな知見を得ることができました。

これまでの成果を受けて，平成10年度には整備の基本構想を，平成11年度には整備の基本計画を策定し，平成12年度からはいよいよ整備工事に着手しております。

町づくりの推進核の一つに文化財を明確に価値付け，位置付けていくことは，その時代時代に生きた人の心をつないでいく最も大切な，今，生きている者の責務だと考えます。神岡町が永遠に生き残るためにも，ここならではの文化財を含む文化に光をあて，保存と活用に力を入れ続けることが，町としての重点課題だと考えます。

今後も更に調査・整備の事業を進める上で，多大な人力と財力に期待せねばなりません。なお一層の関係各位の皆様のお力添えをどうぞ宜しくお願い申し上げます。

平成13年３月

神岡町教育長　　堀本　昌義

例　　言

1　本書は,岐阜県吉城郡神岡町大字殿に所在する中世城館,国指定史跡江馬氏城館跡下館跡の1998・1999年度発掘調査報告書である。

2　本調査は文化庁の指導による史跡の環境整備事業（史跡公園化）にともなう事前調査であり，その復元資料となすことを目的として1994年度から実施しており，その5・6年目の調査である。

3　調査は，文化庁記念物課，岐阜県教育委員会文化課，江馬氏城館跡調査整備委員会の指導協力を得て，神岡町教育委員会が主体となり，1998年度は県費補助事業，1999年度は国庫補助事業として実施した。報告書の刊行は平成12年度町費事業として実施した。

4　本書の編集・執筆は大平愛子が担当した。建物・柵列等の復元について吉岡泰英氏（福井県埋蔵文化財センター），出土陶磁器では，瀬戸・美濃の器種・年代等について藤沢良祐氏（瀬戸市埋蔵文化財センター），墨書土師器皿について水野正好氏（奈良大学学長・文学部文化財学科教授），遺構の石材について若田俊一氏（神岡町文化財審議会委員長）からご教示頂いた。なお，理解・記述等に誤りがあればすべて編者の責任である。また1997年度調査出土カラミの組成分析を神岡鉱業㈱に依頼し，その報告を本書に掲載した。

5　遺跡の電磁気探査は，1998年度は富山大学理学部地球科学科電磁気探査研究室（代表：酒井英男助教授）に，1999年度は㈱村尾地研に委託して実施し，その報告を本書に掲載した。

6　地区割に使用した国土座標は直角座標第7系国土座標であり，（X＝35878.577，Y＝13064.049）を原点として調査座標網を設定した。水準はT.P.である。

7　土層の色調については『新版　標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編著，1967 日本色研事業株式会社）を用いた。

8　1999年度調査航空写真撮影，本報告書の遺構図のトレースは㈱日本テクニカルセンターに委託し，座標網設置原点杭の再測量は大前測量事務所に委託して行った。

9　本書の図版の遺物番号は実測図と写真とを統一している。

10　これまでの報告書では，堀内地区と門前地区の建物・柵列番号が重複していたが，今後混乱を来す恐れがあるため，本報告書において堀内地区の建物・柵列番号を再整理し，以後，堀内地区の建物については，変更した建物番号を使用するものとする。なお，変更後の番号及びこれまでの建物番号との対応等については，第3章1に記述した。

11　参考文献は本文末にまとめ，報告書抄録は巻末に掲載した。

12　現地調査及び本書の作成に際して，江馬氏城館跡調査整備委員会以外にも，下記の諸氏・関係機関からご指導・ご教示，またご協力を得た。記して厚く感謝申し上げる。（順不同・敬称略）
本中　眞（文化庁記念物課主任文化財調査官），坂井秀弥（文化庁記念物課文化財調査官），小島道裕（国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授），小野正敏（国立歴史民俗博物館考古研究部助教授），千田嘉博（国立歴史民俗博物館考古研究部助手），前川　要（富山大学人文学部助教授），玉井哲雄（千葉大学工学部教授），伊野近富（京都市埋蔵文化財センター），橋本久和（高槻市役所総務部），川部　誠（岐阜県教育委員会文化課課長補佐），松野晶信・小林宏行（岐阜県教育委員会文化課学芸主事），三鍋秀典（富山県立山町教育委員会），内堀信雄（岐阜市教育委員会），三宅唯美（恵那市教育委員会），山田哲也（高富町教育委員会），岩花秀明（国府町教育委員会），榊原滋高（青森県市浦村教育委員会），中田書矢（青森県鰺ヶ沢町教育委員会），古宿　稔（神岡町社会福祉協議会事務局長），都竹清隆（神岡町役場福祉衛生課長），大前洋司（大前測量事務所），降矢哲男（奈良大学文学部文化財学科学生），佐伯哲也（岐阜県中世城館総合調査員），北陸中世考古学研究会，岐阜県城館研究会

13　調査に際して，吉中公男・今井悌二郎（大字殿区長），山本　登・家越一三（江馬遺跡保存会長），沖野好夫，堀　進，田中幸一，川上定義，宮前　稔，保木　薫，清水邦宏，川上真人，新家康孝，新家久雄，中田康孝，沖野　寛，岩垣達蔵，伊勢米蔵（殿地区地権者），日影広男，森腰賢三をはじめとする殿地区および神岡町内の方々にご協力戴き，神岡鉱業株式会社からは給水について便宜を計って戴いた。記して厚く感謝申し上げる。

14　出土遺物・記録書類は，神岡町教育委員会で保管・公開している。

目　　次

頁

第１章　調査の概要 …… 1

1　調査に至る経緯と目的及び事業の経過 …… 1

2　下館跡の現状 …… 3

第２章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 4

1　遺跡の立地 …… 4

2　歴史的環境 …… 8

3　高原郷の街道と中世城跡 …… 10

第３章　下館跡の概要と調査の経過 …… 13

1　下館跡の概要 …… 13

2　調査の方法 …… 18

3　調査の経過と調査組織 …… 20

第４章　発掘調査の成果 …… 23

1　調査の目的と調査範囲及びその概要 …… 23

2　層　　位 …… 24

3　遺　　構 …… 32

4　遺　　物 …… 51

第５章　小　　結 …… 60

付　章　自然科学的調査の成果

1　1998年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡における電磁気調査
酒井英男・田中保士・大平愛子 …… 65

2　1999年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡における地中レーダ探査
酒井英男・中埜貴元・笹井　隆・新谷　崇・大平愛子 …… 73

3　1997年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡出土カラミの組成分析結果報告 …… 松倉大作 …… 79

参考文献 …… 86

別　　表 …… 89

挿図目次

第１図　江馬氏下館跡の位置 …… 4
第２図　江馬氏下館跡と周辺の城跡・遺跡 …… 5
第３図　江馬氏下館跡付近絵図トレース図(江戸末～明治初年) …… 7
第４図　江馬氏下館跡付近地籍図(明治21年) …… 7
第５図　中・近世の吉城郡の交通路 …… 10
第６図　調査地区周辺の地形と発掘区位置図 …… 14
第７図　堀内地区Ａ期建物配置図 …… 17
第８図　1998年度調査参加者写真 …… 22
第９図　1999年度調査参加者写真 …… 22
第10図　1998・1999年度調査地区割り・トレンチ・遺構配置図 …… 25
第11図　1998・1999年度調査地区における既調査範囲図 …… 25
第12図　1998・1999年度調査地区遺構平面図 …… 27
第13図　調査地区壁土層断面図 …… 29
第14図　西堀箱堀実測図 …… 33
第15図　石列SV01・SV02・SV03実測図 …… 36
第16図　石列SV01・SV02・SV03石材番号図 …… 37
第17図　1978年度調査Ｋ地区(Ｘ座標48～54，Ｙ座標６～12付近)検出状況写真 …… 37
第18図　門跡実測図 …… 41
第19図　築地塀柱穴列SA55・SA56実測図 …… 43
第20図　築地塀に伴う盛土断面層位図・柵列SA57実測図 …… 44
第21図　Ⅱ地区WAトレンチ北壁断面層位図 …… 44
第22図　柵列SA51・SA52・SA53・SA54・SA58実測図 …… 46
第23図　地鎮遺構SP148土師器皿出土状況実測図 …… 47
第24図　竪穴住居SI 21実測図 …… 48
第25図　不明土坑SX41実測図 …… 49
第26図　SD22断面層位図 …… 50
第27図　江馬氏下館跡出土の土師器皿分類図 …… 54
第28図　出土遺物実測図(1) …… 57
第29図　出土遺物実測図(2) …… 58
第30図　出土遺物実測図(3) …… 59
第31図　1998・1999年度調査地区における遺構の主軸方位 …… 61
第32図　地中レーダ探査測線配置図 …… 66
第33図　電気探査比抵抗マッピング図 …… 68
第34図　Ｙ軸における地中レーダ探査の結果 …… 70
第35図　Ｘ軸における地中レーダ探査の結果 …… 71
第36図　探査測線配置図 …… 74
第37図　測線１～５の225MHzアンテナでの探査結果 …… 75
第38図　測線１～５の900MHzアンテナでの探査結果 …… 75
第39図　探査測線Ａ～Ｈ配置図とその周辺の発掘調査地区概略図及び
　　WAトレンチ北壁断面層位模式図 …… 76
第40図　測線Ａ～Ｈの900MHzアンテナでの探査結果 …… 77
第41図　探査結果から推定される柱穴位置と発掘調査結果との対応 …… 78
第42図　試料No.751・No.752・No.754のXRDチャート及び同定結果 …… 81

表　目　次

第１表　江馬氏下館跡の発掘調査実績表 …… 2
第２表　江馬氏下館跡史跡指定地の土地買い上げ事業実績表 …… 3
第３表　江馬氏関係年表 …… 9
第４表　江馬氏下館跡周辺の城跡一覧表 …… 12
第５表　堀内地区建物番号対応一覧表 …… 17
第６表　調査基準点網設置原点杭の国土座標値 …… 19
第７表　調査地区壁基本層序対照表 …… 31
第８表　1998・1999年度調査地区出土中世陶磁器の種類・器種別組成表 …… 53
第９表　1998・1999年度調査地区出土中世陶磁器の用途・種類別組成表 …… 53
第10表　1998・1999年度調査地区の遺構変遷表 …… 61
第11表　地中レーダ探査測線一覧表 …… 65
第12表　XRD同定結果 …… 82
第13表　XRF法での半定量結果 …… 82
第14表　各試料の酸化学換算XRF法での半定量結果 …… 83
第15表　主成分及び貴金属分析結果 …… 84
第16表　各カラミの組成推定結果 …… 84
第17表　柱穴断面形分類表 …… 95

別表目次

別表１　堀跡計測表 …… 91
別表２　門跡計測表 …… 91
別表３　柵列計測表 …… 91
別表４　竪穴住居計測表 …… 91
別表５　土坑計測表 …… 91
別表６　溝跡計測表 …… 91
別表７　柱穴計測表 …… 92
別表８　石列SV01・SV02・SV03石材計測表 …… 96
別表９　1998・1999年度調査の出土遺物計測表 …… 97

写真図版目次

巻首図版　1　下館跡堀内地区北西隅部遠景写真(1998年度調査地区，北西から)
　　2　地鎮遺構SP148墨書土師器皿出土状況写真(南から)
図版１　1　調査地域航空写真(1947年撮影)
図版２　1　神岡町遠景写真：1978年撮影(北から)
　　2　調査地域遠景写真：1999年度調査時(上が北東)
図版３　1　調査地域遠景写真(西から)
　　2　調査地区Ⅰ地区発掘後全景(北東から)
図版４　1　調査地区Ⅱ地区発掘後全景(南東から)
　　2　調査地区Ⅲ地区・Ⅳ地区発掘後全景(北西から)
図版５　1　西堀箱堀北半部発掘後全景(北から)
　　2　西堀箱堀北半部南北縦断面層位(Ｙ座標－８ライン，北西から)

3　西堀箱堀北半部東西横断面層位(Ｘ座標46.3ライン，北から)
図版６　1　築地塀基底部石列SV01・SV02・近世耕地石組み畦SV03発掘後全景(北西から)
2　築地塀基底部石列SV01発掘後全景(南から)
3　築地塀基底部石列SV02・近世耕地石組み畦SV03裏込め土検出状況(東から)
図版７　1　築地塀基底部石列SV02発掘後全景（北から)
2　築地塀基底部石列SV02裏込めＹ座標2.66ライン断面層位(南東から)
3　近世耕地石組み畦SV03発掘後全景(北から)
4　近世耕地石組み畦SV03裏込めＹ座標3.76ライン断面層位(西から)
図版８　1　脇門SB61発掘後全景(東から)
2　SP144断面層位(南から)
3　SP190断面層位(西から)
4　庭園への通用門SB62発掘後全景(南から)
5　SP11断面層位(南から)
6　SP13断面層位(南から)
図版９　1　柵列SA51～54・57・築地塀柱穴列SA55・56発掘後全景(南から)
2　柵列SA51～54・57・築地塀柱穴列SA55・56発掘後全景(北東から)
3　柵列SA51・53・築地塀柱穴列SA55・56発掘後全景(Ⅰ地区内，北から)
図版10　1　柵列SA52・54・築地塀柱穴列SA55・56発掘後全景(Ⅱ地区内，南から)
2　築地塀基礎地業部検出状況(北から)
3　築地塀基礎地業部断面層位(WAトレンチ北壁内，南から)
4　布掘り溝SD21発掘後全景(柵列SA55aの一部，南から)
5　築地塀に伴う盛土部分断面層位(Ｘ座標０ライン，南から)
図版11　1　地鎮遺構SP148　墨書土師器皿出土状況(1)(１枚目の土師器皿，南から)
2　地鎮遺構SP148　墨書土師器皿出土状況(2)(２枚目の土師器皿，南から)
図版12　1　竪穴住居SI 21発掘後全景(北から)
2　竪穴住居SI 21断面層位(北東から)
3　SD22検出状況(Ⅰ地区内，北東から)
4　SD22検出状況(Ⅱ地区内，南西から)
5　SD22・SV06・SF01・SD23・SV07検出状況(Ⅲ地区内，北西から)
6　SD22断面層位１(Ⅲ地区Ｘ座標49.7ライン，北から)
7　SD22断面層位２(Ⅱ地区南壁内Ｘ座標6.5ライン，北から)
8　SD22内礫検出状況(Ⅱ地区内，南西から)
図版13　1　不明土坑SX41検出状況(上が南西)
2　不明土坑SX41断面層位(南西から)
3～６　調査地区東壁断面層位：
3　Ⅲ地区北側部分(堀外地区，西から)
4　Ⅲ地区南側部分(９トレンチ西壁北半分，南東から)
5　Ⅱ地区Ｘ座標30ライン付近(1976・77年度調査時の畦部分，西から)
6　Ⅰ地区Ｘ座標３ライン付近(西から)
図版14　1　Ⅲ地区北壁断面層位(南西から)
2～４　Ⅱ地区北壁断面層位：
2　Ｙ座標－10～－６西堀箱堀南半部断面層位(南から)
3　Ｙ座標－７～－３(南から)
4　Ｙ座標－４～６(南西から)
5・6　Ⅱ地区南壁断面層位：
5　Ｙ座標５～－１(北西から)

6　Ｙ座標－２～－５　1976・77年度調査・1994年度調査地区との境付近(北から)
7・8　Ｉ地区１トレンチ北壁断面層位：
7　Ｙ座標－９～－１(南東から)
8　Ｙ座標－６～２(南西から)
図版15　出土遺物写真(1)
図版16　出土遺物写真(2)
図版17　出土遺物写真(3)

付　　図

付図１　江馬氏下館跡遺構平面図

第１章　調査の概要

１　調査に至る経緯と目的及び事業の経過

(a)　調査に至る経緯と目的

岐阜県の北部，旧飛騨国に位置する神岡町を流れる高原川と山田川の川筋には，中世にこの地域の豪族が築いたと伝わるいくつかの城跡が点在している。高原川右岸に広がる殿段丘上の神岡町大字殿地区は，古文書・古絵図等に「江馬氏之下館」と記されており，地元では古くから，字土井ノ内の水田の中に残る５つの大きな石を「五ケ石(御花石)」と呼び，中世高原郷を中心に活躍した地方有力武家である江馬氏の館・庭園跡であると言い伝えてきた。

神岡町教育委員会は1973～1977年にかけて，この殿地区一帯において土地改良（基盤整備・客土）工事に先立つ試掘調査を実施し，庭園跡，南・西の堀跡や建物跡の一部を確認した。特に庭園跡は，故森 蘊庭園文化研究所所長により，室町時代の庭園として貴重なものであるという評価を受け，1977年には岐阜県史跡「江馬館庭園」の指定を受けている。

1978年には国史跡指定を前提とした国の埋蔵文化財緊急発掘調査補助事業として，遺構規模・館跡規模の四方向からの確認を目的として本格的な発掘調査を実施した。これらの調査によって，当遺跡は中世武家居館跡として全国的に見ても非常に保存状態のよい遺跡であることが明らかとなり，1980年，遺存状態の良い関連の６つの山城跡とあわせて「江馬氏城館跡」として国の史跡指定を受けた。

1993年，神岡町教育委員会では，江馬氏城館跡は国民共有の文化遺産であるという認識のもとに，遺跡の保護・保存は言うまでもなく，遺跡を広く一般に公開・活用することも大切なことであると考え，その歴史的意義をさらに追及するための発掘調査と，その成果に基づいた整備事業を計画した。

この整備事業では，史跡の公有化及び保護・保存を目的に，地元住民の意志を尊重し，さらに科学的な調査研究結果に基づき，将来的には歴史公園としての整備復元を目指している。

これらの事業は，神岡町教育委員会が事務を担当し，それぞれの学識経験者で構成した調査整備委員会及び文化庁・岐阜県教育委員会から発掘調査の指導や助言，整備方法の提言等を受けながら進めている。調査整備委員会の構成は，下記の通りである。

江馬氏城館跡調査整備委員会

委員長：	牛川喜幸	（考古学・造園）	長岡造形大学教授
委　員：	加藤允彦	（造　　園）	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 保存工学研究室長
委　員：	吉岡泰英	（建　　築）	福井県埋蔵文化財センター
委　員：	宇野隆夫	（考 古 学）	富山大学人文学部教授（～1999年９月） 国際日本文化研究センター教授(1999年10月～)
委　員：	川上　伍		神岡町長
委　員：	山本　登		江馬遺跡保存会長（1998年度）
	家越一三		江馬遺跡保存会長（1999年度）

なお，これまでに以下のとおり整備委員の変更があった。

1994年度：	前川　要	（考 古 学）	富山大学人文学部助教授
	田家幸夫		江馬遺跡保存会長
1995年度：	宇野隆夫	（考 古 学）	富山大学人文学部教授
	洞口英夫		江馬遺跡保存会長
1996年度：	前川　要	（考 古 学）	富山大学人文学部助教授
1997年度：	沖野好夫		江馬遺跡保存会長

(b) 発掘調査の経過（第１表）

発掘調査の主体は神岡町教育委員会であり，調査整備委員会の指導に基づき，遺跡の保護・保全のため，また整備に必要な資料を得るための調査を，1994年度から計画的に実施しており，その概要は第１表にまとめたとおりである。1994年度から1996年度は富山大学人文学部考古学研究室に委託し，1997年度からは町単独の調査体制に移行し，調査を実施している。

なお，各年度の調査の目的および概要については，第３章に記述しているので参照されたい。

第１表　江馬氏下館跡の発掘調査実績表

年　度	調査地区	調査面積（m²）	事業費（千円）	備　　考
1976年度	庭園周辺	2,940		殿地区の土地改良工事に先立つ試掘調査
1977年度	堀内地区北東部建物群	2,610		殿地区の土地改良工事に先立つ試掘調査
	南堀・西堀端部周辺			岐阜県史跡「江馬氏庭園」指定
	南堀外側地区			
1978年度	遺跡範囲確認調査	3,060	10,000	奈良国立文化財研究所・福井県教育庁朝倉氏遺跡
				発掘調査研究所の指導を受ける(●)
1994年度	堀跡地区	1,630	24,357	整備のための発掘調査
				富山大学人文学部考古学研究室に全面委託(●)
1995年度	門前地区	1,210	25,764	整備のための発掘調査
	園池地区	140		富山大学人文学部考古学研究室に全面委託(●)
1996年度	南辺地区	890	19,573	整備のための発掘調査
				富山大学人文学部考古学研究室に全面委託(○)
1997年度	南堀延長部周辺地区	1,429	17,205	整備のための発掘調査 町単独の調査体制に移行(○)
1998年度	堀内地区北西隅部	288	6,020	整備のための発掘調査(○)
1999年度	堀内地区西辺	500	4,650	整備のための発掘調査(●)
総計		14,697	107,569	

・備考の●印は国庫補助事業であること、○印は県費補助事業であることを示す。

(c) 整備事業の経過

1976～1978年度および1994～1997年度までの発掘調査成果の蓄積を受けて史跡整備事業を具体化するため，平成10年度(1998)に『史跡江馬氏城館跡整備基本構想』（以下『基本構想』とする）を策定し，以下の基本理念と整備テーマを設定した。『基本構想』では，下館跡地区を他の史跡整備のパイロット地区と位置づけ，平成11年度(1999)から平成20年度(2008)までの10年間を史跡江馬氏城館跡整備の当面事業計画期間として，主に下館跡地区公有地部分の整備を行うものとしている。またその後，平成21年度(2009)以降，概ね20ヶ年をかけて，状況に応じて適宜事業計画を見直しつつ，山城跡等の整備事業を進めるものとしている。

〈史跡江馬氏城館跡整備基本理念〉

- 大前提としての遺跡の保存
- 歴史的価値の追求と整備による活用
- 地域住民の意向を尊重した歴史公園としての整備

〈史跡江馬氏城館跡整備テーマ〉

－神岡の歴史と文化の発信基地「江馬の館」 －いま，飛騨の地に蘇える花の御所づくり

この基本構想を現実化するため，平成11年度(1999)には『史跡江馬氏城館跡下館跡地区整備基本計画』（以下，『基本計画』とする）を策定し，平成12年度(2000)から平成20年度(2008)の予定で下館跡の整備工事を行っていく計画である。また，整備に必要な知見を得るための発掘調査も継続していく。

2 下館跡の現状（第２表）

下館跡史跡指定地の総面積はおよそ24,782㎡である。神岡町教育委員会では，史跡指定地のうち下館跡遺構保存地区の公有化事業を進めており，その進行状況は第２表にまとめたとおりである。平成10年度(1998)国庫補助事業として，2,170㎡の土地の公有化を実施している。

平成10年度(1998)末の未公有化面積4,686㎡のうち，道路水路以外の約2,936㎡の民有地は５人の地権者が農地（水田及び畑地）・宅地として利用しており，指定地内に２戸の住宅，その他倉庫などの付属建築物，庭木等の樹木がある。指定地内の東側の史跡内を南北に町道が，中央部には同方向に農道が走っている。

第２表 江馬氏下館跡史跡指定地の土地買い上げ事業実績表

事業年度	面積（㎡）	事業費（千円）	備考
昭和53年度(1978)以前	4,197		
平成７年度(1995)	3,575	116,661	家屋移転補償１件含む
平成８年度(1996)	8,176	224,077	家屋移転補償１件含む
平成９年度(1997)	2,178	52,597	付属構築物移転補償１件含む
平成10年度(1998)	2,170	48,174	
公有化済総面積	20,296	441,509	
未公有化総面積	4,686		
下館跡遺構保存地区総面積	24,982		

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

１　遺跡の立地

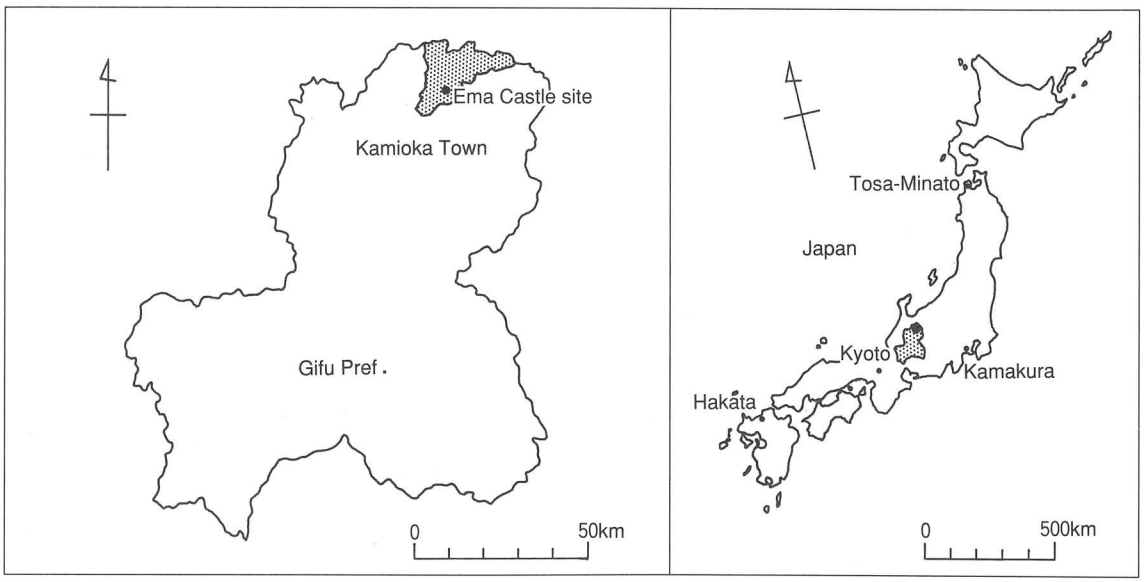
(a)　神岡町の地勢と遺跡立地（第１・２図）

神岡町は岐阜県北部，旧飛騨国吉城郡高原郷に位置する。その人口は約11,600人，面積は312.34㎢であり，うち耕地面積8.72㎢，宅地面積2.32㎢，山林面積221.52㎢である。その広い土地のほとんどは山地・森林であり，標高差が700ｍもある複雑な地勢である。町や集落は山々の間を流れる谷や川に沿って立地し，神岡町市街地は河川の浸食により幾階層かに分かれた河岸段丘状の土地に成立している。市街地中心部の標高は約400ｍを測る。この地域は，昭和25年(1950)に舟津町・阿曽布村・袖川村が合併し，町制を施行したものであり，江馬氏下館跡の所在する殿地区は，古くは阿曽布村に属していた。

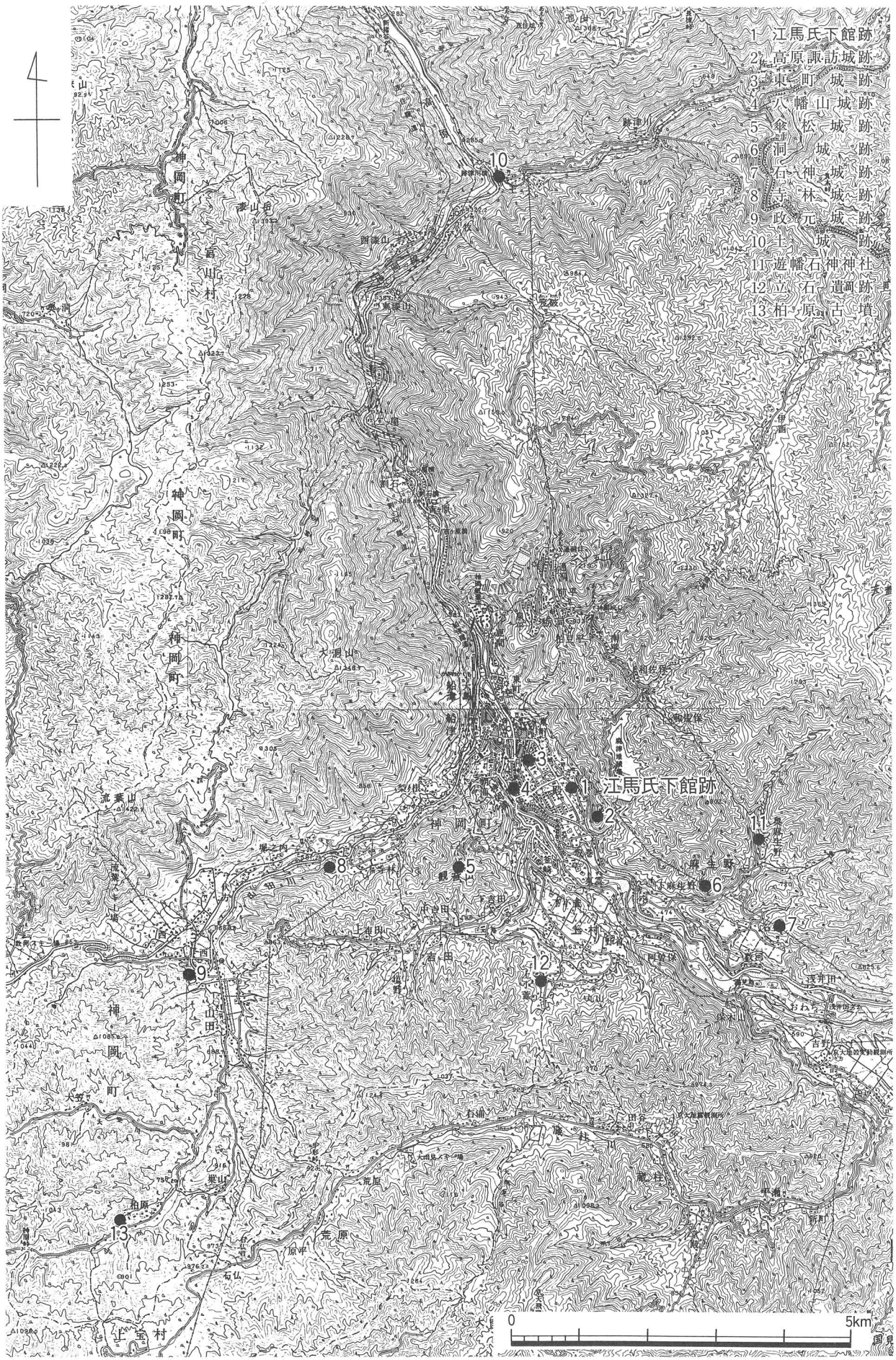
江馬氏下館跡は高原川中流域にある殿段丘の中央部，標高約455ｍに立地する。殿段丘は北アルプス連峰に源を発する小谷および蒲田川，双六川が合流し山峡を北流して日本海に注ぐ高原川（神通川水系右支）と，神岡町東北端に位置する北アルプスの支脈二十五山（標高1,327ｍ）および天蓋山（標高1,527ｍ）付近に源を発する和佐保谷の浸食により形成された河岸段丘である。

遺跡の背後にあたる東側は二十五山から南に向かって伸びる支脈が屏風のように段丘をさえぎり，尾根の南端頂および稜線延長には「高原諏訪城」がある。現在は二十五山に発電所の導水菅が通ったためその水量は減ってしまったが，かつては山麓裾部に豊富な湧水や谷水があり，この地域への水源となっていたようである。

遺跡西側は西堀跡から約55ｍ西の付近において，旧高原川が南から北西に蛇行し段丘を分断して形成した標高差約７ｍの崖が自然の要害をなしている。その対岸の段丘を向野と呼び，現在は神岡鉱業の社宅街・一般住宅地となっている。



第１図　江馬氏下館跡の位置



第2図　江馬氏下館跡と周辺の城跡・遺跡　縮尺1/85,000

遺跡南側は，和佐保谷が二十五山から延びる支脈を浸食・切断して形成した低位段丘が南約１㎞の付近まで広がっている。この地区はかつては耕地であったが，現在は工業団地や運動公園となっている。

北側の段丘端部には東町城が位置している。この遺跡は『飛州史』に「江馬之御館」と記すものであり，現在の神岡城である。この下館跡北側は段丘上で最大の広がりをもち，農耕地として利用していたが，第２次大戦後，神岡鉱業の社宅拡張や都市計画による住宅地化，学校建設等によって市街地化している。東町城から眺望できる最下位段丘上は江戸時代，舟津町村として周辺農村の商業地として発展し，現在も市街地が広がっている。

また，現在の神岡町・上宝村である旧飛騨国吉城郡高原郷の中心をなす集落は，いずれも高原川およびその支流に形成された段丘上に位置している。高原郷に活躍した中世地方豪族に関連すると伝えられる城館跡は，下館跡の東側背後にある高原諏訪城のほか，高原郷では東町城(「江馬之御館」)・洞城・石神城・寺林城・政元城・土城・尻高城・苧生茂城・天元城などがあり，これらの河岸段丘上に成立した集落の背後に立地しているものが多い。なお，荒城郷(現在の国府町・古川町)の梨打城，越中の中地山城なども江馬氏との関係が伝えられている。

(b) 古絵図・古文書から見た下館跡の土地利用の変遷（第３・４図）

殿地区に現存する土地に関する最も古い記録として元禄検地水帳（元禄７年，1694年）がある。しかしこれに付随するもしくは同時期の絵図がないため，水帳にあげている孫字名の正確な位置を知ることはできない。

第３図は江戸時代末～明治初年の江馬氏下館付近の絵図のトレース図である。この図を見ると「土井ノ内」・「土井ノ上」・「田ノ下」・「ほりはた」などの地名の地区を畑として利用していることから，周辺の田よりもやや高い地形であったことが予想される。明治初年頃は，このように僅かではあるがかつての館の地形・施設の名残を留めている。

館跡堀内地区に当たるであろう字「土井之内」には庭園遺構が遺存していたと推定できるが，江戸時代末期の文化年間（1804～1817）に，江馬氏と関係の深い臨済宗瑞岸寺12世陽堂泰旭がこの地区を再開発した。また文化末年に再建した瑞岸寺本堂の境内拡張に際して，その石垣として庭園の景石を利用したようである。

第４図は明治21年の地籍図であるが，これをみると明治初年には畑があった字中通り一帯が，すべて水田になっていることがわかる。ここには掲載しなかったが，昭和初年頃に撮影した当地の写真をみると，田の畦畔にかつては池の景石であったであろう巨石を用いていることがわかる。

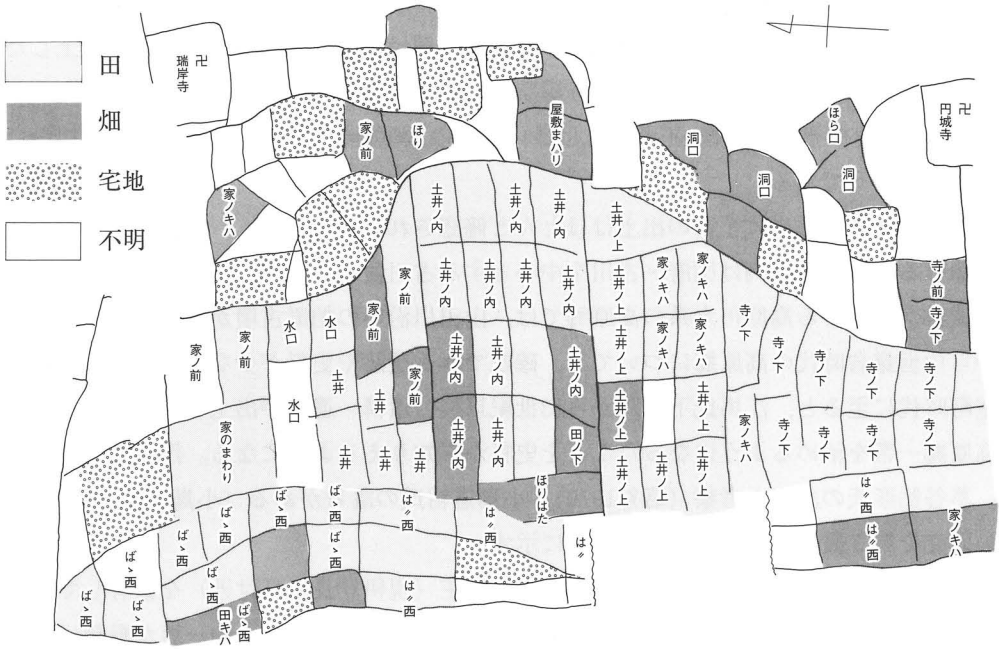
このように後世の耕地化等によって，地形に残っていたかつての館の痕跡は次第に失われ，明治の中頃には字名にその名残を残すだけになったようである。

(c) 遺跡周辺の現地形と原地形

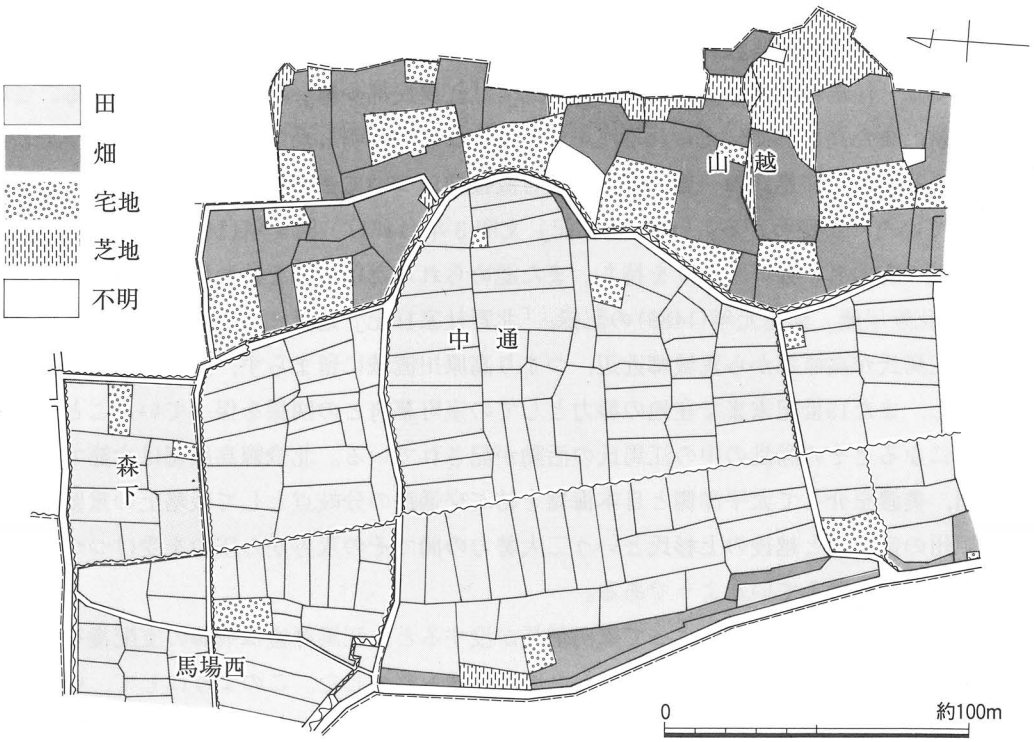
神岡町大字殿地区一帯は1972年から実施した土地改良事業によって，その地形が大きく変わっている。土地改良事業施行前の地形（原地形）は，「土地改良事業計画概要書」（昭和47年10月31日付，岐阜県知事平野三郎宛，神岡町営土地改良事業施行認可許可申請書）では，「旧来の圃場は極めて小さく，そのうえ起伏多き複雑な地形をなしている。地形は東西1/60・南北1/350の傾斜で，地質は洪積層に属する。地質は地表から０～30㎝までは茶褐色粘質土質腐食土壌，30～80㎝までは黒色泥質土壌で花崗岩礫が混っている。80㎝以上は黄褐色礫層で径30㎝の礫および玉石が混じっている。」としている。

このように中通り一帯は南北に細長く緩傾斜で広がり，東側山麓から河川敷跡までの幅は南北に比して狭く，傾斜が急な地形であった。そして土地改良事業の施行に伴い，山麓の起伏が多い高地を削り取り，その土砂によって段丘端部の低地を埋めた。その結果，館跡西部の外郭部分は土砂の著しい

移動がなされ原地形は失われた。また中通り一帯，江馬氏下館跡を南北に縦断している町道周辺の変貌は著しく，土地改良事業とあいまって埋立て，宅地化，工場敷地等の開発が進み，市街地近郊として様相を一新し，かつての地形とはその姿を大きく変えてきている。



第3図　江馬氏下館跡付近絵図トレース図（江戸末～明治初年，小島道裕氏原図を一部改変）



第4図　江馬氏下館跡付近地籍図（明治21年）

2　歴史的環境（第２図・第３表）

高原川水系の河岸段丘上には古くから人々の営みがあったようである。石神・麻生野・殿・小萱・釜崎・朝浦・吉田など，高原川・吉田川によって形成された河岸段丘上や，山田など山田川沿いの河岸段丘上では縄紋時代の土器・石器が出土している。麻生野地区からは縄紋時代草創期の有舌尖頭器が出土し，また同地区の遊幡石神神社は，縄紋時代中期の硬玉製大珠をはじめとする石器類を保管している。石神地区からも縄紋時代中期の赤色顔料付有孔鍔付土器や石器・石棒などが出土した。上小萱の立石遺跡は縄紋後～晩期のものであろう環状列石遺構であり，周辺から土器・石器なども出土している。遺跡の範囲やその変遷等，不明な点は多いものの，縄紋時代を通してこれらの河川沿いに人々が暮らしていたようである。

一方，高原郷からは弥生式土器の出土はほとんど確認されていない。

飛騨における古墳の確認例は国府・古川を中心とする古川盆地と，高山盆地の宮川水系に集中している。本遺跡が立地する高原川水系の高原郷では，山田川沿いの柏原古墳が唯一の確認例である。

古代から中世鎌倉時代の高原郷については，確認できる遺跡や史料が少なく，明らかではない。

中世室町時代に至ると，江馬氏下館跡から13世紀以後の遺構・遺物が出土するようになる。また江馬氏が高原郷一帯を治めるようになったことを史料から知りえるようになる。江馬氏関連の史料については，葛谷鮎彦氏の詳細な考察（葛谷1970），小島道裕氏の論考がある（小島1996・1998）。葛谷・小島氏の研究を第３表にまとめ，以下に簡略に示す。

高原郷の江馬氏は，13世紀中頃に伊豆国田方郡江馬庄（現伊豆長岡町付近）を領有していた鎌倉幕府執権北条氏か，その在地御家人である伊豆の江馬（江間）氏のいずれかの一族が飛騨に所領を得て高原郷に入ったもののようである。その後，南北朝の内乱を経て在地領主として成長して行ったと推定できる。

江馬氏が史料上に表われるのは14世紀後葉以後のことであり，「山科家文書」応安５年(1372)の記録がその初見である（岐阜県教育委員会1969）。「山科家文書」応安５年（1372）から嘉慶２年(1388)までの記録では「江馬但馬四郎」，「江馬能登三郎」，「江馬民部少輔」の名前が確認できる。この３人の出自，系譜，また高原郷で伝えられる江馬氏と同族なのかも明らかではない。しかしすでに14世紀末には，高原郷にいた江馬氏の一族が室町幕府と直接結びついてその公務を執行したり，逆に反抗する力をもっていたことがわかる。「山科家礼記」文明３年(1471)・同４年(1472)の記録からは，江馬氏が室町幕府の有力者と強い繋がりを持ち，また認められるだけの力を持つ地方豪族であったことがわかる。「梅花無尽蔵」延徳元年(1489)の記録，「北野社家日記」延徳３年(1491)・同４年(1492)の記事からは，江馬氏が高原郷から荒城郷近辺，つまり高原川流域に留まらず，既に古川盆地にまでその勢力を拡大し，また15世紀末まで在地の勢力としての室町幕府との関係を保っていたことが判る。

戦国時代になるとその動乱の中の江馬氏の活動が記されている。北飛騨高原郷は次節でも述べるように，信州，美濃を介して太平洋側と日本海側を結ぶ交通路の分岐点として戦略上の重要地である。江馬氏は甲州の武田氏と越後の上杉氏という二大勢力の間でその双方から圧力を受けつつも，越中に進出するだけの力を蓄えていたようである。

天正10年(1582)，本能寺の変によって織田信長が没すると，江馬輝盛は飛騨の支配権をめぐって南飛騨の三木自綱と戦ったが敗れて討死にし，高原諏訪城も落城した。このようにして，中世の北飛騨に雄飛した江馬氏は，近世への転換期に領主としての姿を消すこととなった。

第3表　江馬氏関係年表

暦年代		江馬氏の動向		日本史上の動き
13世紀		北条氏の一門または伊豆の江馬氏の一族，高原郷に入る	鎌倉時代	
1300				
14世紀	1372	「江馬但馬四郎」 広瀬氏を通じ，管領細川頼之から室町幕府の指示実行命令を受ける [1]	南北朝時代	1321 後醍醐天皇 建武の新政 1336 足利尊氏 京都に入る 南北朝の分裂 1378 足利義満 室町殿(花の御所)に移る
	1381	「江馬但馬四郎」 伊勢貞長を通じ，管領斯波義将から室町幕府の指示実行命令を受ける [1]		
	1383	「江馬能登三郎」 山科家領飛騨国江名子・松橋を押領する [1]		
	1388	「江馬民部少輔」 室町幕府の指示実行命令を受ける [1]		1392 南北朝の統一
1400				
15世紀	1471	「江馬左馬助」 伊勢貞宗，飯尾為信・之種から室町幕府の指示実行命令を受ける [2]	室町時代	1467 応仁の乱始まる
	1472	「江馬左馬助」 管領細川勝元から山科家に忠節を尽くすよう指示を受ける [2]		
	1489	万里集九，高原郷・荒城郷を訪れ「江馬氏」の饗応を受ける [3]		
	1491	「江間殿」室町幕府奉行人松田長秀・飯尾為規から北野社領飛騨国荒木郷の回復を命じられる [4] 以後，「江馬氏」北野社領の飛騨国荒木郷の所領経営を委任される [4]		
	1492	「和尓平太」江馬氏の使いとして，北野社に年貢を南円院に納める旨の返答を行う [4]	戦国時代	
1500				
16世紀 前葉				
中葉	1565	甲州武田氏，越後上杉氏の両勢力から圧力を受ける この頃の江馬氏の当主は「左馬介時盛」であるが，息子「常陸介輝盛」と対立する この頃，越中まで勢力を伸ばす		1551 第1回川中島の合戦 1572 武田信玄没
後葉	1572	「輝盛」，父「時盛」を殺害，本城高原諏訪城支配		
	1576	上杉氏の軍勢，飛騨侵攻 「輝盛」，上杉氏に降伏 「輝盛」，織田信長を後盾とした南飛騨の三木自綱と対立		1578 上杉謙信没 1582 本能寺の変，織田信長没
	1582	「輝盛」，吉城郡荒城川で三木自綱軍に敗れ，討死 高原諏訪城落城		
1600				1600 関ヶ原の合戦

• 〈江馬氏に関する記述がみられる古文献〉
[1]『山科家文書』，[2]『山科家礼記』，[3]『梅花無尽蔵』，[4]『北野社家日記』
• 16世紀中葉以降の記事は『岐阜県史』通史編中世 1969 岐阜県，『岐阜県史』通史編近世 1968 岐阜県による。

3　高原郷の街道と中世城跡（第5・6図・第4表）

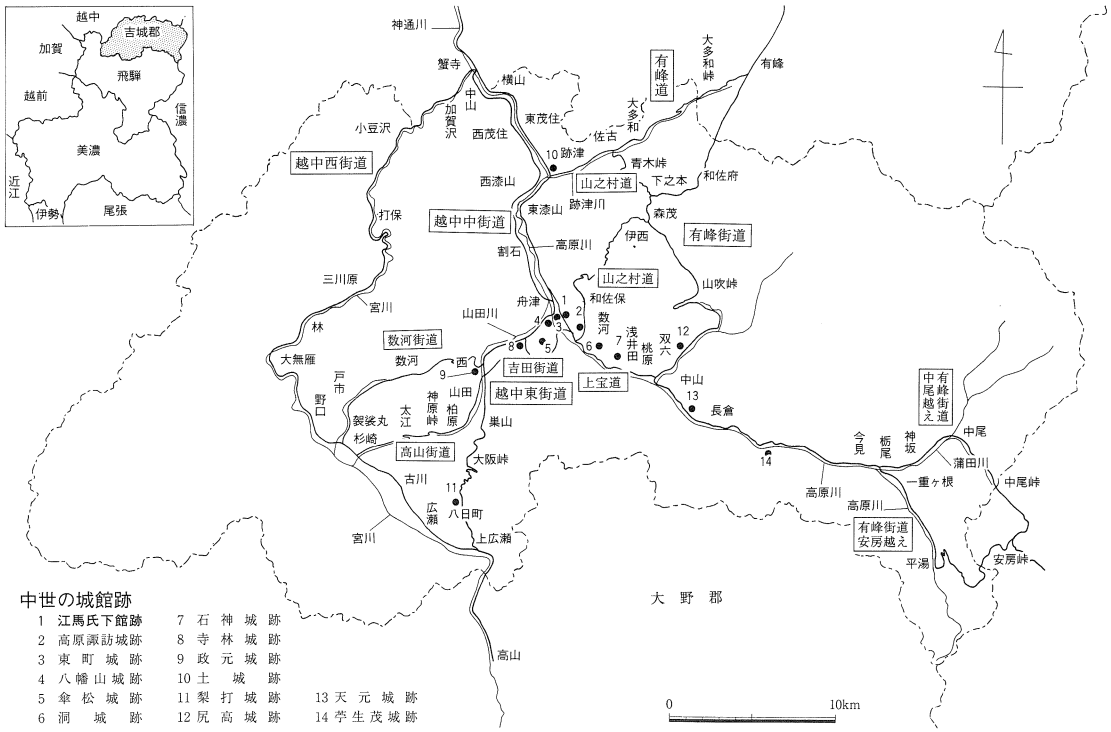
(a)　高原郷の街道と江馬氏（第5図）

江馬氏城館跡の所在する高原郷は飛騨国の最北端に位置し，越中・信州と接していることから古くより交通の要所となっていた。中世鎌倉時代において交通上最も重要であったのは，幕府が所在する政治の中心地鎌倉との交通である。この鎌倉への道を鎌倉街道と呼ぶ。飛騨のみならず，北陸諸国から鎌倉のある関東方面に向かうには，日本アルプスを越え，信州・甲斐に抜けるのが最も近道であり，飛騨の鎌倉街道は北陸諸国と鎌倉とを結ぶ道としても重要であった。この鎌倉街道の一つが越中から高原郷を抜けて信州に至る有峰街道であり，鎌倉幕府が倒れた後は飛騨・北陸諸国と信州を結ぶ道として信濃街道・信州街道と呼ばれるようになった。また飛騨と越中を結ぶ街道を越中街道と呼び，主要なものは越中東街道・越中中街道・越中西街道の3つである。高原郷内にはこれらの主要街道を連絡する幾つかの脇街道も通っていた（第5図）。

江馬氏下館跡は，越中東街道と信濃（有峰）街道とを結ぶ上宝道沿いの河岸段丘上に位置する。さらに館の南には山之村道と吉田街道の分岐点があり，これらを通じても街道と連絡がとれる。また江馬氏城館跡に指定されている城跡は，これらの街道沿いやその分岐点など交通上の重要地に位置している。江馬氏にとって，軍事・商業の両面において大切な意味をもつ交通路を掌握することが，高原郷を支配する上で重要な意味をもつことであったのだろう。

(b)　周辺の中世城跡（第5図，第4表）

高原郷には下館跡のほかにもいくつかの中世城跡がある。第4表に下館跡周辺の中世城館跡を一覧表にまとめ，第5図には街道と城跡との位置関係を示し，先学の研究を参考に以下に簡単に記す。



第5図　中・近世の吉城郡の交通路　縮尺1/450,000

高原諏訪城跡：江馬氏下館の東側背後，二十五山から南に向って延びる尾根の南端頂および稜線延長上，保木戸平（城山）山頂に位置する。周囲の山々の峰はいずれもこれより高く，包囲された印象をうけるが，南方は水かさの多い高原川の急流に臨んでおり，比較的攻撃しにくい位置にある。高原諏訪城の南裾において山之村道が上宝道から分岐し，山之村で鎌倉（有峰）街道と連絡する。高原諏訪城は江馬氏の本城であると伝えるが，築城年代・築城者ともに不明である。

本丸は南北30m・東西16mの長方形の平場であり，その下には幅6～10mの腰曲輪がある。本丸北側尾根の延長に竪堀や堀切を設け，尾根筋からの攻撃を防いでいる。本丸の南方，直高12m下に東西の方向に山地を掘り切った長さ42m・幅18mの堀切がある。この堀切より5.5m下った所に，東西9.6m・南北20mの二の丸(出丸)があり，幅5m前後の腰曲輪がめぐる。二の丸の南端に竪堀と堀切を設けている。

洞城跡：神岡町の中心地から高原川をややさかのぼった麻生野地区の山上にある。『飛州志』には城主は麻生野右衛門大夫直盛と記している。彼は永禄7年(1564)に55歳（一説には57歳）で没しており，築城は天文頃と考えられる。直盛の跡を継いだ慶盛が本家の輝盛と不和になり天正6年(1578)8月18日夜，輝盛の軍勢に攻められ，慶盛は自害し，城も焼け落ちたと伝わっている。

山頂に東西42m，南北13mの長方形の本丸を設け，本丸西側に東西33m，南北14mの曲輪がある。この曲輪から南側・北側それぞれの斜面に1本ずつの竪堀を設ける。また，本丸北側には堀切を設け尾根筋の防御としている。

石神城跡：神岡町石神地区にある。洞城と石神城は共に高原郷と鎌倉（有峰）街道を結ぶ上宝道沿いに立地し，また二つの城の間に広がる河岸段丘面を守るように立地する。江馬時経の築城とされる。

本丸は東西27m・南北19mの楕円形の平場であり，東側に南北方向の堀切，西側南北それぞれの斜面に1本ずつの竪堀を設ける。この竪堀の西に平場があるが，送電線の設置によって地形がかわっている。この平場の南西端部に東西方向の堀切を設けている。

寺林城跡：神岡町寺林，玄蕃山の頂部に立地する。高原郷の主要街道である越中東街道沿いである。本丸は東西23m・南北10mの方形の平場であり，西に3段の平場が連なるが，堀切，竪堀はない。

政元城跡：神岡町西にある。高原郷の主要街道である越中東街道はこの地で巣山・十三墓峠を越える本道と，数河峠を越える脇道（数河街道）に分かれ，政元城はその分岐点の押えであったと推定できる。江馬氏の家臣吉村政元の居城とも，正本主馬の居城とも伝える。本丸は東西20m・南北10mの楕円形の平場であり，幅4～10mの腰曲輪がめぐる。西側に東西16m・南北10mの曲輪がある。その南に堀切を設け，尾根筋への防御としている。

土城跡：神岡町牧，高原川と跡津川の合流点の岩山である牛首城山にある。高原郷の主要街道である越中東街道と，鎌倉（有峰）街道を結ぶ脇街道である有峰道はこの城の麓の大字土より分岐して大多和峠を経て有峰・富山に至る。土城はその分岐点にあり，北方に備えると共に，江馬氏との関係が伝えられる越中中地山城（富山県上新川郡大山町）との連絡にあてられたものであろう。江馬氏の家臣一ノ瀬清四郎の居城であったとも伝えられている。頂部に二段の平場がある。

江馬之御館跡：現在の神岡町東町，江馬氏下館の北方，殿段丘の段丘端部に位置する。『飛州志』によれば，江馬氏が武田氏に属した後，武田信玄の越中侵攻のため，その家臣山県昌景の縄張りで造り，後の金森長近の入国の際には，その家臣山田小十郎が入れ置かれたとされる。

梨打城跡：吉城郡国府町八日町，古川盆地を流れる宮川の支流荒城川が東の山峡に入ってまもなく，北岸の桐谷と十三墓の両峡谷に挟まれた標高749mの山頂にある。越中東街道はこの城の東裾を抜けて大阪峠から高原郷に入り，梨打城はその守りであったと考えられる。『飛州志』には高原郷諏訪城城主江馬常陸介輝盛の持ち分と記され，江馬氏が南方を固めるために造った出城と考えられるが，築

城者，築城年共に不明である。天正10年の荒城川の合戦で輝盛が三木氏に破れた際，本城高原諏訪城と共に落城したと伝わる。本丸は南北36ｍ，東西24ｍの不整三角形の平場であり，幅４～８ｍの腰曲輪がめぐる。本丸を中心に三又状に伸びる尾根上に曲輪を設け，堀切，竪堀で防御している。

その他江馬氏持ち分と伝わる関係城跡には「八幡山城」・「傘松城」(神岡町)，「尻高城」・「天元城」・「苧生茂城」(上宝村)，「中地山城」(富山県上新川郡大山町)などがある。

第４表　江馬氏下館跡周辺の城跡一覧表

番号	城館跡名	読　み	別　称	標高(ｍ)	比高(ｍ)	下館からの直線距離(km)	立　地	指　定	所在地	参考文献
1	下館跡	しもやかたあと		455			河岸段丘面上	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町殿	2,3,4,5,6,7, 9,10
2	高原諏訪城跡	たかはらすわじょうあと	江馬城えまじょう 旭山城あさひやまじょう 旭城あさひじょう	619	164	0.5	尾根筋先端頂部	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町殿	2,3,4,5,6,7, 9,10
3	東町城跡	ひがしまちじょうあと	江馬之御館えまのおやかた 沖野城おきのじょう 野尻城のじりじょう	443		0.9	段丘尻	町史跡	岐阜県吉城郡 神岡町城ヶ丘	2,3,4,5,6,7, 9,10
4	八幡山城跡	はちまんやまじょうあと		451	30	1	山頂	町史跡	岐阜県吉城郡 神岡町朝浦	4,5,9
5	傘松城跡	かさまつじょうあと	吉田城よしだじょう	802	373	2.1	山頂	県史跡	岐阜県吉城郡 神岡町吉田	4,5,9,10
6	洞城跡	ほらじょうあと	麻生野城あそやじょう	536	74	2.4	半独立峰頂部	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町麻生野	2,3,4,5,6,7, 9,10
7	石神城跡	いしがみじょうあと	杏城あんずじょう 二越城ふたごえじょう	703	183	3.7	山頂	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町石神	2,3,4,5,6,7, 9,10
8	寺林城跡	てらばやしじょうあと	玄蕃城げんばじょう	632	76	3.7	半独立峰頂部	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町寺林	2,3,4,5,6,7, 9,10
9	政元城跡	まさもとじょうあと	山田城やまだじょう	741	39	6.2	尾根筋先端頂部	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町西	2,3,4,5,6,7, 9,10
10	土城跡	どじょうあと	鬼ケ城おにがじょう	352	62	9.2	山頂	国史跡 江馬氏城館跡	岐阜県吉城郡 神岡町牧	2,3,4,5,6,7, 10
11	梨打城跡	なしうちじょうあと		749	197	12.5	山頂	－	岐阜県吉城郡 国府町	2,6,7,10
12	尻高城跡	しったかじょうあと				7		－	岐阜県吉城郡 上宝村尻高	7,8
13	天元城跡	てんげんじょうあと				9.5	尾根筋先端頂	－	岐阜県吉城郡 上宝村岩井戸	8,9,10
14	苧生茂城跡	おうもじょうあと				14.2		－	岐阜県吉城郡 上宝村苧生茂	8
15	中地山城跡	なかちやまじょうあと		380	55	26	台地	町史跡	富山県上新川郡 大山町中地山	1,2,6,7,10

・番号は第５図と一致する

第２章３(b)・第４表の参考文献

1　大山町教育委員会　1994　『大山の歴史』

2　神岡町教育委員会　1979　『江馬氏下館跡発掘調査概報』

3　神岡町教育委員会　1981　『江馬氏下館跡保存管理計画策定報告書』

4　神岡町教育委員会　1981　『神岡の文化財』

5　神岡町教育委員会　1994　『飛騨の神岡』

6　神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室　1995　『江馬氏城館跡－下館跡発掘調査報告書Ⅰ－』

7　神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室　1996　『江馬氏城館跡Ⅱ－下館跡門前地区と庭園の調査－』

8　上宝村　『上宝村誌』

9　森本一雄　1987　『定本飛騨の城』　郷土出版社

10　吉岡勲・村瀬一郎・横山泰　1979　「岐阜県」『日本城郭大系』第９巻　新人物往来社

11　佐伯哲也氏提供の縄張図（『江馬氏城館跡－下館跡発掘調査報告書Ⅰ－』掲載）を参考にした。

第３章　下館跡の概要と調査の経過

１　下館跡の概要（第６図）

江馬氏下館跡は北飛騨を治めた中世武家である江馬氏の居館跡であり，1980年に国の史跡指定を受けた江馬氏城館跡の中心遺跡である。

1973年度に江馬氏居館跡・庭園跡との伝承をもつ神岡町大字殿地区において土地改良工事に先立つ試掘調査を行い，広範囲にわたる遺構の存在を確認している。この調査によって庭園遺構の概要をほぼ確認し，園池に隣接した建物跡，館を囲む堀跡の存在も明らかになった。以後，1978年にかけて，調査区を拡大しつつ堀内外の発掘調査を行い，建物跡，館の西・北・南の三方を囲む堀跡などを検出している（神岡町教育委員会1979）。

1994年度は，それまでの調査によって部分的に確認していた館の三方を囲む堀跡の規模と年代を確認することを主目的とする調査を行った（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995）。

1995年度は，館の門前の利用のあり方と堀内外を結ぶ道路を確認するための門前地区の調査と，堀内の園池地区のトレンチ調査を行った（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1996）。

1996年度は，門前地区で確認した南北道路の南への延長の有無と，史跡指定地南辺での遺構の状況を確認するための南辺地区の調査を行なった（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1997）。

1997年度は，門前地区と南辺地区の境を明らかにし，堀外地区西側から南側区画の様相を明らかにするため，南堀延長部周辺の調査を行った（神岡町教育委員会1998）。

これらの調査成果を受けて，1998年度には，史跡整備事業に向けて『史跡江馬氏城館跡整備基本構想』（以下，『基本構想』とする），1999年度には『史跡江馬氏城館跡下館跡地区整備基本計画』（以下，『基本計画』とする）を策定し，その検討作業時にもこれまでの調査で確認した建物構造・遺構配置・地区名称等の再検討・変更等を行った（神岡町・神岡町教育委員会1999・2000）。

なお，建物構造の再検討とともに，本報告書において堀内地区の建物・柵列番号の再整理と変更を行い，今後はこの番号で表示するものとする。これまでの報告書等における建物番号との対応は第５表にまとめ，再検討した礎石建物の構造とともに，次項に示す。

以下に，これまでの調査成果の概要をまとめる。

(a)　堀内（ほりのうち）地区の調査成果（第７図・第５表・付図１）

堀で囲んだ館の中心部（堀内地区）の規模は東西推定114ｍ，南北97ｍ程度であり，東側の山を背にして残りの三方を堀で囲んでいる。建物配置と薬研堀の位置からみて，正面は西を向く。

北堀：幅約４ｍ，深さ約１ｍの箱堀である。西堀の延長ラインよりも東側でその西端部を確認し，西堀とは直接つながらない。堀の内側に接して，幅３ｍ，高さ0.5～0.8ｍの土塁状の高まりがある。

南堀：幅約４ｍ，深さ約1.1ｍの箱堀であり，角度をやや東に振って新たに掘り直している。掘り直した新堀は幅約５ｍ，深さ約0.7ｍの箱堀である。堀埋土の土層の検討から南堀は新旧２時期，６段階の変遷をたどることが判った。旧堀の埋土には堀内地区側からの流れ込み層があり，土塁を伴っていたと考えられる。新堀にはこのような層が堆積しない。旧堀の西方には園池の排水路と推定される石組み溝が接続する。南堀新堀は，この石組み溝以西では旧堀跡をそのまま利用している。南堀旧堀は西堀南端部とは直接つながらず，これを越えてさらに西に伸び，西堀から約30ｍ西にある地形の段差部において，その西端部がそのまま西に向かって開いて終わっている。

第6図　調査地区周辺の地形と発掘区位置図　縮尺1/1,470

西堀：館の正面であり，館への導入部となる二つの土橋がある。北側の土橋１は幅約３ｍ，南側の土橋２は幅約７ｍを測る。堀は，土橋１の北側では幅約4.4ｍ，底幅約1.8ｍ，深さ約1.4ｍの箱堀であり，南側では幅約4.5ｍ，底幅約0.2ｍ，深さ約３ｍの薬研堀である。西堀薬研堀はその南端部で西に屈曲する。屈曲部は南北長約７ｍ，東西幅約４ｍの箱堀になる。この箱堀部の堀底の北半部がさらに一段低く，南側は深さ約1.2ｍ，北側は深さ約２ｍである。西堀の埋土は自然の堆積ではなく，整地土で一度に埋め戻している。この堀埋土の流れ込みの方向から，西堀の内側に土塁の存在が想定できる。なお，堀内地区の建物配置と土橋の規模から，土橋１を脇門，土橋２を主門と考えている。

これらの堀は，その機能時にはわずかに水が溜まる程度であり，基本的には空堀であったようである。出土遺物のうち最も新しい年代を示すものは16世紀前葉のものである。

庭園：館の南西隅に位置する。1995年度に行なったトレンチ調査により東西約28ｍ，南北約14ｍの規模であり，中央部には東西約７ｍ以上，南北2.5ｍ以上の中島を築くものであったと推定している。池底は素掘りの状態であり，地山層まで削った後に，掘削土を用いて池の汀部と中島に盛土している。池辺の施設や付属する建物の配置，石材の使い分け，景石の据え方などから，京都の庭園様式にならって造ったものであると推測している。層位観察による南堀・盛土との関係から，園池は館の造成時に旧堀・土塁と一体の施設として成立したと考えている。最も新しい年代を示す出土遺物は16世紀初めのものである。

建物（第７図・第５表）：1978年度までの調査において，堀内地区では第１～３期の３時期の遺構群の存在を確認している。館の成立期を含めて３回の大規模な整地を行ったと考えられるが，第３期の遺構面を構築した造成土の大部分は後世の削平によって失われている。第１期の遺構については，第２・３期の遺構検出面である最上層遺構面構築土層直下の整地土層から掘り込む柱穴等をトレンチ調査によって部分的に確認したのみであり，その全体的な配列や時期決定は今後の課題としている。最上層遺構面で検出した堀内地区の建物跡には，礎石建物９棟，掘立柱建物１棟，柵列４列，溝跡等がある。これらの建物群はその主軸方位の違いから２時期あったことを確認し，1978年度概報ではこれをＡ期・Ｂ期（第２期・第３期）にわけて整理している。両者の新旧関係については一部の礎石の抜き取り穴の重複（SB43・SB51）や，礎石の検出レベルから，Ａ期（SB41～44・46，SA42・43・45・47）がＢ期（SB48～51）に先行することが判明している。Ａ期建物は遺構の残存状態が良好で平面規模も推測できるが，Ｂ期建物については削平を受け，平面規模は明瞭ではない。

建物と南堀との主軸方位をみると，古いとしているＡ期建物と南堀新堀の主軸方位が一致し，南堀新堀段階にＡ・Ｂ両期の建物が伴うと指摘できる。これら各期の遺構には，建物跡の主軸方位，堀の重複状況，庭園と堀の関係等にみられるように前構築工法の踏襲の意識が強くうかがわれる。

1999年度の『基本計画』策定に際して，史跡整備事業の対象時期となるＡ期建物（SB41～44・46，SA42・43・45・47）の構造の再検討を行い，第７図のように整理した。

SB41は東西５間（７尺等間），南北３間（南から９尺・10尺・９尺），南側に５尺の縁が付く。

SB42は東西５間（西から９尺・７尺×３間・14尺），南北５間（７尺等間）である。

SB43は東西７間（西から４尺・８尺・6.5尺・８尺×２間・6.5尺×２間），南北４間（南から７尺×３間・９尺），南側の西から３間分に幅７尺の縁を持つと推定する。

SB44は母屋は東西６間（6.5尺等間），南北４間（6.5尺等間），北側に１間（6.5尺）の縁を持ち，西側に４間分（6.5尺等間）延びるものと考えられる。

SB46は東西５間，南北３間（ともに6.5尺等間）の身舎の西・南・東の三方に10尺の庇が回り，南西隅部南辺に幅４尺，西辺に幅８尺のすの子縁が付くと考えられる。

SB41とSB42，SB42とSB44，SB44とSB46は，それぞれ渡り廊下で繋がっていたと考えられる。SB41は遠侍または馬屋，SB42は主殿，SB43は台所，SB44は常御殿，SB46は会所と推定している。

(b) 堀外地区の調査（第６図，付図１）

1978年度調査では遺構の広がりを確認するため，堀の外側でもトレンチ調査を行っている。館の北側・南側では南北に長軸をとる十字型のトレンチをそれぞれ４本・１本設定した。西側は西堀から段丘端部まで伸びる東西トレンチを１本，段丘端部に東西方向に２本，南北方向に１本のトレンチを設定した。各トレンチでは柱穴・土坑・竪穴住居等を検出したようであるが，1978年度概報では，館外での明確な遺構の広がりは確認できなかったと報告している。

1995年度から1997年度にかけて，西堀西側から史跡指定地南辺にかけての調査を行い，堀外地区は南堀延長部を境として，その北側を館正面の門前地区（区画５～７），南側を館で使用する諸道具類の制作・修理等を行う職人の工房地区（区画１・２・４）に分けていることがわかった。なお，1997年度報告では，南堀延長部の南側の区画１～４を「南外部地区」としていたが，「工房地区」と変更する。

門前地区では道路や柵列によってさらに３つの方形の区画（区画５～７）を設けており，掘立柱建物８棟，柵列８列，井戸11基，竈跡１基などを検出し，大きく３時期の変遷をたどることが明らかになった。門前地区第１段階は館を整備する前であり，総柱式掘立柱建物（SB01・SB06～08）が散在する。門前地区第２a段階は館の整備に伴って建物を建てる時期であり，柵列（SA01）によって土橋１（脇門）前の区画７，土橋２（主門）前の区画６に分けている。区画６では堀内地区のＡ期建物に主軸を揃えた建物が建ち並び（SB02・03・05，SA02），区画６・区画７は広場という景観が出現する。西堀南端部前面の区画５と主門前の区画６の境は未調査のため明らかではないが，区画６側で道路を確認しており，その南側に柵列を設けて区画していたと推定できる。門前地区２b段階は，堀内地区と共に建物を建て替える時期であり，区画６と区画７の境の柵列SA01を堀内地区のＢ期建物に主軸を合わせて馬屋SB04，さらにSA02に建て替える。区画６の建物はなくなり，門前地区の全ての区画が広場状になっていたと考えられる。

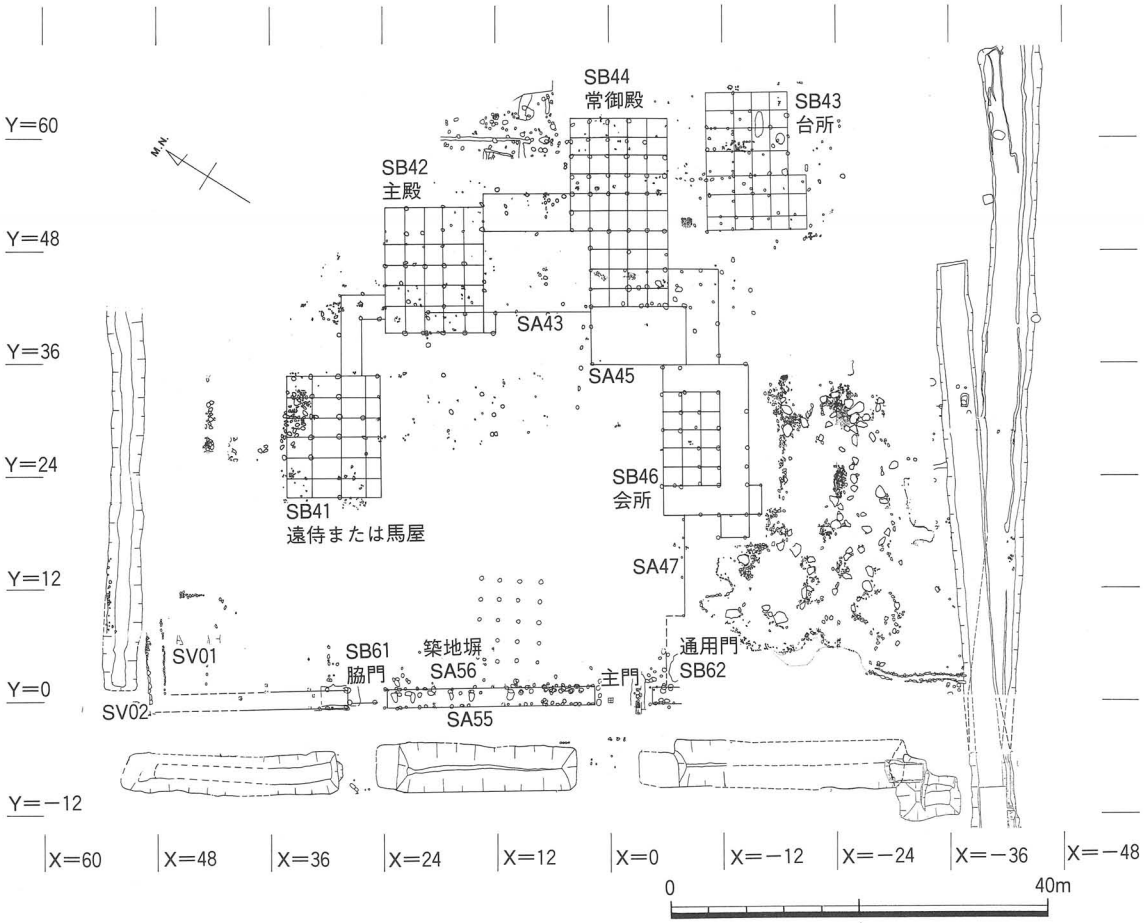
工房地区でも，柵列や道路，地形の段差を利用して３つの区画（区画１・２・４）を設けている。掘立柱建物17棟，柵列11列，竪穴住居３棟，土間状土坑８基，土坑，炉跡等を確認した。竪穴住居に炉跡が伴うこと，カラミや生漆が付着した漆塗膜が出土したことから，館の南辺は職人の作業場の地区であったと考えられる。江馬氏下館Ⅰ期には区画４で総柱式掘立柱建物SB21ができる。館を整備する江馬氏下館ⅡＡ期には，道路と柵列，地形の段差を区切りとした３つの区画（区画１・２・４）それぞれに，堀内地区のＡ期建物に主軸を揃えた掘立柱建物と広場を設けている（区画１にSB11，区画２にSB15，SI 02，区画４にSB22・26）。同ⅡＢ期には，各区画ごとにその配置を踏襲して建て替えを行っているが（区画１ではSB12，区画２ではSB16・17，SI 01），その主軸方位は堀内地区のＢ期建物と一致しない。区画４ではそれまで広場であった西側部分にもさらに竪穴住居や掘立柱建物ができる。館としての機能を他所に移転する江馬氏下館Ⅲ期にも作業場としての利用があったものと推定している。下館では館の整備時に堀外地区においても館に必要な施設を計画的に配置し，その区画の使い分け，身分による住み分けを行っている様子が明らかになった。

また，下館がある殿地区の近世村落の復元を行ったところ，近世には殿段丘の南端部に諏訪社と天神社が，北東端部に加茂社が，北端部に白山社があったことがわかった。これらの宗教施設は，下館の時代にこの地に勧請されたものと考えられ，殿段丘全体に下館の施設が広がるものと推定される。

第５表　堀内地区建物番号対応一覧表

	本報告書以降の堀内地区建物番号	『基本計画』における建物番号	1978～1997年度報告における建物番号	建物形式	性　格	検出年度
A期建物	ＳＢ41	ＳＢ１	ＳＢ01	礎石建物	遠侍または馬屋	1978
	ＳＢ42	ＳＢ２	ＳＢ02	礎石建物	主　殿	1978
	ＳＢ43	ＳＢ３	ＳＢ03	礎石建物	台　所	1978
	ＳＢ44	ＳＢ４	ＳＢ04	礎石建物	常御殿	1978
	ＳＢ46	ＳＢ６	ＳＢ06	礎石建物	会　所	1978
	ＳＡ45	ＳＡ５	ＳＡ05	掘立柱柵列		1978
	ＳＡ47	ＳＡ７	ＳＡ07	掘立柱柵列		1978
	ＳＡ42		ＳＡ02	掘立柱柵列		1994
	ＳＡ43	ＳＡ1		礎石柵列		1999
	ＳＢ52		ＳＢ12	礎石建物		1994
	ＳＡ41		ＳＡ01	掘立柱柵列		1994
B期建物	ＳＢ48		ＳＢ08	掘立柱建物		1978
	ＳＢ49		ＳＢ09	礎石建物		1978
	ＳＢ50		ＳＢ10	礎石建物		1978
	ＳＢ51		ＳＢ11	礎石建物		1978

『基本計画』：『史跡江馬氏城館跡下館跡地区整備基本計画』2000年３月　神岡町・神岡町教育委員会



第７図　堀内地区Ａ期建物配置図　縮尺１/800

(c) 出土遺物の概要

中世の遺物は土師器皿を中心として5800点ほどが出土しており，その出土量は堀内地区に多い。堀外地区においては門前地区では極端に少ないものの，工房地区では一定量の出土があった。出土土器・陶磁器の種類は，土師器，瓦器，中国陶磁器，白瓷系陶器，瀬戸・美濃，珠洲，八尾，常滑などである。13世紀後半から16世紀中葉にかけての各時期の遺物で構成され，15世紀前半の遺物量が最も多く，館の最盛期と考えられる。また，全体的な量は少ないものの16世紀中葉までの遺物が見られる。

(d) 江馬氏下館跡の変遷

以上の調査成果に基づき，江馬氏下館全体の変遷を，次のⅠ～Ⅲ期に時期区分している。

江馬氏下館Ⅰ期（13世紀後半～14世紀）：一定の遺物が出土するようになり，この地の利用が始まる。総柱式建物が散在し，堀はまだ造っていない段階である。1994年度報告の江馬氏下館１期，1995年度報告の門前地区第１段階に相当する。

江馬氏下館Ⅱ期（14世紀末～16世紀初め）：方約一町の館を整備した段階である。建物主軸の方位の変化に基づき，ⅡＡ期・ⅡＢ期に細分できる。

江馬氏下館ⅡＡ期（14世紀末～15世紀前半）には堀・庭園を造成し，館としての機能が出揃う。また堀外地区にも計画的に区画を設け，門前地区の宿直屋や馬屋，広場，工房地区の手工業生産の場など，館に必要な施設を計画的に配置している。1978年度概報のＡ期建物の時期である。遺物の出土量は最も多く，館の最盛期である。1994年度報告の江馬氏下館２-ａ１期，1995年度報告の門前地区第２ａ段階に相当する。

江馬氏下館ⅡＢ期（15世紀後半～16世紀初め）には堀内地区と門前地区では主軸方位を変えて建物の建て替えを行い，門前地区には馬屋が出現する。工房地区でも建物配置を継承しつつ建て替えを行うが，その主軸方位は堀内地区とは一致しなくなる。1978年度概報のＢ期建物の時期であり，1994年度報告の２-ａ２期，1995年度報告の門前地区第２ｂ段階に相当する。

江馬氏下館Ⅲ期（16世紀中頃～16世紀末）：江馬氏が下館の機能を他所に移してから，1582年に三木氏に敗れ領主としての江馬氏の歴史が終わるまでの時期である。1994年度報告の江馬氏下館２-ｂ期と３期の一部に相当する。地籍図や縄張図等の検討から江馬氏下館Ⅲ期には，東町城・高原諏訪城が本拠であった可能性が高い。

なお，Ａ期建物に先行する1978年度概報の堀内地区第１期については，遺構の配置等不明な点が多く，この時期変遷中には対応できていない。第１期も館の創立に関わる時期であるとされ，Ⅱ期はⅡＡ期の前にもう一時期細分できると想定できるが，その対応，細分については今後検討していく。

2　調査の方法

遺跡の標示：岐阜県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はGO7K00093である（岐阜県教育委員会1989）。遺跡略号は，Gifu Emayakata をあらわしたGEとし，調査年度を組合わせてGE98・GE99と標示した。

調査区の設定：基準点網の設定は，1978年度調査時に使用した座標をもとに行っている。これは当時の保存原点である杭１（直角座標第７系国土座標Ｘ＝35878.577，Ｙ＝13064.049，Ｚ＝455.555）を原点０として，杭１と杭２（直角座標第７系国土座標Ｘ＝35913.142，Ｙ＝13116.680，Ｚ＝455.653）を結ぶ軸線を基準として，この軸線をＹ軸，杭１を通りこれに直交する軸線をＸ軸とした。座標は１ｍを単位とした数値によって表示している。この座標の方向は堀内地区のＡ期建物の軸線にあわせたものであり，Ｘ軸が磁北から西へ約33度振っている。

なお，調査地区内の杭は６ｍごとに設定し，遺構実測・遺物取り上げの基準として用いた。

調査地区基準杭の再測量について（第６表）：1999年度調査中に，発掘調査現場における基準点網の設定に使用している保存原点杭１が1994年度調査終了時に転倒し，ずれていたことがわかったため，倒れた保存原点杭１の再測量を行い，同時に以後の発掘調査の基準点網設置時の基準とするため，史跡指定地外の道路面上等に正しい基準点網座標の測量ピンの設置を行った。再測量の結果は，第６表のとおりである。転倒している現地の保存原点杭１については，今後，保存原点杭11（直角座標第７系国土座標Ｘ＝35878.374，Ｙ＝13064.107，Ｚ＝455.543，調査座標Ｘ＝0.06，Ｙ＝0.10，レベル455.543）と読み替えるものとする。杭２については移動していなかった。1995～1998年度調査時は，杭11（調査座標Ｘ＝0.06，Ｙ＝0.10）を原点０とし，杭11と杭２（調査座標Ｘ＝０，Ｙ＝62.86）を結んだ軸線をＹ軸，杭11を通りこれに直交する軸線をＸ軸として，基準点網を設置して現場の図化・記録作業を行っており，今後，必要に応じて記録図面等の修正を行っていく。1998年度調査時の図面・記録等の座標値は，本報告書の作成作業時に正しい基準点網座標値に修正した。

調査の方法：1998年度は，調査予定地東辺を1978年度調査時のトレンチ（９トレンチ）に合わせ，まずこのトレンチを試掘坑として，表土，旧耕作土から地山層に及ぶ基本層序を確認した。1999年度は前年度調査地区と隣接していたため，試掘坑は設けず，前年度の知見を参考にした。調査地区全体の旧耕作土層までを重機を使用して掘削し，それより下層は人力により発掘した。個々の遺構調査については，柱穴は柱痕跡や抜き取り跡を平面的に観察した後，半截して断面観察を行ない，掘り残した埋土はそのまま埋め戻した。土坑等の大型の遺構は二分法，あるいは四分法を用いて発掘した。なお柱穴の完掘，半截の区別は，巻末の別表７に記した。

遺構番号の付し方：江馬氏下館跡の発掘調査では，奈良国立文化財研究所の標示方法に準じて，遺構の性格に応じて以下の記号を用い，各記号毎に通番で番号を付している。

SB：建物・門　SA：柵・柱列　SI：竪穴住居　SD：溝　SK：土坑・倒木痕

SP：穴・柱穴　SV：石積み・石列　SF：道路

SX：その他の遺構（土間状土坑・炉跡・竈跡・不明石列等）

第６表　調査基準点網設置原点杭の国土座標値

下館跡 発掘調査地内 保存原点杭		本来の調査基準点網設置原点杭の座標値（1994年測量）		1995～98年度調査時の調査基準点網設置原点杭の座標値（1999年測量）		備　考
		直角座標第７系国土座標値	調査座標値	直角座標第７系国土座標値	調査座標値	
杭１	（Ｘ座標）	35878.577	0.00	35878.674	0.06	今後，現地保存原点杭１は「杭11」と読み替える
	（Ｙ座標）	13064.049	0.00	13064.107	0.10	
	（レベル）	455.555		455.543		
杭２	（Ｘ座標）	35913.142	0.00	35913.145	0.00	
	（Ｙ座標）	13116.680	62.86	13116.678	62.86	
	（レベル）	455.653		455.652		

※レベル値単位はｍ

前節に記述したとおり，本報告において，堀内地区の建物・柵列番号の付け直しを行った。今後の調査によって新たに検出した遺構については，これまでの遺構番号の付け方を踏襲し，遺構の性格（記号）毎に本報告書で使用した番号以降の番号を付すこととする。なお，今後の調査検討により，すでに確認している遺構の性格が変わった場合（柵列から建物等）は，前の記号番号を欠番とし，新たな記号番号を付け直し，その対応関係を明記することとする。

なお，本年度の遺構番号は，SB61・SA51・SI21・SD21・SV01・SX31から数えたが，整理作業時の遺構の性格の変更等に伴い，欠番になった番号もある。SPのみは調査年度毎に１から数えているが，二年度分をまとめて報告する本報告書では，1998年度調査地区検出分の柱穴については，現場での柱穴番号に百の位を加え，百の位を３として300番台の番号に付け直して報告している。

実測・記録：遺構の全体平面図・断面図は，縮尺二〇分の一で割り付け実測を行った。柱穴の断面図は堆積に層位があるものについて作成した。ただし全ての遺構は，断面形・法量等を記録した遺構観察表から断面図の作成が可能なようにしている。

出土遺物の取り上げは，前述した座標を用いたＸ・Ｙ座標，出土レベルを少数点以下２桁（レベルは小数点以下３桁）まで記録しておこなった。

写真撮影は遺構検出状況，土層断面，遺構完掘状態等を中心に行なった。調査区全体の発掘後全景写真は高所作業車を用いて撮影した。1999年度調査については，完掘状況空中写真を（株）日本テクニカルセンターに委託し，ラジコンヘリコプターによって撮影した。

遺構の埋め戻し：柱穴・土坑等は掘削部分を山砂で埋め戻した。1998年度調査地区SV01・SV02等の礫部分は土嚢を積み上げて遺構を保護した。遺構検出面全体に山砂を撒いた後，重機を用いて調査地区全体を耕作土で埋め戻した。西堀は掘り残した埋土の断面にブルーシートを掛けて断面の保護と埋め戻し土との区別とし，完掘した部分は耕作土で埋め戻した。

3　調査の経過と調査組織

(a)　1998年度調査の経過

９月２日　調査地区の設定。

９月９日　富山大学理学部助教授酒井英男氏の指導のもと，田中地質コンサルタントが表土はぎ取り前の地下遺構の状態を確認し，発掘後の遺構の解釈を助けるデータを得るための電気探査・レーダ探査を行う。

10月５日～　手掘りで層位確認用９トレンチを掘削。重機による表土掘削を行う。

築地塀基底部石列SV02を検出する。

調査地区杭の設定を行う。

平板による調査地区概略図作成開始。

岐阜県中世城館総合調査員高田　徹氏来跡。

手掘りによるⅣ地区南半部の掘削開始。

第１回江馬氏城館跡整備基本構想検討部会開催。委員各氏による現地指導，『基本構想』検討作業。

10月６日　図化作業開始。Ⅳ地区北半部の精査を行い，西堀北端部を確認する。

10月12日　築地塀基底部石列SV02南側の旧耕作土の掘り下げ開始。遺物が出土。Ｘ座標42.7ライン上にならぶ３つの柱穴SP301・302・303を検出する。

10月19日　富山大学考古学研究室学生１名来跡。

10月20日　北堀の北側で竪穴住居SI21検出。

10月23日　SI21の掘り下げを開始。珠洲・越前の甕などの破片が多く出土。

10月28日　第２回江馬氏城館跡整備基本構想検討部会開催。委員各氏による現地指導，『基本構想』検討作業。

10月30日　文化庁坂井秀弥調査官，岐阜県教育委員会松野晶信氏来跡，現地指導。千葉大学玉井哲雄氏，富山大学前川　要氏，富山大学考古学研究室学生５名来跡。

11月１日　神岡町教育委員会主催「おもしろ探偵団」の児童来跡。

11月２日　NHK高山支局池之端甚衛氏取材。

11月５日　記者発表。報道関係者６名取材。

11月６日　岐阜県中世城館総合調査員佐伯哲也氏来跡。

11月８日　現地説明会。町民を中心に100名の見学者が来跡。岐阜市教育委員会高木　洋氏，内堀信雄氏，岐阜市教育文化振興財団恩田裕之氏，恵那市教育委員会三宅唯美氏，関市教育委員会伊藤　聡氏，小矢部市教育委員会大野淳也氏来跡。

11月24日　高所作業車による全体写真の撮影。

11月27日　埼玉県寄居町教育委員会石塚三夫氏来跡。

12月１日　神岡町文化財審議会委員長若田俊一氏来跡。石材について指導を受ける。全ての図化・記録作業を終了する。

12月２・３日　遺構への砂入れ埋め戻し開始。石積みは土嚢を積み上げて覆う。

12月４日　重機による調査区の埋め戻し開始。調査器材撤収。

12月11日　重機による埋め戻し完了。全ての現場作業を終了する。

(b)　1999年度調査の経過

６月10日　富山大学理学部助教授酒井英男氏を中心とする村尾地研探査チームが表土はぎ取り前の地下遺構の状態を確認し，発掘後の遺構の解釈を助けるデータを得るための電気探査・レーダ探査を行う。

神岡中学校３年生選択社会科生徒18名・教師１名来跡。

６月11日　調査地区の設定，発掘器材の搬入。

６月14～23日　重機による表土掘削を行う。調査地区の大部分が1976～1978・1994年度調査地区と重複しており，埋め戻し砂，ブルーシートを目安に，重機によって表土を掘削。その後，人力によって前回の遺構検出面を再検出し，Ⅰ地区から遺構の検出作業を行う。西堀東辺から約3.8ｍのところで，西堀に平行に南北方向に伸びる２列の柱穴列を検出する。

６月21日　Ⅰ地区の遺構概略図の作成開始。

６月24日　梅雨の大雨の中，文化庁本中 眞主任文化財調査官，奈良国立文化財研究所加藤允彦氏，福井県埋蔵文化財センター吉岡泰英氏，岐阜県教育委員会文化課小林宏行氏来跡。現地視察後，江馬遺跡保存会長家越一三氏，㈱空間文化開発機構真鍋建男氏，池畑和子氏，町関係者，調査担当者を加え，第７回江馬氏城館跡調査整備委員会を行う。

６月28日　Ⅰ地区遺構検出作業終了

６月29日　大雨により，調査地区冠水。

７月２日　Ⅱ地区遺構検出作業開始。Ⅰ地区で検出した柱穴列の続きを検出する。

７月５日　神岡東小学校６年１組児童27名・教師１名来跡，現地見学。

７月６日　神岡東小学校６年２組児童27名・教師１名来跡，現地見学。

７月７日　調査地区壁断面図実測開始。Ⅱ地区遺構概略図作成開始。

７月11日　大前測量事務所に委託し，調査地区の原点杭の再測量を行い，調査地区杭を設定し直す。

７月15日　遺構平面実測開始。

７月後半は天候不順で作業が進まず。

８月４日　第１回江馬氏城館跡整備検討部会開催。委員各氏，国立歴史民俗博物館小島道裕氏来跡。現地指導，『基本計画』検討作業。

８月９日　主門の柱穴の有無を確認するため，主門推定位置の掘り下げを行うが，柱穴は確認できなかった。

８月10日　Ⅰ地区の柱穴の半裁開始，終了。

８月17日　Ⅱ地区の柱穴の半裁終了。SP144が脇門の南側主柱穴であることを確認。SP148から内合せで納めた墨書土師器皿２枚が出土。地鎮遺構と考えられる。

８月18日　山口市教育委員会古賀信幸氏来跡。平面実測図のレベリングを開始する。

８月23日　Ⅰ地区SP11・13で柱穴内礎石を確認。庭園への通用門の柱穴であることがわかる。

８月26日　文化庁坂井秀弥調査官，岐阜県教育委員会川部 誠氏，富山大学前川 要氏来跡，現地指導。

８月27日　現地で調査成果の記者発表を行う。報道関係者７名，神岡町議会議員５名が参加。

８月29日　現地説明会を行い，地元の方々を中心に60名の参加を得る。国府町教育委員会岩花秀明氏，押井正行氏，恵那市教育委員会三宅唯美氏，富山県埋蔵文化財センター宮田進一氏，小矢部市教育委員会伊藤隆三氏，富山市教育委員会古川知明氏，城端町教育委員会大平奈央子氏，石川県埋蔵文化財センター布尾和史氏，布尾幸恵氏，金沢市埋蔵文化財センター景山和也氏来跡。

９月７日　脇門周辺部の再精査。脇門の北側主柱穴SP190，築地塀の基礎地業範囲検出。

９月14日　㈱日本テクニカルセンターに委託し，ラジコンヘリコプターによる完掘状況空中写真撮影を行う。高所作業車による完掘状況の撮影。

９月15日　台風15号による大雨で調査地区冠水。

９月19日　完掘状況の写真撮影を行う。婦中町教育委員会堀内大介氏来跡。

秋雨前線による連日の雨で作業できず。

９月24日　台風18号による大雨で調査地区冠水。午後，神岡町中央公民館において，第２回江馬氏城館跡整備検討部会開催。

９月29日　神岡町文化財審議会委員長若田俊一氏来跡。石材についての指導を受ける。すべての図化・記録作業を終了。

９月30日　遺構内及び調査地区全体の砂入れ終了。器材撤収。

10月13日　重機による埋め戻し開始。

10月19日　埋め戻し完了。すべての現場作業を終了する。

(c)　整理作業

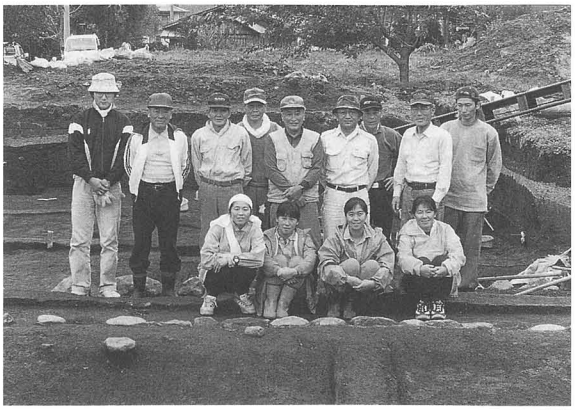
1998年度～2000年度発掘調査中及び冬期間に随時整理作業を継続し，報告書の作成を行った。

江馬氏下館跡1998年度調査組織

調査指導機関：江馬氏城館跡調査整備委員会
調　　査　　員：大平　愛子（神岡町教育委員会）
調 査 作 業 員：沖野　好夫，小野　健太，数井佐登美，上平　憲男，谷口恵利子，出井　正蔵
半田和加子，洞垣　利造，堀辺　英臣，道上　義紀，宮垣　秀雄，森田　英博
整 理 参 加 者：数井佐登美，谷口恵利子，半田和加子
事　　務　　局：堀本　昌義　　神岡町教育委員会教育長
村井　充佳　　神岡町教育委員会教育課長
洞垣　満雄　　神岡町教育委員会社会教育係長
大平　愛子　　神岡町教育委員会学芸員

江馬氏下館跡1999年度調査組織

調査指導機関：江馬氏城館跡調査整備委員会
調　　査　　員：大平　愛子（神岡町教育委員会）
調 査 作 業 員：小川　康二，沖野　好夫，小野　健太，数井佐登美，上平　憲男，下野　正夫
出井　正蔵，中林　郁美，半田和加子，堀辺　英臣，道上　義紀，宮垣　秀雄
整 理 参 加 者：小川　康二，数井佐登美，中林　郁美，半田和加子，堀辺　英臣，道上　義紀
三好　清超（2000年度・神岡町教育委員会嘱託）
事　　務　　局：堀本　昌義　　神岡町教育委員会教育長
村井　充佳　　神岡町教育委員会教育課長
洞垣　満雄　　神岡町教育委員会社会教育係長
大平　愛子　　神岡町教育委員会学芸員



第8図　1998年度調査参加者写真

第9図　1999年度調査参加者写真

第４章　発掘調査の成果

１　調査の目的と調査範囲及びその概要（第10・11図）

第３章１で述べたように，1994～1997年度の４年間の調査は堀外地区を中心に行い，1976～1978年度調査による堀内地区の知見も含めて，下館跡の概要を把握することができた。これらの知見を受けて，1998・1999年度は，堀内地区と堀外地区の区画施設の状況を確認するため，堀内地区の北西隅部から西辺にかけての調査を実施した。調査地区割・トレンチ・遺構の配置は第10図に示した。また，今回の調査地区の大部分が，1976～1978年度調査及び1994年度調査範囲と重複しており，その範囲は，第11図に示した。過去の調査時の掘削状況については，次節に記す。

(a)　1998年度調査の概要

1998年度は堀内地区北西隅部の調査を行った。この地区では，1978・1994年度調査において北堀の西端部を確認し，北堀と西堀が繋がらないことがわかっていた。また，北堀には土塁が伴うと推定していた。そこで，西堀の北端部の確認と，堀内地区北西隅部を閉塞するための土塁等の区画施設の有無を確認し，館中心部の区画施設の状況を明らかにすることを目的として発掘調査を実施した。

調査地区は，史跡指定地中央を南北に通る農業用水を境に２地区に分かれる。Ｘ座標38.8～59.5，Ｙ座標－６～７の範囲を「Ⅲ地区」，Ｘ座標38.8～54，Ｙ座標－13～－7.2の範囲を「Ⅳ地区」とする。北堀外側の土層の堆積状況を確認するため，Ⅲ地区東辺を北へ延長して５トレンチを設けた（Ｘ座標59～66.2，Ｙ座標５～６）。調査前の現況は，Ⅲ地区は水田と農道，Ⅳ地区は住宅移転後の旧宅地である。調査面積は288㎡である。

この調査によって，西堀の北端が北堀中軸線の延長ラインまでで終わること，北堀と西堀箱堀部分の堀内地区側にはその基底部を石積みとした築地塀が伴っていること，堀内地区北西隅部は築地塀によって閉塞しており北に向かって開く門等の出入り口はないことが明らかになった。

(b)　1999年度調査の概要

1999年度は，1998年度調査地区に南接し，西堀薬研堀に面する堀内地区西辺の調査を行った。1994年度調査において，西堀の埋土の堆積状況から，西堀の堀内地区側は土塁が伴うものと想定していたが，1998年度調査によって，西堀箱堀部分には築地塀が伴うことが明らかになった。このため，西堀薬研堀部分に伴う区画施設の様相と，館正面の出入り口である西堀の土橋１・２に伴うと推定される門遺構の確認を目的として調査を行った。

調査地区の設定は，その東辺を1978年度調査地区と重複しないようＹ座標5.8までとした。西辺についてはＹ座標－４以西は1994年度調査地区と重複するが，想定される区画施設と西堀との位置関係を現地で確認するため，西堀の東側肩部と土橋を再検出した。堀内地区から西堀内への土層の堆積状況を確認するため，1994年度調査時の土層観察用畔に合わせてＹ座標－４ラインに幅約２ｍ，Ｙ座標６ラインに幅約１ｍの土層観察用畔を設定した。Ｙ座標６ライン畦を境として，その南側のＸ座標－７～11.2，Ｙ座標－９～5.2の範囲を「Ⅰ地区」，北側のＸ座標12.6～37，Ｙ座標－9.5～5.8の範囲を「Ⅱ地区」とする。調査面積は500㎡である。調査前の現況は，水田と農道である。

この調査によって，西堀薬研堀にも築地塀が伴う時期があること，脇門は掘立柱建ちであることを確認し，主門は礎石建ちと推定できた。また，主門の南東側に掘立柱建ちの庭園への通用門を確認し，脇門の北東側において墨書土師器Ⅲを納めた地鎮遺構を検出した。

2 層　　位

(a) 調査地区の基本層序（第12・13図・第７表）

層位は各調査地区壁およびトレンチ断面において観察した。調査地区壁については，Ⅰ地区１トレンチ北壁・Ⅱ地区南壁・Ⅱ地区北壁およびⅣ地区南壁・Ⅲ地区北壁の土層断面図を本報告書に掲載した（第13図）。堀内地区における調査は1978年度・1994年度にも行っている。今回の調査では，過去の調査における基本層序を再確認し，その理解をふまえて，今回調査で確認した遺構の理解に努めた。

今回の調査地区において確認した基本層序は，上層から，「表土」，「土地改良土」，「旧耕作土」，「Ａ・Ｂ期遺構面構築土」，「下館基盤土」，「地山」に大別でき，さらに人為的な作業の順によって細分できる。以下の報告では細分層序を示す場合は〈括弧〉を付けて記述する。各調査地区壁の基本層序及び細分層序の対照関係は第７表にまとめた。1978年度概報・1994年度報告の基本層序と本報告における基本層序の対照関係も同表に記している。

以下に過去の調査時の基本層序の知見をふまえつつ，今回の調査で得た基本層序と堀内地区における遺構検出面についての知見をまとめる。

基本層序

表土：1972年度から1978年度発掘調査後にかけて行なった土地改良工事の客土による耕作土である。〈1994年度調査埋め戻し土〉と〈現耕作土〉に細分できる。1994年度調査の「表土」に対応する。

土地改良土：土地改良工事時の客土の際の盤土であり，石英小礫を多く含む明黄褐色砂質土である。1994年度報告の「土地改良土」に対応する。

旧耕作土：下館廃棄後の一帯の耕地化から土地改良工事までの耕作土であり，中世～近世の遺物包含層である。人為的な作業の順序によって，上層から〈1978年度調査埋め戻し土〉・〈1976・77年度調査埋め戻し土〉，〈旧耕作土〉，耕作によって沈着した〈鉄分堆積層〉，下館廃棄後の近世以降の耕地化の際の一帯の埋めたて土である〈耕地造成土〉及び〈SD22埋土〉に細分できる。なお，Ⅰ・Ⅱ地区で確認した〈耕地造成土〉の一部は，その堆積状況と土質から，下層のＡ・Ｂ期遺構面構築土を削平，堀内地区側から堀外地区側に押しならした土であると考えられる（第13図Ⅰ地区１トレンチ北壁第26層・Ⅱ地区南壁第18～23層・Ⅱ地区北壁第23～26層）。

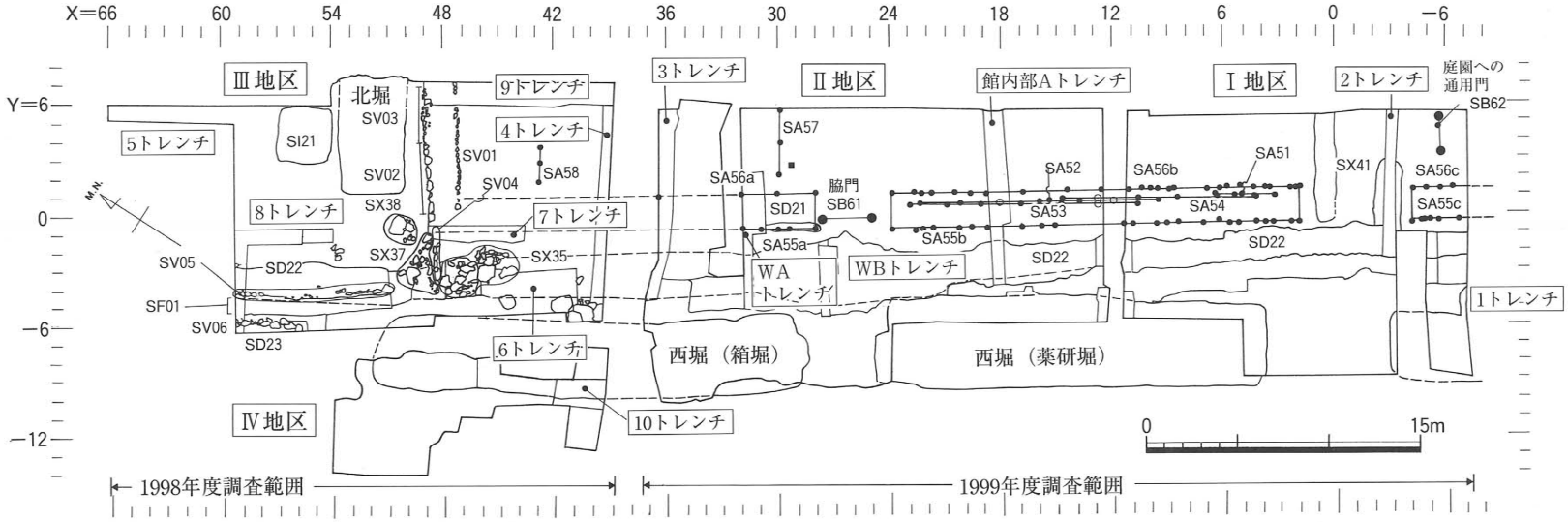
「表土」も含めて，1978年度概報の「第Ⅰ層表土・耕作土・土地改良土層」・「第Ⅱ層床土」に対応する。「旧耕作土」は1994年度報告の「カドミ汚染土」に対応する。

上記３層は館廃絶後の耕地化に伴う造成土層であり，堀の内外を問わず確認できる。

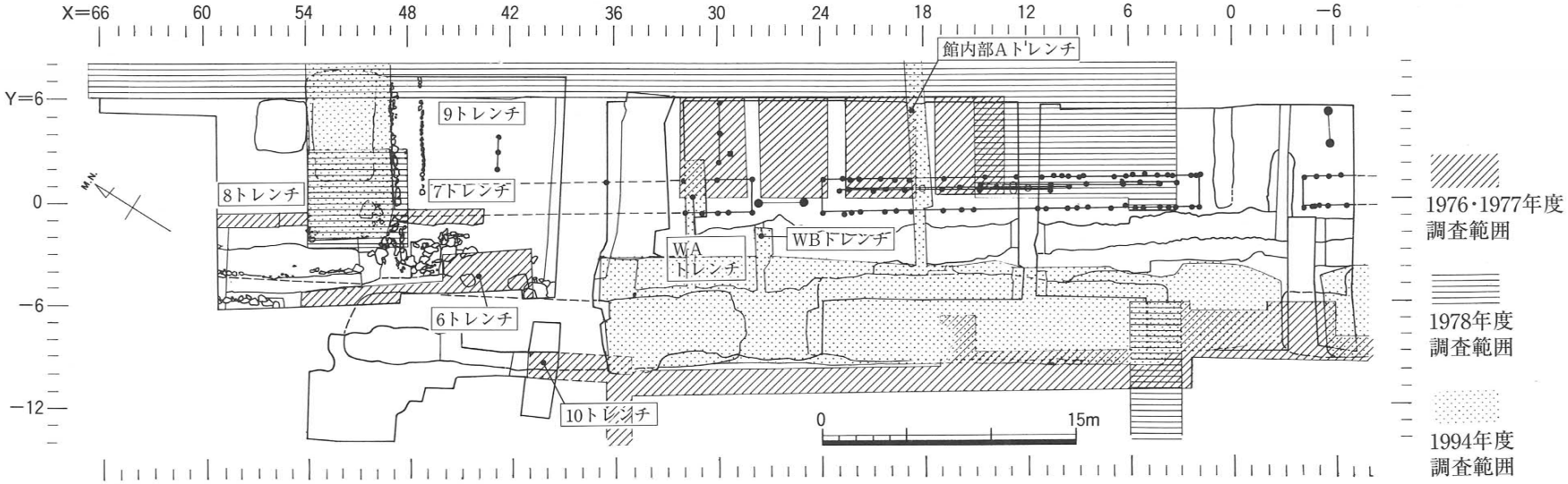
Ａ・Ｂ期遺構面構築土：堀内地区の礎石建物（1978年度概報のＡ期・Ｂ期建物）機能時の生活面を構築する盛土造成土層であり，堀内地区でのみ確認できる土層である。0.5～１㎝大の小礫を多く含む暗褐色～褐色粘質土である。

1978年度概報の「第Ⅲ層褐色土層」に相当し，「Ａ期・Ｂ期の建物跡群（第２・３期の遺構群）は第Ⅲ層褐色土に包含される」としている。

1994年度調査の館内部Ａトレンチにおいて，「Ａ・Ｂ期の遺構群は地山１に広範囲な埋めたて整地（1994年度報告：Ａトレンチ第13層・第14層・第23層）を行って構築していることを確認」している。また館内部地区において，この土層の面上（1994年度報告：館内部地区西壁Ｍ－Ｍ′断面第11層）でＡ期建物に伴うと考えられる溝等およびＢ期建物SB10・SB12の礎石およびその掘形を検出しているが，その深さが極端に浅く，後世の削平を受けている可能性を指摘している。



第10図　1998・1999年度調査地区割り・トレンチ・遺構配置図　縮尺１/400



第11図　1998・1999年度調査地区における既調査範囲図　縮尺１/400

今回の調査地区においては，Ⅰ・Ⅱ地区では部分的に薄い堆積を検出したのみであり，近世以降の耕地化の際の削平によってそのほとんどが失われているが，Ⅲ地区の築地塀基底部石列SV02以南の堀内地区内では約10～60㎝の堆積を確認できる。Ⅲ地区において，この土層の上面でＡ期建物に伴うと考えられる築地塀基底部石列とＢ期建物に伴うと考えられるSA58柱穴をともに検出している。この状況は，1994年度調査館内部地区における知見と同様であり，残存しているＡ・Ｂ期遺構面構築土もその上層は削平をうけており，特にＢ期建物機能時の生活面構築土は失われているものと考えられる。

また，Ａ期建物に伴う遺構には，築地塀基底部石列SV02や築地塀柱穴列SA55・SA56のように，Ａ期の生活面構築土であるＡ・Ｂ期遺構面構築土下層の下館基盤土層面上から掘り込むものがある。これらは，その機能時の生活面構築土であるＡ・Ｂ期遺構面構築土を除去しないと，遺構そのものの掘り込みは確認できない。一方，1994年度調査ではＡ期建物に伴うと考えられる溝をＡ・Ｂ期遺構面構築土層面上で検出しており，生活面の構築後，その面上から掘り込んで構築した遺構もあると考えられる。今後の調査において，遺構の検出，時期変遷を考える上で，留意すべき点と考える。

下館基盤土：中世時期の基盤層と考えられる黒褐色粘質土層であり，館の南・西・北を囲む堀がこの面上から掘り込む。

1978年度概報の「第Ⅳ-Ⅰ層黒色砂質土」，1994年度報告の「地山１」に対応する。

1978年度概報では，「(館の創立期に関わる時期の）第１期の遺構は，第Ⅳ-Ⅰ層黒色砂質土の上層および第Ⅳ－Ⅱ層茶褐色土と，地山である第Ⅴ層緑青色砂質土層を掘り込んで構築されたものが多く，館の構築時に土地の削平，埋めたて等が広範囲にわたって行われたようである」としている。

1995～1997年度調査の門前地区・工房地区の西堀の外側の堀外地区では確認できない。

今回の調査では，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区において確認できるが，西堀の外側にあたるⅣ地区では確認していない。Ⅲ地区SV02以南の堀内地区内では，上層のかわらけ細片や縄紋土器片を含む人為的な堆積〈基盤造成土〉と，下層の遺物を含まない〈自然堆積土〉に細分できるが，土質に大差はない。Ⅲ地区のSV02の北側の堀外地区では遺物の出土はなく〈自然堆積土〉のみと考えられる。1978年度調査の知見にみるように，堀内地区内においては，館の構築に際し広範囲の造成を行ったと考えられる。

北堀，西堀薬研堀がその面上から掘り込む状況は，今回の調査でも再確認した。堀の他にも，築地塀基底部石列SV02，築地塀柱穴列SA55・SA56柱穴等の堀内地区のＡ期建物に伴う遺構が下館基盤土層面上から掘り込んでいる。また，柱穴の切り合いから，Ａ期建物に伴うSA56に先行すると考えられるSA53・SA54も下館基盤土層面上から掘り込んでおり，これらが1978年度概報の第１期の遺構と対応する可能性もあるが，今回の調査において次段階のＡ期建物に伴う遺構にも同一面上から掘り込むものがあることがわかったことから，その対応については今後の検討課題としたい。

1978年度概報の「Ⅳ－Ⅱ層茶褐色土」に対応する土層は，今回の調査地区内では確認できなかった。

地山：この地域一帯の基盤層である。暗灰黄色～暗青灰色砂礫土であり，全地区で確認できる。

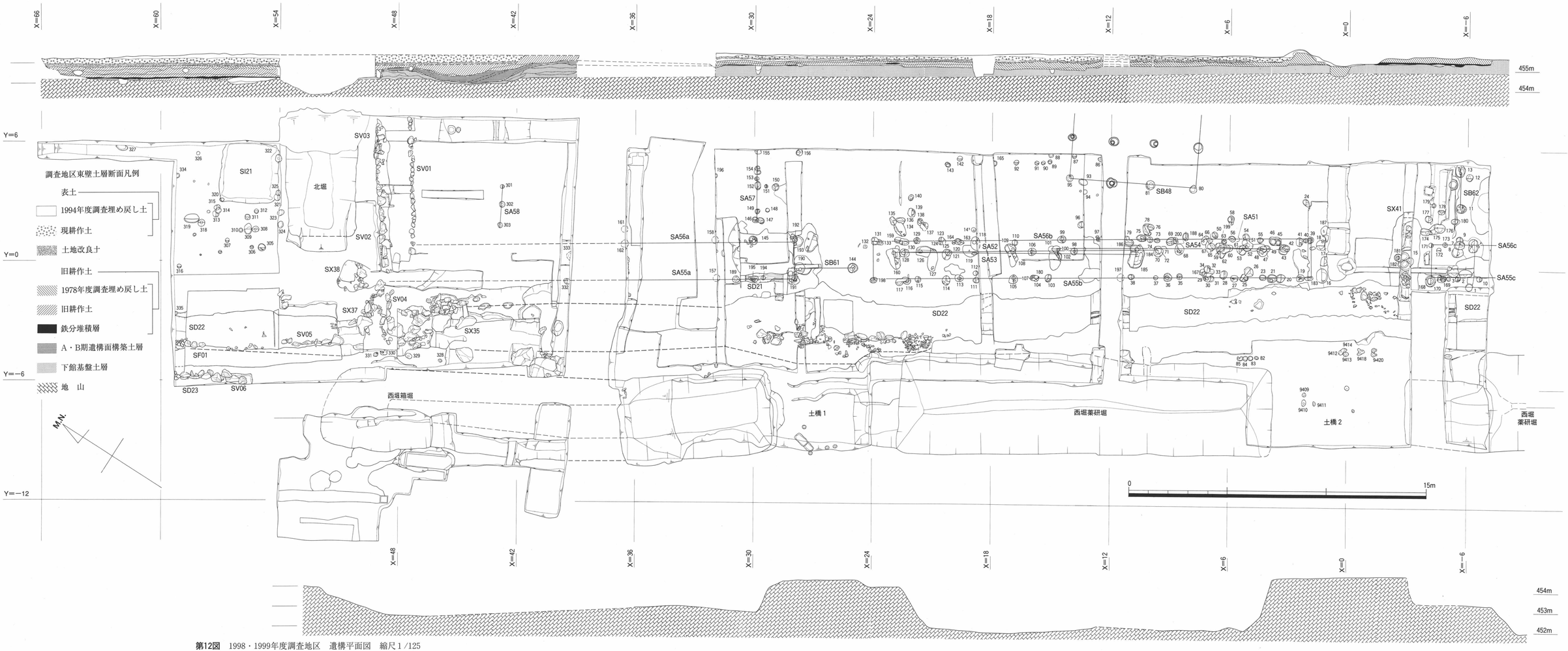
1978年度概報の「第Ⅴ層地山」，1994年度調査の「地山２」に対応する。

堀外の門前地区・工房地区では，この土層面上で遺構を検出している。

(b) 過去の調査における掘削について（第11図）

今回の調査地区は過去の調査地区と重複している。1976・1977年度調査時の記録が紛失しているため，今回の調査で再確認できた過去の調査範囲及び状況を以下に記す。

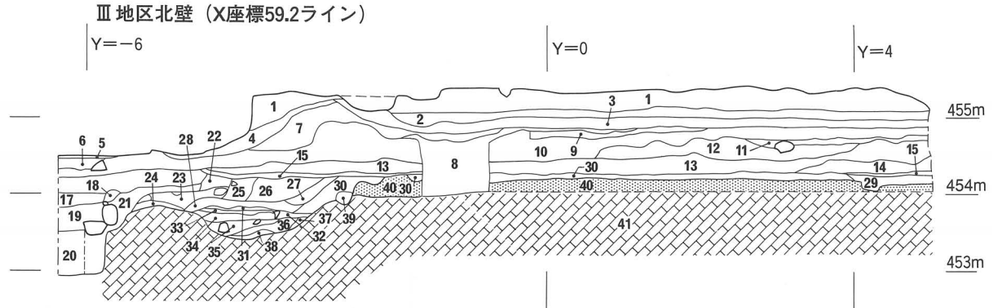
1976・1977年度調査における掘削：Ⅱ地区東側のＸ座標7.4～32.2，Ｙ座標０～６の範囲では，Ｘ座標18・23・28ラインに幅0.5～１ｍの土層観察用畦を残し，下館基盤土層上面を検出しているものの，遺構の検出及び掘削は行っていない。その他の1976・1977年度調査時のトレンチ（６～８・10トレン



第12図　1998・1999年度調査地区　遺構平面図　縮尺1/125

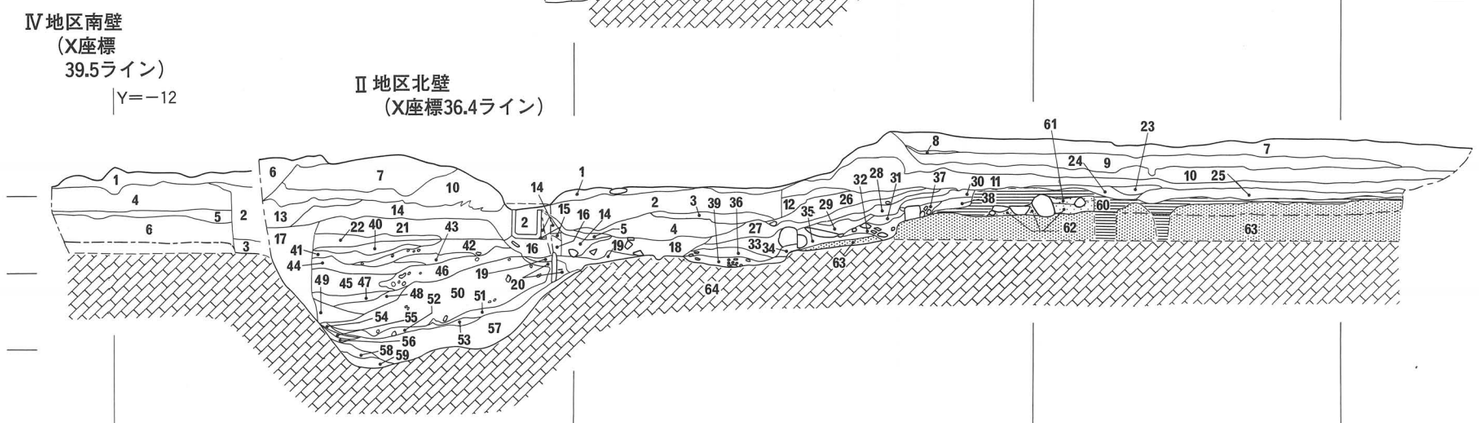
Ⅲ地区北壁（X座標59.2ライン）

1 7.5YR3/3暗褐色粘質土　10YR6/6粘土粒(0.5cm大)・小礫(0.3cm大)・炭化物(0.3～0.5cm大)混
2 7.5YR3/3暗褐色粘土　10YR6/6粘土ブロック(0.5～3cm大・20%)混
3 2.5Y7/6明黄褐色砂質土　石英小礫(0.5cm大)多く混
4 10YR3/2黒褐色砂質土　2.5Y7/6砂質土(50%)・石英小礫(0.5cm大)多く混
5 10YR2/3黒褐色砂質土　小礫(0.3～0.6cm大)非常に多く混　［農道表土］
6 7.5YR3/2黒褐色砂質土　小礫(0.3～0.7cm大)多く混
7 7.5YR2/2黒褐色砂質土　2.5Y5/3砂質土ブロック(1～1.5cm大・1%)・10YR5/8砂質土ブロック(5cm大・1%)混
8 10YR2/2黒褐色砂質土　10YR4/3砂質土ブロック(10%)・5YR2/1砂質土(5%)・小礫(0.2～0.5cm大)多く混
9 7.5YR2/2黒褐色砂質土　小礫(0.5cm大)多く混　炭化物(0.5cm大)混
10 10YR4/1褐灰色砂質土　5YR1.7/1粘質土ブロック(10cm大・10%)・小礫(0.2～1cm大)多く混　鉄分全体に薄く浸透
11 7.5YR3/2黒褐色砂質土　小礫(0.2～0.5cm大)多く混　鉄分全体に薄く浸透
12 5YR4/2灰褐色砂質土　小礫(0.5cm大)多く混
13 7.5YR3/4暗褐色粘質土　2.5Y5/3粘質土(30%)・小礫(0.5～1cm大)多く混　炭化物(1cm大)混
14 5YR4/2灰褐色砂質土　小礫(0.3～0.5cm大)多く混
15 7.5YR2/2黒褐色砂質土　7.5YR6/8鉄分全体に厚く堆積
16 10YR2/3黒褐色粘質土　小礫(0.5～0.7cm大)多く混
17 7.5YR3/3暗褐色砂質土　2.5Y6/6砂(50%)・小礫(0.2～0.5cm大)多く混
18 10YR3/2黒褐色粘土　2Y6/6細砂混　鉄分全体に薄く浸透
19 2.5Y6/6明黄褐色船津花崗岩小礫(0.3～0.6cm大)　石英小礫(0.5cm大)・10YR2/2砂質土(30%)混　［ＳＤ23埋土］
20 7.5YR3/3暗褐色砂質土　砂粒多く混　［ＳＤ23埋土］
21 7.5YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.2～0.8cm大)混　［ＳＶ06裏込め］
22 5YR3/2暗赤褐色砂質土　小礫(0.5cm大)混　［ＳＶ05埋土］
23 5Y7/4淡黄色砂質土地山ブロック　10YR2/3砂質土(20%)・小礫(0.5cm大)混　［ＳＦ01］
24 5YR2/1黒褐色粘質土　5Y7/4粘土・小礫(0.6cm大)混　［ＳＦ01］
25 10YR3/4暗褐色粘質土　小礫(0.5cm大)混
26 10YR3/3暗褐色粘質土　小礫(0.5cm大)混
27 5YR3/3暗赤褐色粘質土　小礫(0.3～0.5cm大)混
28 7.5YR3/3暗褐色粘質土　小礫(0.5～1cm大)混
29 7.5YR2/2黒褐色粘質土　5YR6/8粘土粒(0.5cm大)・小礫(0.5cm大)多く混・炭化物(0.5cm大)混
30 10YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.5～0.8cm大)混
31 2.5Y8/8黄色粘土　10YR3/3粘質土(50%)混
32 7.5YR3/2黒褐色粘質土　船津花崗岩礫(5～10cm大)混
33 2.5YR2/1赤黒粘質土　小礫(0.5cm大)多く混
34 7.5YR3/2黒褐色砂質土　10YR5/4砂質土地山ブロック(40%)・小礫(0.5～1cm大)混
35 5YR3/1黒褐色粘土　小礫(0.5cm大)・船津花崗岩礫(10～30cm大)混
36 2.5Y7/6明黄褐色粘土　2.5Y4/1粘土・2.5Y7/6細砂混
37 5Y4/1褐灰色粘質土　2.5Y4/1細砂(50%)・小礫(0.5cm大)混
38 10YR3/1黒褐色粘土　船津花崗岩小礫(0.5～1cm大)・砂多く混
39 5YR3/2暗赤褐色砂質土　白色微粒混　［ＳＰ335埋土］
40 5YR2/2黒褐色砂質土　白色粒・小礫(0.5～1cm)混
41 2.5Y5/3黄褐色砂質土



Ⅱ地区北壁（X座標36.4ライン）

1 7.5YR3/2黒褐色粘質土
2 10Y6/1灰色砂
3 10YR2/2黒褐色粘質土　7.5YR3/1粘質土(30%)・2.5Y6/4砂質土(10%)・小礫(0.5～1cm大)混
4 7.5YR3/3黒褐色粘質土　10YR4/2砂質土(30%)・5Y3/6砂質土地山ブロック(2～4cm大・10%)・小礫(0.3～0.5cm大)多く混
5 10YR2/3黒褐色粘質土　10YR3/4粘質土・2.5YR7/6砂質土粒混
6 2.5YR2/1赤黒色粘質土　2.5Y7/6砂質土ブロック(5cm大・10%)・石英小粒(0.5cm大)多く混
7 7.5YR2/2黒褐色粘質土　10YR6/6粘質土(0.5cm大)・小礫(0.3cm大)・炭化物(0.3～0.5cm大)混
8 2.5Y7/6明黄褐色砂質土　10YR6/6粘土粒(0.5cm大)混
9 10YR3/3暗褐色粘土　10YR6/6粘土粒(0.5～1cm大)・小礫(0.5～0.8cm大)混
10 2.5Y7/6明黄褐色砂質土　石英小礫(0.5cm大)多く混
11 10YR3/3暗褐色粘土　10YR2/3粘質土(40%)・小礫(0.3～1cm大)多く混
12 10YR3/2黒褐色粘質土　10YR6/6粒・小礫(0.5～1cm大)・炭化物(0.5cm大)混
13 10YR3/2黒褐色粘質土　10YR2/1砂質土ブロック(5cm大・1%)・小礫(0.6cm大)混
14 10YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.2～0.5cm大)・炭化物(0.5cm大)混　鉄分全体に薄く浸透
15 10YR4/3にぶい黄褐色粘土　10YR4/1粘土混
16 2.5Y6/4にぶい黄色砂　10YR3/3粘質土(30%)・小礫(0.5～0.7cm大)混
17 10YR2/3黒褐色粘質土　10YR2/1砂質土(2cm大・10%)・2.5Y7/6砂質土(2cm大)・小礫(0.3～1cm大)多く混
18 5YR3/1黒褐色粘質土　7.5YR4/1粘質土(40%)・小礫(0.5～1cm大)多く混　［ＳＤ23自然堆積埋土］
19 10YR7/6砂　7.5YR3/3暗褐色粘質土(20%)混　［ＳＤ23自然堆積埋土］
20 10YR2/3黒褐色砂質土　5YR2/1粘質土(50%)混　［ＳＤ23裏込め］
21 5YR3/2暗赤褐色粘質土　10YR4/4粘質土・小礫(0.3～1cm大)多く混　鉄分全体に薄く浸透
22 7.5YR2/2黒褐色粘質土　小礫(0.6～1cm大)多く混・炭化物(1cm大)混
23 7.5YR3/3暗褐色粘質土　小礫(1cm大)混　鉄分上部に薄く浸透
24 7.5Y4/2灰褐色粘質土　10Y6/1砂　鉄分最上層に厚く堆積
25 7.5Y1.7/黒色粘質土　5YR4/3粘質土・5Y7/6砂質土地山ブロック混　鉄分最上層に厚く堆積
26 7.5YR4/3褐色粘質土　10YR3/3粘質土(40%)・5YR2/1粘質土粒(1cm大)・5Y7/6砂質土地山粒(1.5cm大)・小礫(0.5～1cm大)混
27 10YR2/2黒褐色粘質土　10YR3/2粘質土・5YR2/1粘質土粒(1cm大)・5Y7/6砂質土地山粒(1.5cm大)・小礫(0.5～1cm大)混
28 7.5YR3/3暗褐色粘質土　小礫(0.5cm大)・細砂全体にうすく混
29 7.5YR4/1褐灰色粘質土　10YR6/4粘質土(10%)・小礫(0.5～1cm大)混
30 7.5YR4/2黒褐色粘質土　小礫(0.5cm大)多く混
31 2.5YR3/1暗赤灰色粘土
32 7.5YR4/2褐灰色粘質土　船津花崗岩礫(3～10cm大)多く混
33 10YR3/1黒褐色粘質土　小礫(0.5cm大)混
34 2.5Y3/1黒褐色粘質土　小礫(0.3cm大)混
35 10YR3/1黒褐色粘土　7.5YR3/2粘土(40%)・細砂全体にうすく混
36 7.5YR4/1褐灰色粘質土　7.5YR3/1粘土(2%)・5Y7/6細砂全体に薄く混
37 7.5YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.5cm大)多く混
38 7.5YR3/3暗褐色砂質土　5YR2/1粘質土・小礫(0.5cm大)多く混
39 2.5Y6/4にぶい黄色粘土　10YR4/2粘土(20%)・2.5Y7/6砂・船津花崗岩礫(3～10cm大)多く混
40 7.5YR2/1黒褐色粘質土　5Y6/1細砂(40%)・5Y7/6砂質土地山ブロック(2～4cm大・10%)・小礫(0.3～0.5cm大)混
41 7.5YR3/2黒褐色粘質土　5Y7/6砂質土(1%)・小礫(0.3～1cm大)・炭化物混
42 7.5YR4/3褐色粘質土　10YR3/2粘質土(40%)・5Y7/3砂質土地山ブロック(4cm大・10%)・小礫(0.3～0.5cm)多く混
43 5Y3/1黒褐色粘質土　5Y3/2粘質土(40%)・5Y7/6砂質土(3%)・小礫(0.3～0.8cm大)混
44 7.5YR3/3暗褐色粘質土　5Y2/1粘質土(40%)・小礫(0.5cm大)混
45 7.5YR4/3褐色粘質土　7.5YR2/1粘質土(2cm大・5%)・小礫(0.5～1cm大)混
46 7.5YR4/2灰褐色粘質土(40%)　5Y6/1細砂(40%)・5Y7/6砂質土地山ブロック(1.5～10cm大・20%)・小礫(0.5～1cm)混
47 7.5YR3/3暗褐色粘質土　小礫(0.5cm大)混
48 10YR2/3黒褐色粘質土　5Y6/1砂(40%)・5Y7/6砂質土地山(1.2～2cm大・3%)・小礫(0.3～0.7cm大)混
49 7.5YR3/2黒褐色粘質土　5Y5/4砂質土地山ブロック(2cm大・1%)・小礫(0.3～0.5cm大)混
50 7.5YR4/2灰褐色砂質土　5Y6/1砂(40%)・5Y7/6砂質土地山ブロック(2～10cm大・15%)・小礫(0.5～1cm大)混
51 5Y3/1黒褐色粘質土(白色粒混)　5Y7/6砂質土(10%)・5Y7/6砂質土地山ブロック(2～4cm大・5%)・小礫(0.3cm大)混
52 7.5YR3/2黒褐色粘土　5Y6/1細砂(5%)混
53 7.5YR4/1褐灰色粘土　5Y6/1砂(40%)・5Y7/6砂質土混
54 7.5YR3/3暗褐色粘土　5Y6/1細砂(40%)混
55 7.5YR2/1黒色粘土　10YR2/2粘土(30%)・5Y6/1細砂(30%)混
56 7.5YR3/3暗褐色粘土　5Y7/6砂混
57 7.5Y6/1灰色砂　10YR5/2砂質土(30%)混
58 10YR2/2黒褐色粘土　5Y5/2砂(30%)混
59 10YR4/2灰黄褐色粘質土　5Y6/1砂混
60 7.5YR4/3褐色粘質土　10YR2/4粘質土(10%)・小礫(0.1～1cm大)多く混
61 10YR2/2黒褐色粘質土　小礫(0.5cm大)多く混
62 10YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.5cm大)多く混
63 7.5YR2/2黒褐色粘質土　白色粒・炭化物混
64 (上部)2.5Y5/3黄褐色砂質土(下部)10GB4/1青灰色砂質土



Ⅳ地区南壁（X座標39.5ライン）

1 2.5Y7/6明黄褐色砂質土　石英小礫(0.5cm大)多く混
2 5Y2/2黒褐色砂質土　5Y7/6砂質土地山ブロック(3cm大)・10YR2/1砂質土ブロック・小礫(0.2～1cm大)混
3 7.5YR3/1黒褐色粘質土　2.5Y6/4細砂・小礫(0.2～0.5cm大)混
4 10YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.3～0.5cm大)多く混
5 10YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.3～1cm大)多く混
6 5Y2/1黒褐色砂質土　小礫(0.5cm大)多く混

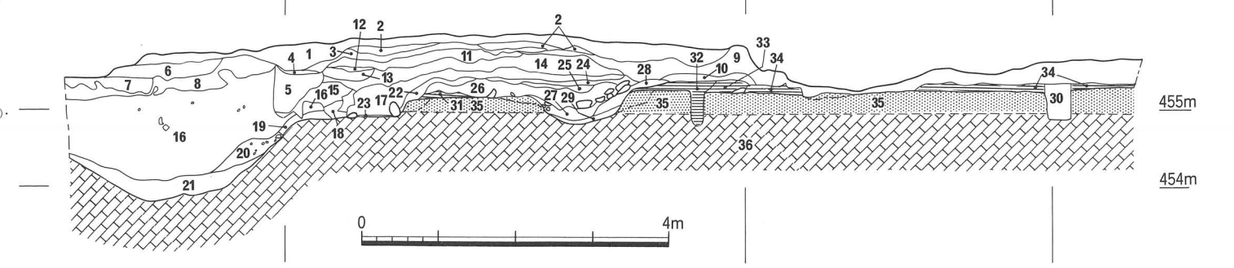
Ⅱ地区南壁（X座標12.5ライン）・1994年度西堀土層観察用畦南壁（X座標12.6ライン）

1 5YR3/2暗赤褐色粘質土　2.5Y8/8砂質土ブロック・小礫(0.5～1cm大)多く混
2 5YR4/2灰褐色砂質土　7.5YR4/3砂質土・2.5YR7/6砂質土ブロック・小礫(0.5～1cm大)多く混
3 7.5YR3/3暗褐色粘質土　10YR6/6粘土粒(0.5 cm大)・小礫(0.3cm大)・炭化物(0.3～0.5cm大)混
4 7.5YR2/3暗褐色粘土　10YR6/6粘土ブロック(0.3～3cm大・20%)混
5 2.5YR7/6明黄褐色砂質土　石英小礫　(0.5cm大)　多く混
6 5YR2/1黒褐色粘質土　10YR3/3粘質土ブロック(5cm大・40%)・小礫(0.5～1cm大)混
7 5YR2/1黒褐色粘質土(白色粒混)　7.5YR3/4粘質土(白色粒混・30%)・2.5Y8/8砂質土・小礫(0.5cm大)混
8 5YR4/1褐灰色砂質土　小礫(0.5～1cm大)多く混　鉄分最下層に約5mm厚で堆積
9 5YR4/2灰褐色砂質土　小礫(0.5～1cm大)多く混　鉄分全体に薄く浸透
10 5YR2/1黒褐色粘質土(白色粒混)　5YR4/2砂質土(40%)・10YR6/8鉄分付着粒混
11 7.5YR6/8橙色鉄分堆積
12 7.5YR3/3暗褐色粘質土　10YR4/3砂・小礫(0.5cm大)混　［ＳＤ23埋土］
13 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土　10YR4/1粘質土混　［ＳＤ23埋土］
14 7.5YR3/3暗褐色粘質土　10YR7/6砂混　［ＳＤ23埋土］
15 2.5Y6/4にぶい黄色砂質土(小石混)
16 5YR2/1黒褐色土(小石混)
17 7.5YR3/1黒褐色土(小石混)
18 7.5YR3/3暗褐色粘質土　10YR2/2粘質土(5%)・小礫(0.5～1cm大)多く混
19 5YR2/2黒褐色粘質土　7.5YR3/3YR粘質土(10%)・小礫(0.5cm大)多く混
20 7.5YR4/4褐色粘質土　小礫(0.5～1cm大)多く混
21 5YR2/1黒褐色粘質土　7.5YR4/4粘質土(40%)混
22 7.5YR2/3極暗褐色粘質土　小礫(0.5～1cm大)多く混
23 7.5YR1.7/1黒色粘質土
24 2.5Y5/3黄褐色粘土
25 10YR5/6黄褐色粘土　5YR3/1粘質土(10%)混
26 5YR3/1黒褐色粘質土　小礫(0.5～1cm大)多く混
27 7.5YR2/1黒褐色土(小礫・地山ブロック混)
28 2.5Y4/1黄灰色砂質土(小石・地山ブロック混)
29 10YR1.7/1黒色粘質土(地山ブロック混)
30 5Y4/1灰色粘質土
31 2.5YR1.7/1赤黒色粘質土
32 10YR4/1褐灰色砂質土(小石混)
33 N4/0灰色砂質土
34 10YR4/6褐色粘質土　7.5YR3/4粘質土(40%)・小礫(1cm大)多く混　［ＳＰ97埋土］
35 7.5YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.3cm大)混　［ＳＰ86埋土］
36 7.5YR3/4暗褐色粘質土　10YR4/6粘質土ブロック(20%)・小礫(0.5cm大)多く混
37 5YR2/1黒褐色粘質土　白色粒混　縄文土器片含む
38 2.5Y5/3黄褐色砂礫土

15～17・27～33層は、1994年度調査西堀土層観察用畦南壁断面図を1999年度調査Ⅱ地区南壁断面図に合成し、土層番号を付けなおした。土色名は、1994年度調査の記録による。

Ⅰ地区１トレンチ北壁（X座標－5.0ライン）

1 5YR3/2暗赤褐色砂質土　2.5Y7/6砂質土・小礫(0.5～1cm大)多く混
2 2.5Y7/6明黄褐色砂質土　10YR3/3粘質土(30%)・小礫(0.5～1cm大)多く混
3 7.5Y6/1灰色砂礫　10YR3/3粘質土(30%)混
4 2.5Y7/4浅黄色砂質土
5 7.5YR3/3暗褐色砂質土　5YR4/2砂質土・2.5Y7/4砂質土ブロック(5cm大)混
6 7.5YR3/3暗褐色粘質土　10YR6/6粘土粒(0.5cm大)・小礫(0.3cm大)・炭化物(0.3～0.5cm大)混
7 7.5YR2/3暗褐色粘土　10YR6/6粘土ブロック(0.3～3cm大・20%)混
8 2.5Y7/6明黄褐色砂質土　石英小礫(0.5cm大)多く混
9 7.5YR3/2黒褐色粘質土　7.5YR4/4粘質土混　小礫(0.5～1cm大)多く混　ビニール片混
10 7.5YR4/4褐色砂質土　小礫(0.5cm大)・石英小礫(0.5cm大)多く混　ビニール片混
11 7.5YR3/4暗褐色粘質土　小礫(0.3～0.5cm大)・10YR7/6船津花崗岩小粒(1～2cm大)混
12 5YR2/1黒褐色粘質土　白色粒・2.5Y6/4砂質土地山ブロック・10YR7/6船津花崗岩小礫混
13 5YR4/4にぶい赤褐色粘質土　砂礫(0.2～1cm大)多く混
14 5YR4/3灰褐色粘質土　小礫(0.3～0.5cm大)混
15 10YR3/3暗褐色粘質土　10YR7/6船津花崗岩小礫混
16 10YR2/3黒褐色砂質土　5Y6/4砂質土地山ブロック(1～5cm大・5%)・5YR2/1粘質土ブロック(2cm大・3%)・2.5Y5/4細砂全体に混
17 7.5YR4/3褐色粘質土　小礫(0.5～1cm大)多く混
18 10YR5/4にぶい黄褐色粘土　砂礫(0.2cm以下船津花崗岩砂)下部に混
19 10YR3/3暗褐色粘質土　小礫(0.5cm大)混
20 7.5YR4/3褐色粘質土(40%)　10YR3/3粘質土ブロック(40%)・5Y2/1粘質土(5%)・5Y6/4砂質土地山ブロック(2～5cm大)・小礫(5cm大)多く混
21 10YR4/2灰黄褐色粘土　7.5YR3/1粘質土ブロック(30%)・5Y6/4砂質土地山ブロック(2cm大・5%)・7.5YR7/8鉄分付着粒(2cm大・3%)混
22 5YR3/1黒褐色粘質土　白色粒・小礫(0.5～0.8cm大)混
23 10YR7/6黄橙色船津花崗岩小礫・砂　7.5YR4/3砂質土混
24 7.5YR3/1黒褐色粘質土　白色粒・10YR7/8船津花崗岩小礫(1～1.5cm大)・小礫(0.3～0.5cm大)混　鉄分全体に浸透・堆積
25 5YR4/2灰褐色粘質土　小礫(0.5～0.8cm大)多く混
26 10YR3/3暗褐色粘質土　5YR2/1粘質土ブロック(40%)・小礫(0.5～1cm大)混
27 2.5Y6/4にぶい黄色粘土・細砂　10YR4/2粘質土　7.5YR3/1粘質土・鉄分全体に薄く浸透
28 7.5YR3/4暗褐色粘質土　小礫(0.5～1cm大)多く混
29 2.5YR7/6明黄褐色粘土・砂　10YR4/2粘土・砂混
30 7.5YR3/2黒褐色粘質土　10YR3/3粘質土(40%)・5Y2/1粘質土ブロック(2cm大)・2.5Y7/6砂質土ブロック(1cm大・3%)混　［ＳＰ14埋土］
31 10YR3/3暗褐色砂質土　白色微粒混
32 7.5YR4/6褐色粘質土　5YR2/1粘質土ブロック(2cm大・3%)・小礫(0.3～0.5cm大)多く混
33 10YR3/2黒褐色粘質土　白色粒・5Y6/4砂質土地山ブロック(0.5～1.5cm大)混
34 7.5YR4/6褐色粘質土　小礫(0.3～1cm大)多く混　石英小礫(0.3～0.5cm大)混
35 5YR2/1黒褐色粘質土　白色粒混
36 2.5Y5/3黄褐色砂礫土



第13図　調査地区壁土層断面図　縮尺１/80

第7表　調査地区壁基本層序対照表

1998・1999年度調査			Ⅲ地区北壁	Ⅳ地区南壁	Ⅱ地区北壁	Ⅱ地区南壁	Ⅰ地区1トレンチ北壁	1994年度報告基本層序	1978年度報告基本層序
基本層序		細分層序							
表土		〈1994年度調査埋め戻し土〉			1～6	1・2	1～5	表土	Ⅰ Ⅱ
		〈現耕作土〉	1・2		7・9	3・4	6・7		
土地改良土			3	1	10	5	8	土地改良土	
旧耕作土		〈1978年度調査埋め戻し土〉			11～14	6～10	9～14	カドミ汚染土	
		〈1976・77年度調査埋め戻し土〉	6～8	2・3	17		15～22		
		〈旧耕作土〉	9～14	4	21・22				
		〈鉄分堆積層〉	15	5	23～25	11	24		
		〈耕地造成土〉	25～30	6～9	26～38	15～23	25～26		
遺構埋土	下館Ⅲ期の遺構	〈SD22埋土〉	31～37						
		SD22自然堆積埋土	38		39	24～26	27～29		
	下館Ⅱ期の遺構	西堀埋め戻し土			40～51	27～29			
		西堀自然堆積埋土			52～59	30～33			
A・B期遺構面構築土					60	36	31～34		Ⅲ
下館基盤土		〈基盤造成土〉			63	37	35	地山1	Ⅳ-Ⅰ
		〈自然堆積土〉	40						
地山			41		64	38	36	地山2	Ⅴ

※　表中の番号は第13図 調査地区壁土層断面図の土層番号に対応。

チ，西堀東西両肩部）は地山まで掘削している。Ⅳ地区西堀箱堀西側肩部の10トレンチは，その北側では堀底を確認するため埋土を地山まで掘り下げているが，南側は埋土の下層部を掘り残している。西堀薬研堀の東側肩部については，Ⅰ地区1トレンチ南壁・Ⅱ地区南壁において，1976・1977年度調査時のトレンチと考えられる掘り込み跡を確認したが，平面的な範囲を確認できず，図示できなかった。確認できる範囲としては，Ⅰ地区内のX座標4.8以南・Y座標－3.6以西の土橋2および西堀薬研堀東側肩部は地山まで掘削している。

1978年度調査における掘削：Ⅰ・Ⅱ地区と重複する範囲では，下館基盤土層面上において遺構の精査・検出を行い，検出した柱穴の埋土を完掘しているが，検出できていない遺構が多い。Ⅲ地区の9トレンチは1978年度調査時の層位確認用トレンチであり，地山まで掘り下げている。北堀西端部と重複する範囲では，北堀埋土も含めて，地山まで掘り下げている。

1994年度調査における掘削：過去の調査地区と重複する範囲では，過去の調査時の遺構検出面において遺構の精査・検出を行っている。1994年度調査範囲内の北堀・西堀箱堀・薬研堀のX座標12.5ライン以北の埋土を完掘している。西堀薬研堀X座標10.5以南では埋土の下層部を掘り残している。（神岡町教育委員会・富山大学考古学研究室1995）。

(c)　今回の調査における各地区の遺構検出面

今回の調査では，過去の調査地区と重複する範囲については，前回調査時の検出面上において遺構の再精査を行ったが，調査地区が堀の内外に及ぶことや，耕地化の際の削平等により，地区によって遺構検出面が異なる。各地区の遺構検出面は，Ⅰ・Ⅱ地区及びⅢ地区内の築地塀基底部石列SV02の北側では下館基盤土層面上，Ⅲ地区のSV02以南（堀内地区内）ではA・B期遺構面構築土層面上，Ⅳ地区では地山面上である。なお，Ⅰ・Ⅱ地区内の西堀の土橋1・2等，過去の調査区と重複する部分については，地山面上で遺構を検出している。

3 遺　　構

1998・1999年度調査において新たに確認した下館に伴う遺構は，西堀箱堀の北端部，築地塀基底部石列２列，門跡２基，築地塀柱穴列２本，柵列６本，地鎮遺構１基，竪穴住居１基，不明土坑１基，溝１本である。その他，近世以降の耕地の石組み畦や溝，道路状遺構等を確認した。耕地石組み畦は，下館の築地塀基底部石列をその一部として再利用している。

以下で，主な遺構について，その種類ごとに報告する。時期別の組み合わせやその変遷については，第５章小結においてまとめることとする。なお主軸方位の表記であるが，これまでは磁北に対して何度傾いているかで表記してきたが，今回の報告では，「主軸の座標軸方向（X・Y）－角度（°）－傾きの振れの方向」で表記する。主軸の方向と傾きは，下館跡の調査座標網の正値象限（北東方向の第１象限・北西方向の第２象限・南東方向の第４象限）範囲において計測した。「主軸の座標軸方向」は，主軸方向が南北方向のX軸である場合「X」，東西方向のY軸である場合「Y」で示す。「傾きの振れの方向」は，主軸方向がX軸（南北方向）の場合，その正値部分においてY軸の正値方向(東)に振る場合「E」，負値方向(西)に振る場合「W」とする。主軸方位がY軸（東西方向）の場合，その正値部分においてX軸の正値方向(北)に振る場合は「N」，負値方向(南)に振る場合は「S」とする。下館の調査座標網の主軸は，堀内地区のA期建物の主軸に合わせて設定しており，遺構の主軸方位が座標に一致する場合，A期建物の主軸方位と一致する。A期建物主軸方位はY－0.5°－N，B期建物の主軸方位はY－4.5°－Sを測る。磁北のラインは，X－33.0°－Eとなる。遺構の法量等の数値データは巻末の別表にまとめたので，参照されたい。

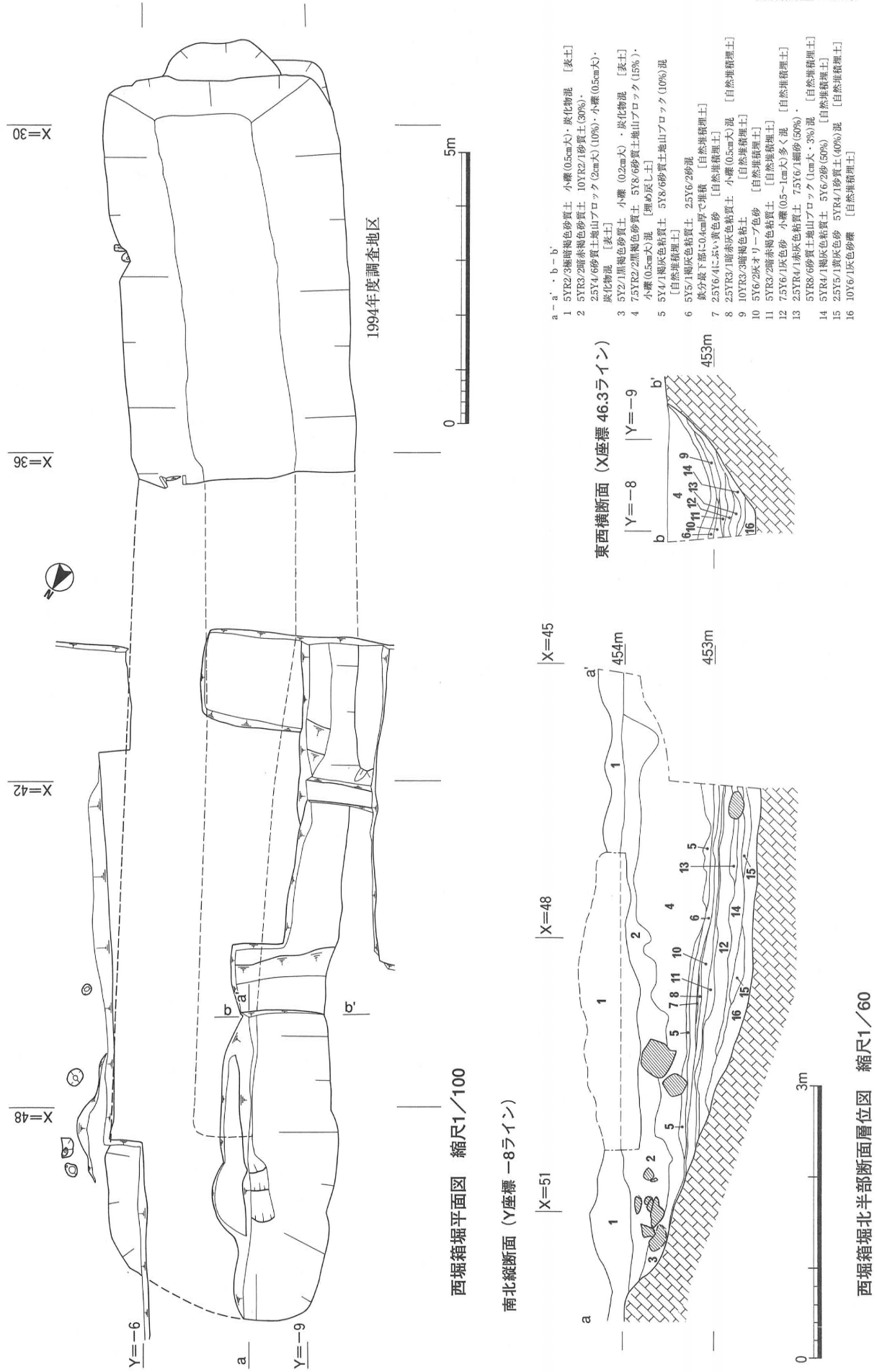
(a) 堀　　跡

西　　堀（第13・14図）

Ⅲ地区西壁際とⅣ地区で土橋１北側の西堀箱堀の北端部を確認した。

西堀箱堀は，館の正面を画する西堀のうち，土橋１より北側の部分である。Ⅱ・Ⅲ地区の西辺及びⅣ地区のX座標29.1～51.9，Y座標－10.0～－5.4の範囲に位置する。西堀箱堀部分の全長は20.7mである。南北両短辺の中心を結んだ主軸方位はX－0.5°－Wであり，座標とほぼ一致する。その東側部分は未検出部分が多いため，平面形全体を確認できないが，西側堀肩ラインは，南北両短辺の中心を結んだラインを主軸とすると，これに平行ではなく，その中央部が西側にやや湾曲し，弓なりのカーブを描く。以下で記述するとおり，Ⅲ・Ⅳ地区内の箱堀北半部とⅡ地区内の箱堀南半部では，その主軸方位・南北短辺側の堀壁の傾斜・堀底形状が異なることから，改修によって堀を拡張した可能性も想定できよう。調査地区設定の都合により全面的な平面検出及び南北縦断面の層位観察が出来なかったため，今回は可能性の指摘にとどめ，今後の調査機会を待ちたい。以下に箱堀北半部・南半部それぞれにわけて報告する。

箱堀北半部：Ⅲ・Ⅳ地区X座標39.6～51.9，Y座標－10.0～－5.5の範囲に位置する。西側堀肩ラインの主軸方位はX－4.0°－Eを測り，南堀旧堀の主軸とほぼ直交する。上幅はX座標49.0ラインで4.27mを測る。堀壁の立ち上がりは，西側はX座標46.3ラインで34.5°を測る。北側はY座標－８ラインで19.0°を測り，北端部掘り込みの傾斜は緩やかである。堀底最低部の検出レベルは452.495mであり，深さは検出面の最高部と堀底最低部で約1.5mを測る。東側下端を検出していないため，下幅は不明である。堀全体を完掘していないため断定はできないが，箱堀北半部の堀底幅は南半部に比べて狭く，また堀壁の立ち上がりの角度も緩やかであり，堀壁から堀底にかけて，すり鉢状になだらかに掘り込むようである。



第14図　西堀箱堀実測図

埋土は，X座標46.3～51.9，Y座標－7.9～－10.0の範囲を地山堀底まで掘り下げ，南北縦断面（Y座標－8ライン），東西横断面（X座標46.3ライン）で堆積状況を観察した（第14図）。第1～3層は宅地の植栽根等による攪乱である。第4層は人為的な埋め戻し土であるが，東西断面全体を確認できず，その流れ込みの方向は不明である。第5～16層は堀機能期間中の自然堆積埋土である。第5・6・8・9・11・14層は雨水等により堆積したと考えられる粘土または粘質土層，第7・10～13・15・16層は地山と良く似た砂質土層である。堀機能期間の堀底は第15・16層上面であり，その後，風雨による滞水に伴う粘質土の堆積が3回，地山壁面の崩落による堆積が2回あったものと観察できる。

箱堀南半部：Ⅱ地区南西部，X座標29.0～36.4，Y座標－9.8～－5.5の範囲に位置する。1994年度調査時に埋土を完掘している。今回の調査では，Ⅱ地区北壁で土層の観察を行うため，壁際の1994年度埋め戻し土のみ掘り上げ，全体の再検出はおこなっていない。1994年度調査の記録およびⅡ地区北壁の観察からは，堀の上・下幅は，X座標33ラインでそれぞれ4.5m，2.0mを測る。堀壁の立ち上がりは同ラインで西側40°東側35°を測り，Ⅱ地区北壁で東西50°前後を側る。箱堀南側の堀壁の立ち上がりは64.0°を測り，その傾斜は急である。深さは1.2～1.5mを測り，堀底はほぼ平らである。南半部の主軸方位はX－4.5°－Wを測り，B期建物の主軸方位とほぼ直交する。

埋土はⅡ地区北壁において再観察した（第13図Ⅱ地区北壁）。第40～59層が西堀箱堀部の埋土であり，第40～51層が人為的な埋め戻し土，第52～59層が堀機能時の自然堆積土である。第40・42・43・46・48・50層は，地山ブロックを多く含み，堀内地区側から流れ込んでいる。第41・44・45・47・49層は地山ブロックをあまり含まず，門前地区側から流れ込んでいる。これらの土層は交互に堆積しており，西堀箱堀部の埋め戻しはその両側から行ったものと考えられる。第57～59層は，地山堀壁が崩落したと考えられる砂質土である。堀を掘削した後，比較的早い時期に堆積し，堀機能時の実際の堀底は第57層上面であったと考えられる。第52～56層は粘土層であり，雨水等によって堆積したものと考えられるが，その堆積は薄く，滞水はわずかであったと考えられる。なお，西堀薬研堀では堀内地区側からの流れ込みしか確認できない（第13図1994年度調査西堀土層観察用畦南壁第27～29層）。

今回の調査において，後述のとおり西堀には築地塀が伴う時期があることを確認した。築地塀を土塁に作り替えた可能性も考えられることから，西堀薬研堀・箱堀埋土の堀内地区側からの流れ込みの土層は，堀内地区側にある築地塀または土塁を押し崩して一度に埋め戻したものと考えておきたい。

なお，西堀の東側肩部は，SD22（Ⅱ地区北壁第39層）の掘削や，耕地化に伴う攪乱（同第11～38層）を受けており，堀の人為的埋め戻し土（同第40～51層）の館側からの移動の状況を確認することはできなかった。

(b) 石列・堀内地区北西隅部の築地塀（第12・15～17図）

Ⅲ地区の北堀の南（堀内地区）側で，北堀にほぼ平行に伸びる3本の石列SV01・02・03を検出した。SV01・SV02は北堀に伴って館の北側を区画する築地塀基底部石列である。このため，堀内地区北西隅部の築地塀についても本項目で記述する。SV03はSV02をその一部として改修・再利用して設けた近世以降の耕地に伴う石組み畦畔である。なお，第16図にこれらの石材の番号を示し，その法量等は別表8にまとめた。SV01はNo.1～21，SV02はNo.22～34，SV03はNo.35～75である。

SV01（第15～17図）：北堀の南側，X座標47.1～47.5，Y座標0.4～7.1の範囲に位置する。主軸方位はY－1.5°－Nであり，座標とほぼ一致する。調査地区内における検出長は約6.9mを測る。今回の調査地区内で確認できた石材の数は21個であり，長径17～34cmの礫の長軸を石列の主軸にあわせて縦長に並べている。石材は船津花崗岩11，閃緑花崗岩4，石英斑岩2，安山岩1，記録なし3である。No.19・20間，No.21の西側でそれぞれ抜き取り穴1つを確認している。9トレンチ西壁とSV01の

No.４の間は，耕地化の際に２石を入れなおしているが，築地塀の基底部石列として１または２石あったものと推定する。なお，後述する西堀に面する築地塀東側柱穴列SA56の延長線とはNo.21・22の中間でほぼ直交する。

SV01はＡ・Ｂ期遺構面構築土層面上で検出したが，平面及びＹ座標2.7ライン・3.8ラインにおける断面層位（第15図）観察からは，Ａ・Ｂ期遺構面構築土層面上からこれを掘り込むSV01の掘形は検出できず，下館基盤土層面上に石材を据え，これを埋めながらＡ・Ｂ期遺構面の構築を行なっていると考えられる。

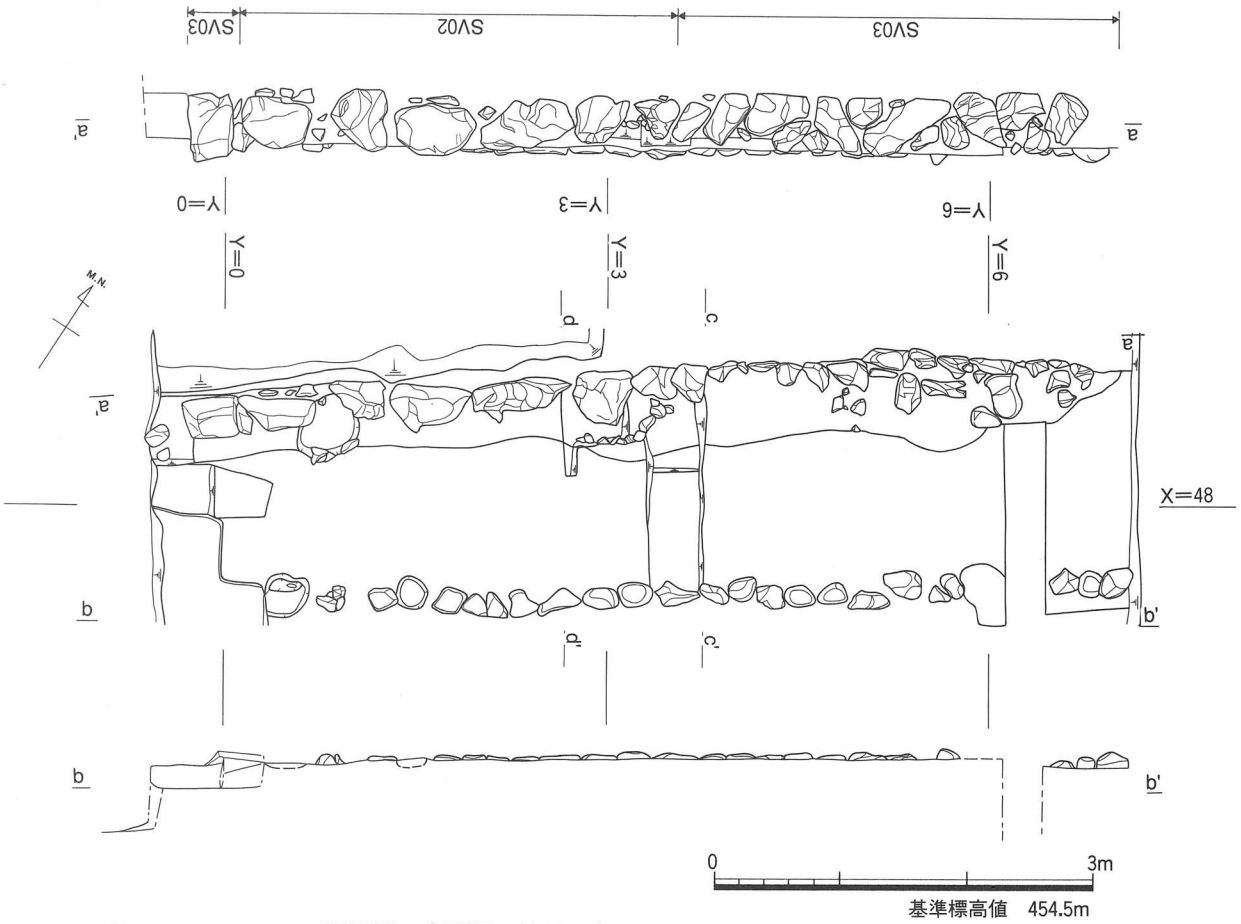
なお，1978年度調査の記録では，今回確認したSV01東端部からさらに東にＹ座標8.8ライン付近まで，７石並んでいることが記録されている（第17図）。SV01の延長である可能性もあるが，SV01No.４東の２石のように耕地化に際して据え直したものである可能性もあるため，今後の調査時に確認することとしたい。

SV02（第15・16図）：Ｘ座標48.3～49.1，Ｙ座標0.1～3.6に位置する。北堀に伴う築地塀の北側の基底部石列である。主軸方位はＹ－5.0°－Ｎを測り，南堀旧堀の主軸方位とほぼ一致するが，SV01とは平行ではない。SV02の高さは約45㎝であり，これが堀内地区と北堀側の地形の高低差となり，堀内地区側の遺構検出面レベルが高くなる。石列の検出長は約3.5ｍであるが，西堀に伴う築地塀の西側柱穴列SA55の延長ラインとSV02の西への延長線はＸ座標48.7，Ｙ座標－1.0付近で交差し，本来のSV02の西端部はこの地点であったと考えられ，推定長は4.5ｍを測る。SA55の延長線上に礫群SX38があり，耕地化の際に壊されたSV02の西端部の石材と考えられる。立面で確認できる主となる石材の数は６石（No.22・26・27・30・32・34)であり，長径34～73㎝，短径33～46㎝の礫を横長に一段並べている。石材はすべて船津花崗岩である。

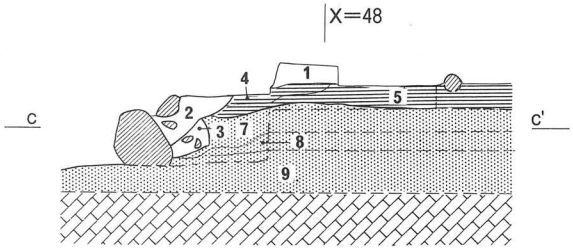
Ｙ座標2.7ライン（第15図ｄ－ｄ′断面）においてSV02の断面層位観察を行った。第２層は平面観察からSV03の裏込め埋土と同一の層であることがわかる。第４・５層はＡ・Ｂ期遺構面構築土層である。第６層がSV02を据える際の掘り込み埋土であり，裏込めと考えられる拳大の船津花崗岩礫が多く含まれる。第７～９層は下館基盤土層である。第６層の掘り込みは南から北へ緩やかに傾斜し，ほぼ垂直に掘り込むSV03据え付けの掘り込みとはその形状が異なる。耕地化の際に，下館の築地塀基底部石列SV02の裏込め上部を改修・再利用し，その東側に新たに耕地の石組み畦畔SV03を築いたものと考えられる。なお，SV02西端に接するNo.35は裏込め断面層位観察からSV03構築時に据え直していることを確認している（断面図は未掲載)。SV02のNo.26は，その断面層位を確認していないため断定はできないが，両脇の石材との間隔が開いていること，石材を縦長に用いていることから，SV03構築時の改修の際に据え直した可能性がある。

SV03（第15～17図）：Ｘ座標48.4～49.2，Ｙ座標3.6～7.0に位置する。SV03は，1978年度調査の記録から，今回検出した部分の東端No.57から北に折れて北堀埋土の上部に続いており，耕地の石組み畦畔であることが確認できる（第17図)。主軸方位はＹ－2.0°－Ｎを測り，座標とほぼ一致する。立面で確認できる主となる石材の数は14石であり，長径18～65㎝，短径12～30㎝の石材を北から見て斜め縦長に並べている。高さは，約45㎝を測る。基本的には一段であるが，一段目の石材が小さいところ，石材を傾けて据えているため上部に隙間が出来ているところは，やや小型の石材を２段目に積み，石列の天端の高さをほぼ一定に揃えている。石材は船津花崗岩13石，斑励岩１石である。

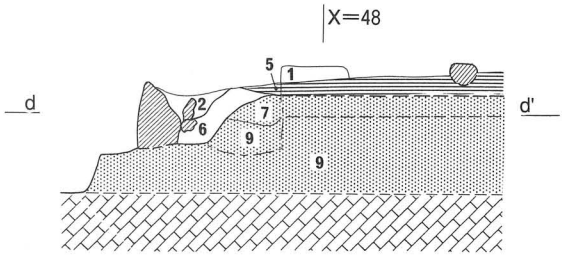
Ｙ座標3.8ラインで断面層位を観察した（第15図ｃ－ｃ′断面)。第２・３層がSV03の裏込め埋土であり，第２層が第４層Ａ・Ｂ期遺構面構築土層を直接切る。第３層は第７～９層下館基盤土層をほぼ垂直にえぐり込むように掘り込んでおり，SV02据え付けの際の掘り込みとはその形状が異なる。



SV01・SV02・SV03平面図・立面図　縮尺1／60



SV03断面層位図（Y座標3.8ライン）　縮尺1／40



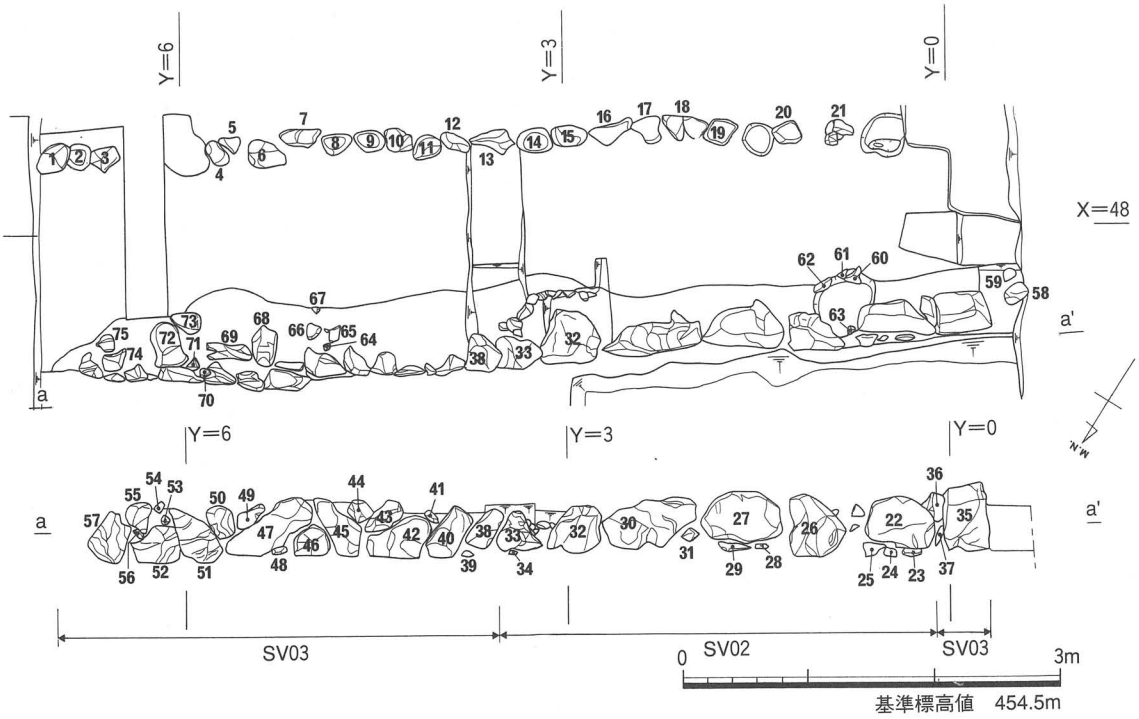
SV02断面層位図（Y座標2.7ライン）　縮尺1／40

c－c'・d－d'

1　7.5YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.5～1cm大)・炭化物・稲藁の茎混　鉄分全体に薄く浸透　［旧耕作土〈旧耕作土〉］
2　5Y3/2暗赤褐色粘質土　小礫(0.5cm大)混　［ＳＶ03裏込め］
3　10YR3/1黒褐色粘土　白色微粒混　［ＳＶ03裏込め］
4　7.5YR3/3暗褐色粘質土　白色粒・小礫(0.5～1cm大)・炭化物混　［Ａ・Ｂ期遺構面構築土］
5　7.5YR3/3暗褐色砂質土(50%)　7.5YR5/8砂質土(50%)・炭化物混　［Ａ・Ｂ期遺構面構築土］
6　7.5YR3/1黒褐色粘質土　白色粒(0.3～0.5cm大)・小礫(0.5cm大)混　［ＳＶ02裏込め］
7　5YR2/2黒褐色粘質土　7.5YR4/2粘質土(40%)・小礫(0.3cm大)混　［下館基盤土］
8　7.5YR3/2黒褐色粘質土　白色粒・小礫(0.5cm大)混　［下館基盤土］
9　7.5YR2/2黒褐色粘質土　白色粒・小礫(0.5～0.8cm大)混　［下館基盤土］

0　2m
基準標高値　454.5m

第15図　石列SV01・SV02・SV03実測図



第16図　石列SV01・SV02・SV03石材番号図　縮尺１/60

第17図　1978年度調査Ｋ地区（Ｘ座標48～54，Ｙ座標６～12付近）検出状況写真（上が東，西から）

手前のトレンチ壁東側の掘り込みが北堀である。北堀埋土上に延びる南北方向の石列は，北堀南側肩部で西に折れるが，この屈曲部が1998年度調査で検出したSV03の東端部にあたる。写真右端に並ぶ東西の石列はSV01の延長とも考えられるが，耕地化の際に据え直している可能性もあり，今後の調査を待って確認したい。

SV01・SV02を基底部とする築地塀について：SV01・SV02はその主軸方位が一致せず，その間隔は1.5～1.7mを測るが，築地塀の基底部幅を1.5m前後とすれば，SV01と平行に伸びる築地塀をSV01・SV02間に築くことは可能であろう。SV01の主軸方位が座標とほぼ一致すること，SV01の据え方から，SV01を築地塀の南辺として下館基盤土層面上に並べてからA・B期遺構面構築土によってA期建物の時期の生活面の構築を行っていると考えられることから，この築地塀はA期建物に伴うものと考えられる。A期建物の構築に際して，館に必要な施設を計画的に設けていた様子がうかがえよう。SV02と北堀南側肩部との間隔は約1.2m（約4尺）であり，犬走りであったと考えられる。なお，1994年度調査時に行った地中レーダ探査では，Y座標9.7ラインでも土塁状の高まりを捉えているが，石列の反応は捉えられていないことから，築地塀の高まりの残りが良い可能性と，北堀に伴う築地塀がその東部分では土塁であった可能性も指摘されている。これらは今後の発掘調査によって確認していきたい。

SX35・SX37・SX39から推定できる西堀箱堀に面する築地塀基底部石列（第12図）：SX35・SX37・SX39はⅢ地区南西部のSD22埋土中およびその周辺に散乱する大きな礫である。SX35・SX37はⅠ・Ⅱ地区で確認した西堀に面する築地塀柱穴列SA55延長ライン西際からその西側のSD22埋土内に流れ込み，散乱している。SX39はSA55延長ラインから約4m西に離れた2トレンチ西側で検出した。SX35南側のSX39に面するSA55延長ライン付近には礫が散乱しておらず，石材の抜き取り穴と考えられる窪みが確認できた。脇門の北側の西堀箱堀に面する部分では，北堀に面するSV02部分同様，SA55延長ラインを境として堀内地区側の遺構検出面がその外側よりも約40～80cm前後高い。このような地形と，これらの礫群の散乱状況から，脇門北側の西堀箱堀に面する築地塀は基底部に石列があったと推定できよう。

これらの礫中には長径100cm前後とSV02に比べても大型の礫が多い。下館の西辺である段丘崖面中位を通る上宝道から分岐して館へと続く道路は，西堀箱堀の中央部のX座標40.0付近で南に折れ，西堀に平行に延びる門前地区の南北方向道路につながると考えられる。西堀箱堀に面する築地塀は，館を訪れた人々が最初に目にする館の中心部の構築物であることから，北堀側よりも大型の石材を用いて築地塀基底部石列を築いたものと推定できよう。

なお，SX39は土地改良工事前の農業用水路の水溜部の護岸石として再利用されていた。

1978年度概報の「北濠内側の土塁状の高まり」について（第12図）：1978年度概報では「西及び南濠では削平されたためか検出できなかったが，北濠の断面では内側に巾3m，高さ50～80cmの土塁状の高まりをもつ」と報告されている。この北堀内側の高まりは，第12図の調査地区東壁断面X座標46～49.2の範囲にみられる下館基盤土層（上層は遺物が混入し，人為的な堆積と考えられる〈基盤造成土〉）の高まりに対応すると考えられる。1978年度調査では，この下館基盤土〈基盤造成土〉層面上から掘り込むA期建物に先行する柱穴群を確認しており（1978年度概報の第1期），X座標46～49.2間の下館基盤土〈基盤造成土〉層による人為的な高まりが，1978年度概報第1期に属する何らかの施設である可能性を想定しておくことはできよう。現在のところ，この下館基盤土層の高まりは，9トレンチでのみ確認できただけである。地中レーダ探査ではY座標9.7ラインでも土塁状の高まりを捉えているが，発掘による確認を行っていないため，9トレンチで確認した下館基盤土層の高まりなのか，築地塀または土塁の盛り土であるかは不明である。下館基盤土層の高まりの性格については，今後の調査における知見の増加をまって，再検討していきたい。

(c) **門跡・築地塀柱穴列・柵列**（第12・18～22図）

今回の調査では，門跡２棟，築地塀柱穴列２本，柵列６本を復元した。1978年度調査時に検出している総柱式掘立柱建物SB48の西側柱穴列も再確認している。これらの門跡・柵列等に伴う柱穴数は105基であり，調査区全体では247基の柱穴を確認した。このうち６基は1978年度調査時に検出しており，14基は1994年度調査時に検出した土橋１・２上に位置する柱穴であり，今回の調査で新たに確認した柱穴は227基である。以下，挿図順に報告する。なお，文中に示す尺は，１尺を0.303ｍとして計算している。また切り合いの新旧関係は矢印を使い「(古い)→(新しい)」で示す。柱穴の柱痕跡・柱の抜き取り穴・根固め石・埋土中の礫の有無等については，巻末の別表７にまとめ，ここでは特徴のあるものについてのみ記述する。埋土中の礫を根固め石と判断する基準は，柱痕跡や柱の抜き取り穴のある柱穴については掘形埋土中に柱痕跡を支えるように礫が入っている場合，柱痕跡・抜き取り穴は分層できなかったが板状の礫が柱穴内に縦長にはいっている場合は，根固め石と判断した。柱穴は，基本的には半裁までで掘削をやめており，礫の数は半裁状態で確認できた数である。

門　　跡（第12・18図）

館の正面である西堀には２箇所の土橋があり，その規模と堀内地区の建物配置から，南側の土橋２側が主門，北側の土橋１側が脇門と考えられる（1994神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室）。今回の調査において，脇門SB61と庭園への通用門SB62の柱穴を確認した。

脇門SB61（第18図）：Ⅱ地区中央部，Ｘ座標24～27.8，Ｙ座標－0.4～０の範囲に位置する南北棟の門である。主柱穴の中心間で間口１間2.67ｍ（8.81尺）を測る。棟の方位はＸ－1.0°－Ｗを測り，座標とほぼ一致する。南側主柱穴SP144と後述する築地塀柱穴列SA55b・SA56bの北辺が接しておらず，南側に通用口が付属すると考えられる。SP144と築地塀柱穴列の間は，その中心間で1.01ｍ（3.33尺）を測る。主柱穴SP144・SP190は平面形が径50㎝前後の円形であり，深さは93㎝を測る大型の柱穴である。主柱穴SP144は調査を半裁にとどめたため，底部を確認できなかったが，検出面から90㎝下で柱穴内礎石を検出した。その天端レベルは454.08ｍである。SP190の底部は地山を掘り込んでいるためか，柱穴内礎石は据えていない。ともに深さ45～90㎝のところで幅15㎝前後の柱材芯部と考えられる木質断片を含む土層（SP190：第18図ａ－ａ′断面第２層，SP144：第18図ｂ－ｂ′断面第２層）が観察できる。門の取り壊しに際して，検出面から約45㎝下までは柱穴埋土を掘りかえし，柱を切断して抜き取ったあと，再び埋め戻したものと考えられる。これらの主柱穴は，後述する築地塀の基礎地業部掘り込み埋土を掘り込んでいる。脇門と築地塀は館の西側を区画する一体の施設であり，その前後関係は時期差ではなく，作業順序を示すものと考えられる。

庭園への通用門SB62（第18図）：Ⅰ地区南東隅部，Ｘ座標－5.8～－5.4，Ｙ座標2.9～5.3の範囲に位置する，東西棟の門である。主柱穴の中心間で間口１間1.91ｍ（6.30尺）を測る。棟の方位はＹ－0.0°－Ｗを測り，座標と一致し，築地塀柱穴列SA56cとほぼ直交する。築地塀柱穴列SA56cのSP７と一直線上に並んでおり，SB62とSA56の間も板塀等で閉じていたと考えられる。主柱穴SP11・SP13はそれぞれ長径50㎝，63㎝の平面楕円形であり，深さは54㎝，58㎝を測るやや大型の柱穴である。ともに底部に柱穴内礎石を据えており，その天端面の検出レベルはそれぞれ454.89ｍ，454.84ｍである。SP13では柱穴内礎石に達する径15㎝，検出長45㎝の柱痕跡を確認した。SP11では柱を抜いた跡と考えられる層が確認できる。

主門について（第12図）：西堀土橋２の堀内地区側では，築地塀柱穴列SA55・SA56がＸ座標－4.2～1.9間で途切れて空間地となっており，この南北幅6.1ｍ（20.1尺）間に主門があったものと考えられる。脇門SB61・庭園への通用門SB62の主柱穴にみられるように，掘立柱建ちの門の柱穴は規模が

大きく，柱穴内礎石を持ち，対になる柱穴の規模もほぼ同じである。主門推定位置では，SP15・SP17が座標軸線上に並んでおり，主門の主柱穴の可能性も残るが，その規模が小さく，柱穴内礎石もなく，規模が異なっており，主門の主柱穴とは考えにくい。ほかに柱穴が確認できなかったこと，主門に面するSD22埋土内には，建物礎石と考えられる川原円礫を含む礫が多く散乱していることから，築地塀とともにA期建物に伴う時期の主門は礎石建ちであったと推定したい。堀内地区の建物礎石の時期の生活面を造成するA・B期遺構面構築土層は，近世以降の耕地化に伴う削平によりⅠ地区内では残存しておらず，主門礎石も抜き取られたものと推定する。

築地塀柱穴列（第19～21図）

SA55・SA56は西堀に面する築地塀に関わる柱穴列である。SA55・SA56の主軸方位はX－0.5°－Wを測り，座標にほぼ一致する。Ⅰ地区からⅡ地区の西堀全体に面しており，SA55がほぼY座標－0.6ラインに，SA56がほぼY座標1.1ラインにそって，西堀と平行に延びる。SA55・SA56の北への延長ラインがそれぞれ北堀に伴う築地塀基底部石列SV02・SV01の西端部と交わる。土橋1に面するX座標24.0～27.8の範囲，土橋2に面するX座標－4.2～1.9の範囲では柱穴がなく，それぞれ脇門・主門位置と推定でき，脇門推定位置では脇門の主柱穴を確認している。SA55・SA56の柱穴は東西でほぼ対応し，その間隔は対応する柱穴の中心間で約1.9m（6.3尺）を測る。柱間距離は，特に主門・脇門間の柱穴列では一定でない。柱穴の規模も一定ではないが，径・深さともに30cm前後の柱穴には根固め石と考えられる礫が入るものが多い。SP118←SP119からSA56←SA53であることがわかる。SA55と西堀東側堀肩部との間は幅約3.8m（12.5尺）の空間地であり，北堀西端部と西堀北端部間の土橋状の部分に繋がる。北堀・西堀端部間の土橋状の空間地を閉塞する門等になると考えられる柱穴等は確認できず，西堀と築地塀の間の空間地を通路として使っていた可能性も想定できよう。

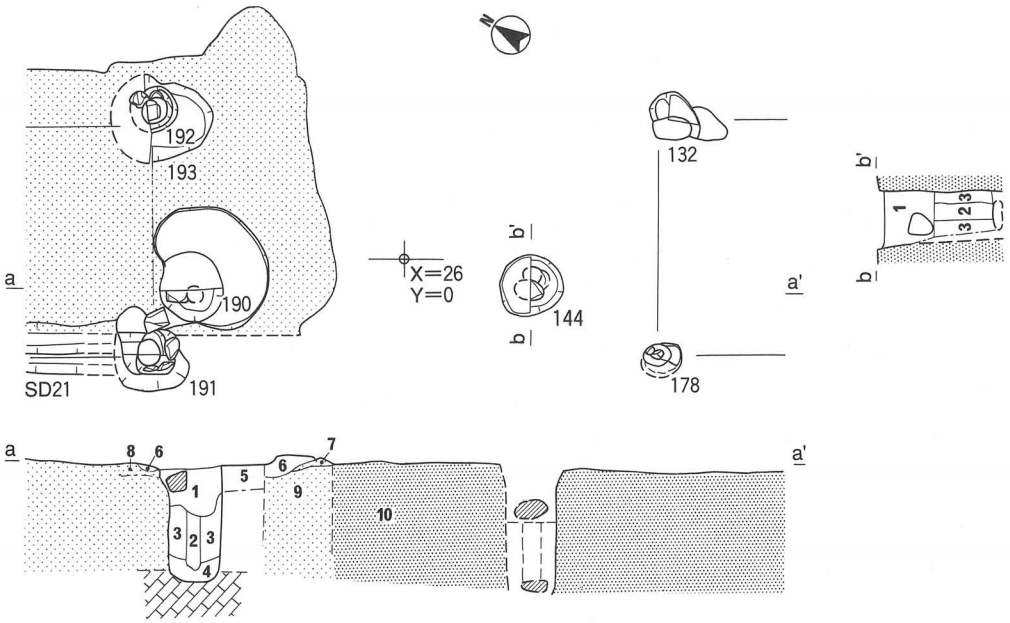
なお，SA55・SA56の柱穴がほぼ東西で対になるものの，柱間が一定でなく，小さな柱穴も多いことから，この柱穴列は築地塀を構築する際の作業用の柱穴列と推定でき，改修などに伴う複数の柱穴列が同一軸線上に存在している可能性があるが，整理しきれなかった。このため，主軸線上に存在する柱穴については，西堀に伴う築地塀に何らかの関連のある柱穴と考え，図化した。以下では，門の推定位置で柱穴列が途切れるため，脇門より北，脇門と主門間，主門より南を，それぞれSA55・SA56のa･b･cとして報告する。

SA55a・SA56a（第19・21図）：脇門の北側から北堀に伴う築地塀基底部石列SV01・SV02までの間，X座標27.8～48.8間に位置すると推定できるが，遺構検出面がA・B期遺構面構築土層面上であるⅢ地区では柱穴列を検出しきれなかった。北端と考えられるSV02・SV01までの全長はSA55aが20.8m（68.7尺），SA56aが19.1m（63.0尺）である。柱間距離はSA56aでは2m（6.6尺）前後と考えられ，SA55aはこれに対応するSP191・SP195・SP157が主柱穴と考えられる。柱穴は円形・楕円形が多く，長径38～52cm，深さ30～55cmを測る。SA56aのSP145で径15cm，検出長14cm，SP193で径15cm，検出長44cmの柱痕跡を検出した。SA55aのSP191・SA56aのSP192で柱の抜き取り穴を観察した。

なお，SD21はSA55a柱穴を設けるための布掘り溝である。また，X座標26.8～32.0，Y座標－1.0～1.6の範囲で，築地塀の基礎地業と考えられる掘り込みを検出した。SA55aおよびその布掘り溝SD21・SA56aの柱穴・脇門主柱穴SP190はその埋土を掘り込んでいる（第21図）。

SA55b・SA56b（第19・20図の1）：主門・脇門間X座標1.9～24.0間に位置し，ともに全長22.2m（73.3尺）を測る。柱穴は円形・楕円形が多いが，長径21～52cm，深さ10～56cmを測り，その規模は不揃いである。SA55bのSP19で径12cm，検出長16cm，SP35で径12cm，検出長30cm，SP113で径12cm，検出長14cm，SA56bのSP54で径12cm，検出長8cm，SP118で径18cmの柱痕跡を検出した。SA55aのSP28・

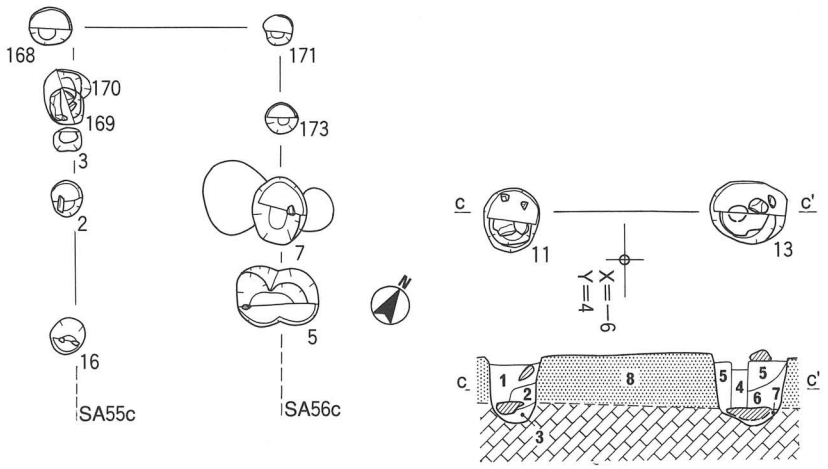
脇門SB61



a－a'
1　5YR3/2暗赤褐色粘質土　小礫(0.5cm大)・炭化物(0.5cm大)混　鉄分所々に浸透　［抜き取り穴埋土］
2　5YR2/2黒褐色粘質土　砂粒・木質小片(1～5cm大)多く混　［柱材芯部痕跡］
3　7.5YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.5cm大)多く混　［掘形埋土］
4　7.5YR2/2黒褐色粘質土　水分を多量に含む　［掘形埋土］
5　7.5YR3/2黒褐色粘質土　5YR2/1粘質土(10%)・2.5Y6/4砂質土地山ブロック(2cm大)・小礫(0.2～1.5cm大)混　［不明掘り込み埋土］
6　7.5YR4/4褐色粘質土　小礫(0.5～1cm大)多く混　［A・B期遺構面構築土］
7　5YR2/1黒褐色粘質土　小礫(0.5～1cm大)・10YR7/8土師器皿細片混　［築地塀基礎地業］
8　10YR2/3黒褐色粘質土　5Y7/6砂質土地山ブロック(2cm大)・小礫(0.5～1cm大)・7.5YR6/8土師器皿細片・炭化物混　［築地塀基礎地業］
9　10YR2/3黒褐色粘質土　5Y7/6砂質土地山ブロック・小礫(0.5cm大)・炭化物混　［築地塀基礎地業］
10　7.5YR2/2黒褐色粘質土　5Y6/4砂質土地山ブロック(2～5cm大)・小礫(0.5cm大)混　［下館基盤土〈基盤造成土〉］

b－b'
1　5YR3/2暗赤褐色粘質土　小礫(0.5cm大)多く混　船津花崗岩礫(10cm大)3・川原円礫(20cm大)1・(10cm大)1　［抜き取り穴埋土］
2　5YR2/2黒褐色粘質土　砂粒・木質小片(1cm大)多く混　［柱材芯部痕跡］
3　7.5YR2/2黒褐色粘質土　水分を多量に含む　［掘形埋土］
4　7.5YR2/2黒褐色粘質土　5Y6/4砂質土地山ブロック(2～5cm大)・小礫(0.5cm大)混　［下館基盤土〈基盤造成土〉］

庭園への通用門SB62



c－c'
1　10YR3/2黒褐色粘質土　10YR2/2粘質土・2.5YR7/4砂質土地山ブロック(5cm大・30%)・小礫(0.3～0.5cm大)混　船津花崗岩礫(15cm大)1・(10cm大)2　［SP11柱抜き取り穴埋土］
2　7.5YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.2cm大)混　［SP11掘形埋土］
3　10YR2/2黒褐色粘質土　［SP11掘形埋土］
4　10YR2/2黒褐色粘質土　小礫(0.2～0.5cm大)混　［SP13柱痕跡］
5　7.5YR3/2黒褐色粘質土　2.5Y7/4砂質土地山ブロック(5cm大・30%)・小礫(0.5cm大)・炭化物混　船津花崗岩礫(10cm大)1　［SP13掘形埋土］
6　5Y2/1黒褐色粘質土　2.5Y5/4砂質土(5%)混　［SP13掘形埋土］
7　7.5YR4/2灰褐色粘質土　2.57/4砂質土地山ブロック(30%)混　［SP13掘形埋土］
8　5YR2/1黒褐色粘質土　白色粒・7.5YR4/3砂質土地山ブロック(3cm大)・小礫(0.5cm大)混　［下館基盤土〈基盤造成土〉］

0　3m

基準標高値　455m

第18図　門跡実測図　縮尺1/60

SP29・SP36・SP105・SP198，SA56bのSP99・SP120・SP129・SP192で柱の抜き取り穴が観察できる。

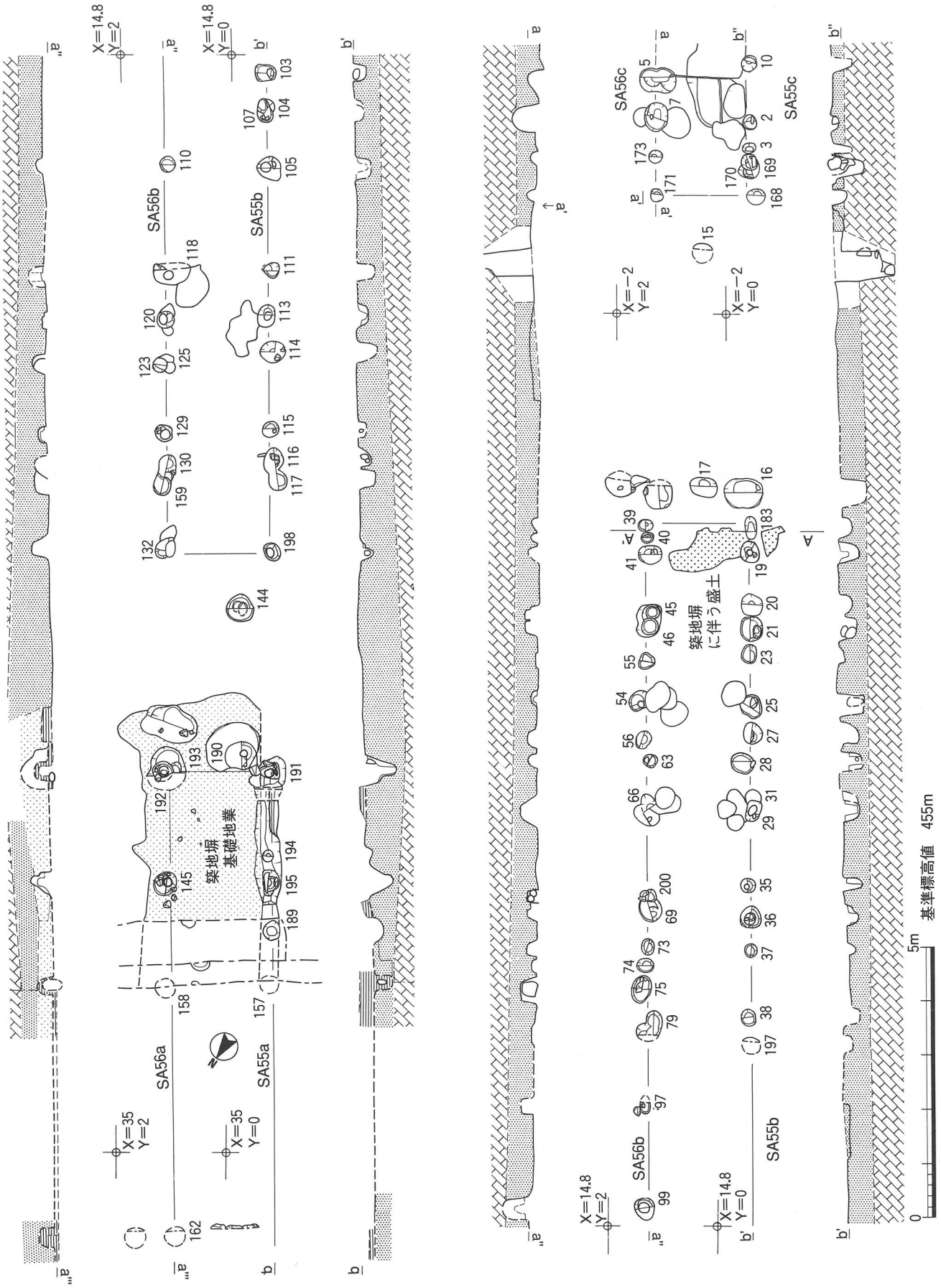
なお，その南端部，X座標2.0～2.8，Y座標－0.4～1.0の範囲で，築地塀に伴うと考えられる盛土を下館基盤土層面上で検出したが，残っている盛土の厚さは約８㎝ほどである（第20図の１）。

SA55c・SA56c（第19図）：主門の南側，X座標－7.0～－4.2間に位置する。SA56cの主軸ラインはほぼY座標1.3ライン上にあり，SA56a・bの主軸ラインより約20㎝西にずれる。SA55c・SA56cの間隔は約1.7m（5.6尺）である。調査区外の南へ延びるが，南堀に伴う区画施設を確認していないため，その南端・全長は不明である。柱間距離はSA55cでは一定ではないが，SA56cではほぼ0.7m（2.3尺）等間と考えれる。柱穴の平面形・規模は不揃いであり，長径22～52㎝，深さ15～54㎝を測る。SP169は柱の抜き取り穴を観察でき，その埋土に礫が入る。

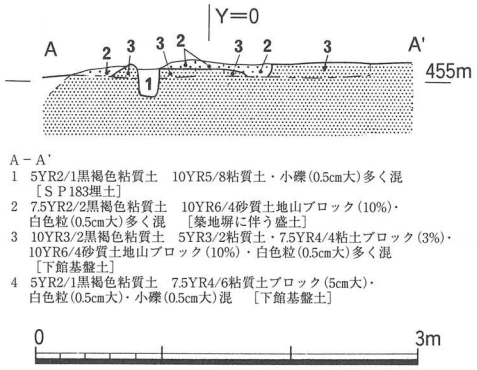
築地塀構築時の石列・柱穴列の掘り込み面と築地塀機能時の生活面について（第13・19・21図）：SA55・SA56の柱穴は，WAトレンチ北壁のSA56bのSP158埋土（第21図の第24層）・Ⅰ地区１トレンチ北壁（X座標--5.0ライン）のSA55cのSP3（第13図のⅠ地区１トレンチ北壁第32層）の観察から，下館基盤土層面上から掘り込み，A・B期遺構面構築土による周囲の造成とともに埋められていることがわかる。SP158・SP3では，柱痕跡や柱の抜き取り穴は観察できなかったが，SA55aのSP191，SA56aのSP192・SP145では，A・B期遺構面構築土と考えられる掘形埋土を掘り込む柱痕跡や柱の抜き取り穴を確認できる。同様に，北堀に面する築地塀はその南辺として基底部石列SV01を下館基盤土層面上に並べ，A・B期遺構面構築土によって一帯の盛土造成を行い生活面を構築した後，築地塀を築いていると想定できる。柱穴列の主軸方位，またA・B期遺構面構築土層との関係から，築地塀はA期建物に伴うものと考えられる。堀も含め，A期建物に伴う遺構には，その構築にあたって前段階の生活面と考えられる下館基盤土層面上から掘り込むが，その機能時の生活面は上層のA・B期遺構面構築土層面上であるものがあると考えられる。

なお，SP158・SP3では柱痕跡が調査地区及びトレンチ壁にかからなかったか，分層しきれなかったため確認できなかったものと考えられる。遺構検出面がA・B期遺構面構築土層面上であるⅢ地区では，径15㎝前後の柱痕跡や柱の抜き取り穴を検出しきれなかったものと考えられる。

土塁について（第21図）：1994年度報告では「西堀の内側の土塁状の盛り上がりはWAトレンチ第22層黒褐色土に認められ，これを土塁の基底部と考えると第６層にぶい黄褐色土，第７層黒褐色土，第８層暗褐色土，第９層暗褐色土，第10層灰黄褐色土，第11層黒褐色土，第12層黒褐色土，第13層黒褐色土，第14層黄色灰色土は，基底部上の版築盛土と推定できる」と報告している。今回の調査において，WAトレンチを再検出し，観察を行った（第21図）。1994年度報告第22層は，今回調査の第30層の下館基盤土層に相当するが，その西側の傾斜は，SD22及び耕地造成時の削平によるものであり，東側の傾斜は築地塀の基礎地業に伴う掘削によるものであると観察できた。基底部上の版築盛土としていた1994年度報告の第６～14層は，今回調査の第11～18層の旧耕作土に相当し，土塁に伴うものではない。今回の調査では土塁に関する遺構は確認できなかったが，長野県中野市の高梨氏館跡の事例に見るように，先行する築地塀を土塁に改修して使用する事例もある。築地塀の上部構造は後世の削平によって全く残っておらず，築地塀を土塁に改修した可能性は想定できよう。

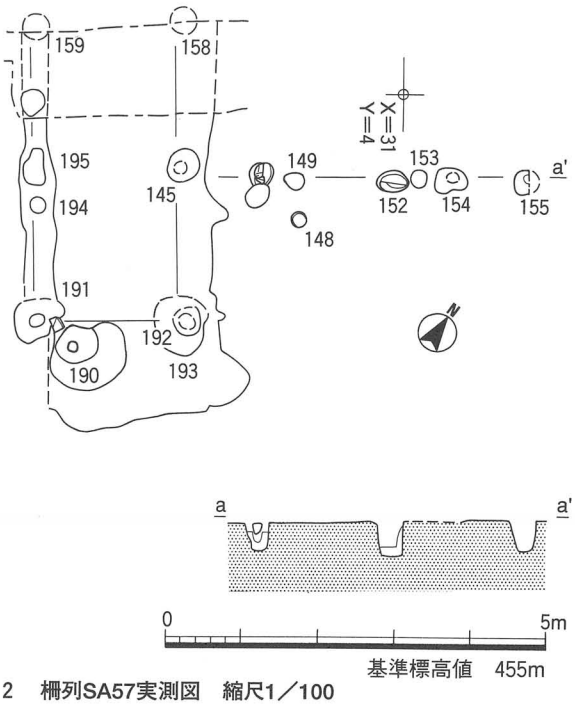


第19図　築地塀柱穴列SA55・SA56実測図　縮尺1/100



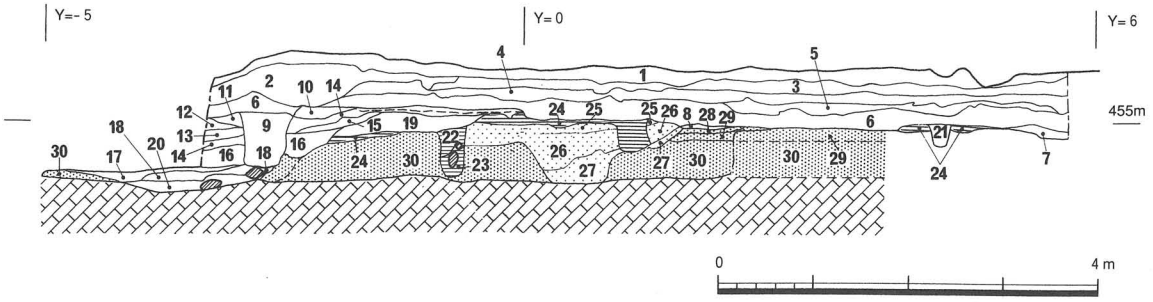
A－A'
1　5YR2/1黒褐色粘質土　10YR5/8粘質土・小礫(0.5cm大)多く混
　［ＳＰ183埋土］
2　7.5YR2/2黒褐色粘質土　10YR6/4砂質土地山ブロック(10%)・
　白色粒(0.5cm大)多く混　［築地塀に伴う盛土］
3　10YR3/2黒褐色粘質土　5YR3/2粘質土・7.5YR4/4粘土ブロック(3%)・
　10YR6/4砂質土地山ブロック(10%)・白色粒(0.5cm大)多く混
　［下館基盤土］
4　5YR2/1黒褐色粘質土　7.5YR4/6粘質土ブロック(5cm大)・
　白色粒(0.5cm大)・小礫(0.5cm大)混　［下館基盤土］

1　築地塀に伴う盛土断面層位図　縮尺1／60



2　柵列SA57実測図　縮尺1／100

第20図　築地塀に伴う盛土断面層位図・柵列SA57実測図



1　5YR3/2暗赤褐色粘質土
　2.5Y8/8砂質土(土地改良土)ブロック・5Y6/1礫・小礫(0.5～1cm大)多く混
2　N7/灰白色砂　7.5YR3/3砂質土・2.5Y7/6砂質土ブロック(5%)混
3　7.5YR2/3暗褐色粘土　10YR6/6粘土ブロック(0.5～3cm大・20%)混
4　2.5YR7/6明黄褐色砂質土　石英小礫(0.5cm大)多く混
5　5YR4/1褐灰色砂質土　小礫(0.5～1cm大)多く混
　全体に薄く鉄分浸透、最下層に約5mm厚で鉄分堆積
6　5YR4/2灰褐色砂質土　小礫(0.5～1cm大)多く混　鉄分全体に薄く浸透
7　10YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.5cm大)・土師器皿細片・炭化物混
8　2.5Y5/3黄褐色砂
9　7.5YR3/2黒褐色粘質土　10YR2/2粘質土(30%)・5Y6/6砂質土(3%)混
10　5YR3/2暗赤褐色砂質土　小礫(0.5～1.5cm大)多く混　全体に薄く鉄分堆積
11　10YR3/4暗褐色砂質土
　5Y7/6砂質土地山ブロック(1～3cm大)・小礫(0.2～0.5cm大)多く混
12　7.5YR3/2黒褐色粘質土
　5Y7/6砂質土地山ブロック(2cm大)・小礫(0.3cm大)多く混
13　5YR2/1黒褐色砂質土　小礫(0.5～1cm大)混
14　7.5YR4/6褐色粘質土
　小礫(0.5～1cm大)多く混　10YR7/6鉄分東部分の最上部に3～5cm厚で堆積
15　7.5YR3/2黒褐色砂質土　小礫(0.5～1cm大)多く混
16　7.5YR2/2黒褐色粘質土　小礫(0.5cm大)・白色粒混
17　5YR3/1黒褐色粘質土　船津花崗岩礫(1cm・7cm大)多く混
18　5YR2/2黒褐色粘質土　鉄分全体に薄く浸透
19　7.5YR3/3暗褐色砂質土
　小礫(0.5～1cm大)多く混・船津花崗岩礫(10cm大)含む
20　10YR4/3にぶい黄褐色粘土・砂
　5Y5/4粘土・砂・10YR7/8船津花崗岩小礫・礫(1cm大・3～15cm大)多く混
21　7.5YR3/4暗褐色粘質土
　小礫(0.5cm大)・土師器皿細片・炭化物混　7.5YR4/4粘質土全体に混
22　7.5YR4/3褐色粘質土　小礫(0.5～1cm大)混
23　7.5YR3/4暗褐色砂質土
　小礫(0.5cm大)混　根固め石と考えられる8～20cm大船津花崗岩礫含む
24　7.5YR4/4褐色砂質土　小礫(0.5～1cm大)多く混
25　10YR2/3黒褐色粘質土
　小礫(0.5cm大)・10YR7/6船津花崗岩礫(0.8～1cm大・4cm大)・
　5Y7/6砂質土地山ブロック(2cm大)・7.5YR6/8橙色土師器皿細片・炭化物混
26　10YR2/3黒褐色粘質土　小礫(0.5cm大)・5Y7/6砂質土地山ブロック・炭化物混
27　10YR4/4褐色粘質土　10YR4/4砂・小礫(0.5～1cm大)・7.5YR2/2粘質土・
　10YR3/2粘質土(白色粒混)ブロック・船津花崗岩礫(5～8cm大)混
28　5YR2/1黒褐色粘質土　小礫(0.5cm大)・白色粒
29　2.5YR3/1暗赤灰色粘質土　小礫(0.5cm大)・白色粒・炭化物・土師器皿小片混
30　5YR2/1黒褐色粘質土　白色粒混
31　2.5Y5/3黄褐色砂層

1・2：表土〈1994年度調査埋め戻し土〉，3：表土〈現耕作土〉，4：土地改良土，5～10：旧耕作土〈1978年度調査埋め戻し土〉，11～19：旧耕作土〈耕地造成土〉，
20：SD22自然堆積埋土，21：SP158埋土，22・23：SP157埋土，24：A・B期遺構面構築土，25～27：築地塀基礎地業，28・29：下館基盤土〈基盤造成土〉，
30：下館基盤土〈自然堆積土〉

第21図　Ⅱ地区WAトレンチ北壁断面層位図　縮尺１/80

柵　　列（第20・22図）

SA57（第20図）：Ⅱ地区北東部，Ｘ座標29.7～30.1，Ｙ座標0.9～5.7に位置する東西方向の柵列である。主軸方位はＹ－0.0°－Ｎを測り，座標に一致する。検出長は２間，3.5ｍ（11.5尺）である。柱間はほぼ1.7ｍ（5.7尺）等間と考えられる。西への延長ライン上にSA56aのSP145があり，SA56aとほぼ直交することから，築地塀にともなう脇門北側の柵列と考えられる。柱穴は円形・楕円形であり，長径32～43㎝，深さ35～45㎝を測る。遺物は出土していない。

SA51（第22図）：Ⅰ地区中央部，Ｘ座標3.1～6.7，Ｙ座標0.6～1.2に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はＸ－2.0°－Ｅを測り，座標とほぼ一致する。総長は３間，3.18ｍ（10.5尺）である。柱間は，ほぼ1.06ｍ（3.5尺）等間である。柱穴は方形に近いものが多く，長径49㎝前後，深さ46～59㎝を測る。SA54と重複し，SP199→SP59，SP48→SP47からSA51→SA54であることがわかる。遺物は出土していない。

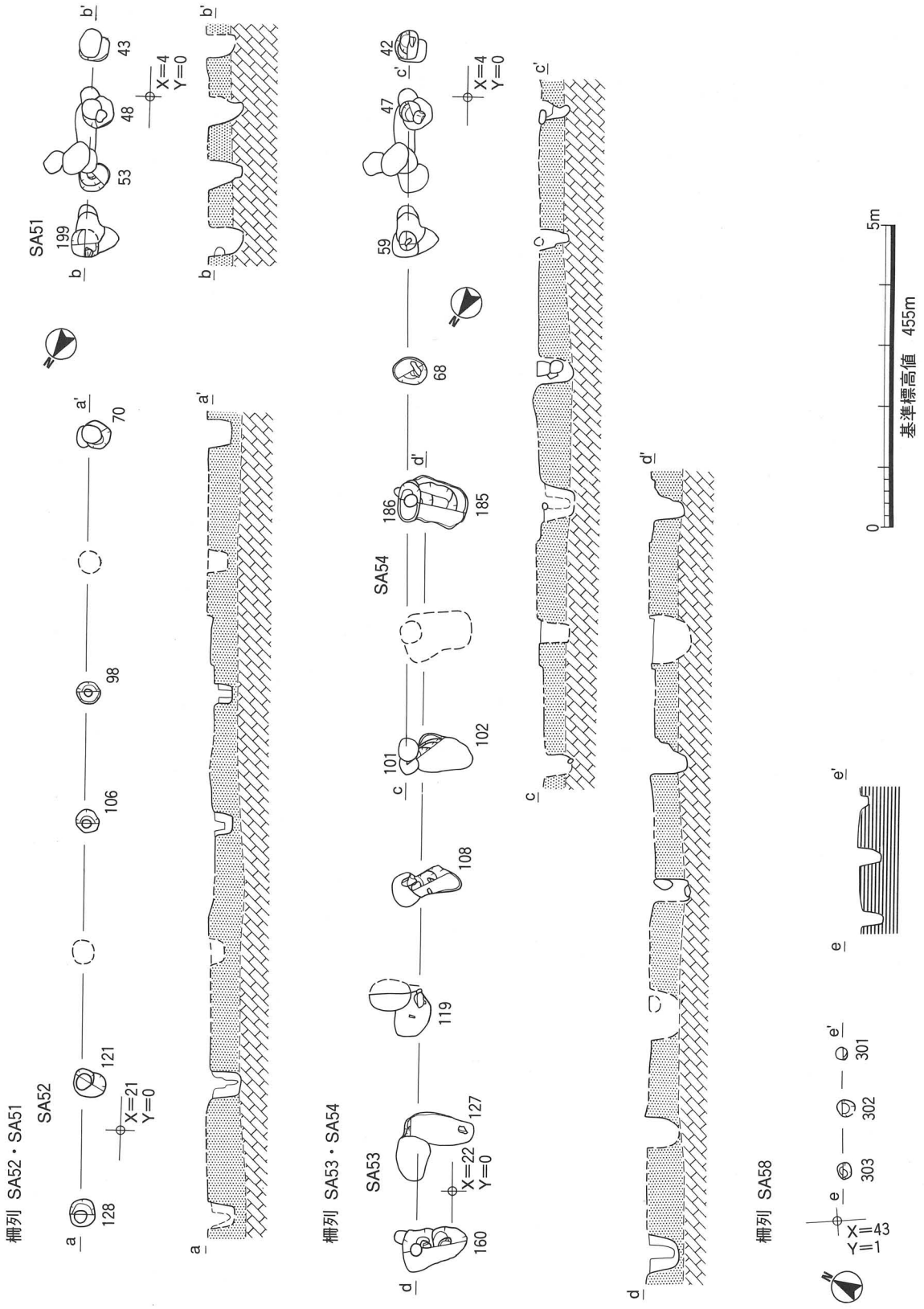
SA52（第22図）：Ⅰ地区中央部～Ⅱ地区中央部，Ｘ座標9.4～22.7，Ｙ座標20.4～1.0に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はＸ－1.0°－Ｗを測り，座標にほぼ一致する。総長は検出４間（推定６間），13ｍ（43.0尺）である。柱間は，約2.2ｍ（7.2尺）等間と考えられる。柱穴は円形・楕円形であり，長径36～53㎝，深さ29～51㎝を測る。SP98で径12㎝，検出長20㎝，SP106で径15㎝，検出長15㎝の柱痕跡を確認し，SP121・SP128では柱の抜き取り穴が観察できる。SA53・SA54と重複するが，直接切り合わない。遺物はSP121から土師器皿１点が出土している（第28図の８）。

なお，SA51とSA52は，SA51の柱間（3.5尺）がSA52の柱間（7.2尺）のほぼ半分であり，柱筋を通すことも可能であることから，一連の柵列の可能性も考えられるが，SA51北端SP199とSA52南端SP70の間隔は3.13ｍ（10.3尺）であること，柱穴断面形が異なることから，別個の柵列としておく。

SA53（第22図）：Ｘ座標4.1～15.1，Ｙ座標－0.7～1.2に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はＸ－1.0°－Ｗを測り，座標にほぼ一致する。総長は検出５間（推定６間），12.2ｍ（40.1尺）である。柱間はほぼ2.0ｍ（6.6尺）等間と考えられる。柱穴はSP119を除いて，長径が86～110㎝を測る東西に長い平面楕円形である。柱穴の底部は東西に長細い柱穴の東側に片寄っており，東側壁面は垂直に近いが，西側壁面は，西に大きく傾斜する。SP119のみは南北方向に長い平面楕円形であるが，未掘のため，底部形状は不明である。全ての柱穴に，拳大以上の礫が入っており，SP108は底部に柱穴内礎石を据え，根固め石１個を持つ。SP160は根固め石を持つ。SA54・SA56と重複し，SP185→SP186，SP102→SP101からSA53→SA54であること，SP119→SP118からSA53→SA56であることがわかる。遺物は出土していない。

SA54（第22図）：Ⅰ地区中央部からⅡ地区南部，Ｘ座標4.1～15.1，Ｙ座標－0.3～1.2に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はＸ－1.0°－Ｗを測り，座標にほぼ一致する。総長は検出４間（推定５間），10.8ｍ（35.6尺）である。柱間はほぼ2.2ｍ（7.1尺）等間と考えられる。柱穴は円形・楕円形であり，長径29～64㎝，深さ30～57㎝を測る。SP68は柱穴の下部から４個の礫が固まって入っていることから，根固め石であると考えた。その他の柱穴の埋土中にも拳大以上の礫が入るが，根固め石であるか，埋土中に混入しただけであるかは，判断できなかった。SP47・SP186では柱の抜き取り穴が観察できる。SA51～53と重複し，SP59←SP199，SP47←SP48からSA54←SA51であること，SP186←SP185，SP101←SP102からSA54←SA53であることがわかる。SA52とは直接切り合わない。遺物は出土していない。

SA58（第22図）：Ⅲ地区南部分，Ｘ座標42.6～42.9，Ｙ座標2.6～3.8に位置する東西方向の柵列である。主軸方位はＹ－3.0°－Ｓを測り，Ｂ期建物の主軸方位とほぼ一致する。総長は２間，2.0ｍ（6.4

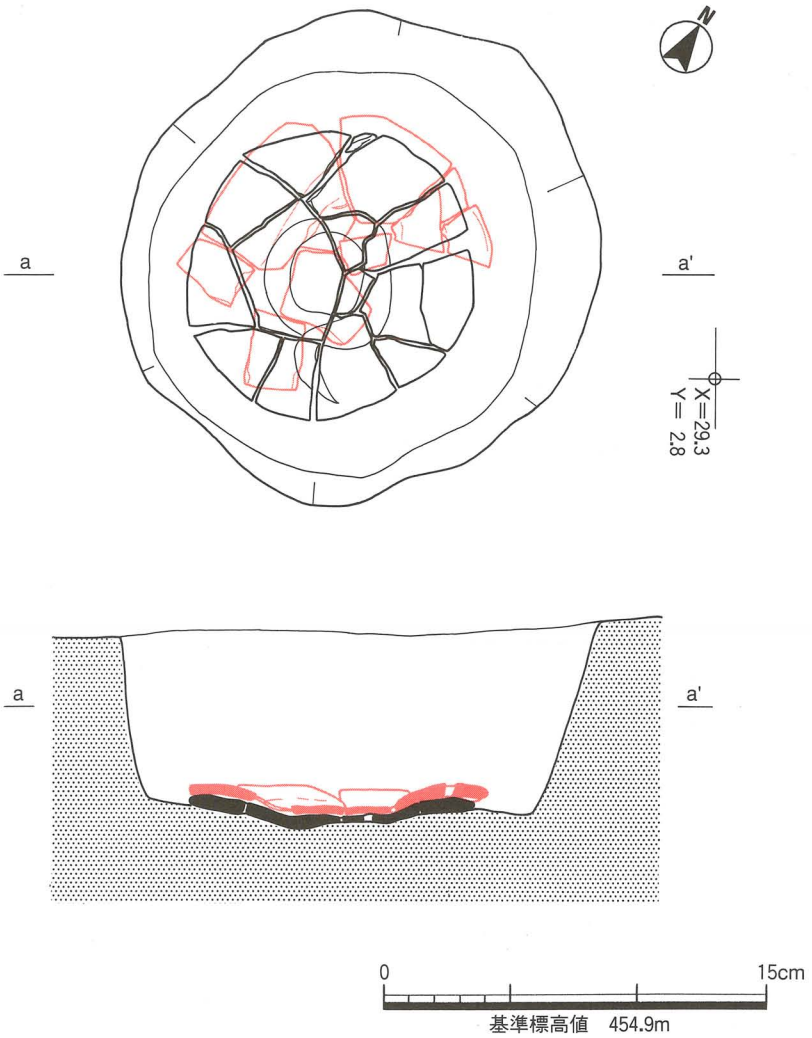


第22図　柵列SA51・SA52・SA53・SA54・SA58実測図　縮尺1/100

尺）である。柱間は西から1.1m（3.6尺），0.9m（3.0尺）である。柱穴は円形であり，長径20～29cm，深さ7～38cmを測る。SP146で径9cm，検出長14cmを測る柱痕跡を確認している。図示していないが，SP303から瓦器1点が出土している。

(e) **地鎮遺構**（第23図）

SP148（第23図）：Ⅱ地区北東部，X座標29.3，Y座標2.7，脇門の北東約4m，SA57の南側に位置する。平面形は径18cmの円形であり，深さは8cmを測る。底面はほぼ平坦である。底面中央部から，土師器皿2枚が内合わせに重なった状態で出土した（第28図の12・13）。2枚の土師器皿の内面及び上部の1枚の外面底部には墨書がある。その字句から地鎮のために納めた土師器皿と考えられる。上部の1枚の外面底部には「西方」と記されており，SP148が脇門の北側，堀内地区の西隅部に位置することから，堀と築地塀に囲まれた館の中心区画に対する地鎮を行ったものであり，他に南・北・東の隅部と館の中心付近の計5ヶ所に同様のかわらけを納めた穴があるものと推定できる。土師器皿は16世紀前半のものと考えられる。通常，このような地鎮行為は新たに建物を建てる時，または大規模な建て替えに際して行うとのことであるが，これまで検討している下館の時期変遷においては，16世紀前半は館として機能する時期としては末期にあたり，大規模な建て替えは想定しにくく，何らかの



第23図　地鎮遺構SP148土師器皿出土状況実測図　縮尺1／3

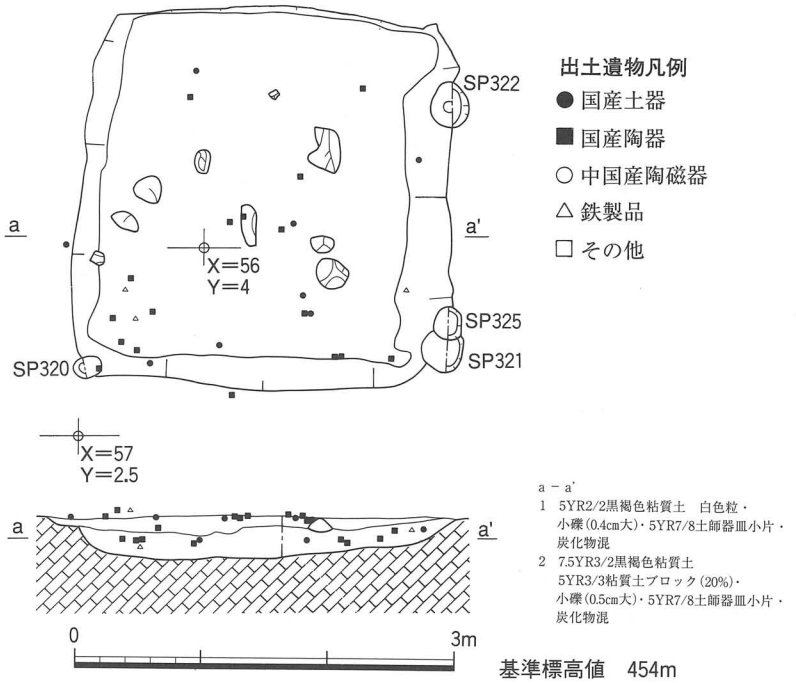
凶事があったため，その祓いとして行った地鎮の可能性も考えられる。建て替えと地鎮遺構との関係は，今後も調査を続けながら，検討していきたい。なお，埋土のサンプリングを行わなかったため，内合わせにした土師器皿の内面に五穀等が納められていたかどうかは確認していない。

(f) **竪穴住居**（第24図）

北堀の北側で１棟を検出した。

SI21（第24図）：Ⅲ地区中央部，X座標54.0～57.0，Y座標2.7～5.9の範囲に位置する。平面規模は一辺約３ｍの方形である。主軸方位はY－0.0°－Nを測り，座標と一致する。下館基盤土層面上から掘り込み，検出した深さは33cmである。底面は，地山をほぼ平坦に掘り込み，そのまま使用していたようである。北・西側壁面は比較的鋭角に立ち上がり，南側壁面はやや緩やかに傾斜しているが，底面，検出上端との境は明瞭である。東側壁面は，調査区東壁内にあり，検出していない。底面外周に壁面にそってめぐる溝，またSI21の主柱穴と考えられる柱穴は検出していない。SI21→SP321・SP325・SP322，SI21←SP320である。

遺物は埋土中から土師器皿８点，瓦器１点，珠洲12点，瓷器系陶器（越前）４点，瀬戸・美濃２点，鉄製品３点が出土している（第29図の14～18）。出土遺物の年代は13世紀中葉～15世紀代である。図示できた遺物中最も新しい年代を示すものは古瀬戸中Ⅳ期の瀬戸・美濃の折縁深皿であるが，14世紀中頃～15世紀代の年代を持つ越前の甕や，細片ではあるが江馬館の最盛期である15世紀代の年代を持つT-６類かT-７類に属する土師器皿も出土している。SI21出土の瓷器系陶器（越前）４点は，SV01南側の堀内地区内の旧耕作土〈耕地造成土〉出土の接合した２点，SD22埋土出土の１点と，接合しないものの同一個体と考えられる。これらの接合関係から，SI21の埋め戻しもSD22の廃棄と同時期と考えられ，SI21は江馬氏下館Ⅲ期の遺構と考えられる。



第24図 竪穴住居SI21実測図 縮尺１/60

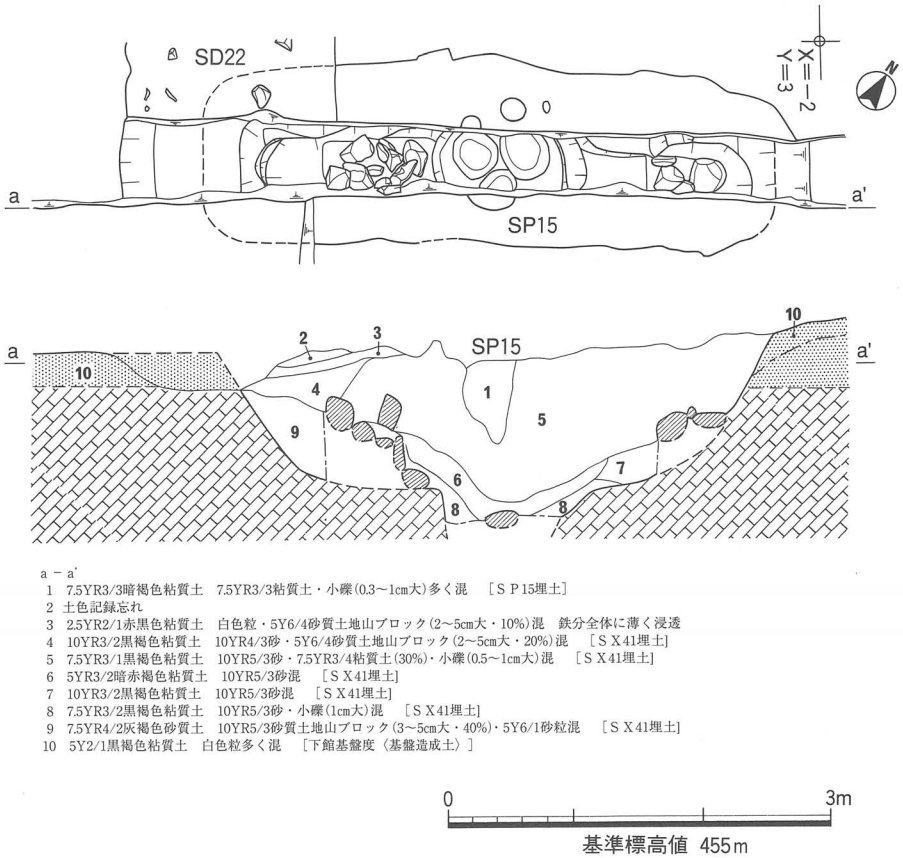
(g) 不明土坑（第25図）

SX41（第25図）：Ⅰ地区南側，X座標－3.6～2.1，Y座標－1.8～2.7の範囲に位置する。平面は長辺4.5m，短辺1.5mの隅丸長方形である。主軸方位はY－2.0°－Sを測り，座標にほぼ一致する。土層確認のために設定した2トレンチ内で土層の堆積・掘り込みの状況を確認した。2トレンチ幅が50cmと狭く，その掘り込み・底部形状は断定できないが，観察できる範囲では，東西両側ともに，検出面から約1.1mの深さまで急傾斜で掘り込み，そこで穴の中央部に向かって緩やかに傾斜するテラス状の平坦面をつくる。この平坦面上部の埋土内には，東西共に長軸10～30cm前後の船津花崗岩礫が多く含まれる。SX41中央部ではさらに径1.4m程の円形の掘り込みが観察でき，その埋土中に長径40～50cm前後の川原円礫3個を検出した。その上面までの深さは約1.6mである。遺物は出土していない。ⅡA期の館の整備に先立つ時期の人為的な掘り込みと考えるが，その性格は明らかではない。

(h) 溝（第12・13・26図）

下館Ⅲ期のものと考えられる溝1本を確認した。

SD22（第12・13・26図）：西堀の東側に延びる南北方向の溝である。X座標－7.0～59.2，Y座標－4.5～－0.8の調査地区全体に延びる。検出長は66.4mを測る。主軸方位はX－2.0°－Wであり，座標にほぼ一致する。各調査区壁際の土層確認用トレンチ内で確認できる範囲で，上幅は約170～208cm，下幅は35～60cm，深さは32～45cmである。地形の傾斜にそって南から北へ低くなり，底面レベルは南端のⅠ地区1トレンチ北壁で454.798m，北端のⅢ地区北壁で453.332mである。Ⅱ地区のX座標21.0～Ⅲ地区のX座標46.0の範囲は，耕地化の際の削平や撹乱をうけ，その掘形は明確ではない。

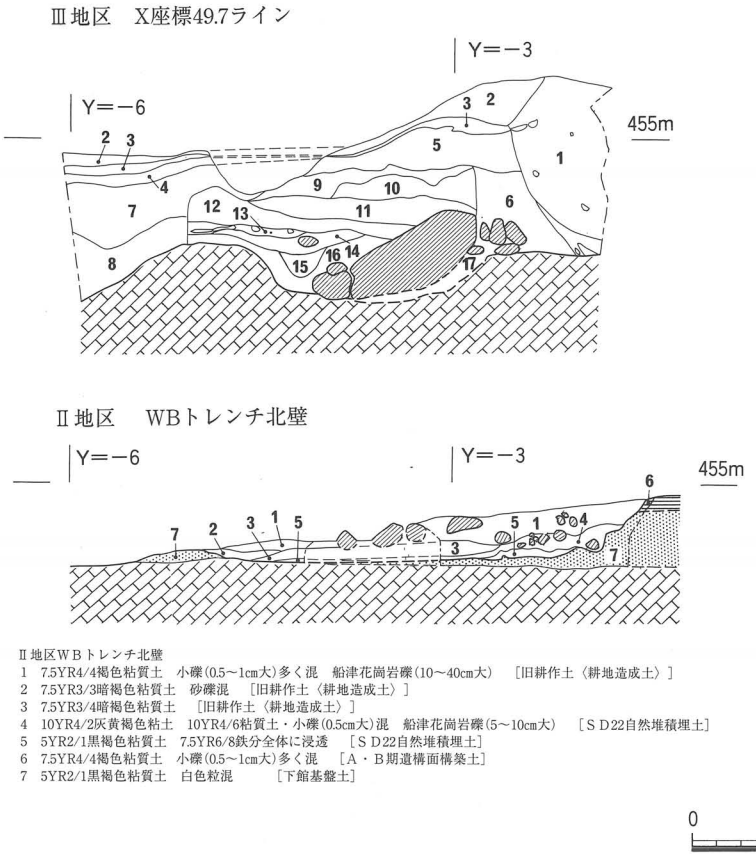


第25図 不明土坑SX41実測図 縮尺1/60

調査地区壁及び各トレンチ壁等で埋土の観察を行った（第13・26図）。Ⅰ・Ⅱ地区内のSD22は堀内地区側のA・B期遺構面構築土層を削平した旧耕作土〈耕地造成土〉で埋め戻されている（第13図Ⅱ地区南壁第19～23層・Ⅰ地区1トレンチ北壁第26層）。Ⅱ地区の脇門に面するSD22埋土中，X座標21.0～30.0，Y座標－5.0～－3.0の範囲で確認できる礫群は，1994年度報告ではSX01として「中世の生活面と考えられる黒褐色土上にあり，土塁及び門に関係するもの」と考えていた。今回の調査の結果，これらの礫群は旧耕作土〈耕地造成土〉に含まれていることを確認し（第26図Ⅱ地区WBトレンチ北壁第1層），耕地に畦を築くための土留め石列であったと考えられる。Ⅰ地区の主門推定位置に面するSD22埋土中にも礫が多く，礎石と考えられる礫もあり，門周辺のSD22埋土内の礫は，門の構築物に使われていた可能性があろう。Ⅲ地区では築地塀基底部石列の石材であったと考えられる礫群SX35・SX37をSD22埋土内で検出している。Ⅲ地区X座標48以北では，SD22埋土の直上に耕地の境と考えられる石列SV05や耕地化後の道路状遺構SF01が作られる。

遺物は自然堆積埋土中から土師器皿1点，珠洲3点，鉄製品1点，石製品1点が，SD22埋め戻し土である旧耕作土〈耕地造成土〉中から土師器皿1点，瓦器1点，珠洲4点，瓷器系陶器1点，瀬戸・美濃2点，白瓷系陶器1点，白磁3点，近世陶器1点，不明陶器1点が出土している（第29図19～24）。最も新しい年代を示す遺物は登窯第1～2小期に属する志野丸皿であり，17世紀前半のものである（第29図24）。このような埋土・出土遺物の年代から，SD22は江馬氏下館Ⅲ期の遺構であり，耕地化に際して堀内地区側を削平し，その土でSD22を埋め戻したものと考えられる。

耕地化の際の撹乱等により，SD22と西堀の埋め立ての順序を調査区壁における土層堆積の観察から確認することはできないが，西堀の埋土がA・B期遺構面構築土層上に築かれた築地塀（または土



Ⅲ地区X座標49.7ライン
1　2.5Y3/1黒褐色砂質土　5Y2/1粘質土フブロック(10%)・2.5Y8/3砂質土ブロック(5%)・小礫(0.5～1cm大)混［表土］
2　5YR3/2暗赤褐色砂質土　小礫(0.5cm大)混［1994年度調査埋め戻し土］
3　2.5Y8/3黄色砂質土　［土地改良土］
4　7.5Y2/3極暗褐色砂質土　白色微粒・小礫(0.5cm大)多く混［旧農道面整地土層］
5　7.5YR3/1黒褐色砂質土　小礫(0.2～0.5cm大)多く混［1978年度調査埋め戻し土］
6　7.5YR3/2黒褐色砂質土　小礫(0.5～0.8cm大)混［1978年度調査埋め戻し土］
7　7.5YR3/3暗褐色砂質土　小礫(0.2～0.8cm大)多く混［1976・77年度調査埋め戻し土］
8　10YR2/3黒褐色砂質土・小礫(0.5～5cm大)多く混［1976・77年度調査埋め戻し土］
9　7.5YR2/2黒褐色砂質土　小礫(0.5～1cm大)・炭化物混　［旧耕作土〈旧耕作土〉］
10　5YR3/1黒褐色粘質土　小礫(0.2～0.8cm大)・炭化物混　［旧耕作土〈旧耕作土〉］
11　10YR3/2黒褐色粘質土　小礫(0.2～0.8cm大)多く混［旧耕作土］
12　7.5YR3/1黒褐色粘質土　小礫(0.2～0.8cm大)多く混　鉄分東部分に薄く浸透　［旧耕作土〈旧耕作土〉］
13　10YR2/3黒褐色粘質土　5Y7/4砂質土地山ブロック(50%)・小礫(0.5cm大)混　［旧耕作土〈耕地造成土〉］
14　10YR3/1黒褐色粘質土　小礫(0.2～0.8cm大)　10YR8/8砂最下層に堆積　［旧耕作土〈耕地造成土〉］
15　5YR2/1黒褐色粘質土(50%)　10YR3/2粘質土(50%)・小礫(0.3cm大)混　［旧耕作土〈耕地造成土〉］
16　7.5YR3/3暗褐色粘質土　10YR2/2粘質土(20%)・小礫(0.5～0.8cm大)混　［旧耕作土〈耕地造成土〉］
17　2.5Y4/1黄灰色粘質土　白色粒・小礫(0.5cm大)混　［SD22自然堆積埋土］

Ⅱ地区WBトレンチ北壁
1　7.5YR4/4褐色粘質土　小礫(0.5～1cm大)多く混　船津花崗岩礫(10～40cm大)　［旧耕作土〈耕地造成土〉］
2　7.5YR3/3暗褐色粘質土　砂礫混　［旧耕作土〈耕地造成土〉］
3　7.5YR3/4暗褐色粘質土　［旧耕作土〈耕地造成土〉］
4　10YR4/2灰黄褐色粘土　10YR4/6粘質土・小礫(0.5cm大)混　船津花崗岩礫(5～10cm大)　［SD22自然堆積埋土］
5　5YR2/1黒褐色粘質土　7.5YR6/8鉄分全体に浸透　［SD22自然堆積埋土］
6　7.5YR4/4褐色粘質土　小礫(0.5～1cm大)多く混　［A・B期遺構面構築土］
7　5YR2/1黒褐色粘質土　白色粒混　［下館基盤土］

0　3m

第26図　SD22断面層位図　縮尺1/60

塁）を押し崩したものと考えられ，西堀と築地塀の中間にあるSD22はＡ・Ｂ期遺構面構築土層を削平，押しならした旧耕作土〈耕地造成土〉で埋めたてていることから，ⅡＢ期末の館の廃棄時に築地塀（または土塁）の上部盛土部を崩して西堀を埋め戻した後，江馬氏下館Ⅲ期にSD22を設けたものと考えられよう。またSD22の機能時には館北西隅部の築地塀の基底部石列は残っていたものと考えられる。

(i) **近世以降の遺構**（第12・13・22図）

Ⅲ地区北西部で検出した近世以降の耕地化に際して設けられた施設である。

SF01：SD22を埋めたてた後に設けられた農道である。

SV04：Ⅲ地区中央部，SD22埋土上にならぶ東西方向の石列である。SV02の西への延長線上にあり，SV03同様，耕地境の石組み畦である。

SV05：Ⅲ地区の北寄り，SD22埋土上にならぶ南北方向の石列である。耕地境の畦を築く際の土留め石または石組み畦と考えられる。SF01を切る。

SD23・SV06：SD23は農業用の水路であり，SV06はSD23の東側の石組み壁である。

4　遺　　物

1998・1999年度調査地区から出土した遺物は，中世の土器・陶磁器片の他に鉄製品，石製品，銭貨，縄文土器，近現代陶磁器など，その総数は232点である。

これらの遺物のうち，館の存続期間である13世紀後半～16世紀初めの年代を持つ中世土器・陶磁器は181破片，6.32個体分である。今回の調査地区は過去の調査地区と重複している部分が多く，過去の調査において掘削の及んだ範囲の遺物はすでに取り上げられている。また，耕地化に伴う削平等によって土が移動していること，すべての遺構埋土を完掘しておらず，取り上げていない遺物があることから，使用・廃棄の状況を完全には把握できないことを念頭におきつつ，若干の分析を行った。

第８表に種類別組成を，第９表に用途別組成を，堀内地区・堀外地区の遺構内，遺構外の旧耕作土のうち〈耕地造成土〉と〈旧耕作土・1976～1978年度調査埋め戻し土〉毎に集計した。堀内地区の遺構内には堀跡出土遺物，Ａ・Ｂ期遺構面構築土層・下館基盤土〈基盤造成土〉層出土の遺物も含む。堀外地区の遺構内出土遺物は，ほぼSＩ21出土遺物に限られる。遺構外の旧耕作土〈耕地造成土〉は，土層の観察から堀内地区側の遺構面を削平して押しならしたものと考えられ，この土層から出土した遺物は本来は堀内地区内で使用していたものと想定できるため，別個に集計した。

今回の調査地区は館の北西隅部であり，陶磁器の使用を伴うような遺構自体が近辺に存在しないことから，下館機能時における陶磁器の使用そのものが少なかったものと考えられる。

堀内地区の遺構内出土遺物および本来は堀内地区で使用していたと考えられる旧耕作土〈耕地造成土〉出土遺物では，種類別組成において土師器皿の占める比率が高い。堀内地区については，ほぼ完形で出土した地鎮遺構SP148の土師器皿２点を含むためであるが，用途別組成についてみても，食膳具における土師器皿の比率が高く，堀内地区内で行われた土師器皿を用いた儀礼祭祀の行為を反映していると考えられよう。またこのような状況は，過去の調査における堀内地区の遺物の出土傾向と同様である。

一方，堀外地区の遺構内出土遺物については，そのほとんどがSＩ21出土のものであるため，その比率はSＩ21における陶磁器の使用比率を示しているが，種類別組成において珠洲の占める比率が高く瀬戸・美濃の出土量も堀内地区に比べて多いことがわかる。用途別組成においては貯蔵具の比率が高い。また食膳具においても，瀬戸・美濃の比率が高く，相対的に土師器皿の比率が低くなる。調理具の出土はなかった。その比率からは，堀の外に貯蔵具の使用を伴う施設を配置しており，そこでは食膳具として瀬戸・美濃も多く用いるという使用の状況がうかがえよう。

遺物の接合関係は，Ⅲ地区堀内地区のＡ・Ｂ期遺構面構築土層から約50㎝離れて出土した瀬戸・美濃の折縁深皿２点（第28図の４），Ⅲ地区堀内地区の旧耕作土〈耕地造成土〉中から約3.4ｍ離れて出土した瓷器系陶器（越前）の甕２点，ＳＩ21出土の瓷器系陶器（越前）の甕２点，瀬戸・美濃の折縁深皿２点（第29図の15）の４例が接合した。また瓷器系陶器（越前）は，ＳＩ21出土の４点（うち２点は接合），これから約12ｍ南へ離れたⅢ地区堀内地区の旧耕作土〈耕地造成土〉出土の接合した２点，その約1.1ｍ西のSD22埋土出土の１点が，接合しないものの同一個体と考えられる。

以下，遺物の諸特徴を述べるが，中世陶磁器については，珠洲を吉岡康暢氏の編年に，瀬戸・美濃を藤沢良祐氏の編年に，中国陶磁器を国立歴史民俗博物館集成の分類に，それぞれ依拠して記述した（吉岡1994・藤沢1996・国立歴史民俗博物館1993）。土師器皿・瓦器については，1994年度調査報告書で示した分類に沿って記述している（第27図，神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995）。胎土・焼成については，「胎土は密であり，焼成は良好」なものが大半を占めるため，この場合は，特に記述しなかった。法量等の詳細データ・土師器皿の色調等も別表９に示し，ここでは触れない。

(a) **遺構内出土遺物**（第28図の１～13）

下館基盤土〈基盤造成土〉出土品（第28図の１）：１は縄紋土器の壷である。胎土は密であり，砂粒を多く含む。内面に煤が付着している。

Ａ・Ｂ期遺構面構築土出土品（第28図の２～４）：２は土師器皿であり，Ｔ－２類に属する。胎土は気泡を含むが，密である。

３・４は瀬戸・美濃である。３は入子の底部破片であり，内外面無釉である。外面底部に回転糸切り痕が残るが，摩耗している。内面底部から立ち上がりにかけてもよく摩耗している。胎土は，気泡を含み，密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸前Ⅲ期～中Ⅱ期に属し，13世紀後半～14世紀前半のものである。４は折縁深皿である。口縁部は一旦外折し，口縁端部は内側に折り返される。折り返された端部上面は中央部が最も膨らむ。内面と外面体部上半に淡黄緑色透明の灰釉を施すが，二次被熱により内外面に細かい気泡がみられ，外面の釉はやや白濁する。胎土は砂粒を含み，密である。色調は灰色を呈する。古瀬戸中Ⅳ期に属し，14世紀中頃のものである。約50㎝離れて出土した２破片が接合した。

西堀埋土出土品（第28図の５）：５は珠洲の甕である。口縁部は上面が丸みをもちつつ短く「く」字状に屈曲し，端部下面をしっかり押さえているため，端部は断面四角形を呈する。体部外面に３㎝幅に７条の叩き目を施し，内面には当て具痕が残る。胎土は砂粒と気泡を含み，やや粗い。海綿骨針を含む。焼成は還元硬質であり，色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期末～Ⅴ期初めに属し，14世紀後半のものである。

北堀埋土出土品（第28図の６～７）：６・７は土師器皿である。６はＴ-２類に属し，胎土は密である。内面にわずかに煤・タールが付着し，内面口縁端部から体部側約１㎝の幅で明橙色に変色しており，灯明皿として使用したと考えられる。７はＲ-５類に属する。胎土は細かい気泡を含み，密であるが，焼成はやや悪い。

SA52柱穴出土品（第28図８）：８は土師器皿であり，Ｔ-５類に属する。胎土は砂粒を含み，密である。口縁端部内外面にタールが付着し，灯明皿として使用したと考えられる。

SP174出土品（第28図の９）：９は土師器皿であり，Ｔ-６類かＴ-７類に属する。胎土は砂粒を含み，密である。

SP175出土品（第28図の10）：10は土師器皿であり，Ｔ-６類かＴ-７類に属する。胎土は0.2㎝大の

第8表　1998・1999年度調査地区出土中世陶磁器の種類・器種別組成表(13世紀後半～16世紀前半)

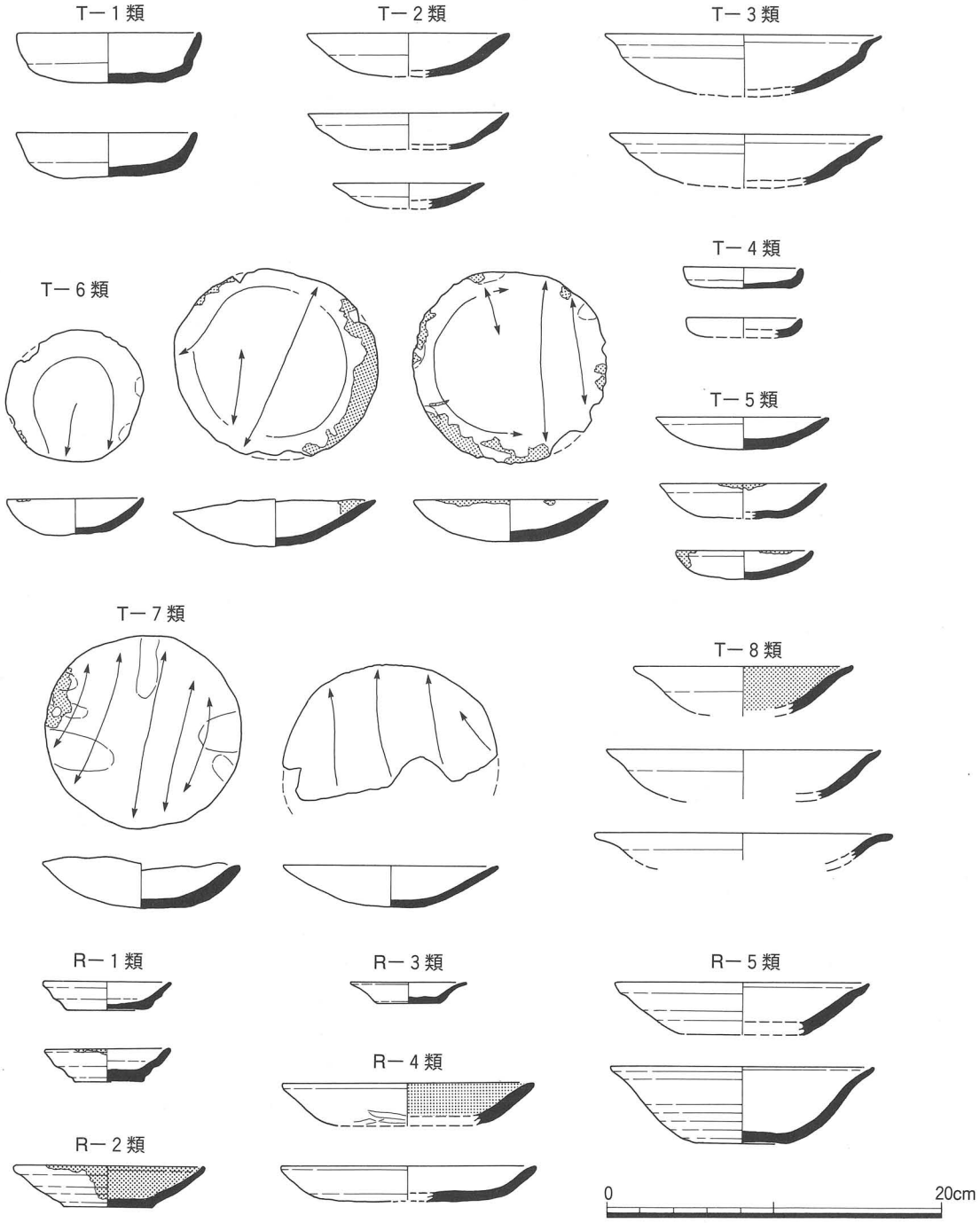
種類	器種	遺構内出土遺物 堀内地区 破片数	個体数	遺構内出土遺物 堀外地区 破片数	個体数	遺構外出土遺物 旧耕作土〈耕地造成土〉 破片数	個体数	遺構外出土遺物 旧耕作土〈旧耕作土・1976～1978年度調査埋め戻し土〉・表土 破片数	個体数
土師器	皿	20	2.58(100.0%)	9	0.14(100.0%)	30	1.38(100.0%)	22	1.02(100.0%)
	小計	20	2.58[98.9%]	9	0.14[27.5%]	30	1.38[86.2%]	22	1.02[64.6%]
瓦器	火鉢・風炉	1	0 (※ %)	1	0 (※ %)	4	0 (※ %)	2	0 (※ %)
	小計	1	0 [※ %]	1	0 [※ %]	4	0 [※ %]	2	0 [※ %]
珠洲	壺			2	0.15(60.0%)			2	0.03(100.0%)
	甕	3	0 (※ %)	6	0.10(40.0%)	8	0 (※ %)	8	0 (※ %)
	壺・甕	3	0 (※ %)	4	0 (※ %)			4	0 (※ %)
	すり鉢					3	0.04(100.0%)	5	0 (※ %)
	小計	6	0 [※ %]	12	0.25[49.0%]	11	0.04[2.5%]	19	0.03[1.9%]
瓷器系陶器	越前甕			4	0 (※ %)	3	0 (※ %)		
	八尾甕							2	0.05(100.0%)
	瓷器系甕	1	0 (※ %)					1	0 (※ %)
	小計	1	0 [※ %]	4	0 [※ %]	3	0 [※ %]	3	0.05[3.1%]
瀬戸・美濃	碗					3	0.09(50.0%)	4	0.08(20.0%)
	皿	1	0 (※ %)					5	0.32(80.0%)
	盤	2	0.03(100.0%)	2	0.12(100.0%)	2	0.09(50.0%)	1	0 (※ %)
	壺・瓶			1	0 (※ %)			1	0 (※ %)
	小計	3	0.03[1.1%]	3	0.12[23.5%]	5	0.18[11.3%]	11	0.40[25.3%]
白瓷系陶器	碗					2	0 (※ %)	1	0 (※ %)
	小計					2	0 [※ %]	1	0 [※ %]
中国陶磁器	青磁碗					1	0 (※ %)	2	0.05(62.5%)
	白磁碗					2	0 (※ %)	1	0.03(37.5%)
	皿	1	0 (※ %)						
	小杯					1	0 (※ %)		
	小計	1	0 [※ %]			4	0 [※ %]	3	0.08[5.1%]
総計		32破片	2.61個体分	29破片	0.51個体分	59破片	1.60個体分	61破片	1.58個体分

• 個体数は全て口縁部計測法による。※は破片が存在するが個体数として表れないもの。
• [括弧]は総数における各種類の比率を、(括弧)はそれぞれの種類における各器種の比率を示す。

第9表　1998・1999年度調査地区出土中世陶磁器の用途・種類別組成表(13世紀後半～16世紀初め)

用途	種類	遺構内出土遺物 堀内地区 破片数	個体数	遺構内出土遺物 堀外地区 破片数	個体数	遺構外出土遺物 旧耕作土〈耕地造成土〉 破片数	個体数	遺構外出土遺物 旧耕作土〈旧耕作土・1976～1978年度調査埋め戻し土〉・表土 破片数	個体数
食膳具	土師器	18	0.92(96.8%)	9	0.14(53.8%)	30	1.38(88.5%)	22	1.02(71.3%)
	瀬戸・美濃	3	0.03(3.2%)	2	0.12(46.2%)	5	0.18(11.5%)	9	0.33(23.1%)
	白瓷系陶器					2	0 (※ %)	1	0 (※ %)
	中国陶磁器	1	0 (※ %)			4	0 (※ %)	3	0.08(5.6%)
	小計	22	0.95[36.4%]	11	0.26[51.0%]	41	1.56[97.5%]	35	1.43[90.5%]
貯蔵具	珠洲	6	0 (※ %)	12	0.25(100.0%)	8	0 (※ %)	14	0.03(37.5%)
	瓷器系陶器	1	0 (※ %)	4	0 (※ %)	3	0 (※ %)	3	0.05(62.5%)
	瀬戸・美濃			1	0 (※ %)			1	0 (※ %)
	小計	7	0 [※ %]	17	0.25[49.0%]	11	0 [※ %]	18	0.08[5.1%]
調理具	珠洲					3	0.04(100.0%)	5	0 (※ %)
	瀬戸・美濃							1	0.07(100.0%)
	小計					3	0.04[2.5%]	6	0.07[4.4%]
その他	土師器(地鎮遺構)	2	1.66(100.0%)						
	瀬戸・美濃								
	瓦器	1	0 (※ %)	1	0 (※ %)	4	0 (※ %)	2	0 (※ %)
	小計	3	1.66[63.6%]	1	0 [※ %]	4	0 [※ %]	2	0 [※ %]
総計		32破片	2.61個体分	29破片	0.51個体分	59破片	1.60個体分	61破片	1.58個体分

• 個体数は全て口縁部計測法による。※は破片が存在するが個体数として表れないもの。
• [括弧]は総数における各種類の比率を、(括弧)はそれぞれの種類における各器種の比率を示す。



手ずくね成形（T類）
T－1類　体部が屈曲ぎみに立ち上がるもの。
T－2類　口縁部に一段の横撫でを強く施すもの。
T－3類　口縁部を薄くし、強く外反させて段をつけるもの。
T－4類　体部が屈曲ぎみに立ち上がる小皿。
T－5類　口縁部に一段の横撫でを浅く施すもの。
T－6類　内面だけを不規則に撫でて、口縁部の調整を省略するもの。
T－7類　内面に一方向の撫でを施し、口縁部の調整を省略するもの。
T－8類　横撫でにより口縁部を強く外反させるもの。

轆轤成形（R類）
R－1類　口縁部がゆるく外反する小皿。底部は回転糸切り。
R－2類　口縁外側を篦で面取りするもの。底部は回転糸切り。
R－3類　口縁部が強く外反するもの。底部は静止篦削りか。
R－4類　浅い皿型で、体部が直線的に開くもの。底部は静止篦削り。
R－5類　深い坏型で口縁部がやや外反するもの。底部は回転篦削り。

第27図　江馬氏下館跡出土の土師器皿分類図　縮尺１／４

小礫を含み，密である。

SP309出土品（第28図の11）：11は瀬戸・美濃の壷瓶類の底部破片である。水注と考えられる。外面体部の下部，底部から約4㎜上に一条の沈線がめぐる。外面底部まで，淡緑灰色透明の灰釉を施す。胎土は気泡を含み，密であり，色調は灰白色を呈する。古瀬戸中Ⅰ～Ⅱ期に属し，14世紀前半のものである。

地鎮遺構SP148出土品（第28図の12・13）：12・13は土師器皿である。ともに内面底部を一方向に撫で，口縁上部内外面をつまんで横撫でを施したあと，内面体部立ち上がりから口縁端部にかけて横ナデを施しており，内面底部と体部の境が溝状にへこむ。口縁先端部にはナデが及んでいない。外面体部から底部にかけては無調整であり，不明瞭ではあるが，器形整形時のものと考えられる指頭圧痕が残る。内面体部にもナデ調整によって消されているものの，器形の整形時の指頭圧痕と考えられる窪みが観察できる。京都の土師器皿の影響を強く受けており，京都以外のところでつくられ，江馬氏下館に搬入されたものと考えられる。京都伊野分類のIa-2類に類似し，内面底部と体部の境に溝状のへこみが観察できることから，16世紀前半のころのものと考えられる。12は内外面，13は内面に墨書が残る。12は内面体部から底部にかけて，口縁端部から縦書きで放射状に5行の字句が記されており，「一徳元水神」「三主元木神」「五儀元土神」「□□元金神」「□□□□神」が判読できる。不明である一行は「□□元火神」であり，どちらかに，二・四の数字が入ると考えられる。外面は底部中央に「西方」と記されている。13も内面体部から底部にかけて，口縁端部から縦書きで放射状に5行の字句が記されており，「中央黄帝黄龍王」「西方白帝白龍王」「北方黒帝黒龍王」「東方青帝青龍王」「南方赤帝赤龍王」と判読できる。

SI21出土品（第29図の14～18）：14は土師器皿であり，T-1類に属する。胎土は砂粒を含み，密である。

15は瀬戸・美濃の折縁深皿である。口縁部は一旦外折し，口縁端部は内側に折り返される。折り返された端部上面は中央部が最も膨らむ。外面体部下半は篦削り調整を行っている。内面と外面体部上半に浅黄色透明の灰釉を施すが，二次被熱により釉薬全面に細かい気泡がみられ，外面の釉薬はやや白濁する。胎土は砂粒を含み，密である。色調は乳白色を呈する。古瀬戸中Ⅳ期に属し，14世紀中頃のものである。口縁部と足部の2破片がともにSI21内で出土し，接合しないが，同一個体である。

16・17は珠洲である。16は壷である。口頸部はゆるく外反して立ち上がる。口縁部は三角形に挽き出し，外傾して面をとっている。その端面と端部外面をつまんで強く撫でており，端面中央部がやや窪み，端部先端が丸く仕上がっている。胎土は海綿骨針と気泡を含み，密である。焼成は還元硬質であり，色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し，14世紀代のものである。17は甕である。口縁部は「く」字状に屈曲し，端部はやや四角く仕上げている。体部外面に3㎝幅に11条の叩き目を施し，内面には当て具痕が残る。胎土は砂粒と気泡を含み，密である。海綿骨針を含む。焼成は還元硬質であり，色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期初めに属し，14世紀初めのものである。

18は鉄釘である。残存長6㎝，幅0.8㎝程である。

(b) **遺構外出土遺物**（第29図の19～33・第30図の34～52）

旧耕作土は，近世以降の耕地化にともなって造成された土層であり，第4章第2節の第7表に示したとおり細分できる。本項では，細分した層序順に報告したが，中近世の遺物包含層として同一の土層と考えてよいものである。なおSD22埋土・SV05裏込め土は細分土層の〈耕地造成土〉にあたる。

SD22埋土出土品（第29図の19～23）：19・20は土師器皿であり，ともにT-6類かT-7類に属し，胎土は密である。20は口縁端部にタールが付着し，灯明皿として使用していたと考えられる。

21は山茶碗の碗の底部である。無高台であり，外面底部には回転糸切り痕が残るが，摩耗が激しく不明瞭である。残存部の内面もよく摩耗している。胎土は気泡を多く含み，密である。長石粒を含む。色調は灰白色を呈する。藤沢編年の南部系山茶碗第10型式に属し，14世紀末～15世紀前半のものである。

22～24は瀬戸・美濃である。22は折縁深皿である。口縁部は一旦外折し，指で押さえて輪花状に仕上げている。内外面にオリーブ黄色透明の灰釉を施すが，二次被熱により口縁端部および内面屈曲部の釉薬は剥落している。胎土は砂粒・気泡を含み，やや粗い。色調は灰白色を呈する。古瀬戸中Ⅱ期に属し，14世紀前半のものである。23は直縁大皿である。口縁部はほぼ直線的に延び，口縁端部は丸い。内外面にオリーブ黄色透明の灰釉を施しており，釉には細かい貫入が入る。胎土は密であり，色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅱ期に属し，15世紀初頭のものである。24は志野丸皿である。体部はやや内湾気味に立ち上がり，口縁端部は丸く仕上げている。内外面に灰黄色の志野釉を施す。胎土は砂粒・気泡を含み，密である。色調は淡黄色を呈する。登窯第１～２小期に属し，17世紀前葉のものである。

SV05裏込め出土品（第29図の25）：25は瀬戸・美濃の平碗である。口唇部は短くくびれ，外反気味に開く。淡黄緑色透明の灰釉を施す。胎土は気泡を含み，密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅲ期に属し，15世紀前半のものである。

旧耕作土〈耕地造成土〉出土品（第29図の26～32）：26～31は土師器皿である。26・27はＴ－２類に，28・29はＴ－６類かＴ－７類に，30・31はＴ－８類に属する。胎土は，26・29が気泡を，31は砂粒を含み，密である。26・28は口縁端部に煤・タールが，27は外面体部に煤が付着し，灯明皿として使用していたと考えられる。

32は瀬戸・美濃の平碗である。口唇部は短くくびれ，口縁部は外反して直線的に開く。オリーブ黄色透明の灰釉を施すが，二次被熱によって内面に細かい気泡ができている。胎土は気泡を含み，密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅲ期に属し，15世紀前半のものである。

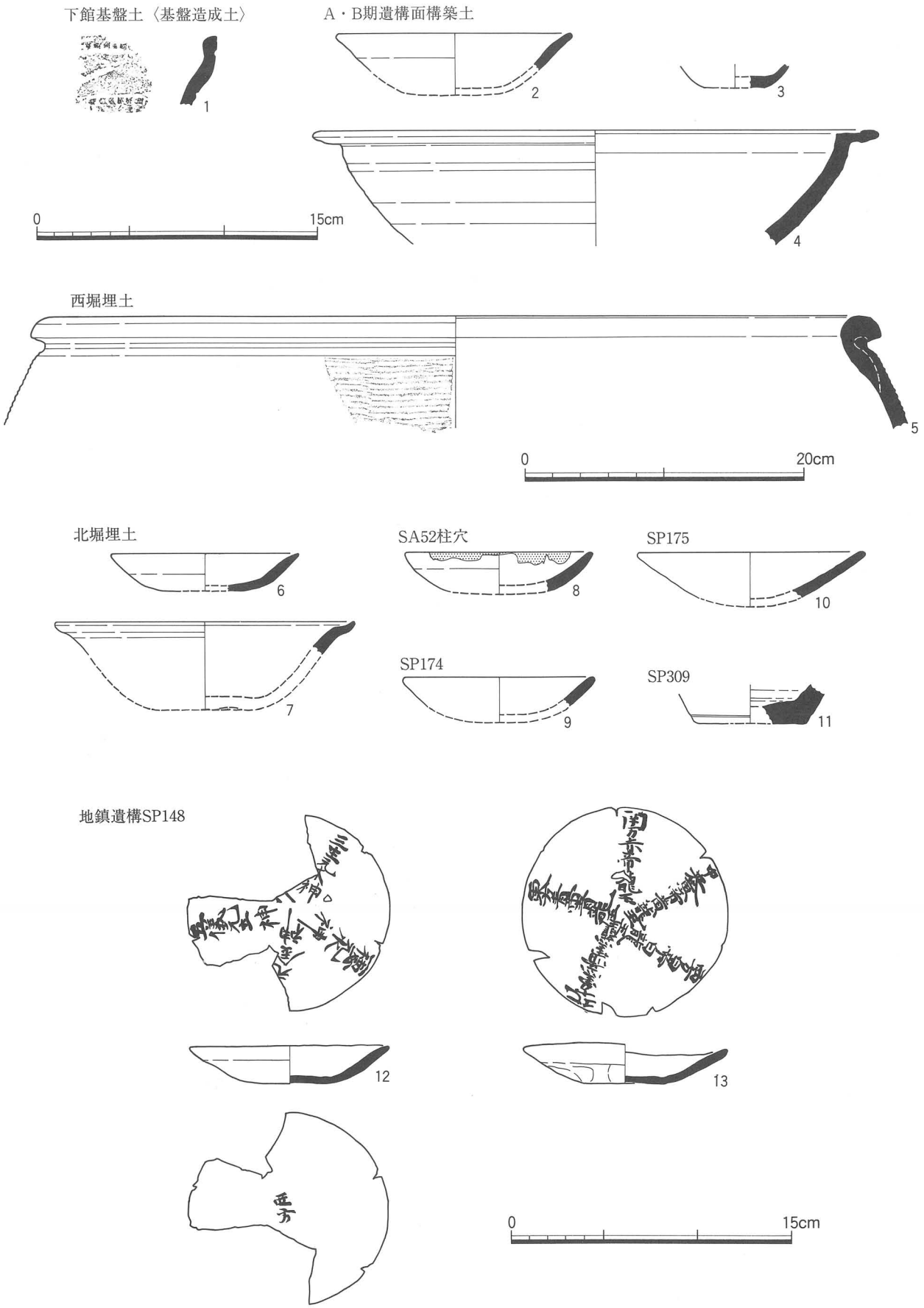
SV06裏込め出土品（第29図の33）：33は珠洲のすり鉢である。口縁部は内傾して面をとり，端部を外方向にやや引き出す。胎土は砂粒を多く含み，密である。海綿骨針を含む。焼成は還元硬質であり，色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し，14世紀代のものである。

旧耕作土〈旧耕作土・1978年度調査埋め戻し土〉出土品（第30図の34～52）：34は須恵器の杯蓋である。縁端部は丸く，内外面に轆轤回転撫で調整を施す。胎土は，砂粒を含み，密である。焼成は還元硬質であり，色調は灰色を呈する。

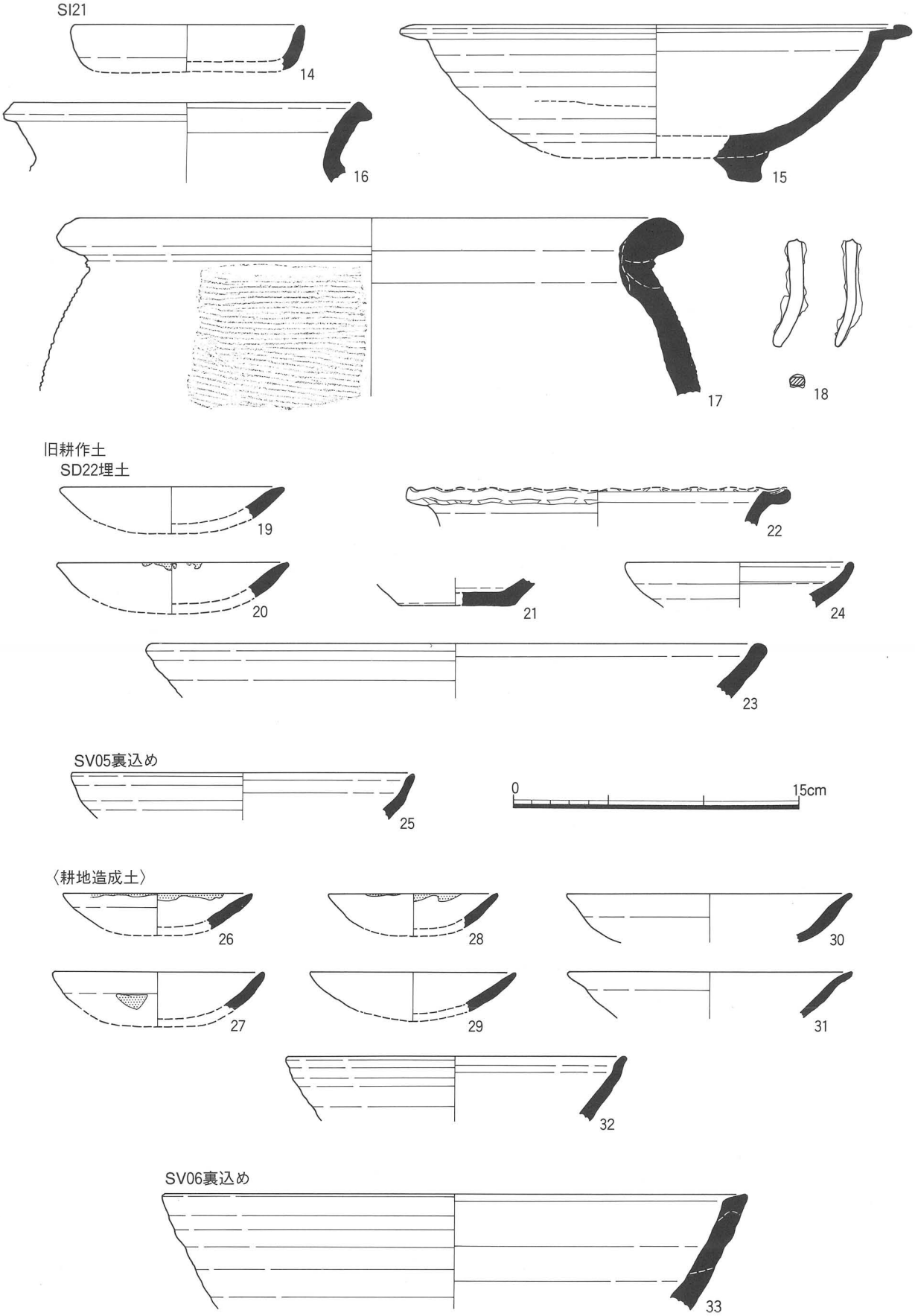
35～45は土師器皿である。35・44はＲ－５類に属する。36はＲ類に属し，外面底部には静止篦削り痕が残り，体部の立ち上がりがきつい。37はＴ－１類，38～40はＴ－２類，41はＴ－６類かＴ－７類，42・43・45はＴ－８類に属する。胎土は37が砂粒を含み密，41が砂粒・気泡を含み密である。44は胎土は砂粒・気泡を含み密であるが，焼成がやや悪い。38は内外面に煤が，41は口縁端部にタールが付着し，灯明皿として使用していたと考えられる。

46は青磁の碗である。細かい気泡をわずかに含むガラス質オリーブ灰色釉を施す。釉には細かい貫入が入る。胎土は気泡，黒粒を含まず，密であり，色調は灰白色を呈する。

47・48は山茶碗の碗であり，ともに北部系（東濃産）である。47は胎土は北部系（東濃産）であるが，器形は南部系山茶碗のものである。内面底部中央部は摩耗しているが，周辺部に轆轤回転撫で調整痕が残る。外面底部は回転糸切り後，高台を張り付けている。高台は断面四角形を呈し，外側に開く。胎土は砂粒・気泡を含み密である。色調は灰色を呈する。藤沢編年の南部系山茶碗第５型式に属



第28図　出土遺物実測図(1)　縮尺１／３　ただし５は縮尺１／４

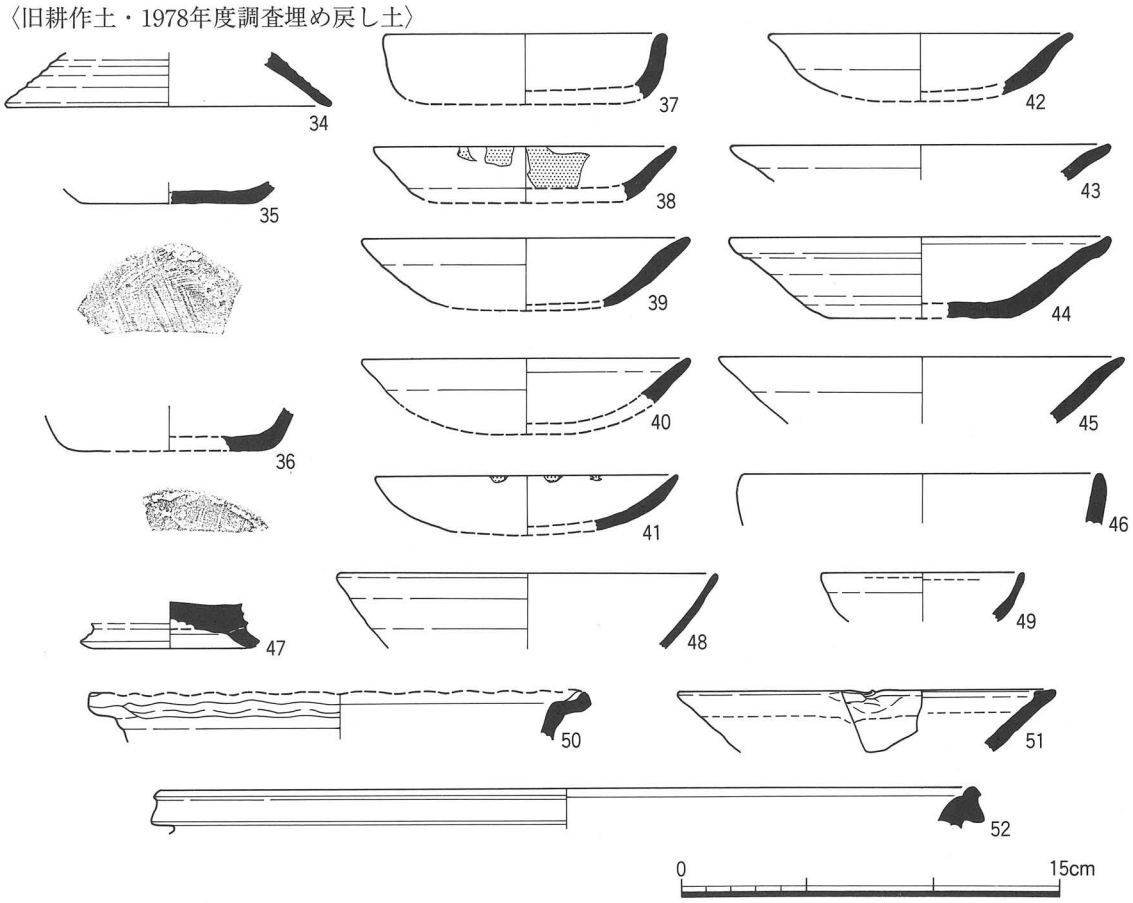


第29図　出土遺物実測図(2)　縮尺１／３

し，12世紀末～13世紀初めのものである。48は器壁が薄く，体部はやや内碗気味に開き，口唇部はややくびれる。口縁端部は丸い。内外面に轆轤回転撫で調整痕が残るが，内面はよく摩耗している。胎土は密であり，色調は灰色を呈する。藤沢編年の北部系山茶碗第Ⅷ期か第Ⅸ期に属し，15世紀前半のものである。

49～51は瀬戸・美濃である。49は入子である。口縁端部にオリーブ灰色透明の灰釉を施す。胎土は砂粒を含み，密である。色調は浅黄色を呈する。古瀬戸中Ⅱ～Ⅲ期に属し，14世紀中葉のものである。50は折縁深皿である。口縁部は一旦外折し，指で押さえて輪花状に仕上げている。内外面に浅黄色の灰釉を施すが，二次被熱により剥落している。胎土は気泡を含み，密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸中Ⅱ期に属し，14世紀前半のものである。51はすり鉢型小鉢である。体部は直線的に開き，口縁部内側に小突起が形成される。口縁の一部を指で押さえて片口を作っている。体部上方内外面に黒褐色の鉄釉を施す。体部の露体の部分が，内外面ともによく摩耗している。胎土は気泡を含み，密である。色調は乳白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(古)に属し，15世紀中頃のものである。

52は瓷器系陶器の甕である。越中八尾窯の製品であり，口縁端部をN字状に折り曲げている。胎土は細かい気泡を含み，密である。色調は灰白色を呈する。酒井重洋氏の分類による第２群甕ｂ類に属する（酒井1990）。



第30図　遺物実測図(3)　縮尺１／３

第5章　小　　結

史跡整備に向けての知見を得るための江馬氏下館跡の発掘調査は，1995年度～1997年度にかけて，館の堀外地区の調査を行い，その空間利用の在り方や遺構の変遷など，多くの知見を得た。これら堀外地区における知見と，1978年度までの堀内地区の調査成果を整理検討し，下館の変遷における史跡整備の対象となる時期（江馬氏下館ⅡA期）の遺構配置を概ね把握出来るようになった。この知見を受け，1998年度からは整備事業の具体化に向け，整備の中心となる堀内地区に調査地区を移し，過去の調査における未解決点の解明を目的とする調査を計画し，実施している。

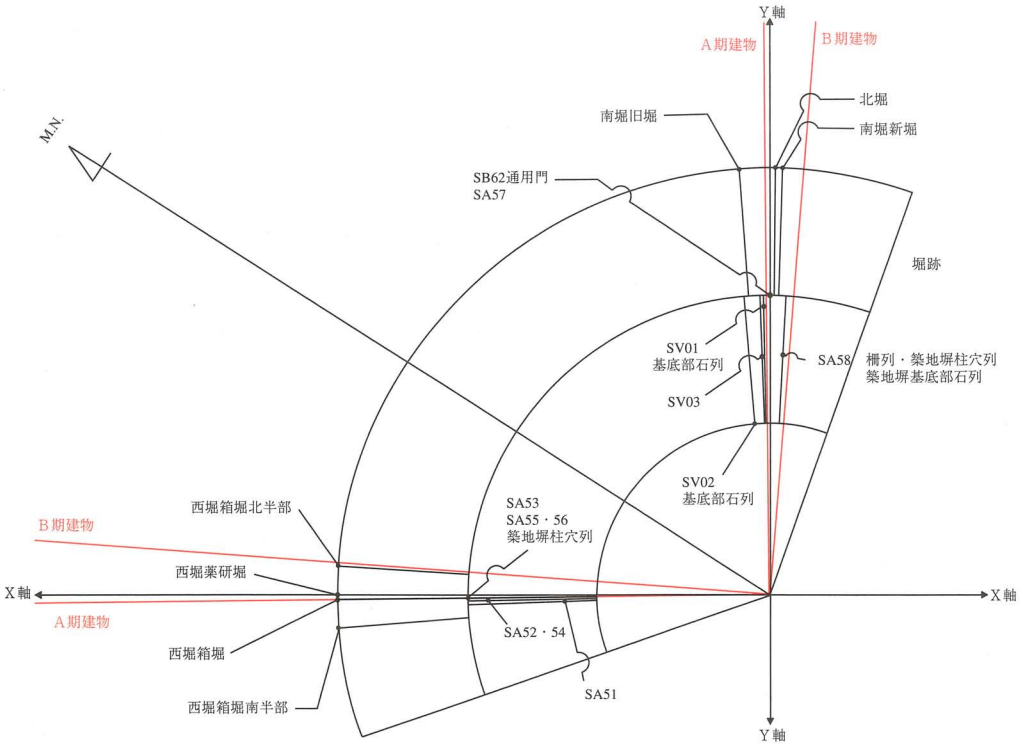
1998・1999年度の調査では，館の中心である堀内地区の西辺から北西隅部にかけての地区の調査を行ない，これまで土塁であると推定していた堀に伴う区画施設が築地塀であること，脇門が掘立柱建ちであることが明らかになり，同じく掘立柱建ちの庭園への通用門を確認し，主門は礎石建ちであったと推定できるなど，下館の空間構成を考える上で貴重な知見を得た。また，今回，堀内地区に調査が及んだことで，堀外地区では確認できない館の構築・建て替えに伴う整地土層（下館基盤土・A・B期遺構面構築土）を再確認し，1978年度概報で示されている堀内地区の整地土層と遺構の構築順序の関係についても，若干の新たな知見と，今後検討すべき課題を得た。

今回の調査で確認した遺構の変遷，堀内地区内の整地土層および1978年度調査時の堀内地区における時期区分との対応関係を，現在使用している江馬氏下館全体の変遷に併せて整理し，第10表に示した。また遺構の変遷の参考になる主軸方位の関係を第13図に示している。江馬氏下館の変遷とその意義については，これまでの調査報告書でまとめている（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1996・1997・神岡町教育委員会1998）。以下，今回の調査で確認した遺構に関わる変遷の知見と今後の検討課題について述べ，まとめとしたい。

今回の調査によって，館の最盛期である江馬氏下館ⅡA期の下館の空間配置がほぼ明らかになった。ⅡA期には，館の三方向を南堀新堀，西堀薬研堀，北堀と築地塀で囲み，館の正面である西側には礎石建ちの主門，掘立柱建ちの脇門を設けている。その内側の館の中心である堀内地区には礎石建ちの規模の大きな建物，庭園を配し，また主門脇には掘立柱建ちの庭園への通用門も設けている。このような館中心部の空間配置は，「下館の様式は京都における『花の御所』に倣ったものであり，室町幕府との社会的関係の中で成立した」とするこれまでの知見（小島1996）をより強く裏付けるものであり，当時の武家館の在り方を遺構として確認できる貴重な事例といえよう。

江馬氏下館ⅡB期にはその主軸方位をかえて建物の建て替えを行うが，築地塀にかわる区画施設は遺構としては確認できなかった。ⅡB期にも堀はそのまま使用していることから，この時期も築地塀であった可能性が考えられる。一方，長野県中野市の高梨氏館跡にみるように，築地塀を土塁に作り替えた可能性も想定できよう。北堀東部の堀内地区側は未調査であり，今後の調査の機会を待って再検討したい。西堀埋土及びSD22とその埋め戻し土の観察から，西堀はⅡB期末の館の廃棄時に堀内地区側の築地塀または土塁を崩して埋め戻したと考えられる。1997年度調査の知見からは，南堀新堀・北堀は，この段階では人為的には埋め戻されておらず，自然堆積によって埋まるに任せてあったものと考えられる。

館の本拠が他所に移転した後の江馬氏下館Ⅲ期には，前段階の西堀と築地塀（または土塁）の間に，溝SD22を設けている。築地塀の盛土は壊されたものの，堀内地区北西隅部の築地塀基底部石列は残っていたものと考えられ，なかば埋まりつつあるものの，その形を残す南堀新堀・北堀も含め，何らか



第31図　1998・1999年度調査地区における遺構の主軸方位

第10表　1998・1999年度調査地区の遺構変遷表

時期区分		1978年度調査報告時期区分	生活面〈括弧内〉は「遺構構築時の掘り込み土層面」を示す	建　物	北堀とその周辺	西堀とその周辺	南堀とその周辺	時期対応の根拠および備考
近世以降				耕地化に伴う削平	• **SF01・SV04・SV05・SV06・SD23** • **耕地の石組み畦畔SV03** 築地塀基底部石列SV02を改修・再利用 ↑ 耕地化に伴う一体の盛土造成に伴い、堀や溝等を埋め戻す • **西堀箱堀に面した築地塀基底部石列の取り壊し。SX35・SX37・SX38・SX39**			
江馬氏下館	Ⅲ期				• 北堀は自然埋没	• **SD22** • **SI21** (• **地鎮遺構SP148**)	• 南堀新堀は自然埋没	
	Ⅱ B期	第３期	A・B期遺構面 構築土層面上 〈A期遺構面上？〉	堀内地区 B期建物 堀外地区 掘立柱建物		• 築地塀[または土塁]を取り壊し、その土で西堀薬研堀・箱堀を埋め戻す [西堀箱堀北半部の一部改修があったか？] [築地塀の土塁への改修の可能性も考えられる] • **SA58**		• 西堀箱堀北半部の主軸方位がB期建物とほぼ一致。 • 堀外地区では建物の主軸方位がB期建物とほぼ一致するが，工房地区は一致せず。
	Ⅱ A期		A・B期遺構面 構築土層面上 〈下館基盤土層面上〉	堀内地区 A期建物 庭園 堀外地区 掘立柱建物	• 北堀 • **築地塀基底部石列** **SV01** **SV02**	• 薬研堀（土橋２の両側） • 土橋１より北の西堀箱堀はそのまま使用か？ • **築地塀柱穴列SA55・SA56** • **SA57**(脇門北東側の東西柵列) • 主門 • **脇門SB61** • **庭園への通用門SB62**		• 堀跡・築地塀の主軸方位はA期建物とほぼ一致。 • A・B期遺構面構築土との関係から。 • 堀外地区の掘立柱建物の主軸方位はA期建物とほぼ一致。
		第２期	? (生活面は，未確定) 〈下館基盤土層面上〉			[• 西堀も箱堀？(主門南側にも箱堀が残っており、薬研堀に先行して箱堀があった可能性が考えられる)] ?	• 旧堀	• 西堀箱堀南半部と南堀旧堀の主軸方位がほぼ直交するが，A期建物の主軸とは一致しない。
	?		? 下館基盤土層面上 〈下館基盤土層面上〉	堀内地区 掘立柱建物		• **SA54** ↑ • **SA51**[=？SA52。主軸ライン同じ] **SA53** ?	?	• 築地塀柱穴列に先行する。 • 主軸方位はほぼA期建物と一致。 • 1978年度報告による • 堀外地区との対応は未確認。
	?	第１期		?	?	?	?	
	Ⅰ期		地山面上 〈地山面上〉	堀外地区 総柱式掘立柱建物				• 1995～1997年度調査時，堀外地区において検出。 • 堀内地区との対応は未確認。

• 太字の遺構は1998・1999年度に確認した遺構を示す。
• [括弧内]は遺構としては確認できなかった、また現段階では断定できないが、可能性が想定できる事項を示す。

の区画の意識は残っていた可能性が推定できよう。そして，下館廃棄後，近世以降の耕地化に際して，西堀に面した築地塀基底部石列を壊してSD22を埋め，かつての築地塀基底部石列SV02を改修再利用して，耕地の石組み畦SV03を設けたようである。また，南堀・北堀も完全に埋めたてたものと考えられる。

今後の検討課題は，現在整理している江馬氏下館の変遷の再検討・整理である。現在整理している江馬氏下館の変遷は，建物の主軸方位から，1978年度概報の堀内地区の時期区分と堀外地区における建物の変遷を対応させている（江馬氏下館ⅡＡ期・ⅡＢ期が，1978年度概報の堀内地区の第２期（Ａ期建物）・第３期（Ｂ期建物）にそれぞれ対応）。しかし，堀外地区では堀内地区で確認できる整地土層（Ａ・Ｂ期遺構面構築土・下館基盤土）を確認できないために層位的に遺構の前後関係を把握できず，1978年度概報において第１期としている遺構群はトレンチ調査によって柱穴等を確認しただけであり，その全体的な配置等は不明であることから，現在整理している時期変遷中に1978年度概報における第１期の遺構群の対応はできていない。1978年度概報における第１期の遺構群は，下館基盤土層から掘り込み，館の創立に関わる時期とされることから（神岡町教育委員会1979），現在の時期区分においてはⅡ期に位置付けられ，Ａ期建物の時期であるⅡＡ期の前にもう一段階，細分した時期を設けることができる可能性がある。今回調査でも柱穴の切り合いから，Ａ期建物に伴うと考えられる築地塀柱穴列SA56に先行する柵列SA53等を確認している。また西堀箱堀南半部の主軸方位が南堀旧堀と一致し，主門南側に箱堀状の掘り込みが残ることから，西堀もＡ期建物に伴う薬研堀の前に箱堀の時期があり，これが南堀旧堀に伴っていた可能性も想定できよう。南堀は，その主軸方位から新堀がＡ期建物に伴うと考えられる。堀も下館基盤土層面上から掘り込むことから，Ａ期建物に伴う新堀に先行する旧堀や，SA53，西堀箱堀が，1978年度調査の第１期の遺構群に対応する可能性も想定できよう。しかし，SA53の主軸方位はＡ期建物と一致し，一方南堀旧堀の主軸方位はこれとは一致しないなど，検討すべき点も残る。また館整備前としている江馬氏下館Ⅰ期の堀外地区総柱式掘立柱建物との対応についても検討する必要があろう。今後，史跡整備に伴って堀内地区の調査が続くことから，下館跡の時期変遷については，知見の増加を待って，再検討したい。

なお，整地土層と遺構の構築については，第４章の２でもふれたように，ⅡＡ期の遺構には，前段階の生活面と考えられる下館基盤土層面上を掘り込んで構築したあと，Ａ・Ｂ期遺構面構築土によってその生活面を造成しているものがある。一方，1994年度調査ではＡ・Ｂ期遺構面構築土層面上でＡ期・Ｂ期両時期の建物に伴う溝を確認しており，同じⅡＡ期の遺構でも，その掘り込み面が異なる遺構があるものと考えられる。また，下館基盤土層面上で，1978年度概報の第１期の遺構とⅡＡ期の遺構が検出されることになる。今後，堀内地区の調査において，遺構の検出・時期変遷を考える上で，注意すべき点といえよう。

以上が，今回調査の知見であるが，担当者の力不足により，整理・理解しきれていない点も多々あると思われる。堀内地区については，史跡整備に伴って今後も再確認調査を継続する。遺構の変遷の再検討も含めて，今後も調査を継続しながら，下館全体の理解を深め，またその成果を史跡整備に反映していきたい。

付章　自然科学的調査の成果

1　1998年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡における電磁気調査

2　1999年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡における地中レーダ探査

3　1997年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡出土カラミの組成分析結果報告

1　1998年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡における電磁気調査

富山大学理学部　酒井英男
田中地質コンサルタント　田中保士
神岡町教育委員会　大平愛子

1　はじめに

江馬氏下館跡の1998年度発掘調査は，北堀に伴う土塁等の区画施設の有無，西堀の北端部の確認等を目的として，北堀と西堀の交差した区域において行った。発掘調査に先立ち，土塁等の盛土が残っているかどうかを予測し，より有効な発掘調査を行うため，電気探査・地中レーダ探査を実施した。本年度の調査地区内では，1976～78・94年度に，トレンチ調査等を行っており，探査当時，すでにこれまでの発掘調査での埋め戻しが済んでいた部分もあったが，探査応答と遺構の検証から，北堀と平行して存在すると思われる土塁跡と，西堀の延長の存在を推定することができた。本報告では，それら推定結果と，今回の発掘調査によって明らかになった事項とを比較対照していく。

2　探査方法と使用機器

(a)　電気探査

電極間隔１ｍウエンナー法による比抵抗マッピング

使用機器　ジオスキャンリサーチ社　RM15

探査グリット　８ｍ×24ｍ＝192㎡　測点数768点

(b)　地中レーダ探査

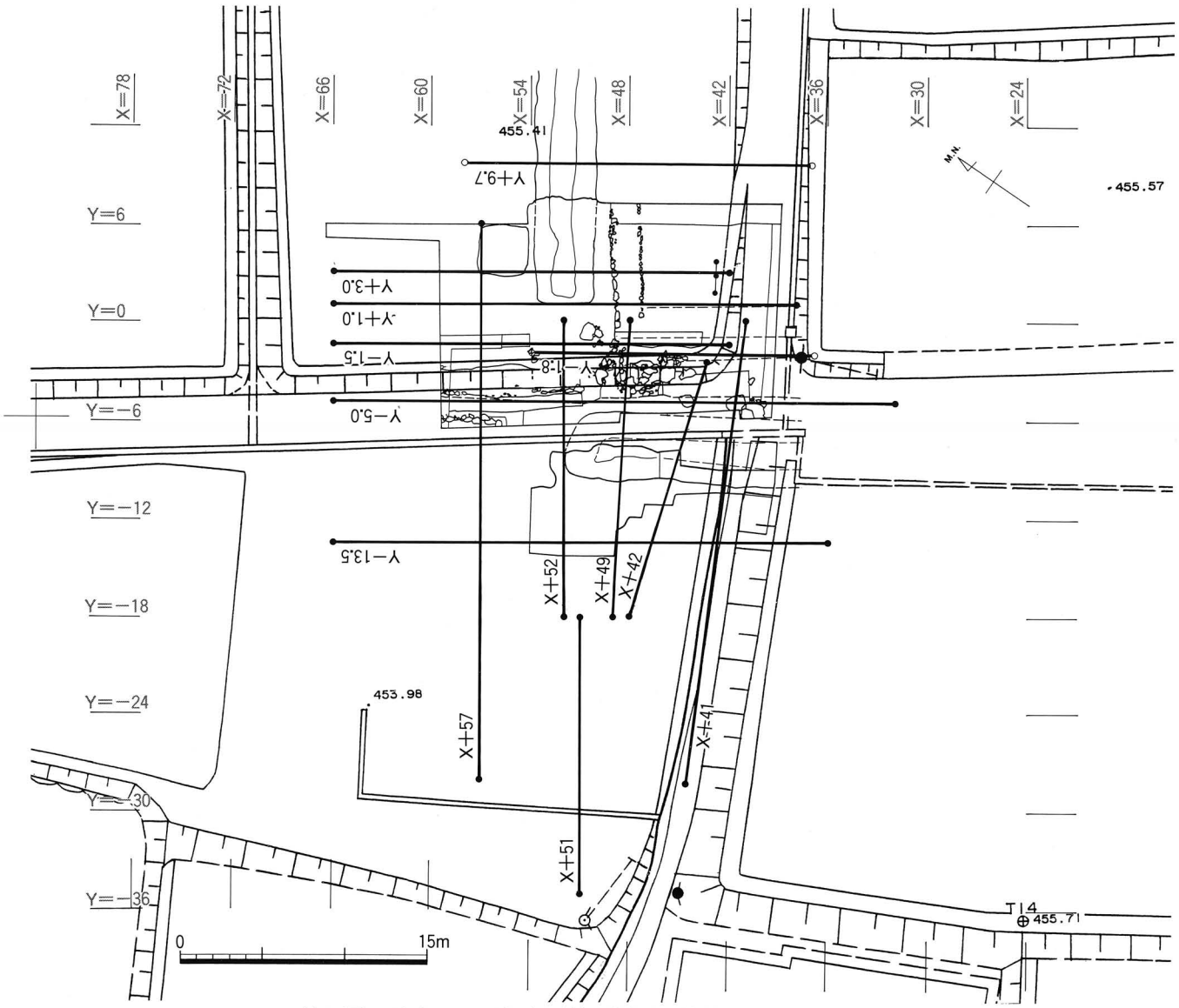
アンテナ周波数　220MHz

使用機器　センサーズアンドソフトウエア社　pulseEKKO 1000

第11表　地中レーダ探査測線一覧表

探査測線	測線長(ｍ)	始点座標		終点座標	
		X	Y	X	Y
Y＋ 3.0	24.0	42.0	3.0	66.0	3.0
Y＋ 1.0	24.0	38.0	1.0	66.0	1.0
Y－ 1.5	17.0	42.0	－ 1.5	66.0	－ 1.5
Y－ 5.0	34.4	32.0	－ 5.0	66.0	－ 5.0
Y－13.5	30.0	36.0	－13.5	66.0	－13.5
X＋41	30.0	41.0	0.0	43.0	－28.0
X＋42	13.4	48.0	－18.0	43.4	2.5
X＋49	24.3	49.0	－18.0	48.0	0.0
X＋51	16.1	51.0	－ 3.5	51.0	－18.0
X＋52	18.1	52.0	－18.0	52.0	0.0
X＋57	32.9	57.0	－28.0	57.0	6.0

11測線　延べ264.2ｍ



第32図　地中レーダ探査測線配置図　縮尺１/400
（実線は探査時の地形。薄刷は発掘調査により検出された遺構概略図。）

3　電気探査による比抵抗マッピングの解釈と発掘調査の結果との比較

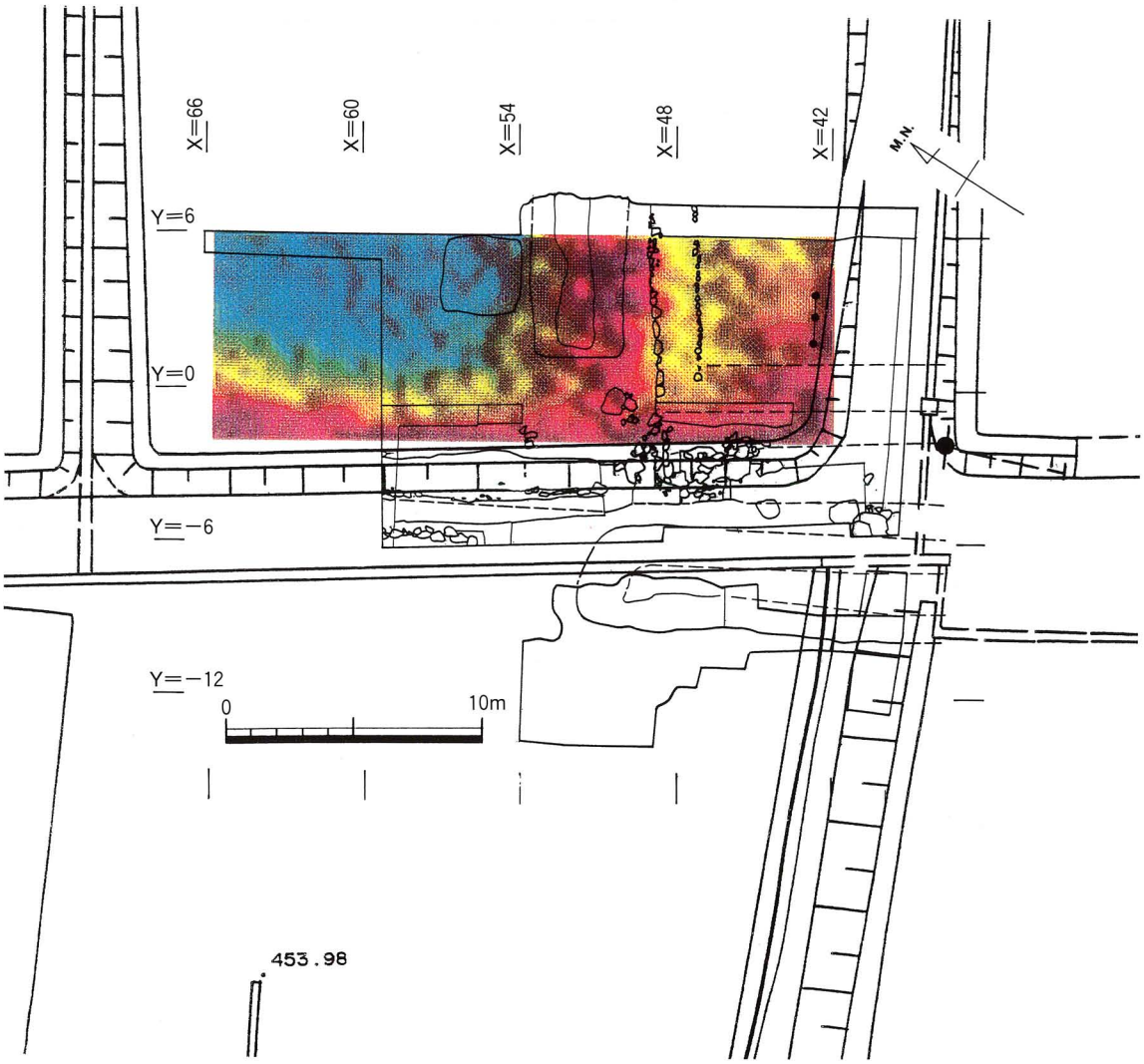
比抵抗マッピングは，地表面からの深さ約１ｍ深さ１㎡当たり４点の高密度で測定した。比抵抗の数値は，絵画的イメージによるカラー濃淡で表現した。赤色の濃いものほど高比抵抗で，青色の濃いものほど低比抵抗である。

	電気探査による推定 （以前の発掘調査結果との照合）	発掘調査後の結果
北堀を挟んで北側	低比抵抗領域。水分の多い細粒土であろう。	旧耕作土が厚く分布していた。
北堀	高比抵抗領域。比較的固く乾燥した遺構面であると検証された。以前の発掘時に，乾いた土で埋め戻されたことも影響しているだろう。	過去の調査で地山（＊）まで掘っていた。
北堀南	黄色の比抵抗帯。築地塀の基底部の範囲にほぼ対応する。	築地塀の基底部の範囲を示していると考えられる。
北堀を挟んで南側	高比抵抗領域。乾燥した土か，あるいはレキ等を含む人工的に固められた土であろう。	Ａ・Ｂ期遺構面構築土層（＊＊）に対応する。
北西の黄色い帯状異常	人工的な構造物によるものなのか，田圃の畦による影響なのか疑問が残る。	特に構造物はなかった。田圃の畦による影響と考えたい。
西側縁	高比抵抗領域。	北堀周辺も含め，過去に地山まで調査のために掘削していた。近現代の耕地化の際に，用水路を作る等の撹乱が入った範囲ともほぼ対応。

＊）　地山：この一帯の地盤を構成する層。門前地区，南辺地区，南堀延長部周辺では，この層の上面で柱穴等の遺構を確認している。
＊＊）Ａ・Ｂ期遺構面構築土層：堀内地区の礎石建物を建てる際の整地土層。

4　地中レーダ探査プロファイルの解釈と，発掘調査の結果との比較

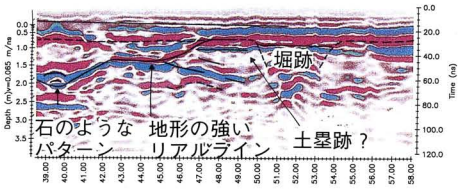
地中レーダ探査とは次のような原理である。地表の送信アンテナから電磁波を放射すると，地下の地層や遺構の境界面で反射して，地表の受信アンテナに到達する。送受信アンテナを移動しながら測定することでプロファイルを表示させ，波形の変化や異常から地下の遺構や地層を推定する，というものである。解釈には94年４月に行ったＹ＋9.7およびＹ－1.8プロファイルを参考にした。なお，プロファイルＹラインは南から北に，Ｘラインは東から西に向かって表示した。



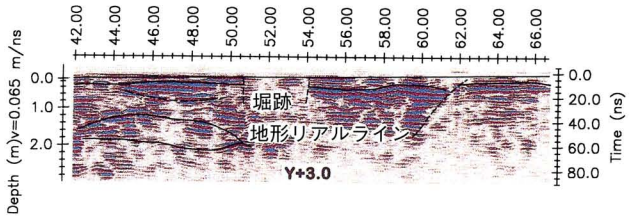
第33図　電気探査比抵抗マッピング図　縮尺１/300

探査測線	地中レーダ探査の結果および構造の推定	発掘調査後の結果(左欄の下線部に関して)
Y＋9.7	pulse EKKO 4，200MHzのアンテナで測定したプロファイル。分解能が異なるがここにも堀跡と南側の異常が現れた。かなり明瞭な地形リアルラインと，39.5m付近に石のようなパターンが見られた。特に47～50mのリアルラインから，土塁の存在が推定される。	「築地塀が良く保存されている」または「館北西隅部では築地塀だが，東方では土塁であった」という可能性が考えられるが，未調査のため，明らかではない。
Y＋3.0	北堀跡の位置では，1994年度調査時に表土部を掘り起こしているため，波形を消したような明瞭なリアルラインの異常が見られた。 堀の南側，深さ1.2m付近にも地形の弧を画いたリアルラインが認められた。	地山の地形リアルラインを現していると考える。
Y＋1.0	このプロファイルにも北堀跡とその南側に地形リアルラインが見られる。	上層のものがA・B期遺構面に，下層のものが地山に反応していると考える。
Y－1.5	このプロファイルも発掘跡とその南に地形リアルラインが見られる。	上層のものがA・B期遺構面に，下層のものが地山に反応していると考える。
Y－1.8 (参考資料)	52mに石等によく見られる強い異常パターンがある。北堀の延長中心線上にあり，北堀跡は存在しないことが報告されているため興味深い。 44m付近の地形リアルラインは，土塁の位置と近いことから関連した遺構を反映しているのかもしれない。	SX38（築地塀の基底部石列を崩したもの）に反応したとも考えられる。 何に反応したかは不明。7トレンチ(1976・77年度調査トレンチ)の両辺に接しており，埋土の違いを反映した可能性もある。
Y－5.0	42～47mに水平波形が減衰する部分がある。土質が変化していると推定され，水分の多い細粒土と考えられる。	1976・77年度調査トレンチ埋め戻し土(田の耕作土)に反応した可能性あり。
Y－13.5	37～42m間にも波形の減衰した部分がある。	田の畦の部分にあたり，畦土に影響されていると考える。
X＋49	－12～－5m間に異常な縦方向の曲線で区切られたパターンを記録した。明確に堀跡とは推定できないが異常部分ではある。	－5～－9.5は西堀，－9.5～－12.0は立ち木の根による撹乱であろう。
X＋42	－12～－6m間にも同様のパターンが見られた。	コンクリート側溝による撹乱の可能性あり。 －2.5～－8.5間が西堀による異常と考える。
X＋41	－12～－6m間にも同様のパターンが見られた。	地形のリアルラインに続く落ち込み部分が堀に反応しているのか。

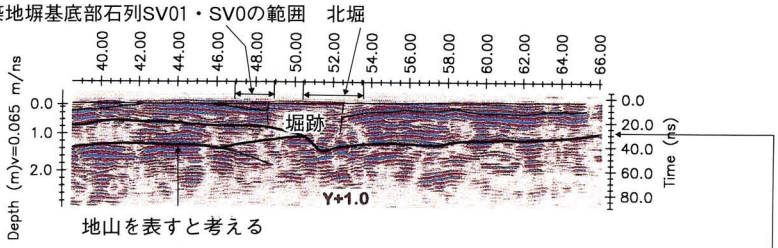
測線Y＋9.7



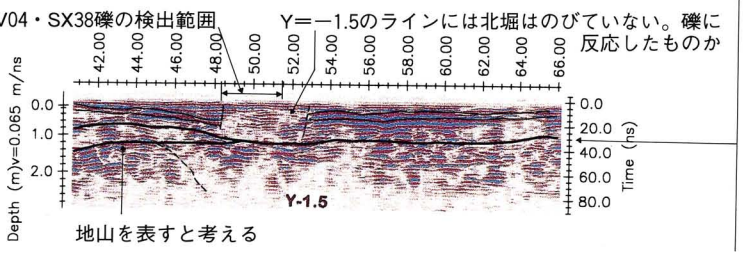
測線Y＋3.0



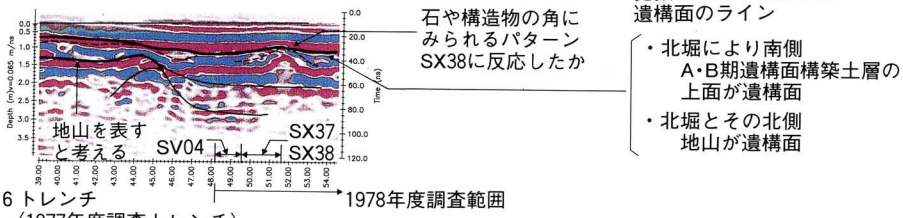
測線Y＋1.0



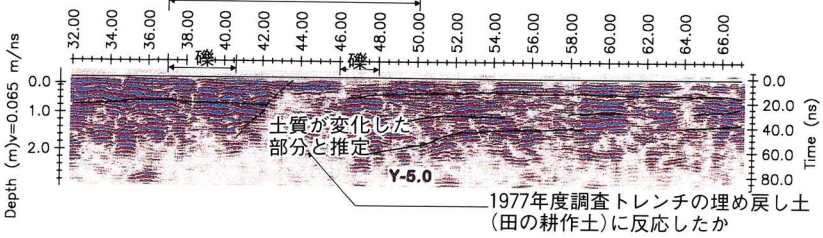
測線Y－1.5



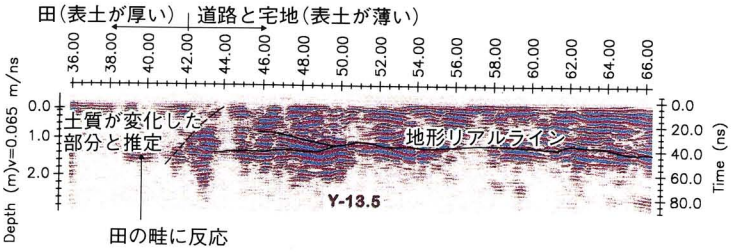
測線Y－1.8



測線Y－5.0

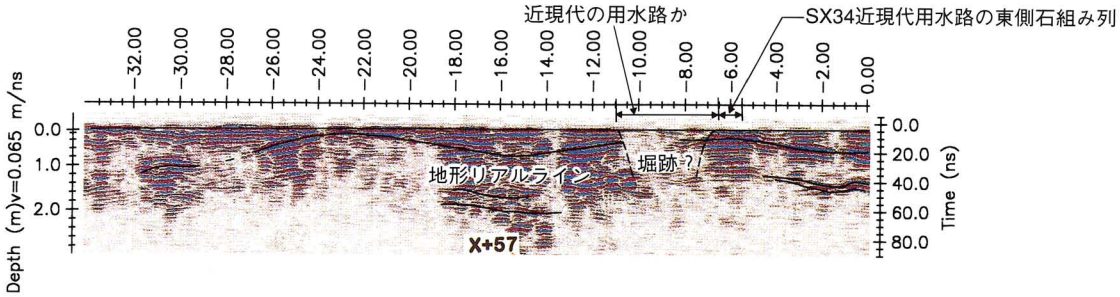


測線Y－13.5

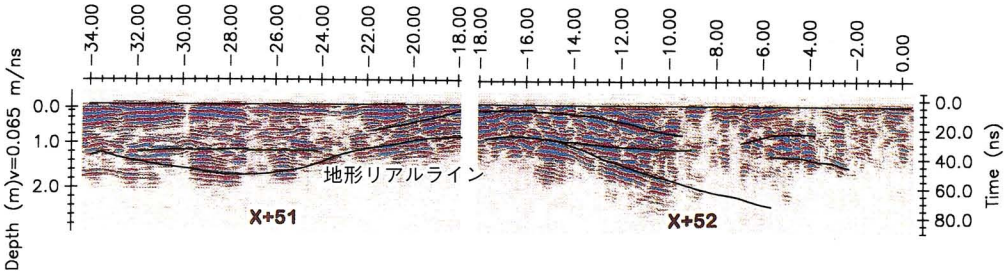


第34図　Y軸における地中レーダ探査の結果

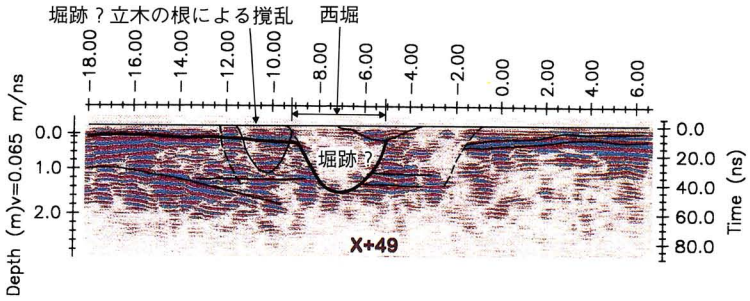
測線X＋57



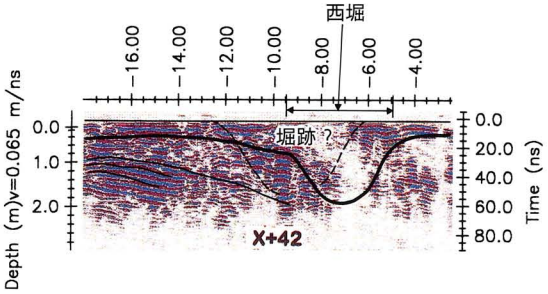
測線X＋51,＋52



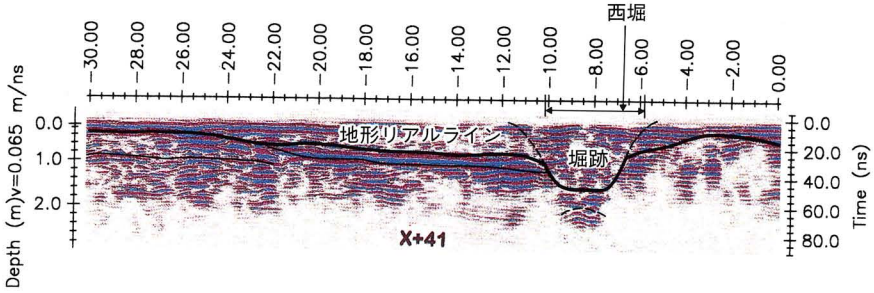
測線X＋49



測線X＋42



測線X＋41



第35図　X軸における地中レーダ探査の結果

5 まとめ

今回の探査に応用した電気探査比抵抗マッピングでは，電極間隔１ｍを用いたため従来よりも明瞭な遺構の形状を捕らえることができた。築地塀の基底部や表層部掘削(撹乱)の跡等，発掘の結果ともよく対応しており，調査の際の有効な情報を得る手段となり得るであろう。

地中レーダ探査は，解像度の高い機種に変えて行った。前回のリアルラインやパターンよりは複雑に見えるが，詳細な変化点や異常面の波形を読みとることができた。地中レーダ探査でも地形はよく現れているものと考えられる。

- 緩やかな弧を画く弱いリアルラインを読みとれた。
  - ➡上のラインはＡ・Ｂ期遺構面構築土層（整地土層）に，下のラインは地山にほぼ対応した。このリアルラインは，その地形を表していると考えられる。
- 北堀に平行する土塁を示唆するようなリアルラインを読みとることはできなかった（前回のＹ＋9.7測線では読みとれていた)。
  - ➡築地塀の残りが良かったのか，又は，北西隅部は築地塀で土塁そのものは無く，東の方だけが土塁だったという可能性がある。
- Ｘ測線では，西堀跡の延長上に５測線とも異常パターンがみられ，堀跡と推定された。
  - ➡ 測線Ｘ＋57は近現代の用水路の可能性，測線Ｘ＋52は西堀の端にかろうじて接する程度であるが影響を受けた可能性がある。

なお，今後の探査には，西堀延長線部分の電気探査比抵抗マッピングを行うこと，および200・225MHzの複数のアンテナで測定し比較検討することを提案したい。

2　1999年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡における地中レーダ探査

富山大学理学部地球科学科　酒井　英男・中埜　貴元
㈱村尾地研　笹井　隆・新谷　崇
神岡町教育委員会　大平　愛子

1　はじめに

電磁気の手法による地下遺構の探査は，種々の手法が試行されている（Clark，1990）。探査手法を開発し改善するためには，遺構の種類や保存状態と探査の有効性を検討しながら研究を進めることが望まれ，それには発掘結果との比較検討を重視した研究が必要である。本稿では，岐阜県神岡町江馬氏下館跡において神岡町教育委員会による発掘調査の前に行った地中レーダ探査の結果を報告する。

江馬氏城館跡下館跡は，岐阜県吉城郡神岡町の神通川水系高原川の中流右岸の殿段丘上に位置する中世豪族江馬氏の館跡である。この地点は，飛騨と越中を結ぶ越中街道と，越中と信州・鎌倉を結ぶ鎌倉（信州）街道とを結ぶ脇街道である上宝道が通過し，高原川の水運によっても，飛騨と越中・信州方面とを結ぶ交通の要衝であった。「山科家文書」などから江馬氏が支配していたと伝えられ，14世紀末には室町幕府の認める有力在地勢力として活躍した。1976～1978年にかけて神岡町教育委員会による試掘調査が実施され，庭園跡や南・西の堀跡，建物跡などが確認された。1994年からは，歴史公園として復元整備するための発掘調査が行われている。

2　探査の目的と概要

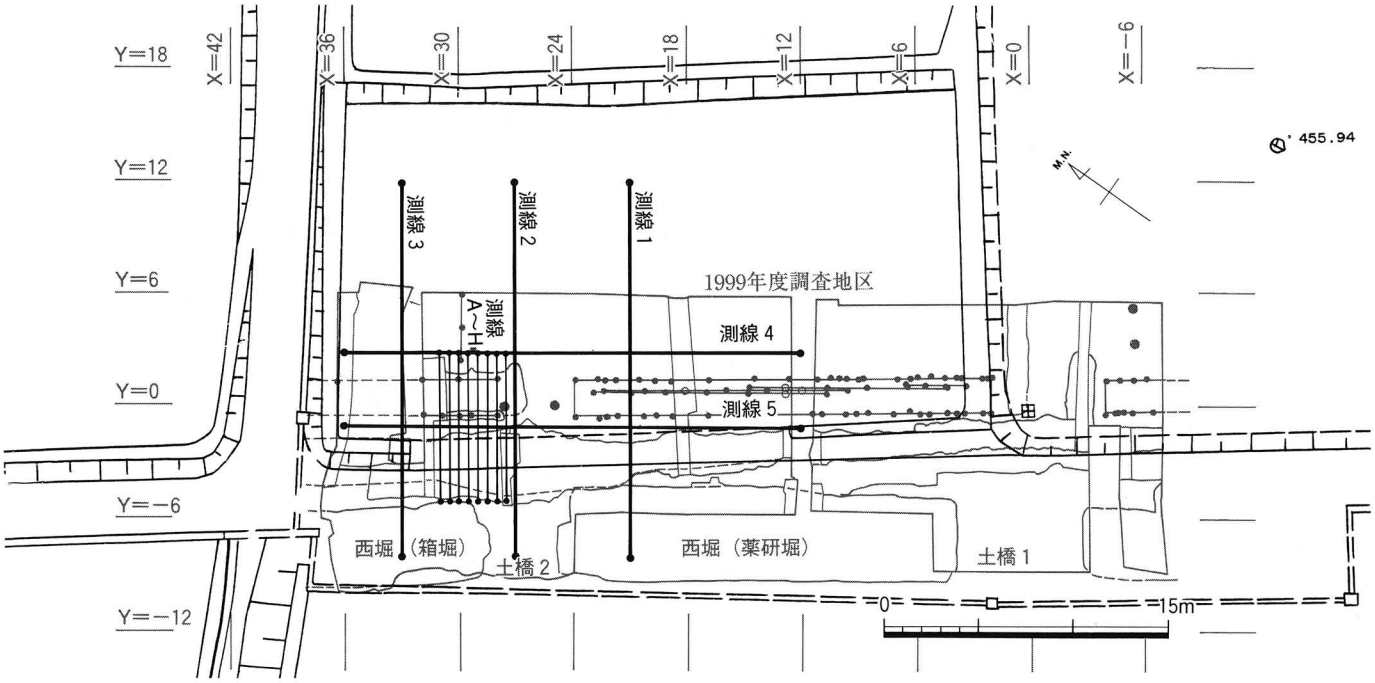
1999年度の調査目的は，館正面出入り口にあたる西堀に伴う区画施設と門の遺構の確認であった。地中レーダ探査では，前年度の発掘調査で館跡北西隅で確認された築地塀の基礎がどこまで存在するかを調べ，それが西堀に伴うものかを発掘前に推定することにあった。

探査測線の位置を第36図に示す。同図の測線１～３（測線長20.0ｍ）はそれぞれ平行であり，測線４・５（測線長21.0ｍ）はそれらと直交する。また，測線A～H（測線長8.0ｍ）は測線１～３と平行で，それぞれの間隔は0.5ｍである。地中レーダ探査装置はpulseEKKO1000型を使用した。測線１～５では，周波数225MHzおよび900MHz，測線A～Hでは900MHzのアンテナを用いて，測点間隔を0.1ｍとして探査を行った。また，電磁波の伝播速度の推定法であるCMP探査を行った結果，レーダ波の伝播速度は約0.08ｍ/nsと求められたため，この値を探査結果の深度解析に使用した。

3　探査結果と発掘結果の比較

測線１～５の探査結果を第37・38図に載せているが，目的としていた築地塀の基礎の高まりは検出されていなかった。発掘調査の結果，築地塀の基礎部分は近世の耕地化の際に削平されており，地中レーダで反応が認められなかったのは妥当な結果と言える。

しかし測線A～Hにおいて，発掘結果と比較検討したところ，探査結果は，館造成時の基盤層である「下館基盤土層」を捉えていることがわかった。第39図は，発掘調査地区の概略と測線配置図，および，発掘調査の断面図を示し，第40図に探査結果を載せている。同図の測線A～Hの探査結果において，縦軸は深さ（反射時間）を，横軸は水平距離（始点が０ｍ）を表示している。断面図のＹ＝３



第36図　探査測線配置図　縮尺１/400
（実線は探査時の地形。薄刷は発掘調査により検出された遺構概略図。）

地点が探査結果の始点（水平距離０ｍ地点）に，断面図のＹ＝－５地点が探査結果の終点（水平距離８ｍ地点）に対応する。断面図との比較から，探査結果の反応の下縁（図中の実線）が「下館基盤土層」の上面に良く対応していることがわかる。測線Ａ～Ｅでは，始点から1.9～3.3ｍ間で，探査結果の反応の下限ラインが窪んでいる。この範囲は，築地塀基礎地業の平面検出範囲に対応しており，この窪みが築地塀基礎地業による掘り込みの形を示しているものと考えられる。測線Ｆ～Ｈでは，このような窪みは観察できないが，これは基礎地業の掘り込みが浅いことを示しているのではないかと推定したい。

第41図では，測線A～Hにおいて，探査結果の反応から柱穴の存在が示唆される位置を発掘調査図上にマークした。当初，これらのマーク地点と，断面図における「柵列の布掘り溝SD21」との対応に着目したが，実際には，溝SD21とは対応せず，むしろ，これらのマーク地点と，「柱穴SP190・191・195」とが対応することがわかった。測線C上には柱穴SP195が存在し，測線GはSP191柱穴，測線HはSP190柱穴と対応付けられる。いずれの柱穴も現地表面から－120cmであり，同深度は探査結果とも一致する。

測線BとDにも，上述の測線と同様な柱穴を示唆する反応がある。発掘調査で掘り下げを行っていない地域であるが，同地点の深部に柱穴が存在する可能性がある。一方，測線Ｃ上にはSP145が，測線Ｇ上にはSP192・193が位置するが，これらはレーダ探査では捉えられていない。また，測線A，E，F上には穴を示唆する反応は無い。

溝SD21が探査で上手くとらえられなかった理由としては，溝SD21の東側の肩部（掘り込みの上部）が築地塀基礎地業部の埋土を掘り込んでおり，SD21埋土と築地塀基礎地業部埋土では土質の差が顕著ではないこと，溝SD21の深さが10～15cmと浅いうえに，その溝内に「下館基盤土層」を掘り込む深い柱穴SP191・SP195（深さ約60cm）が重複していたため，これらの柱穴に強く反応し，浅い溝に対する反応が読みとりにくくなったものと考えられる。SP145・192・193も，築地塀基礎地業埋土を掘り込む柱穴であり，柱穴埋土と基礎地業部埋土との土質の差が顕著ではなく，これらの柱穴の掘り

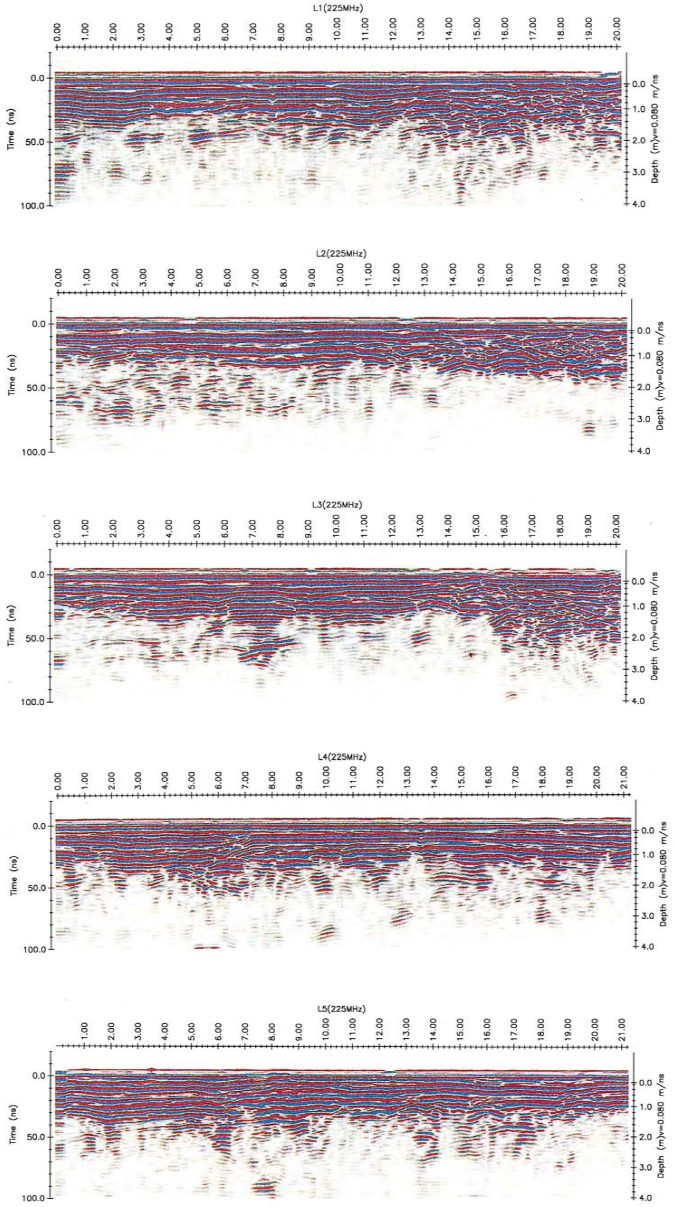
測線 1

測線 2

測線 3

測線 4

測線 5



第37図　測線１～５の225MHzアンテナでの探査結果

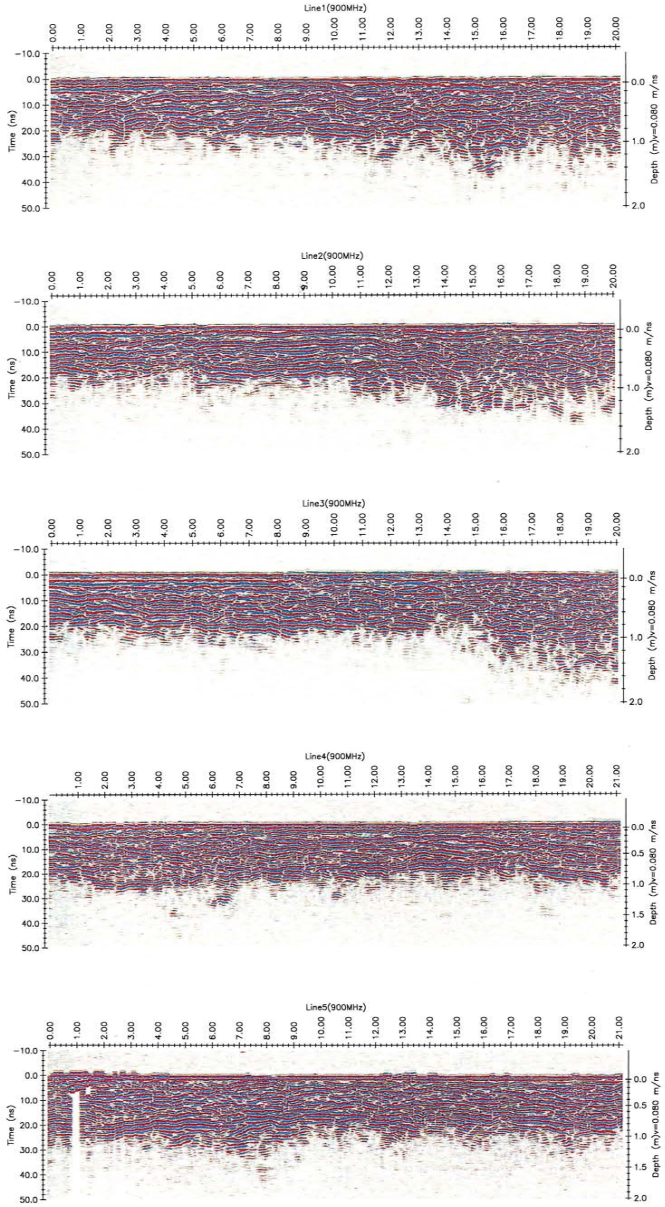
測線 1

測線 2

測線 3

測線 4

測線 5



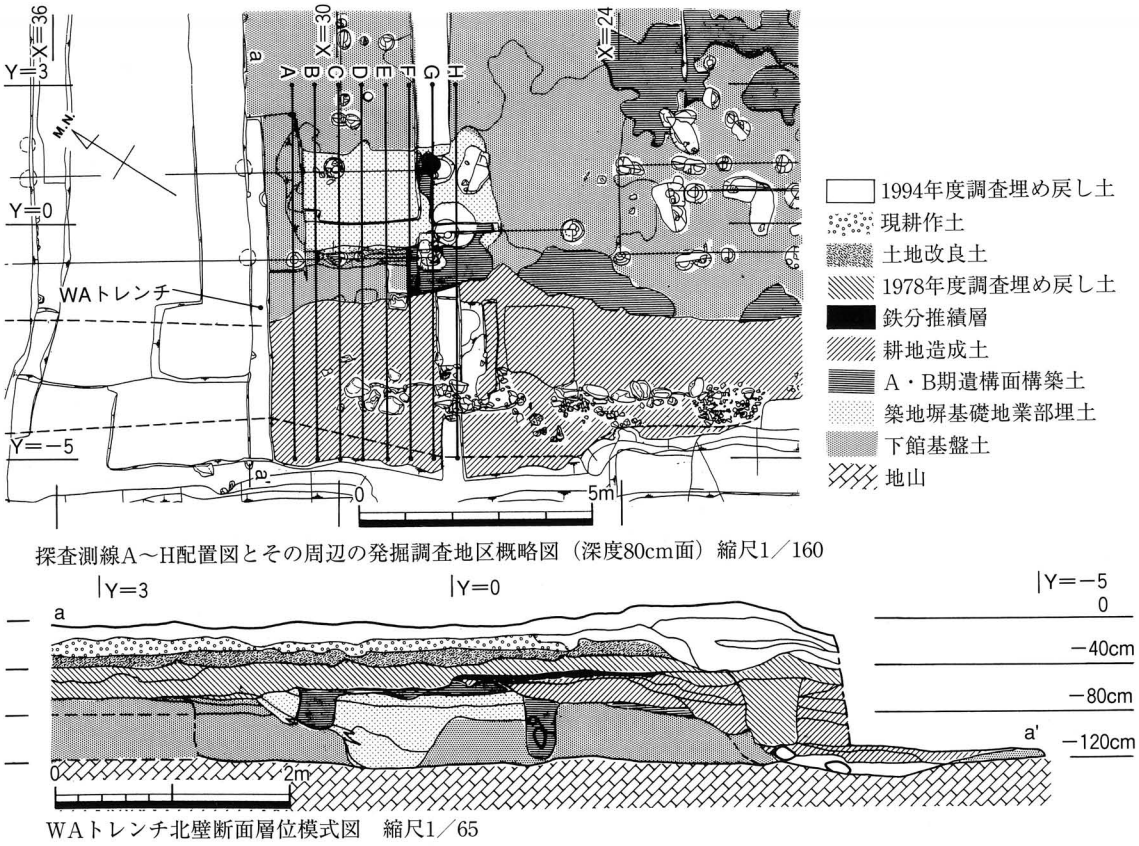
第38図　測線１～５の900MHzアンテナでの探査結果

込みが「下館基盤土層」まで達していなかったため，反応が読みとれなかったものと考えられる。

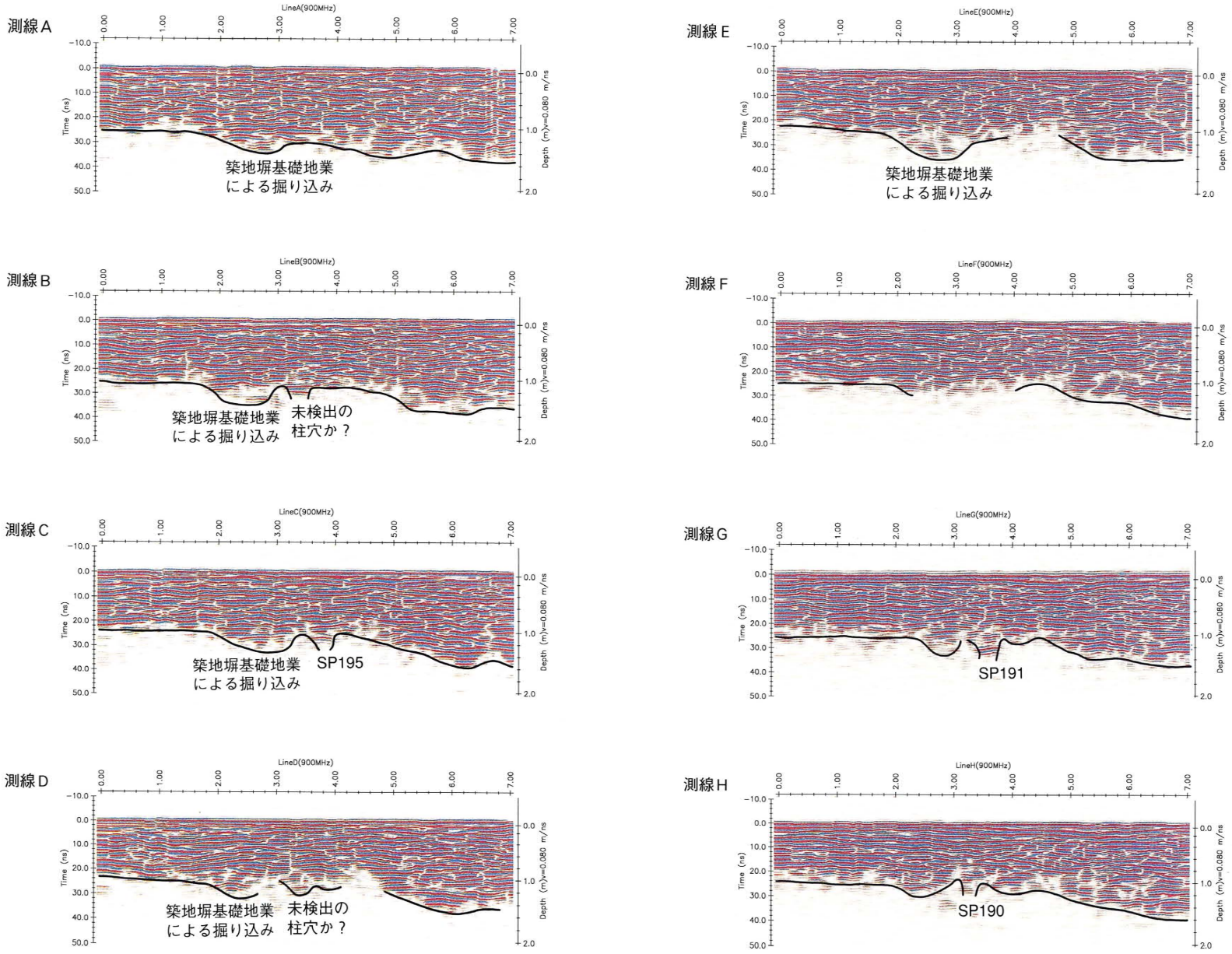
4 まとめ

当初の探査対象であった築地塀の基礎部分は削平されており，探査との対比はできなかった。しかし，発掘結果との検討から，地中レーダ探査は館造成時の基盤層である「下館基盤土層」を明確に捉えていたことが明らかになった。

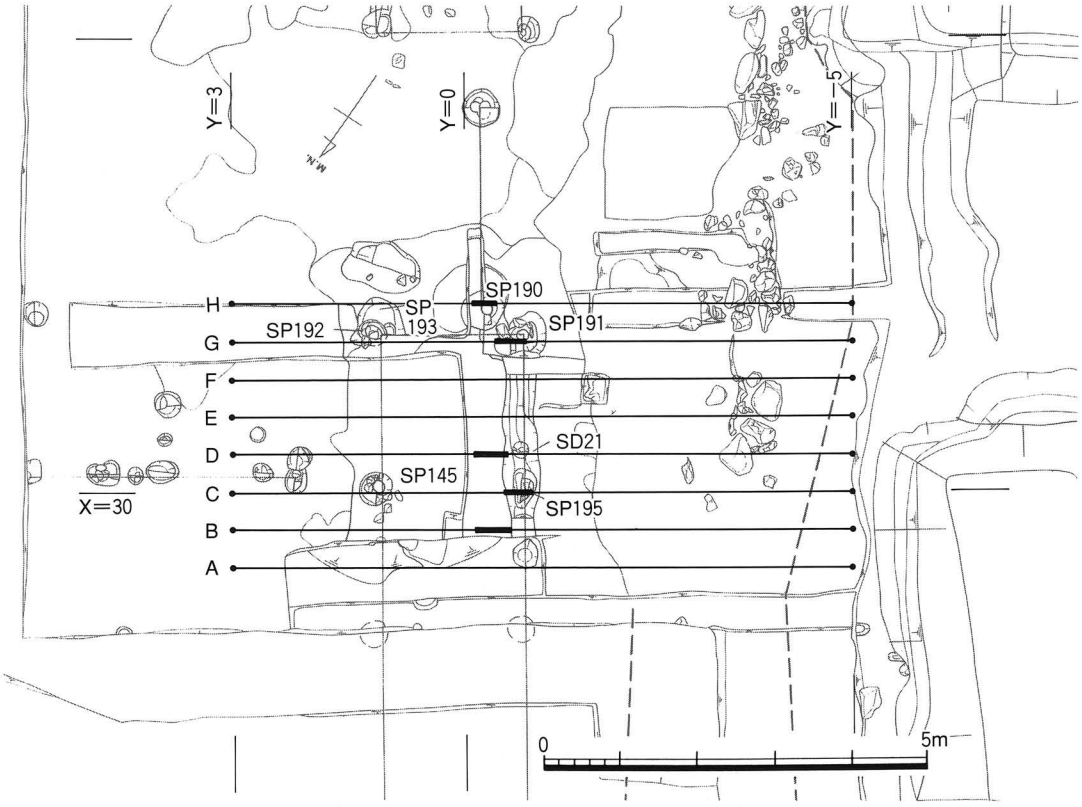
また，今回の地中レーダ探査において，周波数900MHzのアンテナを用いたところ，柱穴を明確に捉えていることが判明した。従来より分解能が高い探査であったため，平面形が直径30㎝前後の円形の柱穴のような規模が小さな遺構も良く捉えたものと考える。さらに高周波数の1200MHZアンテナを利用すれば，今回は反応が微妙だったSD21のような現地表面からの検出深度60㎝前後，深さ10～20cmの遺構の掘り込み部も捉えられるものと考える。



第39図　探査測線A～H配置図とその周辺の発掘調査地区概略図及びWAトレンチ北壁断面層位模式図



第40図　測線Ａ～Ｈの900MHzアンテナでの探査結果
図中の実線が「下館基盤土層」の上面に対応している
（水平距離3.0ｍが第39図の断面図中のＹ＝０に対応）



第41図　探査結果から推定される柱穴位置と発掘調査結果との対応　縮尺1/100

加えて，今後の探査のために，「下館基盤土層」を構成する土壌と直上層の構成土壌を発掘現場で採取し，比誘電率を実験室で測定した。予察的な結果では，両層の比誘電率は有意に異なっており，誘電率データから探査結果は良く解釈できた。

これまで，遺跡において，高周波数による探査を行った例は無かったが，今回の調査によって，小型の遺構を確認する手段となる可能性が示せたことは大きな成果と考える。地中レーダ探査が，堀跡のような大型の遺構の把握に有用であることは，これまでの探査成果で明らかになっているが，高周波数のレーダ探査も併用することで，掘削前にさらに多くの地中遺構の情報を得ることが出来ると考える。さらにその際，簡易掘削で土壌試料を採取して比誘電率の測定を併用することにより，より詳細な非破壊での地下探査の新たな手段となると考えられる。

参考文献

Clark A. (1990): Seeing beneath the soil — prospecting methods in archaeology —, B. T. Blatsford Ltd, London, pp176.

3　1997年度岐阜県神岡町江馬氏下館跡出土カラミの組成分析結果報告

神岡鉱業株式会社　保安環境課　分析係　　松倉　大作

1　緒　　言

神岡町教育委員会の依頼により，神岡町大字殿に所在する江馬氏下館跡1997年度発掘調査において出土したカラミ状物質３種類について，Ｘ線回折法による組成解析ならびに蛍光Ｘ線分析法による含有物質の定性分析，高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法による主要含有物質及び貴金属の定量分析を行い，組成推定を行った。

その結果，カラミ状物質３種類とも，組成比率の差異はあれど鉄系及びケイ素系酸化物のカラミと推定され，かつ金，銀の貴金属はほとんど含有していないことが判明した。

2　分析試料

分析を行ったカラミ状物質は，以下の３点である。

１）試料　No.751：　比較的表面酸化が少なく，かつ密度の高いカラミ状物質
　　発掘調査遺物番号No.751，柱穴SP680出土

２）試料　No.752：　３種の中ではもっとも密度が低く，泡沫状かつガラス様溶融物
　　発掘調査遺物番号No.752，柱穴SP424出土

３）試料　No.754：　表面及び内部的にも酸化の進行がみられるカラミ状物質
　　発掘調査遺物番号No.754，柱穴SP491出土

3　試料調整方法

各資料の１/３～１/２をハンマーにて約10㎜以下の塊状に欠き取った後，超鋼性振動ミルにて約0.15㎜以下になるまで粉砕した。各粉砕試料を105℃で８時間以上乾燥したものを以下の解析及び分析用試料とした。

4　解析ならびに分析方法

(a)　Ｘ線回折法（以下，XRD法と記す）

結晶性の固体粉末に固有Ｘ線を照射すると，その散乱によって各結晶固体に固有のＸ線回折図形（回折強度と回折角の関係）が得られる。このＸ線回折図形から試料の同定や結晶構造の解析を行う方法。ただし，一般的に同定に関しては感度が鈍く，数％～数十％以上含有されていなければ検出されないこともある。特に鉄系化合物に関してはBackground noise散乱が大きく，正確な同定は難しい。更に非晶質化合物は同定出来ない。

今回の測定条件：　Ｘ線管球：Cu（1.54060Å）40KV 30ｍA
　　測定範囲（２θ）：10.000～80.000度　Step幅：0.020度
　　計数時間：0.6秒

(b)　蛍光Ｘ線分析法（以下，XRF法と記す）

固体試料に連続Ｘ線を照射し，そこから発生する２次Ｘ線（蛍光Ｘ線）を測定。２次Ｘ線は元素毎

に固有の波長を有し，その波長位置より含有元素の定性を，X線強度より定量を行う方法。指定された元素の合計X線強度より半定量を，もしくは酸化物換算による半定量も可能。一般的に含有量１％未満は検出感度が悪く，且つ原子番号の小さい軽元素は原子番号の大きい重元素よりX線強度が弱いため検出能力に劣り，含有量としては低く定量される恐れがある。

今回の測定条件：　X線管球：RhKα(0.6147Å)，Kβ(0.5456Å) 50KV 50mA
スキャンスピード：
半定量条件：ファンダメンタルパラメーター(FP)法

(c) 高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法（以下，ICP-AES法と記す）

試料を酸にて溶解後，溶液試料を高温のアルゴンプラズマ中へ噴霧すると発光する。各元素固有の発光強度を測定することで試料溶液中の金属元素含有量を定量する方法。希釈倍率にもよるが，一般的に数十％から数ppmオーダーまでの他元素同時定量が可能。

今回の測定条件：　マルチタイプICP-AES
(Al，Fe，Na，K，Caのみ定量)

(d) Siの定量方法

本来であれば，試料中の酸可溶性成分を溶解し，残った不溶解固形分(A)中のSiをフッ酸溶解して残る残渣分(B：カーボン等)を差し引き(A－B)して定量する。しかし過去の経験からも鉱物及びカラミ状物質中のフッ酸溶解残分は１％未満と少ない。かつ今回の試料はオーダー的に0.5～１％以下のバラツキ・偏差は許容できると考えた。従って今回のSiの定量は簡便的に酸不溶解固形分を求めることとした。場合によっては新値より１％弱高い定量となっている恐れがある。

5　XRD法による解析結果

第42図に各資料のXRDチャート及び固定結果を示す。試料No.751とNo.754はBackground noise及び検出ピークのレベルからもほぼ同様のFeO系組成物と推定できる。しかし検出ピーク強度比から，両者は全くの同一組成含有物とは言えない。基準カードデータとの整合検索結果より，試料No.751はFeO主成分の他Fe_2SiO_4，試料No.754はFeO成分の他$FeFe_2O_4$(Fe_3O_4)及びFe_2SiO_4が多量含有されていると考えられる。

一方，試料No.752は鉄に起因するBackground noiseも比較的低く，明瞭なSiO_2ピークが検出された。他には若干ながらFeO及びFe_2SiO_4も認められた。

３試料とも純鉄(Fe)のピークは検出されなかった。以上の同定結果をまとめると第12表のとおりになる。

6　XRF法による解析結果

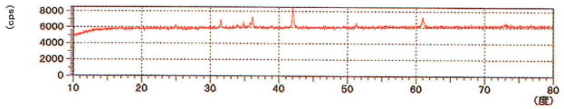
第13表に各試料のXRF法での測定スペクトル強度，第14表に各試料の酸化学換算XRF法での半定量結果を示す。あらかじめ，全スペクトル位置による定性を実施し，その結果検出された成分についてのみファンダメンタルパラメーター法にて半定量を実施した。

試料No.751はFeが主成分の他Si，Al，Ca，K，Znの存在が確認された。試料No.752もほぼ同等の内容であったがSi, Al, については試料No.751より１～２％程度高いように観察される。試料No.752は他の試料と違いSiが主成分で次いでFe，この２元素より低含有量であるがAl，K，Caの順に存在している事が確認された。

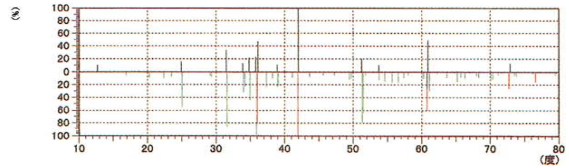
３試料ともZn，Pb，Cu等重金属類は１～２％未満と推定される。

試料No.751

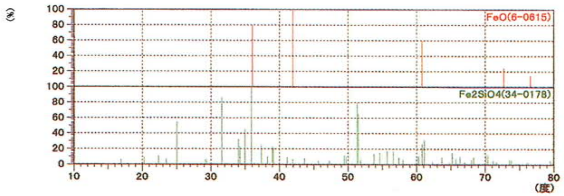
<生データ>



<ピーク データ/登録 データ>



<カード データ>

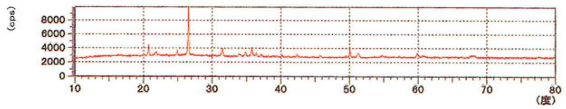


<登録 カード>

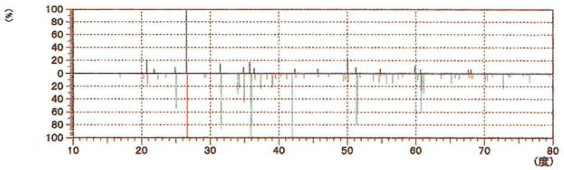
番号	カード	化学式 / 化合物名	S	L	d	I	R
1	6-0615	FeO Iron Oxide (WVPIustite, syn)	0.789	0.800(4/ 8)	0.778	------	0.623
2	34-0178	Fe2SiO4 Iron Silicate (Fayalite, syn)	0.391	0.161(10/83)	0.816	------	0.132

試料No.752

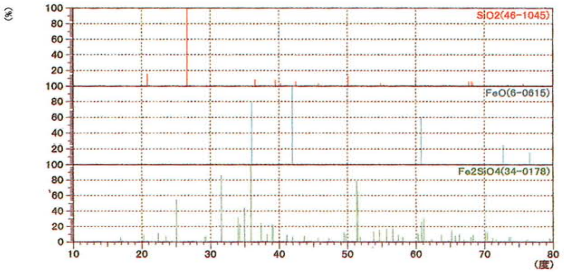
<生データ>



<ピーク データ/登録 データ>



<カード データ>

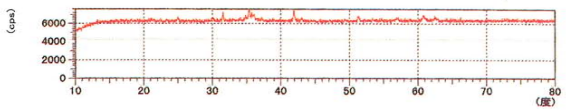


<登録 カード>

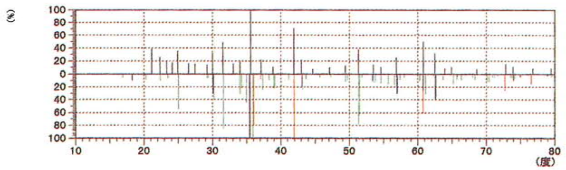
番号	カード	化学式 / 化合物名	S	L	d	I	R
1	46-1045	SiO2 Silicon Oxide (Quartz, syn)	0.989	0.455(10/58)	0.776	------	0.353
2	6-0615	FeO Iron Oxide (WVPIustite, syn)	0.129	0.600(3/ 8)	0.463	------	0.278
3	34-0178	Fe2SiO4 Iron Silicate (Fayalite, syn)	0.267	0.210(13/83)	0.605	------	0.127

試料No.754

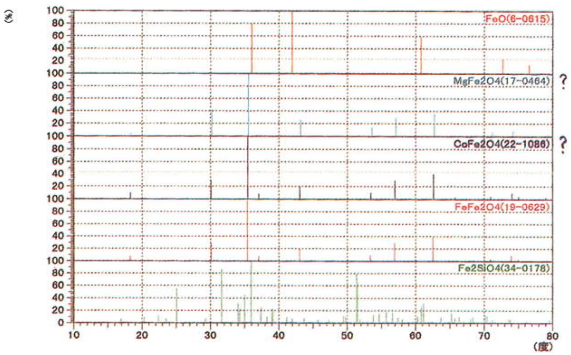
<生データ>



<ピーク データ/登録 データ>



<カード データ>



<登録 カード>

番号	カード	化学式 / 化合物名	S	L	d	I	R
1	6-0615	FeO Iron Oxide (WVPIustite, syn)	0.804	1.000(5/ 8)	0.671	------	0.671
2	17-0464	MgFe2O4 Magnesium Iron Oxide (Magnesioferrite, ordered,)	0.930	0.818(9/22)	0.677	------	0.554
3	22-1086	CoFe2O4 Cobalt Iron Oxide	0.952	0.714(10/30)	0.756	------	0.540
4	19-0629	FeFe2O4 Iron Oxide (Magnetite, syn)	0.952	0.615(8/26)	0.849	------	0.522
5	34-0178	Fe2SiO4 Iron Silicate (Fayalite, syn)	0.767	0.371(23/83)	0.738	------	0.274

第42図　試料No.751・No.752・No.754のXRDチャート及び同定結果

第12表　XRD 同定結果

	No.751	No.752	No.754
FeO	◎	△	○
Fe_2SiO_4	○	△	○
SiO_2	△	◎	△
$FeFe_2O_4$	?	?	○

注：◎－主成分（相対的にみて50％以上）
　　○－主成分に次いで多く含有（相対的にみて数10％程度）
　　△－○ほどではないが存在の可能性あり
　　？－不明

第13表　XRF 法での半定量結果

	No.751			No.752			No.754		
	I(kcps)	I/ΣI	Io/ΣIo	I(kcps)	I/ΣI	Io/ΣIo	I(kcps)	I/ΣI	Io/ΣIo
Na	0.2	<1%	Tr	0.6	1%	1%	<0.1	Tr	Tr
Mg	0.2	<1%	Tr	0.6	<1%	Tr	0.3	<1%	Tr
Al	9.9	3%	3%	38.6	11%	10%	15.3	4%	4%
Si	29.2	8%	10%	145.7	42%	47%	30.2	8%	10%
P	4.2	1%	<1%	1.7	<1%	Tr	4.3	1%	<1%
S	3.0	1%	<1%	0.9	<1%	Tr	2.9	1%	<1%
Cl	<0.1	Tr	Tr	<0.1	Tr	Tr	1.2	<1%	Tr
K	7.8	2%	<1%	28.3	8%	4%	7.0	2%	<1%
Ca	8.2	2%	<1%	16.7	5%	2%	8.8	2%	<1%
Ti	<0.1	Tr	Tr	0.6	<1%	Tr	0.7	<1%	Tr
Cr	0.2	<1%	Tr	0.3	<1%	Tr	0.3	<1%	Tr
Mn	1.1	<1%	Tr	1.7	<1%	Tr	1.2	<1%	Tr
Fe	295.9	80%	84%	106.0	31%	33%	290.1	80%	82%
Cu	0.1	Tr	Tr	<0.1	Tr	Tr	<0.1	Tr	Tr
Zn	7.7	2%	<1%	4.0	1%	<1%	2.2	1%	<1%
Pb	0.4	<1%	Tr	<0.1	Tr	Tr	<0.1	Tr	Tr
Total	368.1	99%	97%	345.7	99.1%	97%	364.5	99.0%	96%

注；「Ｉ」各元素スペクトル強度（Kcps; Kiro-count per second）
　「I/ΣI」検出された全スペクトル強度に対する各元素スペクトル強度比（各元素存在比率；％）
　「Io/ΣIo」酸化物換算における各元素存在比率（％）
　但し，「Ｉ」にて0.1Kcps未満の元素は「I/ΣI」にてTr（トレース），「I/ΣI」にて１％未満は「Io/ΣIo」にてもTr（トレース）とした。

第14表　各試料の酸化学換算XRF法での半定量結果

試料No.751　　試料モデル＝酸化物

成　分	定　義	元素コード	スペクトル	強度kcps	含有率WT%
NA_2O		Na00	Na-KA	0.223	0.580
MGO		Mg00	Mg-KA	0.191	0.220
AL_2O_3		Al00	Al-KA	9.919	2.900
SIO_2		Si00	Si-KA	29.193	9.500
P_2O_5		P00	P-KA	4.181	0.440
SO_3		S00	S-KA	3.033	0.400
CL		Cl00	Cl-KA	0.019	Trace
K_2O		K00	K-KA	7.794	0.800
CAO		Ca00	Ca-KA	8.179	0.570
TIO_2		Hv00	Ti-KB1	0.073	0.099
CR_2O_3		Hv00	Cr-KA	0.238	0.015
MNO		Hv00	Mn-KA	1.140	0.058
FE_2O_3		Hv00	Fe-KB1	295.940	84.000
CUO		Hv00	Cu-KB1	0.104	0.034
ZNO		Hv00	Zn-KA	7.657	0.300
SRO		Hv00	Sr-KA	0.652	Trace
PBO		Hv00	Pb-LA	0.388	0.020

試料No.752　　試料モデル＝酸化物

成　分	定　義	元素コード	スペクトル	強度kcps	含有率WT%
NA_2O		Na00	Na-KA	0.555	1.300
MGO		Mg00	Mg-KA	0.577	0.590
AL_2O_3		Al00	Al-KA	38.627	10.000
SIO_2		Si00	Si-KA	145.690	47.000
P_2O_5		P00	P-KA	1.699	0.240
SO_3		S00	S-KA	0.912	0.160
K_2O		K00	K-KA	28.284	4.300
CAO		Ca00	Ca-KA	16.673	1.900
TIO_2		Hv00	Ti-KA	0.653	0.240
CR_2O_3		Hv00	Cr-KA	0.261	0.027
MNO		Hv00	Mn-KA	1.673	0.110
FE_2O_3		Hv00	Fe-KB1	105.980	33.000
ZNO		Hv00	Zn-KA	3.978	0.110
RB_2O		Hv00	Rb-KA	2.000	0.017
SRO		Hv00	Sr-KA	6.210	0.049
ZRO_2		Hv00	Zr-KA	4.330	0.028
BAO		Hv00	Ba-LA	0.143	0.120

試料No.754　　試料モデル＝酸化物

成　分	定　義	元素コード	スペクトル	強度kcps	含有率WT%
NA_2O		Na00	Na-KA	0.091	0.240
MGO		Mg00	Mg-KA	0.308	0.350
AL_2O_3		Al00	Al-KA	15.339	4.400
SIO_2		Si00	Si-KA	30.228	9.900
P_2O_5		P00	P-KA	4.353	0.460
SO_3		S00	S-KA	2.893	0.380
CL		Cl00	Cl-KA	1.211	0.320
K_2O		K00	K-KA	6.987	0.730
CAO		Ca00	Ca-KA	8.859	0.630
TIO_2		Hv00	Ti-KA	0.709	0.160
CR_2O_3		Hv00	Cr-KA	0.260	0.017
MNO		Hv00	Mn-KA	1.249	0.064
FE_2O_3		Hv00	Fe-KB1	290.140	82.000
ZNO		Hv00	Zn-KA	2.167	0.085
SRO		Hv00	Sr-KA	0.873	0.010
ZRO_2		Hv00	Zr-KA	0.913	Trace

7　ICP-AES 法による主成分分析及び乾式試金法による金，銀の分析結果

XRD 法及び XRF 法による解析結果より，各試料の主成分と考えられる元素を ICP-AES 法にて定量した。併せて金，銀の貴金属定量も実施した。結果を第15表に示す。尚，試料No.751及び754の Na，K，Ca は XRF 半定量の結果から１％未満と推定されたため，ICP-AES 定量は行わなかった。

第15表　主成分及び貴金属分析結果

	No.751	No.752	No.754
Al　%	0.95	2.09	2.00
Si　%	4.84	31.10	6.16
Fe　%	65.90	18.50	57.40
Na　%	—	0.48	—
K　%	—	1.38	—
Ca　%	—	1.09	—
Au　ppm	<5	<5	<5
Ag　ppm	<5	<5	<5

8　組成推定

以上の XRD 解析，XRF 解析及び ICP-AES での主要成分の定量結果から，組成推定を行った。方法としては，XRD 解析結果の主要化合物の比率を ICP-AES での主成分定量値に対してもっとも近くなるよう Try and Error にて決定した。組成推定結果を第16表に示す。

第16表　各カラミの組成推定結果

	No.751	No.752	No.754
Al_2O_3	2%	3%	3%
SiO_2	1～2%	62%	6%
Na_2O	<1%	1%	<1%
K_2O	<1%	2%	<1%
CaO	<1%	2%	<1%
FeO	64%	13%	26%
Fe_2SiO_4	32%	15%	35%
$FeFe_2O_4$	<1%	<1%	28%
他	1～2%	1～2%	1～2%
Total	98～102%	99～100%	99～100%

9 結　論

以上のように，カラミ状物質3試料について，XRD法での組成解析，XRF法での半定量及びICP-AES法での主要成分定量を行った結果に基づいて，組成推定を実施した。

その結果，試料No.751は比較的表面酸化が少なくかつ高密度のカラミであり，FeOを約64％程度，Fe_2SiO_4を約32％程度含むFe-Si系カラミであると推定できた。試料No.752は低密度・泡沫状のガラス様溶融物であり，組成的にはSiO_2を約62％程度含むほか，FeOを13％程度，Fe_2SiO_4を15％程度含むシリケートカラミであると推定できた。試料No.754は比較的No.751に近い組成を示し，Fe-Si系カラミと考えられるが，試料No.751よりも酸化状態の進行したFe_3O_4を約29％程度含むカラミと推定できた。

本来であれば，鉱物的見地からの解析と，更に掘り下げた鉄鋼冶金学的な見地からの解析を付加すればより詳細な解析が可能であったかもしれないが，解析者の能力不足及び限られた時間と解析必要性に鑑み，化学的なアプローチにとどまった事は深謝に耐えない。

参考文献（五十音順）

青森県市浦村教育委員会　1996『十三湊遺跡－市浦村第１次・第２次　発掘調査概報－』
網野善彦・石井 進編　1992『中世都市と商人職人』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集
市村高男　1992「戦国期東国の城郭と城下町の実態」『北の中世 史跡整備と歴史研究』日本エディタースクール出版部
上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.２，日本貿易陶磁研究会
宇野隆夫　1992「食器計量の方法と意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集，国立歴史民俗博物館
宇野隆夫　1994「考古学からみた日本生産流通史－2000年余の歴史を二分する転換点について－」『日本史研究』第380号，日本史研究会
宇野隆夫　1994「日本海における中世の生産と流通」『中世都市十三湊と安藤氏』国立歴史民俗博物館
宇野隆夫　1996「木製食器と土製食器－弥生変革と中世変革－」『古代の木製食器－弥生期から平安期にかけての木製食器－』発表要旨，埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究集会実行委員会
大山町　1964『大山町史』
岡村利平　1912『飛騨山川』住伊書店
小野正敏　1984「第４回貿易陶磁研究集会・その成果と課題」『貿易陶磁研究』No.４，日本貿易陶磁研究会
小野正敏　1984「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』No.４，日本貿易陶磁研究会
小野正敏　1985「出土陶磁よりみた15，16世紀における画期の素描」『MUSEUM』No.416，東京国立博物館
小野正敏　1991「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社
小野正敏　1991「中世陶磁器研究の視点と方法」『考古学と中世史研究』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集
小野正敏　1994「戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識」『信濃』531号，信濃史研究会
金子拓男・前川　要編　1994『守護所から戦国城下へ－地方政治都市論の試み－』1993年度日本考古学協会シンポジウム報告集
鎌倉考古学研究所　1994『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部
神岡町　1972『神岡町史』史料編　上巻(中世・近世・近代)
神岡町　1982『神岡町史』特集編(飛騨国野史・国説集成)
神岡町教育委員会　1979『江馬氏城館跡発掘調査概報』
神岡町教育委員会　1981『江馬氏城館跡保存管理計画策定報告書』
神岡町教育委員会　1994『ふるさと「神岡」探検マップ』
神岡町教育委員会　1995『飛騨の神岡』
神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室　1995『江馬氏城館跡－下館跡発掘調査報告書Ⅰ－』
神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室　1996『江馬氏城館跡Ⅱ－下館跡門前地区と庭園の調査－』
神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室　1997『江馬氏城館跡Ⅲ－下館跡南辺地区の調査－』
神岡町教育委員会　1998『江馬氏城館跡Ⅳ－下館跡南堀延長部周辺の調査－』
神岡町役場　総務課　1992『神岡町勢要覧』資料編
木下密運　1984「中世の地鎮・鎮壇」『古代研究』28・29，元興寺文化財研究所
岐阜県　1968『岐阜県史』通史編 近世上
岐阜県　1969『岐阜県史』通史編 中世
岐阜県　1969『岐阜県史』史料編 古代・中世１
岐阜県　1973『岐阜県史』史料編 古代・中世４
岐阜県郡上郡大和村教育委員会　1984『東氏館跡発掘調査報告書』
岐阜市教育委員会　1990『城之内遺跡』
葛谷鮎彦　1970『中世江馬氏の研究』神岡町
葛谷鮎彦　1972「越中街道」『飛騨の街道』飛騨運輸株式会社
国立歴史民俗博物館　1993『日本出土の貿易陶磁』
国立歴史民俗博物館　1994『中世都市十三湊と安藤氏』
小島道裕　1984「戦国期城下町の構造」『日本史研究』第257号，日本史研究会
小島道裕　1990「平地城館跡と寺院・村落－近江の事例から－」『中世城郭研究論集』新人物往来社
小島道裕　1996「江馬氏下館と江馬氏－文献史料による考察－」『江馬氏城館跡Ⅱ－下館跡門前地区と庭園の調査－』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室

小林 幹　1972「信州街道」『飛騨の街道』飛騨運輸株式会社
酒井重洋　1990「越中における在地窯の諸問題」『中世北陸の在地窯－生産と流通の諸問題－』北陸中世土器研究会
坂井秀弥　1991「絵図にみる城館と町」『中世の城と考古学』新人物往来社
嶋谷和彦　1992「“地鎮め”の諸相」『関西近世考古学研究』Ⅲ
千田嘉博　1994「古城探検隊」『歴史読本』第39巻，新人物往来社
千田嘉博　1995「江馬氏の山城」『江馬氏城館跡－下館跡発掘調査報告書Ⅰ－』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
多賀秋五郎　1941「第５編 第２章 社会経済」『飛騨史の研究』下巻，濃飛文化研究会
高槻市教育委員会　1978「嶋上郡衙跡（38-M・N地区）」『高槻市文化財年報』昭和51・52年
高槻市教育委員会　1981『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要』
高橋與右衛門　1992「発掘された中世の建物跡」『北の中世 史跡整備と歴史研究』日本エディタースクール出版部
中世土器研究会　1995『概説 中世の土器・陶磁器』
中世都市研究会　1994『都市空間』中世都市研究１
中世都市研究会　1995『古代から中世へ』中世都市研究２
中世都市研究会　1996『津・泊・宿』中世都市研究３
東海埋蔵文化財研究会　1989『清須－織豊期の城と都市－』研究報告編
富山県井口村教育委員会　1990『井口城跡発掘調査概要』
中井 均　1987「中世城館の発生と展開」『物質文化』48，物質文化研究会
中井 均　1990「織豊系城郭の画期」『中世城郭研究論集』新人物往来社
中井 均　1991「中世の居館・寺そして村落－西国を中心として－」『中世の城と考古学』新人物往来社
中条町教育委員会　1993～1997『江上館跡』Ⅰ～Ⅴ
長野県中野市教育委員会　1993『高梨氏館跡発掘調査報告書』
丹生川村教育委員会　1993『尾崎城跡発掘調査概報』
橋口定志　1987「中世居館の再検討」『東京考古』５，東京考古学談話会
橋口定志　1991「中世居館研究の現状と問題点」『争点日本の歴史』４，新人物往来社
菱村正文　1972「総論」『飛騨の街道』飛騨運輸株式会社
菱村正文　1972「平湯街道」『飛騨の街道』飛騨運輸株式会社
福井県教育委員会　1979『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅰ
福井県教育委員会　1990『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅲ
福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館　1983『一乗谷朝倉氏遺跡 県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』
藤澤良祐　1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要』Ⅴ　瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　1991「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社
藤澤良祐　1991「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要』Ⅹ，瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　1995「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年－」『研究紀要』第３輯，㈶瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐　1997「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要』第５輯，㈶瀬戸市埋蔵文化財センター
北陸中世土器研究会　1991『城館遺跡出土の土器・陶磁器』
北陸中世土器研究会　1993『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』
埋蔵文化財研究会・大阪市文化財協会　1990『中世末から近世のまち・むらと都市』第１分冊 発表要旨編
水野和雄　1984「中世城郭都市一乗谷における地鎮の諸例」『古代研究』28・29，元興寺文化財研究所
水野正好　1984「近世の地鎮・鎮壇」『古代研究』28・29，元興寺文化財研究所
村瀬一郎　1979「岐阜県・概説」『日本城郭大系』９，新人物往来社
森田 勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.２，日本貿易陶磁研究会
湯本軍一　1991「信濃高梨氏城下の景観復元」『中世の村落と現代』吉川弘文館
横田賢次郎・森田 勉　1978「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４，九州歴史資料館
吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
吉岡泰英　1983「朝倉館の建築的考察」『朝倉氏遺跡資料館紀要』福井県立朝倉氏遺跡資料館
脇田晴子　1981『日本中世都市論』東京大学出版会

別　　表

凡　例

〈遺構の計測表〉

No.　　：報告書での通し番号。遺構の種類毎に，1997年度報告書からの通し番号とする。柱穴のみは１から数えている。

主軸方位：座標の正値象限(北東方向の第１象限・北西方向の第２象限・南東方向の第４象限)における「遺構主軸の座標軸方向(Ｘ・Ｙ)－角度(°)－傾きの振れの方向」を示す。

遺構主軸の座標軸方向：「Ｘ」･･･遺構の主軸方向が南北方向(調査座標網のＸ軸)

「Ｙ」･･･遺構の主軸方向が東西方向(調査座標網のＹ軸)

傾きの振れの方向：主軸方向がＸ(南北方向)･･･その正値部分においてＹ軸の正値方向(東)に振る場合「E」，負値方向(西)に振る場合「W」。

主軸方位がＹ(東西方向)･･･その正値部分においてＸ軸の正値方向(北)に振る場合は「Ｎ」，負値方向(南)に振る場合は「Ｓ」。

〈柱穴計測表〉

No.　　：調査時・報告書での通し番号。

平 面 形：円形，楕円形，方形，不整形の形に分類した。

デ ー タ：[長径] [短径] [深さ] [底面レベル] の値。

断 面 形：第17表の分類表に依拠して表示した。

出土遺物：●国産土器，■国産陶器，○中国陶磁器，▲鉄製品，□その他，で表した。

備　　考：遺構の切り合い関係は＞，＜の記号で表した。切り合い不明は，遺構≠遺構と表した。

調　　査：×は1976～1978年度調査時において完掘していた遺構を表わす。

「完」「半」は，今回調査において，それぞれ完掘・半裁にとどめたことを示す。

〈遺物計測表〉

No.　　：報告書での通し番号。

種　　類：土師器，珠洲，瀬戸・美濃，青磁などの名称。

器　　種：椀，皿，すり鉢，盤など用途別の分類。

Ｘ ・ Ｙ：１ｍ単位の調査座標で出土地点を示した。

遺　　構：遺物の出土遺構名。空白は遺構外である。

層　　位：遺物の出土した土層名。層位図参照。

レ ベ ル：遺物の出土標高値。水準はT.P.，単位はｍである。

法　　量：口＝口径，底＝底径，高＝器高を示している。

括弧のつかないデータが完形値，[　]が復元値，(　)が現存値である。

個 体 数：口縁部計測法(宇野1992)による。

備　　考：時期別分類，重量，その他を示す。

整 理 No.：調査時の取り上げ番号。

別表1　堀跡計測表

（単位：cm）

堀名	形状	主軸方位	検出長	上場幅	下場幅	深さ	立ち上がり	出土遺物	備　　考
西堀	箱堀	X—0.5°—E	2074	427		150	西34.5° 東不明	■2	土橋2より北部分の西堀　幅はX＝49ラインで計測　深さ及び立ち上がりはX＝46.3ラインで計測

別表2　門跡計測表

遺構No.	間口	間口幅(cm)	間口幅(尺)	主軸方位	備　　考
SB61	1	267	8.81	X—1.0°—W	脇門　南側に間口一間(100.8cm)のくぐり口がつく
SB62	1	191	6.30	Y—0.0°—N	庭園への通用門

別表3　柵列計測表

遺構No.	柱間	総長(cm)	総長(尺)	主軸方位	出土遺物	備　　考
SA51	3	318	10.49	X—2.0°—E		SA54＞SA51
SA52	4(6)	1302	42.97	X—1.0°—W	●	
SA53	5(6)	1215	40.09	X—0.5°—W		SA54・SA56b＞SA53
SA54	4(5)	1078	35.57	X—1.0°—W		SA54＞SA53・SA51
SA55a	2	398	13.13	X—0.5°—W		南端SP191から北端SV02までの推定長2083cm　築地塀西側柱穴列
SA55b	—	2220	73.26	X—0.5°—W		築地塀西側柱穴列
SA55c	3	244	8.05	X—0.5°—W		築地塀西側柱穴列
SA56a	3(4)	858	28.31	X—0.5°—W		南端SP192から北端SV01までの推定長1910cm　築地塀東側柱穴列
SA56b	—	2220	73.26	X—0.5°—W		SA56b＞SA53　築地塀東側柱穴列
SA56c	3	207	6.83	X—0.5°—W		築地塀東側柱穴列
SA57	2	348	11.48	Y—0.0°—N		SA56aにほぼ直交する
SA58	2	195	6.43	Y—3.0°—S	●	

別表4　竪穴住居計測表

（単位：cm）

No	X	Y	平面形	長　径	短　径	深　さ	底面レベル	埋　土	出土遺物	備　考
SI21	55.5	4.4	方形	306	291	33	453.820	第24図	●9■18▲3	

別表5　土坑計測表

（単位：cm）

No.	X	Y	平面形	長　径	短　径	深　さ	底面レベル	埋　土	出土遺物	備　考
SX41	0.4	−2.9	隅丸長方形	450	149	156	453.745	第25図		

別表6　溝跡計測表

（単位：cm）

No.	検出長	最大幅	最小幅	平均幅	深　さ	埋　土	主軸方位	出土遺物	備考調査
SD21	293	50	28	38.8	14		X—0.5°—W		築地塀西側柱穴列SA55aの布掘り溝
SD22	6635	208	167	177.1	44	第13・26図	X—2.0°—W	●4■11○3▲1□3	
SD23	325				46		—	■2□18	

別表７　柱穴計測表

（単位：cm）

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱　痕　跡	断面形	出土遺物	備　　考	調査
SP001	-6.08	-0.82	円形	37	33	24	454.973		A			半
SP002	-5.53	-0.39	円形	28	34	18	455.050		B		SA55柱穴 根固め石1 埋土に礫2	半
SP003	-5.05	-0.39	方形	22	17	39	454.810		B		SA55柱穴	完
SP004	-5.91	-0.13	楕円形	65	40	31	454.880		B			半
SP005	-6.29	1.27	楕円形	63	41	25	454.956		B		SA56柱穴	半
SP006											欠番	
SP007	-5.61	1.28	楕円形	52	42	43	454.765		A		SA56柱穴 埋土に礫2 SP7＞SP8・SP9	半
SP008	-5.51	0.94	円形	58		22	454.956		B		埋土に礫1 SP7＞SP8・SP9	半
SP009	-5.59	1.55	円形	32		21	454.965		A		SP7＞SP8・SP9	半
SP010	-6.61	-0.40	円形	26	26	39	454.785		B		SA55柱穴 根固め石2	半
SP011	-5.68	3.10	楕円形	50	31	54	454.727	抜き取り穴	B		庭園への通用門SB62柱穴 底面に礎板石1 抜き取り穴に礫1	半
SP012	-6.08	4.68	円形	35	34	12	455.177		B			半
SP013	-5.63	4.99	楕円形	63	47	58	454.696	円形 径15	B		庭園への通用門SB62柱穴 底面に礎板石1 根固め石1	半
SP014	-5.25	4.31	円形	34	32	43	454.886		A			半
SP015	-3.10	0.43	円形	34		64	454.360		C-2			半
SP016	1.27	-0.33	楕円形	69	53	45	454.643		A			半
SP017	1.20	0.38	楕円形	48	34	51	454.545		B		根固め石1	半
SP018	1.35	1.19	円形	46		46	454.588		C-2			半
SP019	2.38	-0.48	円形	38	38	45	454.720	円形 径12	A		SA55柱穴 根固め石1	半
SP020	3.35	-0.51	円形	38	38	25	454.867		B		SA55柱穴	半
SP021	3.79	-0.51	円形	44	38	34	454.782		C-2		SA55柱穴 根固め石2	半
SP022											欠番	
SP023	4.27	-0.46	方形	32	23	10	455.017		B		SA55柱穴	半
SP024	2.11	3.29	楕円形	42	26	49	454.734					
SP025	5.20	-0.50	円形	38	36	34	454.765		A		SA55柱穴 根固め石1 SP26＞SP25	半
SP026	4.98	-0.19	円形	42	42	35	454.765		A		SP26＞SP25	×
SP027	5.70	-0.54	楕円形	40	32	35	454.758		B		SA55柱穴 埋土に礫1	半
SP028	6.16	-0.34	楕円形	41	32	41	454.730	抜き取り穴	A		SA55柱穴 抜き取り穴に礫1 SP29・SP32・SP167＞SP33＞SP34	半
SP029	7.13	-0.54	楕円形	40	25	26	454.800	抜き取り穴	A		SA55柱穴 根固め石1	半
SP030											欠番	
SP031	6.89	-0.55	円形	26							SA56柱穴 SP29・SP32・SP167＞SP33＞SP31・SP34	未
SP032	7.13	-0.07	円形	35	32	33	454.810		B		SP29・SP32・SP167＞SP33＞SP31・SP34	半
SP033	7.08	-0.29	楕円形	64		36	454.780	抜き取り穴	A		SP29・SP32・SP167＞SP33＞SP31・SP34	半
SP034	7.35	-0.24	円形	30		23	454.855		B		SP29・SP32・SP167＞SP33＞SP31・SP34	半
SP035	8.61	-0.49	円形	28	25	39	454.705	円形 径12	B		SA55柱穴	半
SP036	9.08	-0.51	不整形	41	38	26	454.804	抜き取り穴	C-2		SA55柱穴	半
SP037	9.69	-0.54	円形	22	20	15	454.840		B		SA55柱穴	半
SP038	10.93	-0.52	楕円形	30	22	23	454.771		A		SA55柱穴	半
SP039	1.89	1.44	楕円形	24	21	12	455.025		B		SA56柱穴	半
SP040	2.12	1.41	円形	19	19	13	455.020		B		SA56柱穴	半
SP041	2.43	1.35	楕円形	41	33	20	454.959		B	□	SA56柱穴 埋土に礫3	半
SP042	3.17	1.00	楕円形	46	31	51	454.650		B		埋土に礫1 SP42＞SP43	半
SP043	3.30	0.94	方形	48		46	454.690		A		SA51柱穴 SP42＞SP43	半
SP044											欠番	
SP045	3.51	1.30	円形	40		20	454.864		A		SA56柱穴	×
SP046	3.91	1.33	円形	38		19	454.878		A		SA56柱穴	×
SP047	4.24	0.94	円形	32	32	51	454.584		B		SA54柱穴 埋土に礫1 SP47＞SP48＞SP49	半
SP048	4.27	0.82	円形	49		51	454.615		B		SA51柱穴 SP47＞SP48＞SP49	半
SP049	4.04	0.98	円形	32		27	454.854		A		SP47＞SP48＞SP49	半
SP050	6.70	1.63	楕円形	35	26	9	455.019		A		埋土に礫1	半
SP051	5.05	1.15	楕円形	52	37	28	454.837		C-2		SP51＞SP54・SP52＞SP53 78年度検出	半
SP052	4.09	1.02	楕円形	52	39	33	454.770		A		SP51＞SP54・SP52＞SP53	半
SP053	5.32	0.94	楕円形	50		59	454.515		B		SA51柱穴 SP51＞SP54・SP52＞SP53	半
SP054	5.10	1.52	楕円形	38		32	454.795	円形 径12	B		SA56柱穴 根固め石1 SP51＞SP54・SP52＞SP53	半
SP055	4.39	1.38	不整形	30	26	7	455.064		A		SA56柱穴	半
SP056	5.82	1.43	楕円形	32	28	18	454.918		A		SA56柱穴 根固め石1	半
SP057											欠番	
SP058	5.90	2.35	不整形	45	32	49	454.615		B		埋土に礫2	半
SP059	6.38	0.98	円形	31	27	44	454.615		A		SA54柱穴 埋土に礫1 SP59＞SP60＞SP61・SP199＞SP62	半
SP060	6.24	-0.08	不整形	47		44	454.645		C-2		SP59＞SP60＞SP61・SP199＞SP62	半
SP061	5.97	-0.03	円形	33		20	454.890		A		SP59＞SP60＞SP61・SP199＞SP62	半
SP062	4.36	0.66	楕円形		36	48	454.580		A		SP59＞SP60＞SP61・SP199＞SP62	半
SP063	6.12	1.22	方形	22	22	15	454.950		B		SA56柱穴 根固め石2	半
SP064	7.23	1.37	楕円形	50		24	454.860		B		SP65＞SP67＞SP66＞SP64	半
SP065	6.91	1.05	楕円形	40	31	28	454.815		A		SP65＞SP67＞SP66＞SP64	半
SP066	6.99	1.36	楕円形	60	25	19	454.900		A		SA56柱穴 SP65＞SP67＞SP66＞SP64	半
SP067	6.99	1.13	楕円形	58		13	454.970		A		SP65＞SP67＞SP66＞SP64	半
SP068	8.52	0.90	楕円形	56	44	57	454.520		B		SA54柱穴 根固め石4	半
SP069	8.97	1.28	楕円形		38	18	454.913		B		SA56柱穴	半
SP070	9.58	0.73	楕円形	48	40	32	454.780		B		SA52柱穴 SP72＞SP70＞SP71	半

別表７のつづき

（単位：cm）

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱　痕　跡	断面形	出土遺物	備　　考	調査
SP071	8.62	0.94	不整形	34		39	454.695		B		SP72＞SP70＞SP71	半
SP072	9.57	0.82	円形	31	38	40	454.700		B		SP72＞SP70＞SP71	半
SP073	9.64	1.32	楕円形	29	20	10	454.987		B		SA56柱穴	半
SP074	9.99	1.37	楕円形	28	23	26	454.823		B		SA56柱穴	半
SP075	10.23	1.44	楕円形	49	33	30	454.770		A		SA56柱穴 根固め石1	半
SP076	9.94	1.86	円形	29	28	41	454.660	抜き取り穴	A		SP76＞SP78	半
SP077											欠番	
SP078	10.19	1.85	楕円形	62	29	45	454.620	抜き取り穴	B		SP76＞SP78	半
SP079	11.13	1.25	不整形		44	15	454.900		B		SA56柱穴 埋土に礫1	半
SP080	7.86	3.89	円形	40	36	28	454.820		B		SB48柱穴	×
SP081	10.02	4.08	円形	47	44	44	454.628		B		SB48柱穴	×
SP082	4.58	-4.52	楕円形	21	16	15	454.527		C-2			完
SP083	4.88	-4.52	円形	23	21	17	454.512		A			完
SP084	5.13	-4.55	円形	23	21	15	454.505		A			完
SP085	5.39	-4.57	不整形	26	20	12	454.531		A			完
SP086	12.54	5.38	楕円形		24	29	454.667		B			半
SP087	13.87	5.47	円形	19	19	15	454.685		B			半
SP088	15.04	5.51	円形	23		23	454.649		A			半
SP089	15.10	5.18	円形	21	20	21	454.667		B			半
SP090	15.43	5.13	円形	20	20	14	454.740		B			半
SP091	15.75	5.11	円形	21	20	21	454.674		B			半
SP092	16.79	5.13	円形	27	23	15	454.705		A			半
SP093	13.43	4.19	楕円形	46	30	38	454.645		A			半
SP094	13.33	3.70	円形	20		20	454.835		B			半
SP095	14.09	4.38	円形	35	32	26	454.602		C-2		SB48柱穴	×
SP096	13.50	2.07	円形	32	28	26	454.612		A			半
SP097	12.63	1.35	楕円形		18	23	454.776		A		SA56柱穴 根固め石4	半
SP098	13.85	0.72	円形	36	33	29	454.642	円形 径12	A		SA52柱穴	半
SP099	14.50	1.32	楕円形	42	35	39	454.505	抜き取り穴	A		SA56柱穴	半
SP100	15.76	0.73	楕円形	38	31	32	454.660		A		埋土に礫3 SP100＞SP101＞SP102	半
SP101	14.99	0.81	円形	29		30	454.625		B		SA54柱穴 底面に礫1 SP100＞SP101＞SP102	半
SP102	14.82	0.26	楕円形	95	61	66	454.355		B		SA53柱穴 埋土に礫1 SP100＞SP101＞SP102	半
SP103	15.15	-0.62	方形	33	30	24	454.797		A		SA55柱穴 根固め石1	半
SP104	15.77	-0.69	楕円形	30	25	15	454.870		A		SA55柱穴 埋土に礫2 SP107＞SP104	半
SP105	16.92	-0.71	円形	43	41	31	454.692	抜き取り穴	C-2		SA55柱穴 根固め石1	半
SP106	15.96	0.68	円形	40	37	35	454.581	円形 径15	A		SA52柱穴	半
SP107	15.88	-0.60	円形	30	28	15	454.865		A		SA55柱穴 埋土に礫2 SP107＞SP104	半
SP108	16.92	0.41	楕円形	86	42	55	454.400		C-2		SA54柱穴 底面に礫1 根固め石1 SP108＞SP109	半
SP109	17.06	0.82	円形	56		63	454.280		A		根固め石1 埋土に礫1 SP108＞SP109	半
SP110	16.83	1.15	円形	28	27	10	454.778		B		SA56柱穴	半
SP111	17.79	-0.74	不整形	28	28	35	454.615		A		SA55柱穴 根固め石1	半
SP112	17.82	-0.41	円形	22	20	15	454.797	円形 径16	B		根固め石2	半
SP113	19.62	-0.66	楕円形	42	31	19	454.780	円形 径12	B		SA55柱穴	半
SP114	20.29	-0.77	楕円形	46	37	39	454.580		B		SA55柱穴 埋土に礫3	半
SP115	21.72	-0.75	円形	29	28	17	454.817		A		SA55柱穴 根固め石2	半
SP116	22.27	-0.81	楕円形	46	36	22	454.734		A		SA55柱穴 根固め石2	半
SP117	22.64	-0.88	楕円形	36	32	3	454.660		B		SA55柱穴 埋土に礫5	半
SP118	18.81	1.06	楕円形	66		7	454.867	円形 径18	C-2		SA56柱穴 根固め石1 埋土に礫1 SP118＞SP119	半
SP119	19.10	0.66	楕円形	90							SA53柱穴 埋土に礫3 SP118＞SP119	未
SP120	19.70	1.18	円形	30	28	21	454.742	抜き取り穴	A		SA56柱穴 SP120＞SP163・SP164	半
SP121	20.28	0.52	楕円形	53	43	51	454.438	抜き取り穴	A	●	SA52柱穴	半
SP122											欠番	
SP123	20.52	1.18	円形	25	24	15	454.745		A		SA56柱穴 SP123＞SP124＞SP125	半
SP124	20.58	1.10	円形	21		5	454.637		A		SP123＞SP124＞SP125	半
SP125	20.44	1.28	円形	30		29	454.650		A		SA56柱穴 SP123＞SP124＞SP125	半
SP126	21.43	0.65	楕円形	71	52	43	454.520		A		上面に礫1 SP127＞SP126	半
SP127	20.98	0.24	楕円形	111	50	66	454.295		B		SA54柱穴 埋土に礫2 SP127＞SP126	半
SP128	22.39	0.57	円形	46	40	40	454.556	抜き取り穴	A		SA52柱穴	半
SP129	21.78	1.20	円形	31	30	16	454.785	抜き取り穴	B		SA56柱穴 根固め石1	半
SP130	22.42	1.12	楕円形		32	24	454.708		C-2		SA56柱穴 SP130＞SP159	半
SP131	23.91	1.19	円形	30		30	454.650		A		SP132＞SP131＞SP133	半
SP132	23.90	1.06	楕円形	28	16	27	454.672		A		SA56柱穴 SP132＞SP131＞SP133	半
SP133	23.65	1.10	楕円形		25	41	454.554	抜き取り穴	A		SP132＞SP131＞SP133	半
SP134	22.64	1.76	楕円形	82	49	63	454.340		B		SP135＞SP134＞SP136	半
SP135	22.98	2.16	楕円形	40	31	37	454.612		B		SP135＞SP134＞SP136	半
SP136	22.61	2.14	楕円形		34	35	454.610		B		SP135＞SP134＞SP136	半
SP137	21.40	2.34	円形	38	37	41	454.520		C-1		根固め石1 SP137＞SP138	半
SP138	21.61	2.13	楕円形	37	26	39	454.550	抜き取り穴	A		SP137＞SP138	半
SP139	22.06	2.58	楕円形	45	37	39	454.566		B		根固め石1	半
SP140	22.08	3.34	楕円形	30	21	40	454.549	抜き取り穴	A		根固め石1	半

別表７のつづき

（単位：cm）

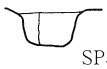
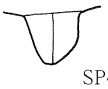
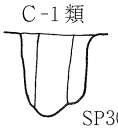
No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱　痕　跡	断面形	出土遺物	備　　考	調査
SP141	18.93	1.75	円形	21	21	6	454.881		B		埋土に礫1	半
SP142	19.63	5.30	円形	25	24	21	454.714		A			半
SP143	20.24	4.99	楕円形	28	22	34	454.598	抜き取り穴	B	●	柱痕	半
SP144	24.99	-0.20	円形	49	48	88	454.100	柱材芯部 円形 径15	A		脇門SB61柱穴 底面に礎板石1 抜き取り穴に礫5 柱材芯部木質一部残	半
SP145	30.05	1.14	円形	44	40	31	454.600	円形 径15	C-2		SA56柱穴 根固め石5	半
SP146	29.92	2.15	楕円形		28	35	454.572	円形 径9	A		SA57柱穴 抜き取り穴に礫1 SP147＞SP146	半
SP147	29.66	2.13	楕円形	34	25	46	454.457		C-2		根固め石1 SP147＞SP146	半
SP148	29.34	2.66	円形	18	18	8	454.852		A	●●	地鎮遺構	完
SP149	29.83	2.58	円形	24	22	35	454.570		B			完
SP150	28.94	3.82	円形	34	31	38	454.567		A		埋土に礫2	完
SP151	29.42	3.85	円形	20	16	27	454.681		B			半
SP152	29.84	3.88	楕円形	43	29	45	454.481	抜き取り穴	B		SA57柱穴	半
SP153	29.89	4.22	円形	20	18	21	454.728		B		根固め石1	半
SP154	29.89	4.65	不整形	42	32	39	454.560	円形 径12	B		根固め石5	半
SP155	29.83	5.59	円形	32		43	454.520		B		SA57柱穴	半
SP156	27.73	5.57	円形	35	30	46	454.515	抜き取り穴	B			半
SP157	31.90	-0.76		28		55	454.406		B		SA55柱穴 根固め石1 埋土に礫2	半
SP158	31.96	1.14		30		29	454.690		A		SA56柱穴 根固め石1	半
SP159	22.69	1.21	楕円形	43	28	26	454.706		B		SP130＞SP159	×
SP160	22.90	1.27	楕円形	106	66	52	454.450	円形 径15	A		SA54柱穴 根固め石1	半
SP161	36.40	1.85	円形		44				不明			未
SP162	36.40	1.15	円形		30				不明		SA56柱穴	未
SP163	19.55	1.14	不整形	25		43	454.530		B		SP120＞SP163	半
SP164	19.89	1.13	楕円形	2		18	454.775		C-2		SP120＞SP164	半
SP165	17.88	5.08	円形	23		14	454.700		B			半
SP166											欠番	
SP167	7.39	-0.28	楕円形	20	16	30	454.835		B		SP29・SP32・SP167＞SP33＞SP34	半
SP168	-4.16	-0.64	円形	32	30	27	454.923		B		SA55柱穴	半
SP169	-4.79	-0.41	方形	28	26	20	454.980	抜き取り穴	B		SA55柱穴 抜き取り穴に礫4 SP169＞SP170	半
SP170	-4.63	-0.41	不整形	37		54	454.615		A		SA55柱穴 SP169＞SP170	半
SP171	-4.17	1.26	方形	22	21	16	454.966		B		SA56柱穴	半
SP172	-4.56	1.02	円形	22	22	116	454.015		B			半
SP173	-4.88	1.30	円形	24	24	15	455.036		B		SA56柱穴	半
SP174	-3.89	1.92	楕円形	46	31	40	454.649		B	●	SP174・SP176＞SP175	半
SP175	-4.29	1.96	不整形		44	31	454.695		A	●	SP174・SP176＞SP175	半
SP176	-4.62	2.10	楕円形	54	43	51	454.667		C-1	●	埋土に礫12 SP174・SP176＞SP175	半
SP177	-4.05	2.55	楕円形	35	31	20	455.050		A			半
SP178	-4.68	2.92	楕円形	32	20	29	454.975		B			半
SP179	-4.30	3.25	円形	19	19	8	455.155		A			半
SP180	-5.39	2.45	楕円形	32	26	37	454.885		B			半
SP181	-2.52	0.61	円形	18	17	24	454.775		B			半
SP182	-2.62	0.30	円形	16		3	455.030		B			半
SP183	1.95	-0.47	楕円形	40	18	26	454.890		A		SA55柱穴	半
SP184	10.50	1.05	円形	14					不明		SP186＞SP184・SP185	未
SP185	10.68	0.48	楕円形	110	70	58	454.475		C-2		SA53柱穴 埋土に礫1 SP186＞SP184・SP185	半
SP186	10.68	0.88	楕円形	64	26	50	454.540	抜き取り穴	C-1		SA54柱穴 抜き取り穴に礫2 SP186＞SP184・SP185	半
SP187	1.08	1.87	楕円形	50		6	454.995		不明		抜き取り穴に礫2	未
SP188	8.11	1.53	楕円形	37	28	28	454.800		A		埋土に礫3	半
SP189	30.90	-0.82	楕円形	37	32	21	454.565		A	●	SA55柱穴	半
SP190	27.70	0.00	円形	55	50	93	454.060	柱材芯部 円形 径15	A		脇門SB61柱穴 抜き取り穴に礫1 柱材芯部木質一部残存	半
SP191	27.98	-0.95	不整形	52	46	55	454.320	抜き取り穴	B		SA55柱穴 根固め石3	半
SP192	27.98	1.16	円形	40	38	36	454.640	抜き取り穴	B		SA56柱穴 抜き取り穴に礫2 根固め石2 SP192＞SP193	半
SP193	27.97	1.17	円形	60		6	454.940	円形 径15	C-2		SA56柱穴 SP192＞SP193	半
SP194	29.54	-0.74	円形	21	20	14	454.721		B		SA55柱穴	半
SP195	29.98	-0.80	楕円形	48		35	454.426		B		SA55柱穴 根固め石3	半
SP196	32.00	4.32	円形	20		16	454.749		A			半
SP197	11.40	-0.50	円形	18					不明		SA55柱穴	未
SP198	23.95	-0.80	楕円形	34	28	20	454.740	抜き取り穴	B		SA55柱穴 抜き取り穴に礫3	半
SP199	6.44	1.00	方形	43	43	59	454.515		B		SA51柱穴 SP59＞SP60＞SP61・SP199＞SP62	半
SP200	8.72	1.29	不整形	52	46	18	454.915		A		SA56柱穴 埋土に礫2	半
SP201	-1.05	-4.05	円形	24	19	11	454.700		A			完
SP9401	29.11	-5.42	円形	17	16	9	454.211		A		94年度調査時に完掘	×
SP9402	30.87	-0.81	方形	70	40	35	453.995		A		94年度調査時に完掘	×
SP9403	27.49	-8.20	円形	22	20	15	454.208		A		94年度調査時に完掘	×
SP9410	2.15	-6.71	楕円形	33	20	17	454.520		B		94年度調査時に完掘	×
SP9411	1.63	-6.75	楕円形	20	13	12	454.573		B		94年度調査時に完掘	×
SP9412	0.29	-4.18	楕円形	25	21	7	454.663		B		94年度調査時に完掘	×
SP9413	0.01	-4.26	円形	25	22	106	454.656		B		94年度調査時に完掘	×
SP9414	0.09	-4.03	楕円形	27	18	8	454.668		B		94年度調査時に完掘	×
SP9417	-0.63	-4.02	不整形			11	454.659				94年度調査時に完掘	×

別表７のつづき

（単位：cm）

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱　痕　跡	断面形	出土遺物	備　　考	調査
SP9418	-0.69	-0.24	不整形			8	454.660				94年度調査時に完掘	×
SP9419	-0.77	-4.12	不整形			8	454.660				94年度調査時に完掘	×
SP9420	-1.37	-4.25	円形	23	20	14	454.631		B		94年度調査時に完掘	×
SP301	42.76	3.76	円形	20	0.2	4	454.707		B		SA58柱穴	半
SP302	42.76	2.86	円形	29	28	38	454.400		B		SA58柱穴	半
SP303	42.87	1.82	円形	25	24	36	454.360		B		SA58柱穴	半
SP304											欠番	
SP305	54.95	0.64	円形	36	35	26	453.850	抜き取り穴	B			半
SP306	55.40	0.66	円形	19	17	18	453.960		B			半
SP307	56.63	1.00	楕円形	22	19	15	454.020		A			半
SP308	55.22	1.55	楕円形	35	28	24	453.880	円形 径15	B			半
SP309	55.58	1.55	楕円形	54	34	25	453.880	抜き取り穴	A			半
SP310	55.96	1.52	円形	21	20	22	453.939		B			完
SP311	55.62	2.18	方形	25	24	17	453.958		C-2			半
SP312	55.17	2.48	円形	23	22	5	454.077		C-2			完
SP313	57.21	2.31	円形	30		34	453.815		B		SP313・SP315＞SP314	半
SP314	57.10	2.50	円形	30	30	30	453.839		C-2		SP313・SP315＞SP314	半
SP315	57.17	2.71	円形	31		31	453.839		B		SP313・SP315＞SP314	半
SP316	59.05	-0.32	円形	19	19	21	453.960		B			半
SP317											欠番	
SP318	57.96	1.88	円形	34	32	27	453.899		A			半
SP319	58.44	2.12	楕円形	77	43	31	453.877	円形 径14	A			半
SP320	56.92	3.02	楕円形	23	16	27	453.887	円形 径8	A			半
SP321	54.12	3.16	楕円形		34	17	453.970		A		SP321＞SP325	半
SP322	54.07	4.85	楕円形	37	360	20	453.942		A			完
SP323	53.94	2.42	楕円形	34	29	30	453.835		A			×
SP324	53.95	1.80	楕円形	34	27	27	453.850		A			×
SP325	54.08	3.38	楕円形	26	21	15	453.970		B		SP321＞SP325	半
SP326	58.11	5.16	円形	17	16	13	453.998		B			完
SP327	61.90	5.70	楕円形	57		28	453.945		A			半
SP328	45.80	-5.02	楕円形	20	15	15	453.973		B			完
SP329	47.33	-4.81	楕円形	30	25	18	453.965		B			完
SP330	48.68	-4.52	方形	35		16	453.979		C-2			完
SP331	49.10	-4.75	円形	24	20	12	453.995		A			完
SP332	39.41	0.31	円形	32		28	454.379		A			半
SP333	39.25	-0.97	円形	32		40	454.411		A			半
SP334	59.20	4.24	円形	25		14	454.041		A			半
SP335	59.24	-2.66	円形	18		8	453.879		B			半

第17表　柱穴断面形分類表

形態・分類	備　　考
A類  SP394	• 底面が平坦で，断面形が方形を呈するもの。
B類  SP450	• 底面が丸もしくは尖り，断面形が方形・三角形を呈するもの。
C-1類　C-2類  SP308　SP13	• 底面に段を有するもの。 ｛底面中央に段を有するもの(C-1類)。 ｛壁面に段を有するもの(C-2類)。

（類例柱穴は1996年度調査のもの）

別表８　石列SV01・SV02・SV03 石材計測表

（単位：cm）

遺　構	No	石 材 名	被熱	長軸	短軸	控え･高さ	長軸傾き	備　　考
SV01	1			30	20			石材観察忘れ
SV01	2		無	20	20			石材観察忘れ
SV01	3		無	23	17			石材観察忘れ
SV01	4	船津花崗岩	無	21	14			風化激しい
SV01	5	船津花崗岩	無	17	12			風化激しい
SV01	6	船津花崗岩	無	32	23			
SV01	7	船津花崗岩	無	32	14			
SV01	8	石英班岩	無	23	15			
SV01	9	安山岩	無	23	17			
SV01	10	船津花崗岩	無	25	18			
SV01	11	船津花崗岩	無	25	19			風化激しい
SV01	12	閃緑花崗岩	無	21	13			
SV01	13	船津花崗岩	無	36	20			風化激しい
SV01	14	石英班岩	無	27	21			
SV01	15	閃緑花崗岩？	無	26	18			
SV01	16	船津花崗岩	無	34	17			
SV01	17	船津花崗岩	無	22	19			
SV01	18	船津花崗岩	無	26	19			
SV01	19	閃緑花崗岩	無	21	19			
SV01	20	閃緑花崗岩	無	18	18			
SV01	21	船津花崗岩	無	17	10			
SV02	22	船津花崗岩	無	55	37		7.0°	
SV02	23	船津花崗岩	無	15	6			No.22のかませ石か？
SV02	24	船津花崗岩	無	9	6			No.22のかませ石か？
SV02	25	船津花崗岩	無	16	11			No.22のかませ石か？
SV02	26	船津花崗岩	無	53	45		59.5°	
SV02	27	船津花崗岩	無	63	41		7.0°	
SV02	28	船津花崗岩	無	9	23			No.27のかませ石か？
SV02	29	船津花崗岩	無	25	6			No.27のかませ石か？
SV02	30	船津花崗岩	無	73	38		16.0°	
SV02	31	船津花崗岩	無	14	9			
SV02	32	船津花崗岩	無	40	35	42.4	58.0°	
SV02	33	船津花崗岩	無	33	34	24.2	23.5°	
SV02	34	船津花崗岩	無	8	4			No.33のかませ石か？
SV03	35	船津花崗岩	無	50	35		90.0°	
SV03	36	船津花崗岩	無	22	17			
SV03	37	船津花崗岩	無	17	3			
SV03	38	船津花崗岩	無	34	18	28.2	57.0°	
SV03	39	船津花崗岩	無	8	5			
SV03	40	船津花崗岩	無	41	24		59.0°	
SV03	41	船津花崗岩	無	12	5			
SV03	42	船津花崗岩	無	53	30		32.5°	
SV03	43	船津花崗岩	無	33	18			
SV03	44	船津花崗岩	無	18	16			
SV03	45	船津花崗岩	無	57	25		53.5°	
SV03	46	斑励岩	無	25	30		90.0°	
SV03	47	船津花崗岩	無	64	27		39.0°	
SV03	48	船津花崗岩	無	12	4			No.47のかませ石か？
SV03	49	船津花崗岩	無	27	12			
SV03	50	船津花崗岩	無	26	19			
SV03	51	船津花崗岩	無	53	29		46.5°	
SV03	52	船津花崗岩	無	39	29		74.5°	
SV03	53	船津花崗岩	無	7	7			
SV03	54	船津花崗岩	無	8	5			
SV03	55	船津花崗岩	無	25	22			
SV03	56	安山岩	無	10	5			
SV03	57	船津花崗岩	無	38	25		67.5°	
SV03	58			20	12			裏込め 石材観察忘れ
SV03	59			10	7			裏込め 石材観察忘れ
SV03	60	船津花崗岩	無	14	8			SV03構築にともなう改修時に入れられた裏込め石
SV03	61	船津花崗岩	無	9	7			SV03構築にともなう改修時に入れられた裏込め石
SV03	62	船津花崗岩	無	18	6			SV03構築にともなう改修時に入れられた裏込め石
SV03	63	船津花崗岩	無	7	5			SV03構築にともなう改修時に入れられた裏込め石
SV03	64	船津花崗岩	無	6	4			裏込め
SV03	65	船津花崗岩	無	16	8			裏込め
SV03	66	船津花崗岩	無	14	11			裏込め
SV03	67	船津花崗岩	無	8	6			裏込め
SV03	68	船津花崗岩	無	32	19			裏込め
SV03	69	船津花崗岩	無	34	13			裏込め
SV03	70	船津花崗岩	無	9	6			
SV03	71	船津花崗岩	無	11	7			裏込め
SV03	72	船津花崗岩	無	27	25			裏込め
SV03	73	船津花崗岩	無	23	17			裏込め
SV03	74	船津花崗岩	無	22	17			裏込め
SV03	75	船津花崗岩	無	14	13			裏込め

別表9　1998・1999年度調査の出土遺物計測表

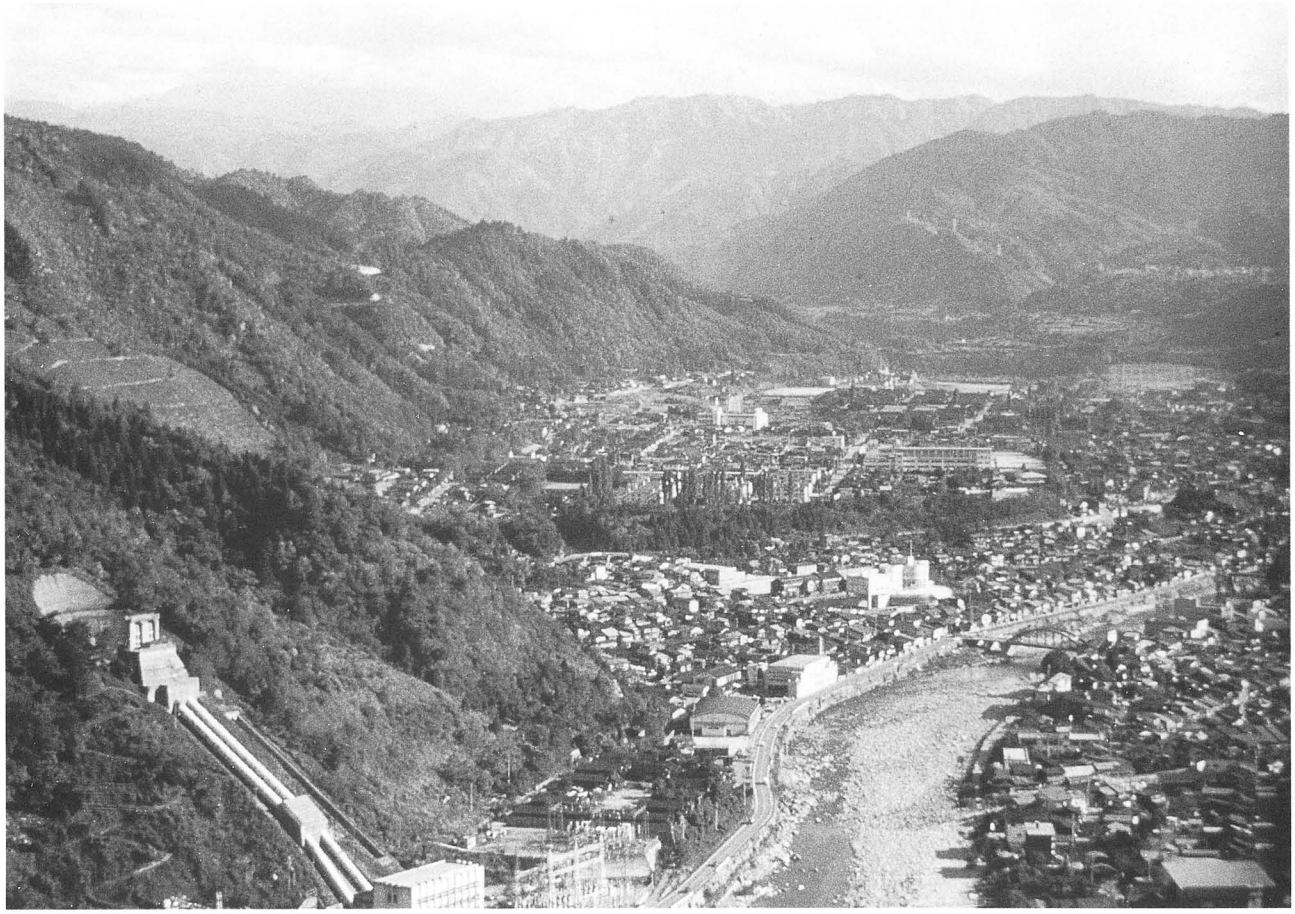
（単位：cm）

No	種類	器種	X	Y	遺構	層位	レベル	法量	個体	備考	整理No
1	縄紋土器	甕	46.99	0.23		下館基盤土(基盤造成土)	454.463		0.00	口縁端部内面にタール付着	98-140
2	土師器	皿	47.03	5.01	SV01埋土	A・B期遺構面構築土	454.708	口[12.5]	0.08	T-2類 浅黄橙色	98- 44
3	瀬戸美濃	入子	27.91	-1.18	脇門周辺	A・B期遺構面構築土	454.865	底[3.5]	0.00	古瀬戸前Ⅲ期～中Ⅱ期	99- 56
4	瀬戸美濃	折縁深皿	44.80	4.40		A・B期遺構面構築土	454.475		0.00	古瀬戸中Ⅳ期 灰釉 二次被熱 98-48と接合	98- 47
4	瀬戸美濃	折縁深皿	44.39	4.13		A・B期遺構面構築土	454.484	口[30.0]	0.02	古瀬戸中Ⅳ期 灰釉 二次被熱 98-47と接合	98- 48
5	珠洲	甕	40.80	-9.67	西堀	埋土	453.460	口[57.3]	0.00	珠洲Ⅳ期末～Ⅴ期初	98- 26
6	土師器	皿	53.12	3.35	北堀	埋土	453.765	口[10.0]	0.25	T-2類 浅黄橙色 煤・タール付着	98-147
7	土師器	皿	53.46	4.16	北堀	埋土	453.983	口[16.0]	0.05	R-5類 淡黄色	98-146
8	土師器	皿	20.30	0.34	SP121	掘形埋土	454.916	口[10.0]	0.15	SA52柱穴 T-5類 灰白色 口縁端部にタール付着	99- 40
9	土師器	皿	-4.10	1.88	SP174	埋土	454.887	口[11.0]	0.06	T-6類かT-7類 浅黄色	99- 38
10	土師器	皿	-4.18	1.89	SP175	埋土	454.789	口[12.0]	0.15	T-6類かT-7類 浅黄色	99- 37
11	瀬戸美濃	壺	55.44	1.72	SP309	埋土	454.093	底[6.0]	0.00	水注？古瀬戸中Ⅰ～Ⅱ期灰釉	98-144
12	土師器	皿	29.34	2.66	SP148	埋土	454.857	口10.8高2.1底3.5	0.66	京都伊野分類Ia-2類 浅黄色 内面・外面底部に墨書	99- 1
13	土師器	皿	29.34	2.66	SP148	埋土	454.852	口11.0高2.2底4.0	1.00	京都伊野分類Ia-2類 淡黄色 内面に墨書	99- 10
14	土師器	皿	56.05	5.39	SI21	埋土	453.881	口[12.0]	0.07	T-1類 橙色	98- 95
15	瀬戸美濃	折縁深皿	55.73	2.84	SI21	埋土	454.158	口[27.0]	0.11	古瀬戸中Ⅳ期 灰釉 二次被熱 98-102と接合	98- 64
15	瀬戸美濃	折縁深皿	55.24	4.55	SI21	埋土	454.178		0.00	古瀬戸中Ⅳ期 灰釉 内面底部まで施釉二次被熱 64と接合	98-102
16	珠洲	壺	54.93	3.14	SI21	埋土	453.926	口[18.0]	0.15	珠洲Ⅲ期 T類	98-123
17	珠洲	甕	56.17	2.76	SI21	埋土	454.068	口[31.0]	0.10	珠洲Ⅳ期初め	98-122
18	鉄製品	鉄釘	54.40	3.67	SI21	埋土	454.058		0.00		98-171
19	土師器	皿	26.11	-1.05	SD22	埋土	454.945	口[11.5]	0.10	T-6類かT-7類 浅黄橙色	99- 59
20	土師器	皿	25.65	-3.30	SD22	埋土	454.725	口[12.0]	0.04	T-6類かT-7類 黄橙色 口縁端部にタール付着	99- 36
21	瀬戸美濃	折縁深皿	54.19	-3.47	SD22	埋土	454.158	口[20.0]	0.06	輪花 古瀬戸中Ⅱ期 灰釉	98-135
22	山茶碗	椀	47.14	-3.76	SD22	埋土	454.193	底[6.0]	0.00	尾張型山茶碗第10型式？	98-136
23	瀬戸美濃	直縁大皿	3.17	-1.18	SD22	埋土	455.080	口[32.0]	0.02	古瀬戸後Ⅱ期 灰釉	99- 49
24	近世陶磁	志野丸皿	12.95	-2.25	SD22	埋土	454.840	口[12.0]	0.08	登窯第1～2小期	99- 67
25	瀬戸美濃	平椀	59.17	-4.01	SV05	裏込め	454.015	口[18.0]	0.03	古瀬戸後Ⅲ期 灰釉	98-127
26	土師器	皿	46.71	2.78		耕地造成土	454.653	口[10.0]	0.12	T-2類 浅黄橙色 タール付着	98- 75
27	土師器	皿	44.90	1.17		耕地造成土	454.453	口[11.0]	0.08	T-2類 灰白色 煤付着	98- 77
28	土師器	皿	19.36	-0.87		耕地造成土	454.956	口[9.0]	0.08	T-6類かT-7類 淡黄色 口縁端部にタール付着	99- 33
29	土師器	皿	45.92	2.95		耕地造成土	454.513	口[11.0]	0.06	T-6類かT-7類 灰白色	98- 78
30	土師器	皿	45.27	4.79		耕地造成土	454.343	口[12.0]	0.11	T-8類 淡黄色	98- 72
31	土師器	皿	46.10	3.43		耕地造成土	454.583	口[15.0]	0.10	T-8類 浅黄橙色 98-70と同一個体	98- 71
32	瀬戸美濃	平椀	44.45	2.83		耕地造成土	454.373	口[18.0]	0.05	古瀬戸後Ⅲ期 灰釉 二次被熱	98- 66
33	珠洲	すり鉢	59.06	-5.41	SV06	掘形埋土	453.928	口[31.0]	0.04	珠洲Ⅳ期	98-111
34	須恵器	蓋	40.55	-0.16		旧耕作土	454.793	口[13.0]	0.08		98- 85
35	土師器	皿	14.24	1.14	1978年度調査	埋め戻し土	455.034	底[7.0]	0.00	R-5類	99- 30
36	土師器	皿	14.26	-0.33		旧耕作土	455.044	底[8.0]	0.00	R類 外面底部静止箆削り	99- 31
37	土師器	皿	23.61	2.60	1978年度調査	埋め戻し土	455.005	口[11.0]	0.08	T-1類	99- 29
38	土師器	皿	46.17	0.50		耕地造成土	454.633	口[12.0]	0.06	T-2類 にぶい黄色 煤付着	98- 51
39	土師器	皿	41.75	-1.45		耕地造成土	454.708	口[13.0]	0.08	T-2類	98- 82
40	土師器	皿	58.57	5.04	5トレンチ	旧耕作土		口[13.0]	0.05	T-2類 黄橙色	98- 65
41	土師器	皿	45.76	6.53	9トレンチ	耕地造成土	454.348	口[12.0]	0.06	T-6類かT-7類 淡黄色 タール付着	98- 59
42	土師器	皿	42.47	4.98		旧耕作土	454.773	口[12.0]	0.02	T-8類 淡黄色	98- 86
43	土師器	皿	43.89	1.14		耕地造成土	454.593	口[15.0]	0.06	T-8類 浅黄橙色	98- 52
44	土師器	皿	41.64	-1.13		旧耕作土	454.808	口[15.0]	0.24	R-5類 灰白色	98- 81
45	土師器	皿	42.71	-2.14			454.583	口[16.0]	0.09	T-8類 浅黄橙色 内面に煤付着	98- 42
46	青磁	椀	41.45	5.86		旧耕作土	455.034	口[14.0]	0.05	龍泉窯系碗E類 二次被熱	98- 33
47	山茶碗	椀	47.96	-0.41		旧耕作土	454.773	底[7.0]	0.00	東濃型山茶碗第5型式	98-142
48	山茶碗	椀	45.16	1.28			454.749	口[15.0]	0.00	東濃型山茶碗大洞東か脇之島	98- 37
49	瀬戸美濃	入子	19.36	3.35	1978年度調査	埋め戻し土	454.920	口[8.0]	0.10	古瀬戸前Ⅲ期～中Ⅱ期	99- 44
50	瀬戸美濃	折縁深皿			6トレンチ	埋め戻し土		口[20.0]	0.06	輪花 古瀬戸中Ⅱ期 灰釉 二次被熱	98- 16
51	瀬戸美濃	すり鉢形小鉢			1994年度調査	埋め戻し土		口[14.8]	0.07	古瀬戸後Ⅳ期(古) 鉄釉	98- 19
52	瓷器系陶器	甕	21.28	0.93	1978年度調査	埋め戻し土	454.950	口[32.0]	0.05	八尾窯第2群b類	99- 26

図　　版

1　調査地域航空写真(1947年撮影)
1．江馬氏下館跡　2．高原諏訪城跡　3．東町城跡
4．八幡山城跡　(上が北，縮尺：約1／26,500)

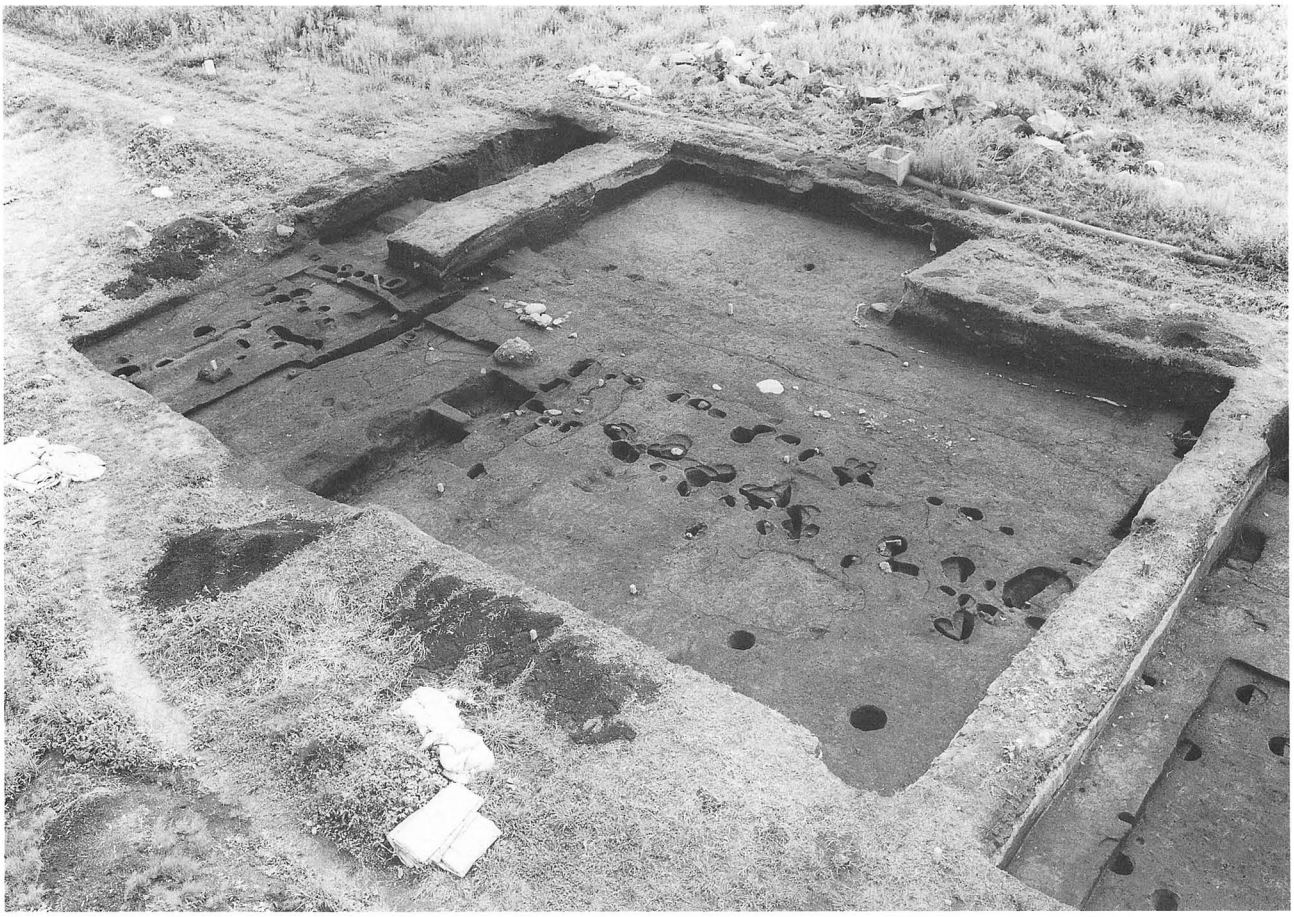
図版 2



1　神岡町遠景写真：1978年撮影（北から）

2　調査地域遠景写真：1999年度調査時（上が北東）

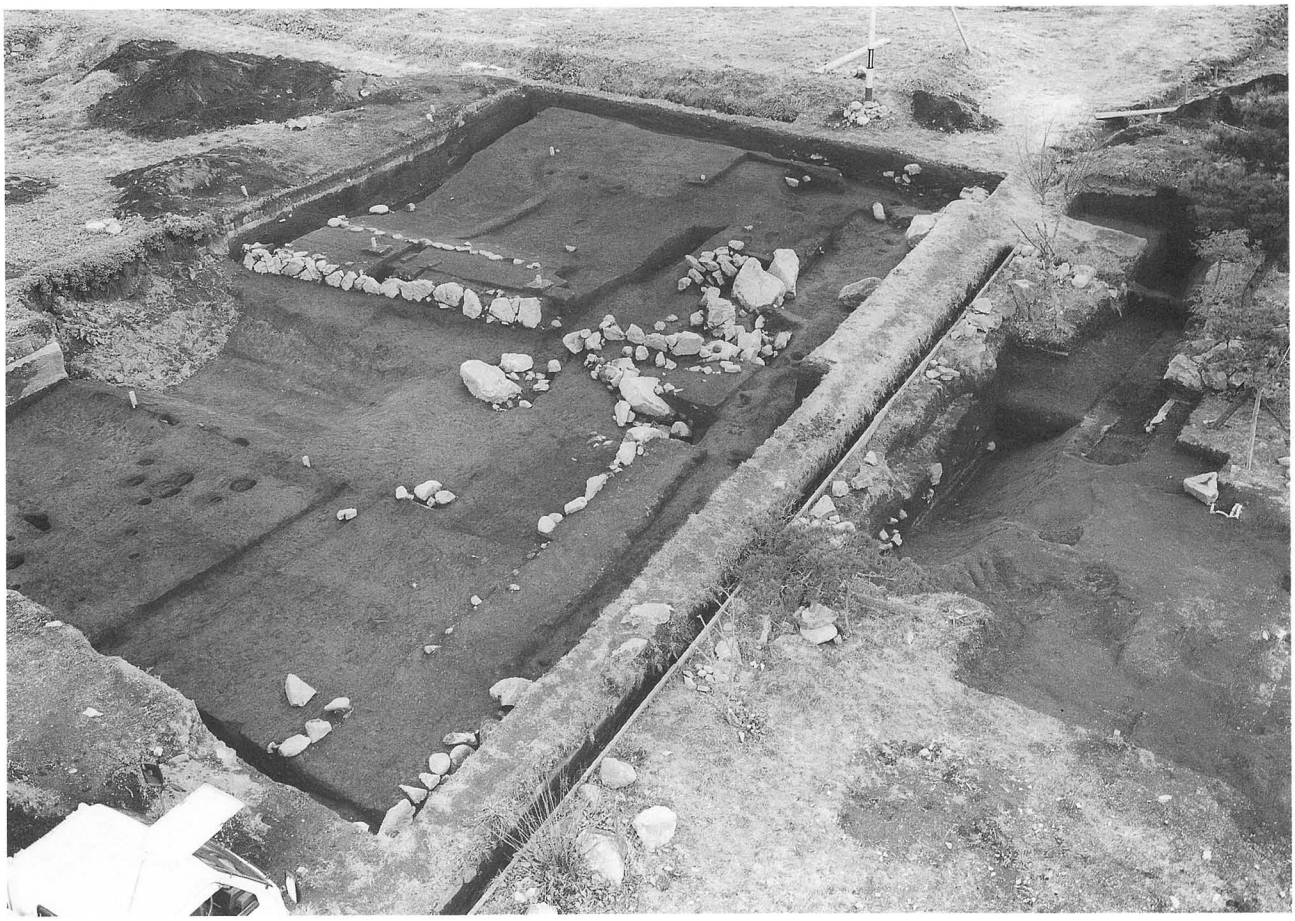
1　調査地域遠景写真(西から)



2　調査地区Ⅰ地区発掘後全景(北東から)

図版 4

1　調査地区Ⅱ地区発掘後全景（南東から）

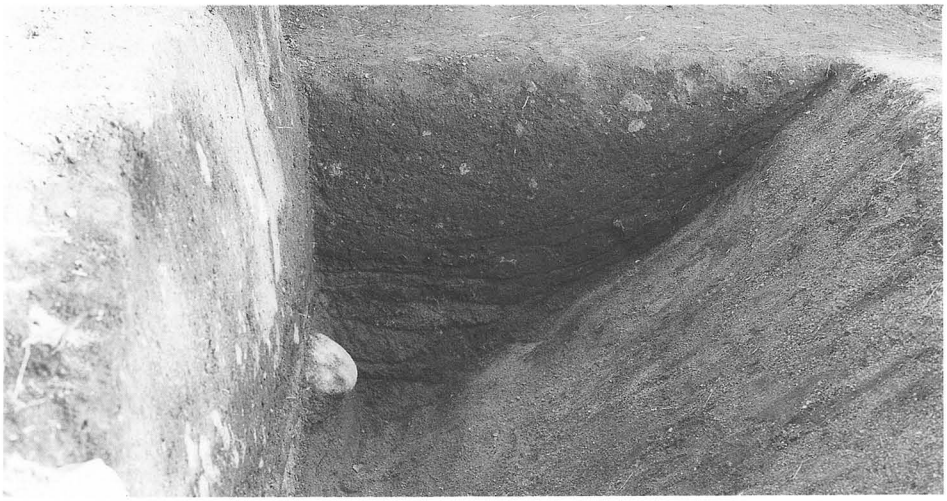


2　調査地区Ⅲ地区・Ⅳ地区発掘後全景（北西から）

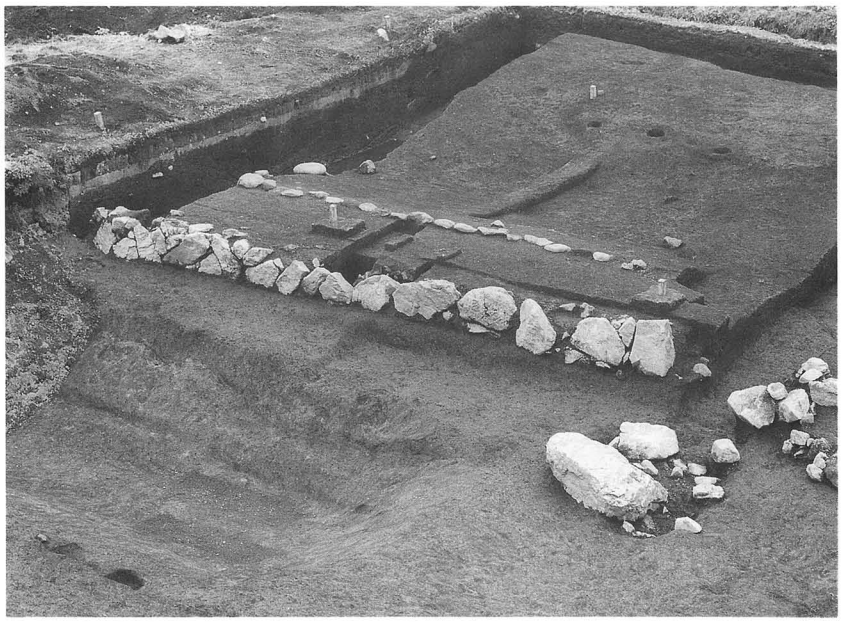
1　西堀箱堀北半部
発掘後全景（北から）

2　西堀箱堀北半部
南北縦断面層位
（Y座標－8ライン，
北西から）

3　西堀箱堀北半部
東西横断面層位
（X座標46.3ライン，
北から）

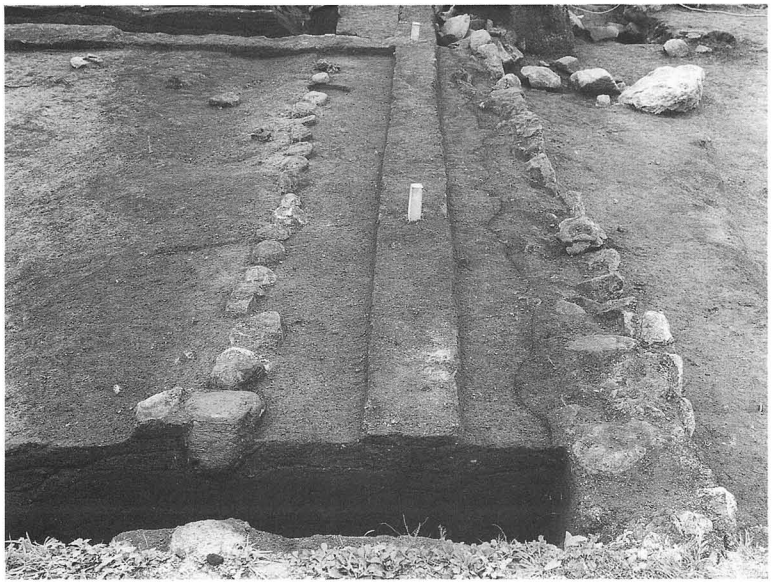


図版 6



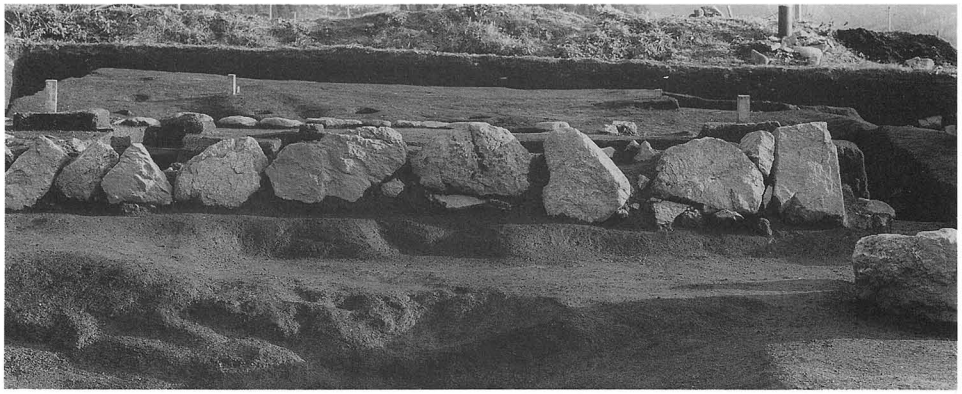
1　築地塀基底部石列SV01・SV02・
近世耕地石組み畦SV03
発掘後全景（北西から）

2　築地塀基底部石列SV01
発掘後全景（南から）



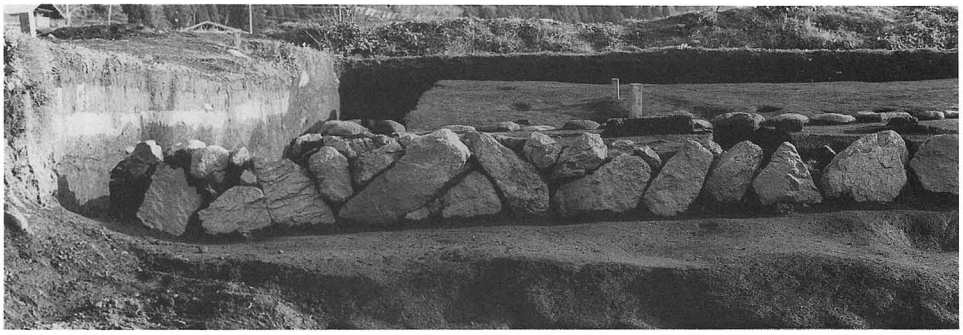
3　築地塀基底部石列SV02・
近世耕地石組み畦SV03
裏込め土検出状況（東から）

1　築地塀基底部石列
SV02
発掘後全景（北から）



2　築地塀基底部石列
SV02裏込め
Y座標2.66ライン
断面層位（南東から）

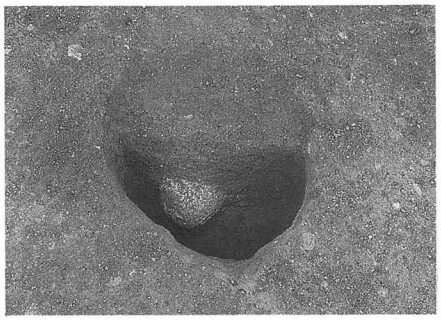
3　近世耕地石組み畦
SV03
発掘後全景（北から）



4　近世耕地石組み畦
SV03裏込め
Y座標3.76ライン
断面層位（西から）

図版 8

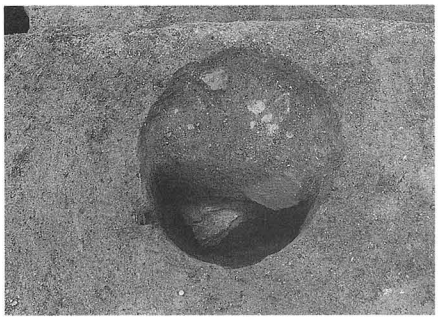
1　脇門SB61発掘後全景
（東から）



2　SP144断面層位（南から）

3　SP190断面層位（西から）

4　庭園への通用門SB62
発掘後全景
（南から）



5　SP11断面層位（南から）

6　SP13断面層位（南から）

1　柵列SA51～54・57・築地塀柱穴列SA55・56
発掘後全景（南から）

2　柵列SA51～54・57・築地塀柱穴列SA55・56
発掘後全景（北東から）

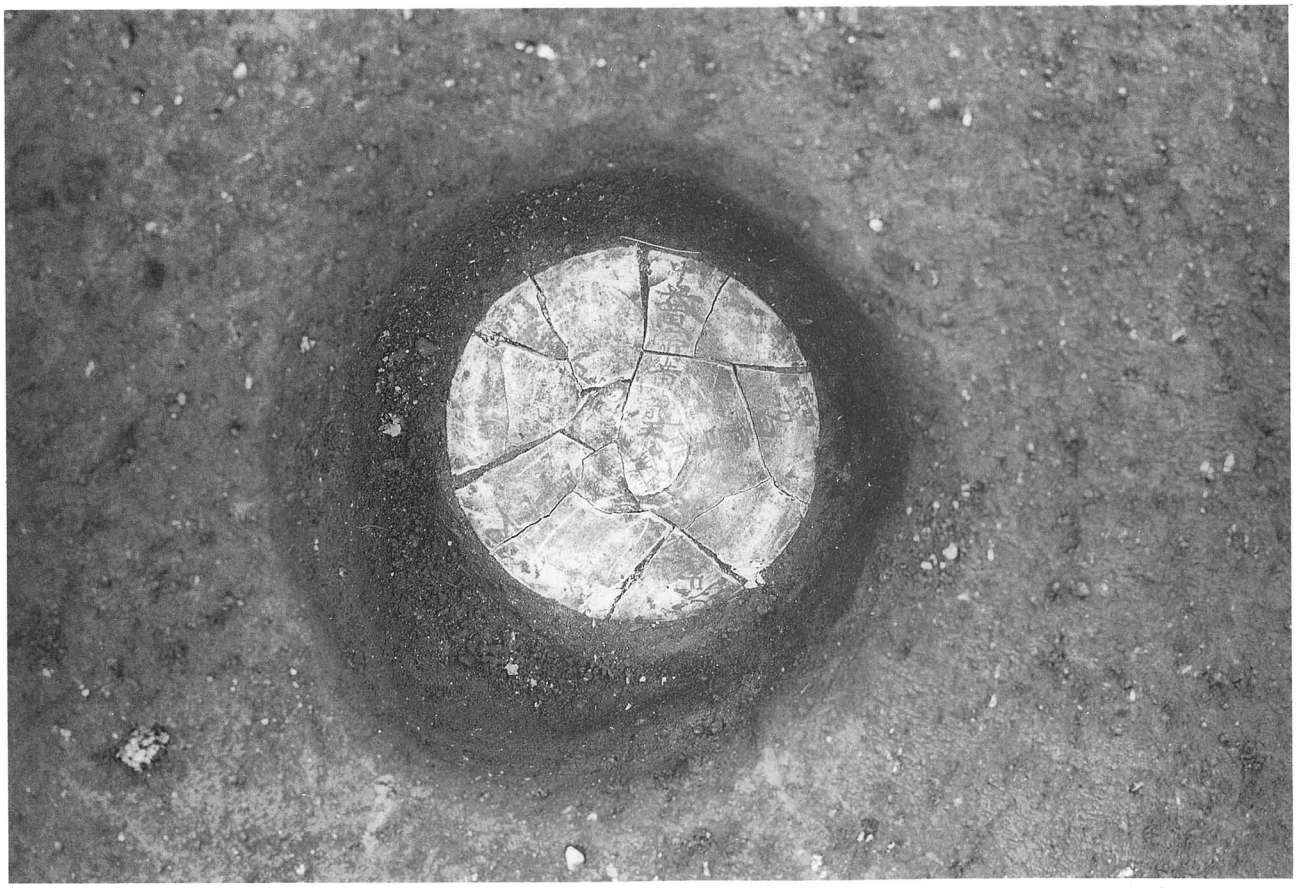
3　柵列SA51・53・築地塀柱穴列SA55・56発掘後全景（Ⅰ地区内，北から）

図版10

1　柵列SA52・54・築地塀柱穴列SA55・56発掘後全景（Ⅱ地区内，南から）

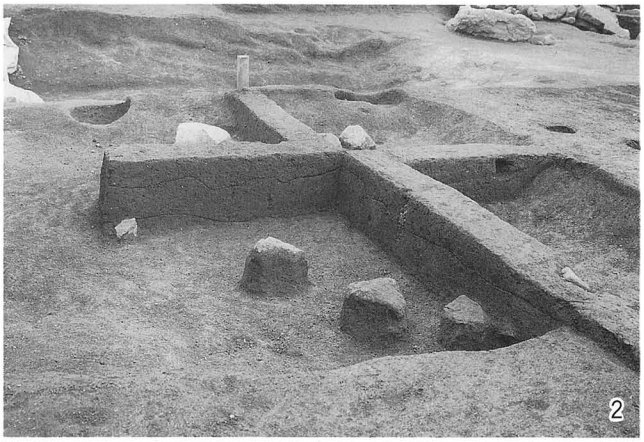
2　築地塀基礎地業部検出状況（北から）
3　築地塀基礎地業部断面層位（WAトレンチ北壁内，南から）
4　布掘り溝SD21発掘後全景（柵列SA55aの一部，南から）
5　築地塀に伴う盛土部分断面層位（X座標0ライン，南から）

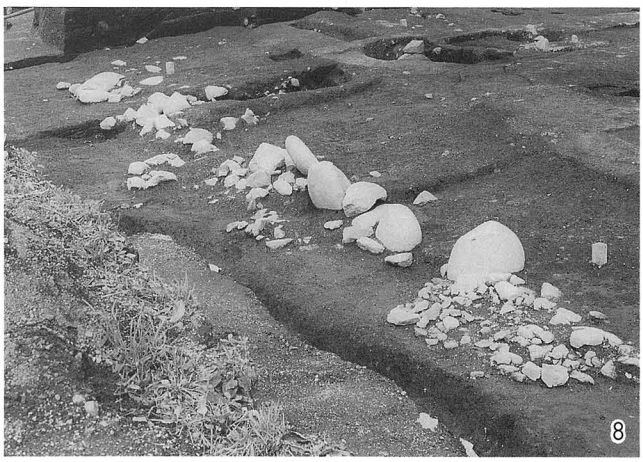
1　地鎮遺構SP148　墨書土師器皿出土状況(1)（1枚目の土師器皿，南から）



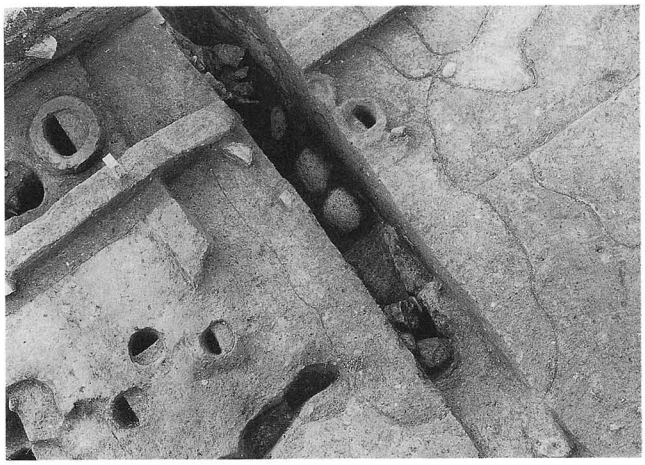
2　地鎮遺構SP148　墨書土師器皿出土状況(2)（2枚目の土師器皿，南から）

図版12

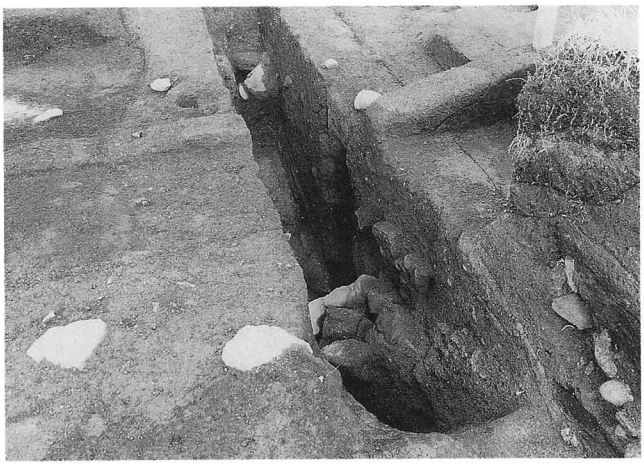




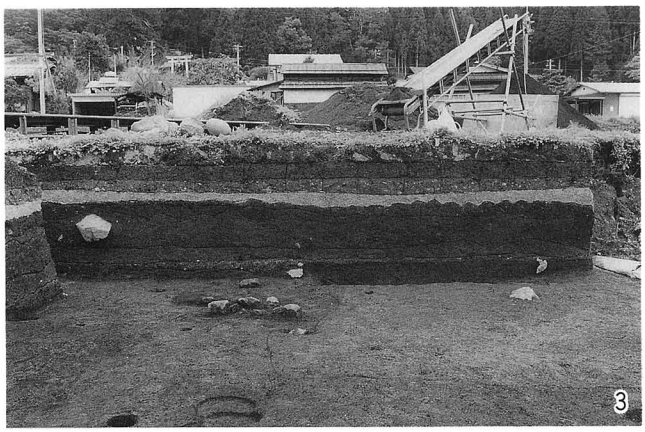
1　竪穴住居SI21発掘後全景（北から），　2　竪穴住居SI21断面層位（北東から），
3　SD22検出状況（Ⅰ地区内，北東から），　4　SD22検出状況（Ⅱ地区内，南西から），
5　SD22・SV06・SF01・SD23・SV07検出状況（Ⅲ地区内，北西から）
6　SD22断面層位１（Ⅲ地区X座標49.7ライン，北から）
7　SD22断面層位２（Ⅱ地区南壁内X座標6.5ライン，北から）
8　SD22内礫検出状況（Ⅱ地区内，南西から）



1　不明土坑SX41検出状況
（上が南西）

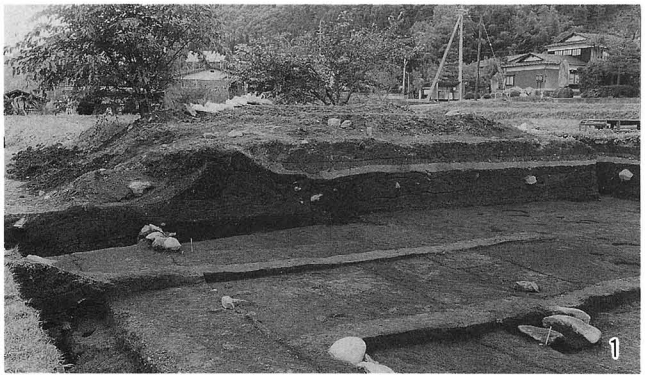


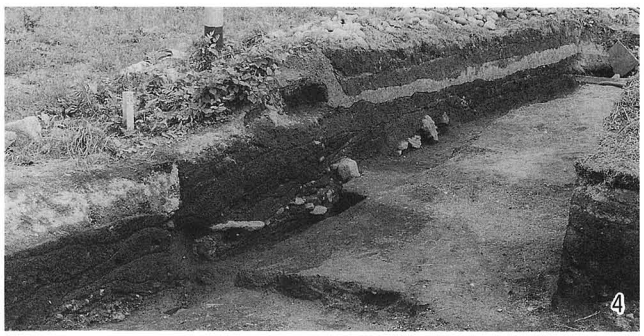
2　不明土坑SX41断面層位
（南西から）

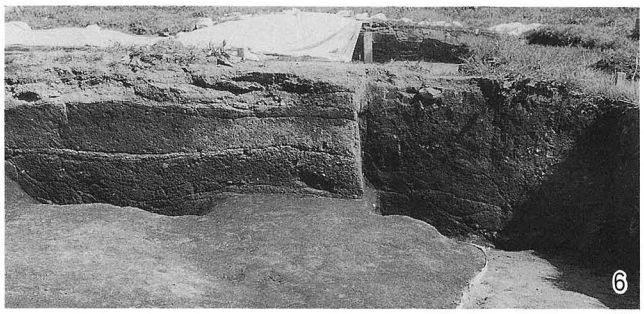


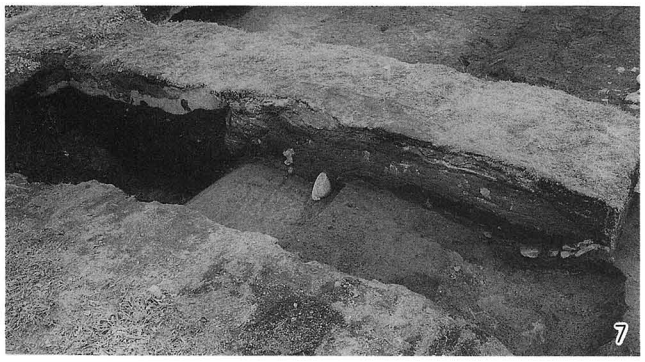
3～6　調査地区東壁断面層位：
3　Ⅲ地区北側部分（堀外地区，西から）
4　Ⅲ地区南側部分（9トレンチ西壁北半分，南東から）
5　Ⅱ地区X座標30ライン付近（1976・77年度調査時の畦部分，西から）
6　Ⅰ地区X座標3ライン付近（西から）

図版14

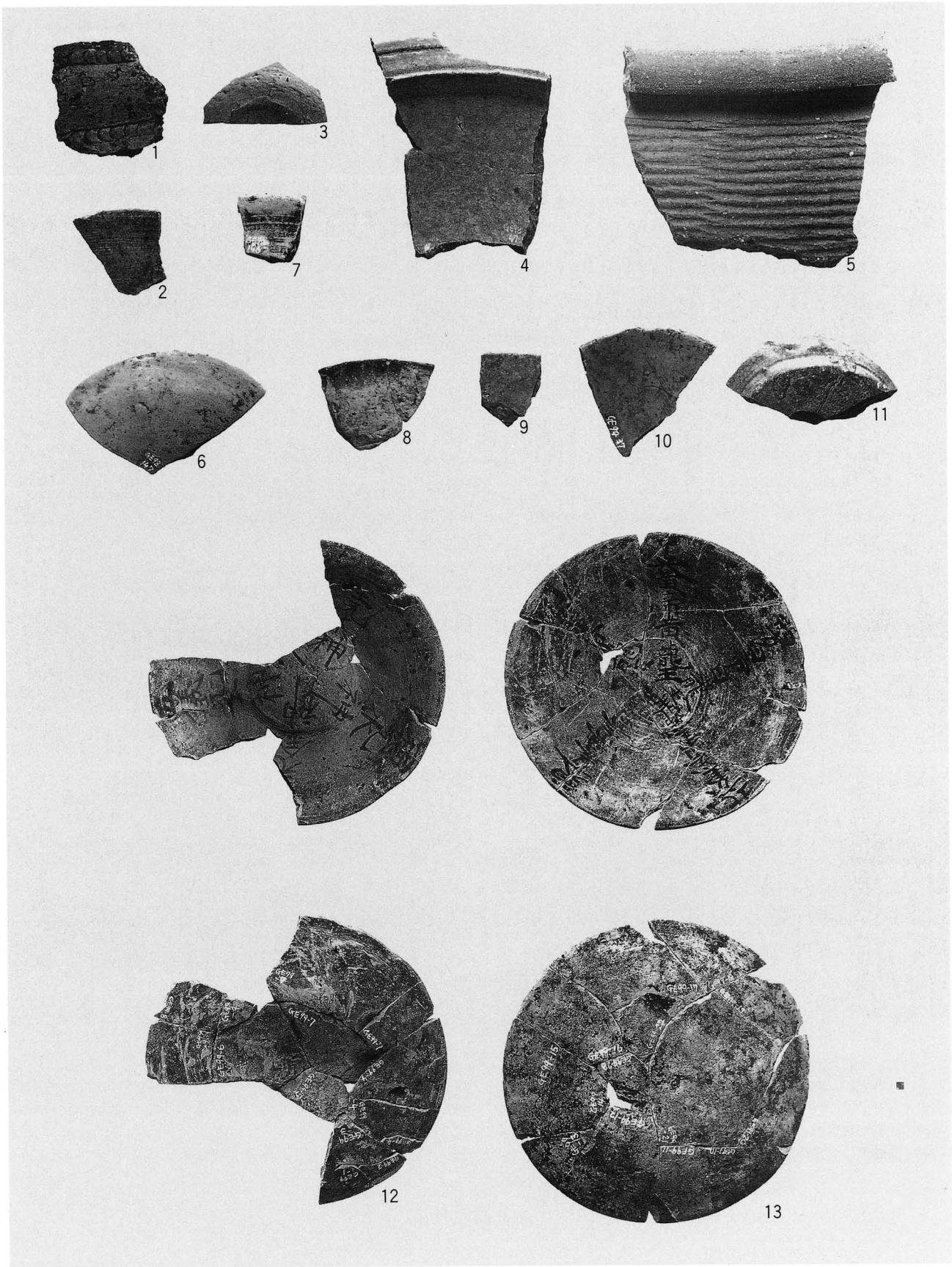




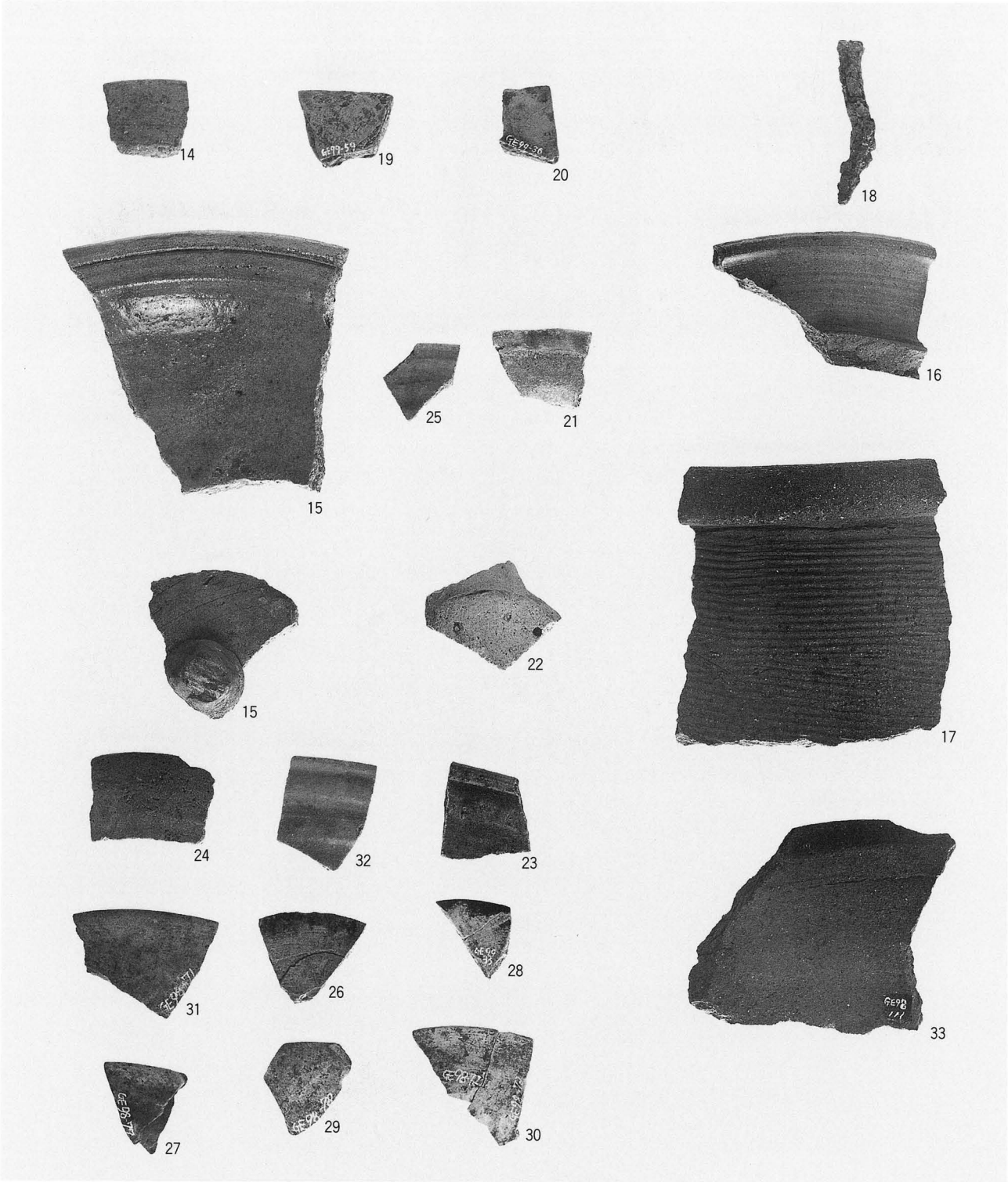




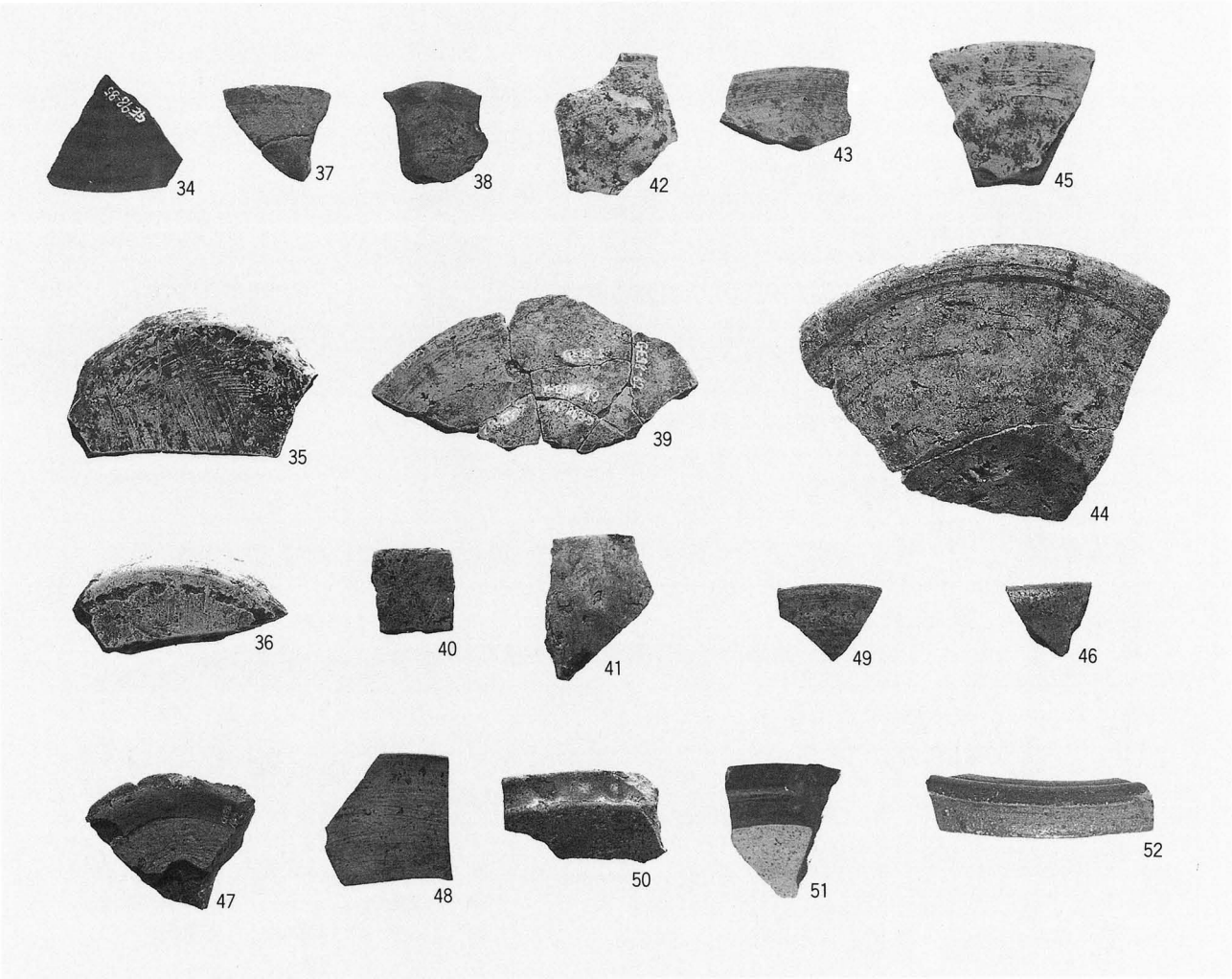
1　Ⅲ地区北壁断面層位(南西から)，
2～4　Ⅱ地区北壁断面層位：
2　Y座標－10～－6西堀箱堀南半部断面層位(南から)，3　Y座標－7～－3(南から)
4　Y座標－4～6(南西から)
5・6　Ⅱ地区南壁断面層位：
5　Y座標5～－1(北西から)
6　Y座標－2～－5　1976・77年度調査・1994年度調査地区との境付近(北から)
7・8　Ⅰ地区1トレンチ北壁断面層位：
7　Y座標－9～－1(南東から)，8　Y座標－6～2(南西から)



出土遺物写真（1）：下館基盤土〈基盤造成土〉(1)，A・B期遺構面構築土（2～4），
西堀（5），北堀（6・7），SA52柱穴SP121（8），SP174（9），SP175（10），
SP309（11），地鎮遺構SP148（12・13）



出土遺物写真(2)：SI21(14～18)，SD22埋土(19～24)，SV05裏込め(25)，
〈耕地造成土〉(26～32)，SV06裏込め(33)



出土遺物写真(3)：〈旧耕作土・1978年度調査埋め戻し土〉(34～52)

報告書抄録

ふりがな	えましじょうかんあと
書　　名	江馬氏城館跡
副 書 名	下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査
巻　　次	V
シリーズ名	神岡町埋蔵文化財調査報告書・江馬氏城館跡調査報告書
シリーズ番	第6集・第6集
編著者名	大平 愛子・酒井 英男・田中 保士・中埜 貴元・笹井 隆・新谷 崇・松倉 大作
編集機関 所 在 地	神岡町教育委員会 〒506-1195 岐阜県吉城郡神岡町大字東町378番地　TEL 0578-2-1271
発行年月日	西暦2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
江馬氏城館跡 下 館 跡	岐阜県吉城郡神岡町 大字殿字中通り・ 山越・馬場西・ ヲカモ	21625	G07K00093	36° 19′ 25″	137° 18′ 43″	19980902 ～ 19981211 288m² 19990610 ～ 19991019 500m²	史跡保存 整備事前 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
江馬氏城館跡	城館	中　世	堀，門，築地塀柱穴列，柵列，築地塀基底部石列，竪穴住居，地鎮遺構	土師器，瓦器，青磁，白磁，瀬戸・美濃，珠洲，八尾，瓷器系陶器，鉄製品	

神岡町埋蔵文化財調査報告第６集
江馬氏城館跡調査報告書　第６集

江馬氏城館跡Ⅴ
―下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査―

印　　刷　2001年３月25日
発　　行　2001年３月30日

編集・発行　神岡町教育委員会
〒506-1195 岐阜県吉城郡神岡町大字東町378
TEL 0578-2-1271

印　　刷　ヨシダ印刷株式会社
〒939-8204 富山県富山市根塚町1丁目5番5号
TEL 076-493-3321

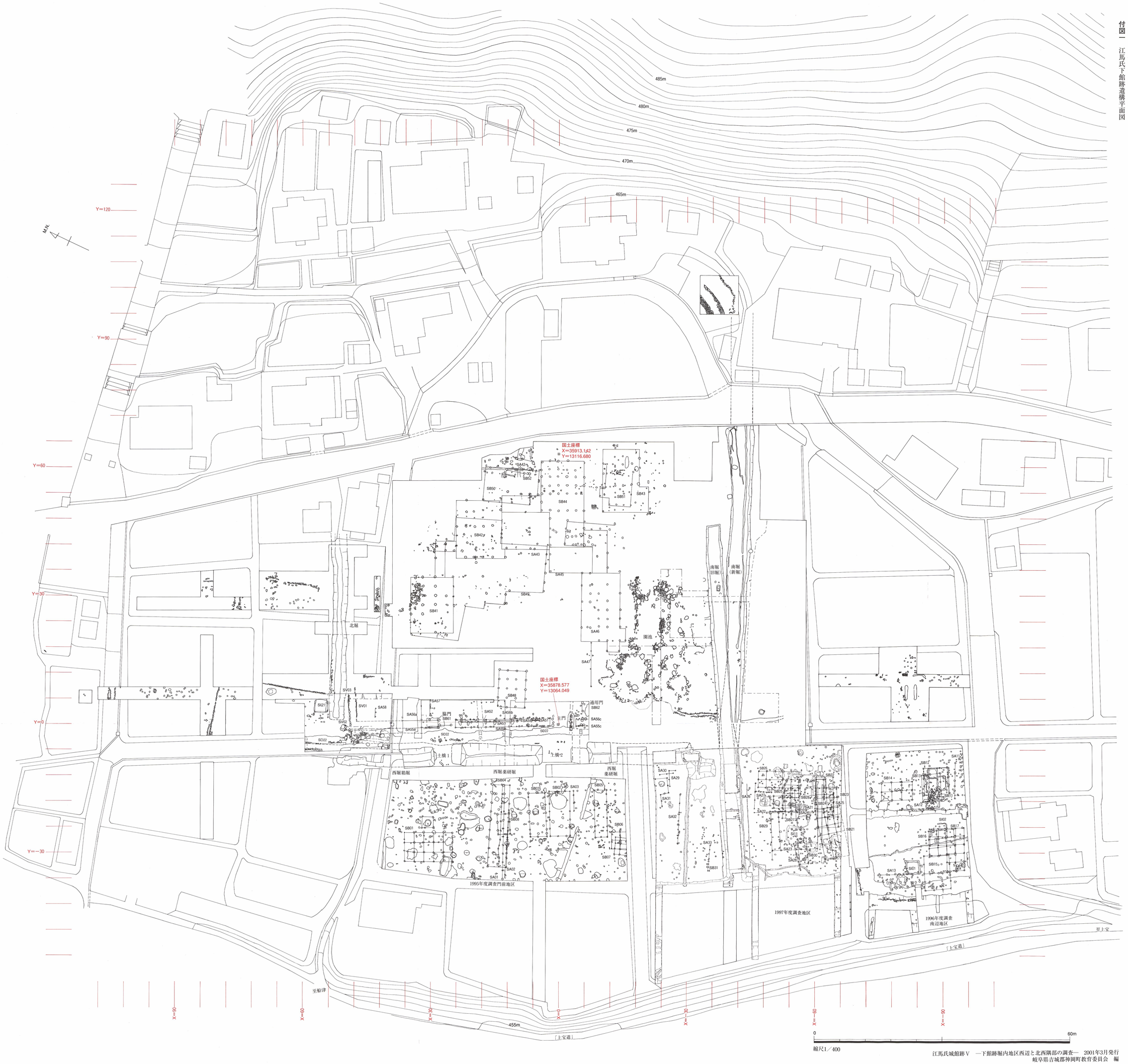
江馬氏城館跡Ⅴ ― 下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査 ― 2001年３月発行
岐阜県吉城郡神岡町教育委員会編

江馬氏城館跡Ⅴ

― 下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査 ―

付図１　江馬氏下館跡遺構平面図

付図一　江馬氏下館跡遺構平面図



江馬氏城館跡Ⅴ　―下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査―　2001年3月発行
岐阜県吉城郡神岡町教育委員会　編